
ゲームの世界で第二の人生！？

シェイフォン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲームの世界で第二の人生！？

【Nコード】

N4709W

【作者名】

シェイフォン

【あらすじ】

目が覚めると俺はゲームに良く似た世界にいた。

それだけなら別に構わないが、薄汚い路地裏で寝転んでいた浮浪児からスタートだなんてどんな上級者プレイだ？

まあ、良いだろう。

おれはこのゲームをかなりやり込んでいるからこの程度で心が折れることはない。

さてと、ログアウト出来ないのは放っておいてまずは生活できるほどの環境ぐらいいは整えるか。

人物紹介（前書き）

これからどんどん加筆していく予定です。

書き込む順は私の気まぐれですが、主要キャラは全員書き込むので
ご安心を。

ネタバレを含みますのでご注意ください。

2011年12月7日更新

人物紹介

ユウキカザクラ

本編の主人公。

突然訳も分からずゲームとそっくりな世界に飛ばされたにもかかわらず慌てなかった。

これは本人は夢だと考えていることが起因している。

そのため己の行動に対する責任というのが曖昧で、キツカ達浮浪児と同居するなど常識では考えられない行動を取る。

技術や調合がチートであり、材料さえ揃えば作り出せないものはない。

第1章登場

ティータカエルマライ

主人公が足を向けて寝られない人物。

主人公が生活の糧を得るために訪れた薬屋のお姉さん。

栗色の髪の毛をポニーテールにして眼鏡をかけている。

気さくな性格からか交友関係は驚くほど広い。

エルファとは旧知の仲である。

キツカカザクラ

主人公が拾った浮浪児その1。

活発な性格でそのエネルギーを表し、髪も瞳も燃える様に赤いのが特徴。

気安い性格をしており、誰にでもフランクに接することが出来るので人気者である。

主人公に拾われる前は4人組のリーダーとしてスラムを生き抜いていた。
冒険者を志望しており、将来は前人未到の地を踏破することが目標。
アイラ達を仲間と表現するなら主人公を親と考えている。

アイラ⇨カザクラ

主人公が拾った浮浪児その2。

キツカとは正反対の冷静沈着な性格をしているが、思い込みが激しいのでたまに暴発する。

青い髪と切れ目が特徴で、周りに油断ならない人物という印象を与えている。

諜報や謀略の類を好み、合理性を追求するので容姿にはそんなに拘らず、髪も短く切り揃えている。

主人公に拾われる前は、4人組の頭脳として活躍していた。

主人公を主として捉え、絶対の忠誠を一方的に誓っている。

ユキ⇨カザクラ

主人公が拾った浮浪児その3

無口な少女で何を考えているのか本人以外誰にも分らない。

浮浪児なので何の教育を受けていないにも関わらず王国最高峰の魔法学校に入学出来た。

ある意味主人公以上のチート能力保持者。

クロス⇨カザクラ

主人公が拾った浮浪児その4

大柄な体格と優しい性根の持ち主。

その体力はどう学年でも飛びぬけており、一人だけ成人年齢が受ける訓練をこなすことが出来る。

主人公はクロスを成人だと疑っているが、キツカ達は主人公や自分達と同じ年齢だと言いつ張っている。

攻撃よりも防御に関心があったので主人公はクロスにファイアーエムブレムに登場するアーマーナイトに近い鎧を装着させた。

第2章登場

エルファ＝ララフル

主人公のメイド

鮮やかな緑色の髪と白磁の肌、そして顔のほりが深いので人形のよ
うな印象を与える。

主人公に対しては結構厳しく、辛辣な言動を行うことが多々ある。
元暗殺者で現在は人を殺せなくなったのでメイドをやっている。

今の居場所を大切と考えており、それを守るためなら手段は問わな
い。

サラ＝キュリアス

主人公を師匠と呼ぶ鍛冶屋の娘。

主人公が作成した武器に感銘を受けて自ら弟子入りを願った少女。
くすんだレンガ色の髪や同年代と比べてやや長身で筋肉質なことが
ら年上だと見られる場合が多い。

天才型の人間で、鍛冶に関しての才能は底知れないが、それ以外に
なると全く駄目である。

ヒュエテル＝クーラー

いつも優しい笑みをたたえる貴婦人。

全てを包み込むような包容力を兼ね備えている。

彼女がスラムを解体しようとしていたので、主人公が協力を申し出
て現在に至る。

人物を見る目があるらしく、ヒュエテルが目を付けた人物にまず外

れない。

そのため単身ジグサールへ向かった主人公の護衛を選んでいる。

第3章

フィーナ^レグリアス^ツバイク

ツバイク伯爵の双子娘の姉。妹のレアと違って奔放な性格なのだが、相手の警戒心を解かせる雰囲気を持っている。だから主人公はフィーナを外交兼営業に当てている。

体型は妹と全く同じで、こここまで酷似している双子は珍しいとのこと。

海のような青い髪と深い色の瞳を持ち、顔立ちは綺麗にまとまっている。胸はあまり無いが、それを欠点だと思わせないほどしなやかでスレンダーな体つきをしている。

レア^レグリアス^ツバイク

ツバイク伯爵の双子娘の妹。姉とは正反対の物静かな性格で何でもそつなくこなす器用な人物である。特に事務系が得意なので主人公は都市の内政全般をレアに任せている。たまに実の姉にする言動ではないことをしてフィーナと主人公を驚かせることがある。

間章

ククルス^フオンテジ

竜騎兵軍団副隊長

キツカの頭脳。

人を動かす能力に長けており、浮浪者を兵に仕立て上げた手腕を持つ。

栗色の髪の毛と大きな愛らしい瞳から小動物の様だが中身は腹黒く、キツカ以外の人を陰で罵倒しているがかなりのドMであり、キツカに苛められることを心の底から喜んでいいる。
想像できない読者は恋姫無双に登場する桂花を思い浮かべてくれれば良い。

オーラ・ユクエリス

諜報部隊副主任

「鬼がアイラなら仏はオーラ」と呼ばれている。
加減出来ないアイラのブレーキ役を務める。

金色の髪と堀が深い顔立のため人形の様な美貌を持ち、気さくで誰にでも分け隔てなく接するが、一番になることに固執し、陰でアイラを虐めていた過去があるが、色々あって今ではアイラが一番の理解者となっている。アイラが容赦なく弾劾して傷心した隊員をよく慰める。

薬のせいで体が小さくなってしまったが、オーラはあまり気にしていない。

ミア・キャストウイツチ・ヴァルレシア

魔導騎士団副団長

ヴァルレシア侯爵の長女

ユキは口数が少ないので代わりにミアが魔導騎士団を纏めているので実質団長。

幼少から男として育てられたため男勝りなボクッ娘。性格も社交的で紳士なため女性から人気がある。ユキの様な可愛い者を愛でるのが好きという困った性格をしている。

モデルはアイドルマスターの菊池真。

レオナ・カリスリン

ジグザール騎士団副官

クロスの元教官で現在恋人

用兵術は天才的で昔はエリート部隊である王国第2騎士団を率いていた。

常に礼服を纏って金色の髪を腰まで伸ばし、ある事故が原因で右目に眼帯をしている。特徴的なのはその豊かに突き出た胸であり、それがあから彼女が罵倒をしても兵隊は喜んで従う。

ヘヴィーオブジェクトに登場するフローレイティアに金髪+眼帯を付けた姿。

第4章

ベアトリクスⅡシマールⅡインフィニティ

シマール国第1王女

腰まである見事な銀色の髪を持つ少女で儂げな印象を醸し出し、次の瞬間には折れてしまいそんな雰囲気を持つ淑女然のだが、気に入った相手には不快にする言動をよく取る。一種のツンデレと言えるのだが、やられている方は堪ったものでない。相手の嫌がることをするのが大好きという最悪な性格だが、知略や謀略においては右に出る者はいない。

シクラリスⅡバルティアⅡライソライン

バルティア皇国第2皇女

プラチナ色の髪と病的なほど白い肌を持ち、物憂げな表情を常に浮かべ、何気ない動作の1つ1つが気品に満ち溢れている。男尊女卑のバルティア帝国の教育方針によって彼女は他人を尽くすことに生甲斐を感じ、主の幸せが自分の幸せだと考えている。そのため普段は主人公のメイドをしている。

ヴィヴィアン＝リーザリオ＝トルツエン
リーザリオ帝国第3皇女

光り輝く金髪と女神のような容姿から彼女に心酔しているものは後を絶たない。指揮において知略においてもリーザリオ皇国随一で、まさしく完璧なのだがそれら全ては非凡の努力で手に入れたものである。実力があるため、無能な者が自分の上に立つのが許せない性格である。

エレナ＝グランシリア＝イーズルブル

シマール国貴族 爵位は子爵

20代後半の女性で、180cmを超える身長にポリウームのある赤毛。すっきりと通った目鼻とそして燃えるような瞳を持つ。性格も容姿の通りで直情的であり、臨機応変に対応することが苦手である。しかし、貴族としての能力は立派であり、自身も清貧を心がけているので領民からはすこぶる評価が高い。

キリング＝トリアエル

エレナ子爵の片腕

エレナと同年代で、肩口に切り揃えた亜麻色の髪そして片メガネをかけている知的な女性である。エレナ子爵が足りないところを彼女が補っており、暴走したエレナ子爵を無理やり黙らせることがあるなど2人の関係は上司と部下というより親友と呼んだ方がしっくりくる。

無一文から始まる（前書き）

始めまして、シエイフォンです。

経験を積んだ主人公というチートな能力を使って襲いかかる不合理から必死に抗おうとします。

剣術から裁縫まで全てMAXレベルにまで上げた経験のある主人公がどのようなセカンドライフを歩むのか。
それを楽しんでいただければ幸いです。

無一文から始まる

気が付くと俺は子供になって薄汚い路地で倒れていた。

いや、冗談じゃないよ？

一応自己紹介しておこう

俺の名は火桜優喜。フルダイブ型MMORPGにどっぷりハマった高校二年生だ。

一応学校は通っている。ゲームが大好きだが平均点はクリアしている。

本音を言えば学校を辞めてずっとゲームをしたいのだが、それをやると確実に家を追い出される。

比喩じゃない、マジ話だ。

何せ内の親はやると言えば必ずやるタイプ。

どれだけ理不尽な約束でも絶対に履行するのだ。

……ヘタレと嘲つても構わない。

俺も自覚しているから。

閑話休題

俺の時代にはフルダイブ出来る機械がある。

ん？ それは何だってか？

それはヘルメット状の形をしたもので、脳からの電気信号を受け取り、そして逆に変換した信号を流すことによってあたかも現実に存在しているよう錯覚させる機械だ。

洗脳されそうで怖いと感じるだろうが、正直俺達にはこれが無いとともに授業についていくことが出来ない。

何せ高校二年の授業で不確定性原理を応用した問題を出されるんだぜ。

教科書だけで解けるか。

機械に頼らないと出来るわけがない。

そして俺は文系だ。ついでに言えば理系はもっと恐ろしいぞ。

数字の羅列を見ただけで何を意味しているのか理解できるんだ。

スパイ養成課か、と思ったよ。

まあ、その機械のおかげで俺達は限りなく全能に近づいているがな。

普通の俺でさえ過去の名医と同程度の執刀が出来る。

また話が逸れた、すまん。

とにかく、俺はそのフルダイブ機械を使ってMMORPGをやっていたわけだ。

まあ、やっていることと言えば、パーティを組んで魔物を討伐するのではなく、ひたすらにアイテムを作ってそれを売り捌いていたわけだけだな。

ダンジョンにはレア素材を探すために潜る程度だった程度だから国関連のイベントなんてほぼノータッチ状態だったな。だから今俺が街どころかどの国にいるのかすらわからない。

……国関連のイベントには現実のお金が必要なんだよ、貧乏高校生に払えるわけないだろ。

そのゲームはユーカリア大陸物語。

各プレイヤーは望みの職業になって冒険者になったり国を興したりと色々と自由度の高いゲームだ。

ここからが本題だ。

俺はいつもの通り学校へ行き、いつもの通り帰宅していつもの通りゲームを起動させた。

普通なら俺は拠点としてある工業都市ジグザールから始まるはずだった。俺は大富豪で、その都市に対して影響力がある。顔もイケメンで背の高いハンサムなキャラクターだったはずなのに、俺は気が付くとどこか訳の分からない街の裏側で倒れていた。

さあ、どういうことだ？

眼が覚めた俺はまず始めにウィンドウを開いて見た。

ウィンドウに表示されるのは名前とステータス、持ち物や装備の他にゲームを終わらせるログアウトがあるはずなのだが。

「……ない」

その欄は空白になっており、目をこすっても変化が無かった。

どうやら不本意なバグが起こったのだと考える。

「仕方ない、しばらくここで生きるか」

喚いたり叫んだりしても意味は無い。それならば一度初心に帰ったつもりで始めからプレイしてみようと決めた。

「まずは何を持っているのか」

俺はもう一度ウィンドウを呼び出して己の状態を確認する。

名前： ユウキ「カザクラ

装備： 武器 なし

防具 ボロの服

頭 なし

足 擦り切れた靴

装飾品 なし

持ち物： なし

お金 0G

ステータス なし

「……何だこれは？」

その惨状を見て愕然とする。

良いところが一つも無い。普通ならお金も3000Gぐらいはあり、ステータスも幾らかは自由に設定できるはずだ。

ステータスというのはスキルの別称で、例えば剣を振るうとステータスに『剣』という項目とレベルが追加され、そのレベルが上が

ることにSTRやDEFなどが上昇する。

ちなみに『短剣』のスキルが上がると『剣』と比べてSTRよりもAGEが上昇する。

そして、スキルが1から2に上がると能力の上昇は2または3程度だが、スキルが20代だと能力の上昇率は2桁まで上がる。ゆえに満遍なくスキルを伸ばすよりのと、一つのスキルを伸ばすのではあまり大差ない。

閑話休題

これだとボーナスポイントを使わず、さらに所持金を全てどぶに捨てた状態だ。

そして、それ以上に驚いたのは。

「この容姿は何なんだよ」

見た感じ五年前の俺である。年齢は12歳前後と言ったところか。

「まあ、上級者の俺にはちょうど良いかな」

初心者なら間違いなく匙を投じているが、生憎と俺はこのゲームをやり込んでいるマニア。だからこれくらいのハンデなど物の数ではない。

「とりあえず最初の目標は一軒家を持つことだな」

家さえ持つことが出来れば行動範囲がグッと広まる。薬を大量に調査出来たり鍛冶が出来たりとメリットは計り知れない……まあ、月々に税を納めなければならぬ欠点があるがそれは仕方ないだろう。

「さてと、じゃあ始めますか」

俺はそう呟いた。

しかし、俺はこの時、これから先に起こることなど想像すらできなかった。

手頃な空き地に移動した俺は簡易な調査台を作成する。

「まずはポーションの調査から」

ポーションとはHPを回復する薬の中で最も安価で親しみやすい類のだ。値段は一個50Gと安い、材料となる草はそこら辺に生えているので原価はほぼ0。まさに初期に作る物としては打ってつけだ。

「そつえば序盤の頃もこうしてポーションを調査していたよな」

何世代前のゲームとは違って材料を揃えてボタンを押せば完成という代物ではない。そして、このユーカリア大陸物語というゲームはフルダイブ機能を駆使してリアルを極限にまで追求した結果、現実と同じように調合の匙加減で成否が分かれるのだ。

まさしくリアル志向。

現実と何一つ変わらない。

ゲーム製作者に殺意を覚えるほどリアルだ。

「確かポーシヨンの調合法は……」

俺は頭の中からポーシヨンの調合法について引つ張り出す。

ああそうだ、確かああいう作り方だった気がする。

捨ててあった竈と槓を拾ってお湯を炊く。

沸騰するまでの間に材料の草をすり潰しておこう。

「……子供だから力がない」

普段ならシャシャシャとやってしまっ作業が渾身の力を込めて行わなければならなくなっている。だからいつもの倍の時間と労力を費やしてしまった。

「さてと、次はこれらの材料を手順通りに放り込んで混ぜると」

まずアカイ口草をすり潰したのを加えて混ぜ、色が淡くなってき

たらアオイ口草を加える。ここから激しくかき混ぜて完全な薄紫にした後キイ口草を加えて今度はゆっくり混ぜて完成。

「まあ、上出来かな」

ポーションを調合しているうちに体が思い出してきた。俺の経験から言うとこれは良い部類に入るだろう。

確認のため出来たポーションを少し飲んでみる。いつも俺が作っている上質なポーションと比べれば劣るものの、市販品よりかは味も効果も高いと判断。

「さすがは俺、弘法筆を選ばずとはよく言ったものだ」

うん、満足。

そして俺はそのポーションを持って薬売りの店に行く。ここは様々な種類の薬を取り扱っており、その中にポーションが含まれている。

そして俺はその店の番人をしているお姉さんに声を掛けた。

「こんにちは、おねいちゃん」

ニッコリと、キッズスマイル全開で話しかける俺……気持ち悪い。

「あら、ボク。どうしたの？ お使い？」

まあ、そうだろうな。俺もお姉さんの立場ならそう判断するだろ

う。しかし、俺はお使いでは無い、営業をしに来たのだ。

「おねいちゃん、このポーションをどう思う？」

そう言つてガラス瓶に入ったポーションを見せる俺。

「あら、それは……」

お姉さんの瞳に真剣見が宿る。やはりそこはプロなのだなあと思
感した。

光に透かしたり、振つてみたり味を確かめた後にお姉さんはホウ
ツと感嘆の吐息を洩らす。

「ボク、これは凄いわよ。少なくともこの街にいる調合師じゃあ一
個一個丹念に作つてもこのレベルは作れない。一体どこの調合師が
作つたの？」

そう聞いたので俺はにこやかに自分を指差す。

「え？ ボクが作つたの？」

「うん、そうだよ。なら目の前で実演してあげようか」

お姉さんが頷いたのを見た俺は予め用意してあつた原料を取り出
す。

「それつてそこら辺に生えている雑草じゃないの。もっと質の良い
草を使用しないと飲めたものじゃないわよ」

忠告してくれるは有り難かつたけど、俺は首を振つた。

薬売りの店の奥には調合台が備え付けている。やはりこのお姉さんも調合師の端くれなのだろう。

「じゃあ、作るからよく見ておいてね」

そう宣言して俺はポーションを作り始めた。

昨日と手順は似ているが微妙に違う。今回はアカイ口草と一緒にアオイ口草を加えたり、薄紫からさらに透明になり始めた所でキイ口草を追加したりしていた。

お姉さんの言う通りに、これらの草は生えているのよりも栽培した方が手順の変更がなくて楽だが、その分お金がかかる。

と、言っても一草3、4Gなのだが、それでも今の俺にその出費はきつかった。

どうせ俺はこれ以上の難易度を誇るエリクサーを何度も調合しているし。

あれはきつかった。ほんの少しでも力加減を間違えると失敗。しかも嫌らしいのが、エリクサーは失敗した時点には現れず、完成してからその失敗に気付く点だ。

あれで何人ものプレイヤーがエリクサーの調合を諦めたか。

「はい、完成したよ」

そう昔の思い出に想いを馳せている内にポジションが完成したようだ。それをコップですくってお姉さんの前へ持っていく。

お姉さんは目をまじまじと見開いた後、それを口に含んだ。

「素晴らしいわ」

しばらく咀嚼した後、そう吐息を洩らすお姉さん。

「これはすごいわ。私の人生の中でもこれほどのポジションにお目にかかったことはない、これなら50Gと言わず、100Gでも売れるわ」

早口に捲し立てるお姉さん。それを見た俺は手応えを感じて切り出した。

「ねえ、おねいちゃん。提案だけど、このポジションをここで売ってみない？」

博打よりも安定的に収入を得られるのを優先する。確かに露天商は利益が相当出る代わりに、ならず者による強奪が考えられるし、また売り上げ代をいくら取られる可能性がある。今の時点で闇の者と関わるのは避けた方が良く、今後の活動に大きな支障が出る。

「ええ、いいわ。むしろこちらからお願いしたいくらい。ところでボクの名前はなんていうの？」

「ユウキ!!カザクラだよ。おねいちゃんの名前は?」

「私の名はティータ!!エルマライよ。これからよろしくね」

交渉の結果、俺はポーション一つにつき30Gの利益が出ることになった。もちろん、この俺の正体を隠すというのが条件付きで。

「とりあえず今日宿に泊まる分のGは確保できてよかった」

ポーション二個で60G。今回はおまけとして200G余分にくれた。

よし、これなら今日は宿に泊まれるな。

俺は人知れず安堵した。

今日の収穫

収入元を確保できた。

無一文から始まる（後書き）

フルダイブ機能という設定について説明不足でしたので修正しました。

11/4設定を変更しました。

俺は仲間を得た

合計して260G。100万G以上持っていた俺にはこの金額が物足りなく感じるがまあ良いだろう。

何せ全くの無一文からこれだけのGを得たんだ。

さらにこれからポーションを売ることによって安定的な収入を得ることが出来る。

「いやいや、お金のありがたさを感じるねえ」

俺は十二歳の少年とは思えないセリフを吐いた。

25

クルルルル

「お？」

宿屋に向かっていると突然俺の腹から鳴った。

「ん？ ユーカリア大陸物語に腹が減るなんてことはあったっけ？」

酒場などで食べ物を食べることはあるが、必ず食う必要はなかったはずだ。

ぐーっ

「……とりあえずは腹ごしらえだな」

腹の虫には勝てない。

俺は腹が減る、減らないについての考察は後回しにして近くのパン屋へ向かった。

「毎度ありがとうございます。お釣りは五（S）（シルバー）と二（B）（ブロンズ）です」

適当なパンを見つくるって俺は代金を払った。

そして手元に残る銀の硬貨と銅の硬貨。

この世界の通貨は1Gで10S。そして1Sで10Bとなっている。

まあ、食料品や安物の素材の単価に付けられるSやBなんて使うことは最近だと滅多にないから忘れていた。

何せ俺がGを使うと言えば何千G単位だから。

「さてと、食べるか」

俺は近くのベンチに腰を下ろし、ついでに買った飲み物もすぐ横に行く。

出来立てらしくパンはまだ熱い。

ふわふわとしている。

「さてと、いただきまー……」

俺が大口を開けてかぶりつこうとした瞬間目の前の少女と目があった。

「……」

少女は何も言わないが、目はしっかりと訴えている。パンをくれと。

年代は俺と同じぐらいだろう。

服装は俺と同じボロの服を着て金色の髪はぼさぼさ、顔も薄汚れている。

元は良いのに台無しだと感じる。

見た感じ小動物という印象を受けた。

「……すい」

試しにパンを右から左へ移動させると少女の目もそれに続く。

グルグルと回転させたら同じように少女の目も回転した。

「きゅー」

どろぢらぢりすぎで目を回してしまったらしい。

俺は調子に乗ってしまったと反省した。

「悪かった。ほら、これをやるよ」

お詫びに俺は手に持ったパンを差し出す。幸いにもまだ口を付けていないからセーフなはずだ。

「……くれるの?」

途端に少女の目が輝き出す。

本当に素直だなと感心しながら俺は頷いた。

「……ありがとう」

「つて、おい!?!」

少女は差し出したパンでなく、俺の隣にあったパンの袋を掴んで一目散に駆け出しに行く。

「ちょっと待て! ドロボー!」

俺は叫ぶがもう遅い。すでに少女の姿は見えなくなっていた。

「はあ、相手がNPCとは言え腹が立つな」

俺は毒づきながらもまたパン屋に赴き、同じパンを注文した。

店員に不思議がられたが、俺が少年口調で事情を説明するとパン屋の店員はクスクス笑い始めた……値段を安くするとかちよつとはサービスしてくれよ。

そして俺はまた同じベンチに座った。

キョロキョロと周りを見渡し、また同じアクシデントが起きないか確認する。

前方良し、左右良しそして前方良し。

俺はパンを手を持った。

そして食べようとしたその時。

「本当に申し訳ありません！」

後方から突然大きな声で謝罪させられて俺は引っくり返ってしまった。

俺の目の前には四人の少年少女がいる。女子三、男子一の比だ。

しかもその女子の内の一人は俺からパンの袋を奪っていった無口女だった。

「ほら、謝りなさい！」

「……ん」

そのリーダーらしき女の子に小突かれて先程の無口女が頭を下げる。

リーダーらしき女の子は凜としていて口調もはきはきとしている。薄汚れているが、髪を洗えば燃えるような赤毛を見せるだろうと想像した。

俺は手を振りながら。

「いや、もう良いよ」

と、答えた。

「盗みを働き、本当に申し訳ありません。ユキは本当に良い子なんです、感情表現が下手ですけどそれは生まれつきなんです」

無口少女はユキという名前なのか。

「申し遅れました。私はキツカ、後ろにいる切れ目がアイラそしてなよなよしている奴がクロスです」

「よろしくお願いします」

「よ、よろしく」

同時に頭を下げるアイラとクロス。アイラの方は髪が藍色であることも相まって冷たく、鋭く切れるような印象を与えそしてクロスの方は俺と同じ黒い髪と瞳から真面目で実直なイメージがある。

「何度も言ったように僕はもう怒っていないから。だからもう消えてもいいよ」

何度も言っているのだが四人組の少年少女はこの場から去ろうとしない。そして謝り続けている。

「……ああ、そういうことが」

再三言っても謝り続けるのを見て俺は得心した。

彼らは単に謝罪しに来たのではない。それ以上のものをせびりに来たのだ。

「これで良いか？」

俺は観念して財布から10G硬貨を取り出してキツカという少女に渡す。

「き、金貨だ」

「……きれー」

クロスとユキが10Gの光具合を見て感嘆のため息を漏らす。

「ねえ、ここでやめちゃうっ。」

「そうですね……。」

そしてキツカも動揺して後ろのアイラに相談を始める。

「やれやれ、いい勉強になったな」

俺はため息を吐いてその場を後にしようとした。これ以上関わっても仕方ない。

「お待ち下さい」

が、少女に似つかわしくない氷の様な冷たい声音が俺を引き止める。

「ええと、確かアイラだっけ？」

俺が振り向いて尋ねるとアイラはコクリと頷いた。

「僕はもう話すことはないのだけど」

俺は声音を低くして問う。これで俺が苛立っていることが相手に伝わるだろう。

「あ、アイラ、もう止めようよ」

「アイラさん、ストップストップ」

「……怖い」

事実、後ろの三人も怯えているようだ。

しかし、アイラは意にも介さず言葉を紡ぎ始めた。

「私達を買ってくれませんか？」

「は？」

突然の申し出に俺は呆気に取られる。

「アイラ！？ 何を言ってるの？」

「そ、そうですよ。いきなり何を」

「……おー」

後ろが困惑しているのが伝わってくる。

「あなたは私達と同じ浮浪児の格好をしていますますが中身は全く違う、一人で自立できる能力と自信を持っています。あなたは必ず瞬く間にこの最底辺から抜け出すでしょう」

「ほう……」

俺は感嘆のため息を漏らす。

アイラの言う通り俺は違う。薬の調合も出来るし鑑定の目聞きも出来る。さらに鍛冶も出来るため、あつという間に駆け上がるだろう……チートだし。

「NPCにしては洒落た誘い文句だな」

「NPC?」

アイラが首を傾げるが俺は気にしない。

「まあ、面白そうだから仲間に見せてみるか」

どうせこのデータはバグであり、エラーから復旧すれば消えてしまふ運命にある世界。

それなら付き合ってやろう。

俺は彼らをもう一度まじまじと見つめる。

「どうですか?」

目の前のアイラは間違いなく抜け目がないだろう。ユキがパンを持ってきたところからここまで持つてくるのは並大抵のことではない。

キツカは決断力というか思い切りが良い。俺に声を掛ける時もそうだが、彼女は竹を割った様な潔さがある。

クロスは大柄な体格だから力もあるだろう。これなら暴漢に襲われても大丈夫かもしれない。

ユキは確実に何かを持っている。ユキがいなければ俺達は出会うことすらなかっただろう。

「よし、ついでに」

「え？ つまり受け入れてくれるのですか」

確認するよつにアイラが尋ねると俺は苦笑しながら。

「その通り、だから俺について来てくれ」

俺は仲間を得た（後書き）

2011年9月13日に一部改編しました。

紺屋の白袴

「どこへ行くのですか？」

「まあ、ついてくれば分かる」

俺は疑問を口にするアイラにそっけなく答える。

「急に乱暴になりましたね」

「否定はしないな」

猫を被るのは疲れるんだよ。

確かここら辺りに文房具屋があったはずだ。薬屋から宿屋へ向かう途中で見た気がする。

「ああ、あった」

お目当ての店を見つけた俺は文房具屋へ入って羊皮紙とインクとペンを購入した。

「さて、洋服屋へ行くか」

「……買ってくれるの？」

目をキラキラさせるユキには申し訳ないが、さすがに五人分の服を購入できるだけのGは無い。だから俺は首を振る。

「それはまたいつか今度だな」

不満顔を隠そうとしないユキに苦笑しながら俺は洋服屋へと歩を進めた。

「ここはお前らが来る所じゃない！ 帰れ帰れ！」

案の定、店員に入ること断られる。

まあ、そうだろうな。

浮浪児の集団など洋服屋に縁など無いからな。あつたとしても万引きか。

「はい、これ」

俺は店員に断られるのを想定済みだったので動揺なく10Gを店員に握らせる。

「え？」

突然の出来事に驚いたものの、店員は得心が言ったように後ろへと下がった。

「さあ、入るぞ」

後ろで所在なさげにうろつろしていた四人に俺はそう呼びかけた。

「気に入った服があれば俺に見せてくれ。ただし、絹を使っている服は駄目だ」

変な指示だと思ったのだろう、代表してキツカが尋ねる。

「どういふこと？」

「レベル上絹素材で服を作成するのは無理だからな」

木綿や麻、布は今の俺でも作れるが、絹になるとレベルが二ケタ必要だ。

「もしかしてあんた、服を作れるの？」

「ああ、それが何か」

店で装備を買うのは中級者まで。上級者になると装備は全て自作になる。

何せ一人一人のプレイヤーに個性が出るため店のものでは対応できなくなるのだ。

俺も最終的にはドラゴンアーマーなどを普通に作っていた。

「……どうした？」

ユキを除いた全員がポカンとした表情で俺を見つめる。

NPCが戦闘以外で驚くことなんてあったっけ？

俺が内心で首を捻っている間に四人が集まってコソコソ話し合っていた。

「ちょっとアイラ、私達ってすごい人を見つけたんじゃないの？」

「ええ、私もここまでとは思いませんでした」

「夢なのかもしれないよ」

「……それなら殴ってあげる」

興奮しているのか全然内緒話になっていない。

俺はため息をついて先を促した。

「おーい、早く決めてくれ」

洋服屋から出た俺達は布屋へと向かう。

上質な布は4桁Gもするが、生憎と今の俺達には用が無い。あるのは値段がB単位の布だ。

「ええと、緑色と青、そして赤色の麻と黒と白と黄色の綿だな」

羊皮紙に書いた字を眺めながら俺は注文する。

お金を払って商品を受け取った。

「荷物持ちは任せて」

後ろの方で控えていたクロスが俺の代わりに受け取る。四人分の布だから結構重はずだが、クロスは顔色一つ変えなかった。

「力が合って羨ましいな」

ポーション一つ作るにもしんどい俺がそう漏らすとクロスは困ったようにはにかんだ。

その後には雑貨屋へ行って糸と針とボタンを購入した。

「一人一泊20Gです」

「分かった」

俺は頷いて五人分の代金を支払った。

俺達がいる場所は宿泊街の一角にある宿屋だ。

本来なら薬屋のお姉さんが勧めた宿屋に入る予定だったのだが、出費が増えたのでお金が足りなくなった。

困っていた俺にここら辺の地理に詳しいキツカがいい宿があると助言して今、ここにいる。

「悪くはないな」

キツカ推薦の宿屋に入った第一印象がそれだった。

『マミエルの夢』という名の宿屋で、一階が酒場そして二階が宿屋のオードソックスな冒険者の宿だった。

三人部屋を二つ借りて俺とクロス、そしてキツカとアイラ、そしてユキに分かれた。

本来なら俺とクロスの2人だから2人部屋なのだが、これから作業するので手広い部屋が欲しかったのだ。

俺は主人に別料金として石鹸とお湯の代金を支払って四人に入るよう促す。

もちろんレディーファーストだ。

三人部屋に五人は多過ぎだろうと考えたが、俺達は子供だったので十分スペースがあった。

全員集まったところで俺は買ってきた布で服を作りながら話を切り出す。

「ここは何という街だ？」

俺の質問にアイラが答える。

「シマール国の王都、カルギュラスです」

「カルギユラス……」

俺は口の中で反芻させる。

ユーカリア大陸においてカルギユラスという名の場所があった気がする。

しかし、俺が知っている中では少なくとも街じゃなかった。

「廃墟じゃないのか？」

ゲーム上の設定ならばカルギユラスは魔物の大進行によって滅びているはずだ。俺が昔クエストでその場所へ向かったのだから間違いない。

「何を言っているのですか？」

アイラが首を傾げる。そうだろうな、俺がアイラの立場でもそう言うだろうな。

気になった俺は今日の年数を尋ねてみるが。

「さあ？」

と、返された……まあ、浮浪児に年数など知っているわけないよな。そこから辺りは明日薬屋のお姉さんに尋ねてみるか。

「ほい、一着完成」

ユキの服が完成した。白をベースとしたワンピースでアクセント

としてリボンが付いている。

「……ありがとう」

そっけない返事だが、内心は大いに喜んでいるのが分かる。だつて耳たぶが赤いもん。

「明日からはどうする予定ですか？」

アイラが明日からについて聞いてくるので俺は正直に話した。

「明日の午前中はポーシヨンの材料となる草を取る予定だ」

「ポーシヨン？ 草？」

アイラが疑問符を浮かべるので俺は苦笑して訳を説明する。

「実は今日薬屋の主人であるティータさんと交渉してポーシヨン一個につき30Gで引き取る取引をしているんだ。だからポーシヨンの材料となる草を集めるわけ」

俺がそこまで言うと、他の四人はまた隅っこで集まって内緒話を始めた。

「ねえ、聞いた？ あいつは安定的な収入があるのよ」

「これならもうゴミ漁りしなくて済みそうですね」

「これは夢だ、きつと夢だ」

「……可愛い服」

若干一名会話に加わっていないように見える。

しかもやはり声が大きいので内緒話になっていない。

「ほら、出来たぞ」

俺はアイラが選んだ黄色のブラウスと青色のロングスカートのセ
ットを横に置いた。

無論、アイラがすごい勢いで取りに来たのは言うまでも無い。

こういう所はやはり女の子で子供何だなあと、外見子供の俺が微
笑ましく思った。

「あの、お手伝いできませんか」

次の服の作成に取り掛かっているとクロスが口火を切った。

「ん？ どういうことだ？」

手の動きは止めないまでも俺は返事をする。

「アカイ口草とアオイ口草、そしてキイ口草を集めているんですよ
ね」

「そうだな。ポーション作りにはその三つが不可欠だ」

「それらの草は雑草でどこにでも生えています。だから自分達がそ

れを集めるといふのはどうかな？」

「そうしてくれると助かるな、手間が省ける」

俺がそう答えるとクロスはパツと顔を明るくして。

「そうですか、ありがとうございます」

「礼はいい。そして、キツカの服が出来たぞ」

赤を基調としたこの世界のオードソックスな服装のだが、スカーフトでなくズボンとしているのはキツカは動きやすい冒険者が着るような服を選んでいたからだ。

キツカがそれをうつとりと見つめているのを見ると俺も嬉しくなる。作った甲斐があった。

「ああ、それなら作業用の服を作るための布を買ってくるんだっかな」

俺は失敗に気付く。

雑草を拾うとなれば当然服は汚れてしまふ。そして、俺がさっき作った服は彼らのお気に入りであり、機能性は重視されていない。

「……………大丈夫」

さて、どうしたものかと悩んでいると、それを察知したのかユキが慰めにくる。

「何が大丈夫なんだ？」

「私達は雑草取りをしない。その代わりにユウキが作った服を売る」
「なるほどね、そういうことか」

俺の技能はポーション作りだけでない。今、実演しているように裁縫も得意だ。だから服を作ってそれを売ればいいとユキは提案していた、が。

「それは止めた方が良い」

露天商は俺もやろうとしたが、リスクが高すぎて止めた。シヨバ代とか言つて金を取られるならまだしも変な奴らと関わり合いたくない。

「言い方は悪いが君達から俺の情報に辿り着く奴らが現れないとは限らない。俺はまだ目立ちたくないんだ」

いずれは関わり合いになることだろう。

しかし、それは今でない。

何の力も無しに闇の者と関わり合うと待っているのはゲームオーバーだ。

「……残念」

ユキは不満そうな顔をしていたが、俺が絶対に折れないことを悟るとしぶしぶ引き下がってくれた。

俺はそんなユキの頭をポンポンと叩いて。

「アイディア出してくれたことは嬉しい、だからそんなに落ち込まなくてもいいぞ。そして、クロスの服だ」

クロスはTシャツに短パンと少年らしい服装を好んでいた。アクセントとしてポケットが四つも付いている。

全員の服を作り終えた俺はウーンツッと一伸びした後彼らに言った。

「君達全員にお小遣いを上げるから明日は街で遊んでおいで。けれど明後日からはちゃんと働いてもらうよ……って、聞いていないな」

四人は俺が自作した服を眺めるのに頭が一杯らしい。全員が興奮した面持ちで服の見せあいをしている。

俺はその様子を眺めながらベッドへ横になる。

ふかふかの感触を楽しみながら今日一日の出来事について思いを馳せた。

いきなりログアウト出来なくなったり、ステータスが貧弱だったりするが、今日の行動は悪くなかったな。

明日からはティータさんの所へ行つてポーション作りだ。これではばらくお金を稼ぐか。

そう言えば靴を作るのを忘れていたな、明日も雑貨屋さんへ行つ

て材料となる皮でも買うか。

頭がぼんやりしてきた。どうやら本格的に寝るらしい。

いつも思うけどゲームの中で眠るといふのは不思議な感覚がするんだよな。

そう言えば大事なことを忘れていた気がする。

確か、何だっけ？

俺は睡魔によって使い物にならなくなった脳をフル回転させ、次にキツカやアイラ達が持っている服を見て思い出した。

あ、自分の服のことを忘れていた。

紺屋の白袴（後書き）

次の話の内容は半月ほど時間が飛んだ時点から始まります。

四人が素材を集めて主人公のユウキがポジションを作る。

そんな日々が続いていたのですが、ある日にクロスがお願いをユウキにすることになります。

さて、その内容とは。

魔物退治（前書き）

すいません。

予告通りの内容にはなりませんでした。

内容が長くなり過ぎましたので二分割します。

魔物退治

カンカンカンカーン！

ジュー！

「うん、まあまあかな」

俺は先程製造が終わった青銅の剣にそう評価を下す。

この武器はキツカが使用するので市販の青銅の剣よりも細くして軽さを上げていた。

けど、強度まで下げたわけじゃないから。むしろ2倍以上の耐久性がこの軽い青銅の剣に宿っている。

キツカは「大人と同じ武器を扱いたい」とか駄々こねていたけど、どれだけ粹がっついていても俺達は12歳の子供だからね、大の大人が使う武器を軽々しく振りまわせないから。

「さてと、後はアイラが使うボウガンの矢じりとユキが使うロッドだけか。おじちゃん、まだ使わせてもらって良い？」

俺が店に奥にいる職人にそう尋ねると「あいよ」という返事が返ってきた。

良かった、これで今日中に作れそうだ。

何せクロスは力があるので普通の武器と比べて一回り大きいのを作る予定だった。サイクロプスやキングアリゲーターなど大型モンスターとの闘いを想定した武器で、例えば鎧を着ていても、鎧ごと一刀両断するのを作ろうとしたが、それが想像以上に大変だった。

俺はこの時ほど子供であることを悔やんだ経験は無かった。

何せ重い。

ハンマーを打つのに水で冷却するのも既存の武器と比べて倍以上の負担がかかる。

たった2倍程度の負担ぐらいどうってことないと考えた時期が俺にはありました。

もし、過去に戻るのならその時の自分を殴ってやりたいです。

手を抜くと失敗してしまうから休めません。正直最後の方は意識が朦朧としていました。

どうやって宿屋に帰ったのか覚えていません。

気が付いたら朝でした。

筋肉痛で腕がえらいことになっていましたが、納品であるポーションを作成しなければならぬので根性でやり遂げました。

ちなみに俺が作った『鋼の大剣』をクロスは軽々と振り回していました。

……俺は持つことすらできないのに。

勉強とは大事なものだ。

それを怠ると最悪死へと繋がる。

だから俺は心を鬼にしなければならぬ時がある。

「もう勉強嫌〜」

そう、例えキツカを鎖と手錠で机に拘束させてでも知識を叩きこむ必要があるのだ。

「だから何度でも言っているだろう。字を覚えろと、それが出来なければ何も始まらないぞ」

「字を読めなくても、勉強できなくても死なない〜」

「死ぬから言っただろうが!」

俺の一喝が部屋に響き渡った。

「まったく、キツカ以外はすでに魔物特性の勉強に入っているのに、お前だけは机にじっとしていることすらできないよな」

浮浪児としての生活が長かったのか、最初の内は全員椅子に座っても5分すら持たなかった。まあ、浮浪児として行動しなければ死んでいたのだからじっと出来ないのは大目に見よう。

「放して〜、自由にさせて〜」

が、それがいつまでも続くとさすがの俺も堪忍袋の緒が切れそう
だ。なので俺は仕置きを兼ねてある紫色の液体を取り出した。

「そ、それは？」

キツカの動きがピタリと止まり、視線が俺の手に持っている液体
へ釘づけになる。

「そう、精神安定剤入りポーションだ。これを飲めばキツカも大人
しくはなるぞ」

ポーションにリラックス草加えると、飲んだ者を落ち着かせると
いう効力を持つ。アイラ達にも最初の内は椅子に座らせるためにこ
れを飲ませていた。

「いやー！ 苦いのいやー！」

ただこの薬、相当苦い。俺も一舐めしたが体が壊れるかと思った。
例えるならゴーヤの中身の部分を5倍に濃縮した苦さと言っべきだ
ろうか。

もしかするとアイラ達が素直に座ったのはポーションの効能なの
ではなく、二度とこの薬を飲みたいくない恐怖観念からゆえだろうか。

「さあ、口を開けておけよ。でないと鼻から入れるぞ」

「た〜す〜け〜て〜!!」

キツカの悲鳴が宿屋中に響き渡った。

昼前

外へと繋がる門の前に4人の少年少女が整列し、その前に1人の少女が剣を掲げていた。

俺、キツカ、アイラ、ユキ、そしてクロスが装着している武器防具は全て俺の手作りだ。

ユウキ

青銅のダガー

革の鎧

革の小手

布の靴

キツカ

青銅の剣

プレートメイル

青銅の楯

革の靴

アイラ

青銅のボウガン

プレートメイル

ガントレット
革の靴

ユキ

ファイアロッド

絹のローブ

革の小手

布の靴

これだけ装備が充実していれば死ぬことはまずありえないだろう。どんなゲームにも最も装備は重要な位置を占める。装備を侮る者に勝利などありはしない。

その問いに否と答えるならば序盤から装備を一切変えずにラスボスまで行ってみてほしい。大抵の人は挫折するだろう。つまりそれだけ装備は大事だということだ。

俺が作った装備のおかげでキツ力達はレベルこそ一だが、そのステータスはレベル10程度にまで引き上げられている。近辺の魔物の生息についても確認したが、レベルが5もあれば集団で襲われても戦えるほどの難易度らしい。これなら負けることはないだろう。

ただ……

クロス

鋼の大剣

鋼の鎧

鋼の楯

鋼のすね当て

はい、1人だけ別格がいます。

おそらくクロスのステータスはレベル15にまで引き上げられています。

一度キツカがクロスを羨ましがって鋼の楯を装備してみたけど、腕すら上げられない有様でした。

本当にクロスは俺と同じ12歳かと疑ったよ。

クロスが12歳と言うのは俺以外全員が主張していたけどね。

ああ、それとユキは魔法の才能があるらしいので魔法の扱い方について多少レクチャーした。

まだ火の玉が出る程度だけど、この辺りの敵だとそれで良いだろう。

ユキはもっと火力を望んでいたが、危ないので教えなかった。

ちなみに俺の現在のスキル。

剣	6
魔法	5
斧	7
採取	8

弓矢	5
料理	8
鍛冶	10
調合	15
裁縫	10

ポーション調合やら草採取やら武器作りやら4人に戦い方を教えるやらでこの半月の間に相当上がりました。

裁縫がこんなに高いのは俺が每晚簡単な服を作っているからだ。作成した服は4人を通して無料で配って歩いている。

これは利益度外視で行っている。

裁縫というのは後々になってから重要になる。

極論を言えば剣や魔法などよりも重要。

何せ状態異常を防いでくれる防具を作ろうと思えば裁縫が必須だからね。

裁縫をめんどくさがって上げなかった俺は後でどれだけ苦労したか。

一ヶ月ぐらいずっと裁縫していた記憶がある。

おかげで学校の家庭科でSを取りました。

「皆、装備は持ったわね？」

一番張り切っているのが剣を掲げているキッカ。

聞くところによると昨日は興奮して眠れなかったらしい。

アイラとユキが眠そうに目を擦っている。

「ユウキ、ポーションは大丈夫？」

確認することは良いことだが剣を俺のど元へ突き付けるな。万が一があつたらどうする。

「ポーション、ポイズンボトル、パラライアウト、スリープブレイクなど近隣のモンスターが使う状態異常に対する対策は整っている」

「そう、上々ね」

キツカが当然とばかりに頷くがこれらは高いんだぞ。

もし俺が作った薬を一式買おうとすれば300Gは普通に飛ぶという事実を忘れてはいまいか。

と、ここでユキがクイクイと俺の袖を引っ張った。

「…………お弁当は？」

「全部ユキの好物にしている」

「ん」

俺の答えに満足したのかユキは満足そうに頷いた。

「思えばここまでの道のりは長かったわ」

外に出た俺達はキツカを先頭にして進んでいると、不意にキツカがそう口火を切った。

「この瞬間を私はどれだけ待ち望んでいたか」

「感動するのは勝手だがキツカがちゃんと俺の教えた通りにしていればもっと早かったぞ」

今は青銅のダガーしか装備出来ない俺だが、前のデータの時は剣術もレベル93あった。だからその経験を生かして戦いの基本を教えていたのだがキツカは全然聞いてくれなかった。

「あんな型に嵌った動きじゃ意味無いわよ」

このクソガキめ。

アークドラゴンやジェネラルオークなど一級モンスターを相手にしていた俺に言うか？

畜生、少年の体が憎い。

そうこうしている内に近くの草むらが動き、ついでモンスターが飛び出してきた。

相手はワームやビッグアントなど雑魚モンスター。

これといった特殊攻撃も無いので落ち着いて対処すればいいのだ

が、いかんせんこちらは初めての戦い。

クロスも顔がこわばって大剣が震えていた。

仕方ない、ここは経験者である俺が先手を出てや。

「うりゃあ」

「ふっ」

「……ファイアボール」

俺がクロスを案じている間にすでに戦闘は始まっていたようです。

それにしても内の女性陣は容赦無いなあ。

キツカは喜々としてモンスターに斬りかかり、アイラは冷静にモンスターの目など急所を射抜いている。そして感情の表現の乏しいユキでさえ正確に魔法を詠唱・発動していた。

モンスターも抵抗とばかりに攻撃を仕掛けてくるが俺の作った防具に阻まれてダメージどころか足止めにもなっていない。

「ふっ、口ほどにもないわね」

最後のモンスターを切り捨てたキツカが軽く決めポーズを取った。

「俺の出番はなしですか」

俺は呆れ調子で呟く。

これならばもう少し装備を弱くしても大丈夫なのではないだろうかと考えてしまうほど一方的だった。

その後は祭り状態に近かった。

モンスターを発見すると俺を除く全員が突撃してあっという間に息の根を止める。

それが単体だろっが集団だろっがお構いなしに突撃して刈って刈って狩りまくった。

「見て見て！ 『剣』のスキルが5よ。随分上がったと思わない？」

「私は『弓矢』が6ですけどね」

「何で私よりアイラの方が上なのよ!？」

「私の武器はこれですからね、当然です」

「ボウガンは卑怯よ!」

モンスター狩りに一息ついた俺達は持ってきた弁当で昼食を取っていた。

キツカとアイラはお互いのレベルについてやいのやいの言い合っている。

「本当に彼女達の元気は底なしだなあ」

クロスがそんなことを言うが、あんな重装備で軽装備の俺達と同様の運動量にも関わらず、息一つ乱さないというのはどういことだ？

「……………美味しい」

具が気に入ったのだろう、黙々と弁当を食べるユキ。

その様子は小動物みたいで可愛い。

「ほら、これも食べる」

だから俺は自分の分から一つおかずをユキに差し出す。

「……………くれるの？」

するとユキは目を輝かせて俺に尋ねてきたので「ああ」と答える
と。

「……………ありがとう」

「って、おい!？」

あろうことかユキはおかずでなく俺の弁当箱をひったくった。

アハハハハハ

草原に軽やかな笑い声が響いた。

魔物退治（後書き）

次こそがクロスが主人公にお願いする場面です。
約束を破ってしまい、申し訳ありませんでした。

魔物退治についてどうして子供達が魔物を相手にできるのか説明が
不足していたため追加しました。

目標達成

ゴリゴリゴリゴリ

「よし、これでノルマの30本完成」

俺はいつもの通りに薬屋でポーションを作っていた。

「お疲れ」

薬屋のお姉さんであるティータさんが、俺が終わったのを見計らって出てきた。

「そう言えば今日は友達と一緒にいなくて良いの？」

ティータさんは俺達が外へ出て魔物の討伐をしているとは信じていない、だから俺はその問いかけに苦笑して。

「最近は何抜きで遊んで(戦って)いるんだよ」

最初の数回は全員揃って出ないと街外へ出なかったが、最近は何口でも行くようになった。

俺はソロで行くのは大変危険だと懸念したのだがそれは杞憂に終わった。

キツカ、アイラ、ユキそしてクロスは長い間浮浪児としてスラムを生き抜いている。

そのため野生の勘が研ぎ澄まされているのか危険に関しては敏感だ。

先日、苦勞しそうなキングワームに遭遇した時も一人で突っ走らずに俺を含めて5人が見事なコンビネーションを発揮して敵を沈めていた。

だから大丈夫だと俺は判断している。

「あらら、はぶられちゃったの？」

こちらの状況を誤解しているティータさんのセリフに俺は苦笑を深めてしまった。

そして話題を切り替えるためにポーションを渡す。

「はい、これが今日の分」

「いつもいつも御苦勞様。ボクの作ったポーションは常連さんからも評判が高いわよ」

ティータさんはいつまでたっても俺をボクと呼んで子供扱いする。それがたまに不愉快だと感じる時があるけど、それを責めてもティータさんは決して改めようとしなないことが分かっていたから俺はもう諦めている。

「明日もポーションだけで良い？ 何ならポイズンボトルやパラライアウトも作るけど」

「お生憎様、そちらは事足りているの」

「残念」

俺は肩を竦める。状態異常回復系はポジションより高く売れるが需要が少ない。

俺がポジションに拘る理由の一つだった。

最も、ティータさんに言わせると。

「状態異常回復系の調合の方が難しいんだけどね」

らしい。

まあ、調合レベル98だった俺から見るとポジションもポイズンボトルも一緒なただけだな。

「そう言えばボク、結構稼いだんじゃないの？」

「うん、僕は今10000G以上持っているよ」

ポジションは一日30個と決まっているが、たまに予約買出しなど大口取引が三、四回あった。

大口取引一回につき大体ポジション200個ぐらい頼まれるから相当稼いだものだ。

大口取引は契約外として大目に一個40Gで買い取って貰えたからこちらはホクホクだ。

「で、それがどうしたの？」

「ボクって何でお金を集めているの？」

「それは家を持つためだよ」

家を持つことが出来れば大型の調合台や鍛冶場などが創設できるので、これ以上誰かの場所を借りなくて済む。

この調合台もポーション作りのみ認められていて、それ以外の使用は料金を取られていた。それが無料になれば今後の活動がぐっと広がることは予想できる。

「ねえ、ボク。提案何だけど、そのお金を担保にして家を手に入れない？」

「どういうこと？」

「近々郊外に空き家が出るのよ。で、その家の持ち主は色々なことをやっていたらしくて調合台や鍛冶場は勿論のことキッチンや畑まで完備しているのよ」

「へえ」

俺は感嘆する。もしこの話が真実ならばそれは非常に嬉しいことだ。

俺が家を持った暁にはそういったものをいずれ作る予定だったから、それが省けて非常に助かる。俺にとっては非常に面白い話だが。

「まずその家を見たいのだけど」

ティータさんが俺を騙すことなんてないが、確認のため聞いておく。

するとティータさんは唇の端を吊り上げて。

「そう言うと思ったわ、この店が閉店してから向かいましょう」

閉店になった時刻に俺は薬屋の前で待機していた。

しばらくするとティータさんが現れる。

「お待たせ、待った？」

「いや、僕も今来たところだよ」

ここは社交辞令。

本当は1時間ほど待たされていた。

「ここがそつよ」

馬車で揺られること30分、目的の場所へと辿り着く。

まず始めに俺は立っている場所と紙で示されている場所とを示し合わせて誤りがないことを確認した。何せ他人の家を案内されちゃたまらない。

「ボクって用心深いわね」

ティータさんが感心と苦笑の入り混じった表情をした。

それはアイラから口を酸っぱくして言われていたからな。

この2ヶ月アイラは俺に詐欺師のテクニクについて何度もレクチャーしてくれた。

アイラ曰く俺は騙されやすいのだから、詐欺師がどのようにして人を騙すのか方法ぐらいは知っておきなさい、らしい。

「ほづ……」

俺は感嘆のため息を零す。

中の様相は俺が家を買ったらこうしようかという想像を具現化したようだったからだ。

ちょっとした屋敷になっており、執事やメイドがいてもおかしくない。

そして外には広い畑もあって離れには鍛冶場も備え付けられている。

家の中を拝見してみる。

一階は大きな広間となっており、ドアを隔てた先には調合台やキッチンがある。そして二階へ続く階段を上がると、部屋がいくつもある。

これなら一人ずつ部屋を割り振ることが出来るだろう。

「これは本当に良い物件だね」

心なしか俺は興奮していた。

ここでテイータさんが切り出す。

「で、この家なんだけど、おそらく30000Gで売りに出されると思うわ」

「30000か……」

俺は考え込む。

今あるお金がとてもしゃないけど払えない。しかし、この家は絶対に欲しい。

「これは提案何だけど、今のお金じゃボクが家を買えないから、私も一緒に出してあげる。そして20000Gはボクが返してくれば良いよ」

「え？ どういうこと？」

「だから私が残りの20000Gを払うということ。ボクには結構

お世話になっっているからね。これまでの利益を考えるとこれぐらい安いものよ」

ティータさんは俺の作ったポジションを100Gで販売している。

つまり少なくとも見積もっても30000Gはあるのだ。

「けど、それは悪い気がする」

「何言っているの、ボクは家が欲しかったのでしよう。あの時、私から今日の年数を聞いた時から人が変わったようにお金を集め出したわ」

現在はイルヴァナス歴458年。

そして魔物による大進行によってこのカルギュラスが廃墟となるのが463年。

つまり後5年でこの都市は跡形もなくなってしまうのだ。

それを聞いた瞬間俺は今までの戦略を見直す必要が出てきたと感じた。

本来ならばこの都市を拠点としてゆっくりと力を付けようと考えていたが、それは諦める。

俺は前の住み家だった工業都市ジグサールに移り住み、そこで力を付ける計画へ変更した。

しかし、工業都市ジグサールの周辺にはこと比べ物にならない

強大な敵が徘徊している。

当然ながら今の俺にその都市へ辿り着くことは不可能。

だから俺は一年以内に家を持ち、そこで各スキルのレベルを上げるのと並行して自分のレベルを上げることにした。

そのための第一歩として必要だったのが家だったのだ。

俺が黙りこんでいるのを見て何を思ったのか、ティータさんは腰を下ろして視線を下げ、俺の肩を掴んで語りかける。

「ボクが何を考えているのかお姉さんに分からないけど、ボクが焦っているのは伝わってきているよ。一度力を抜いて深呼吸して。ほら、少なくともお姉さんはボクの味方だよ」

俺は我知らず赤面した。

ティータさんは俺の母親に似ている気がする。

そう言えば母さんも今の様な恥ずかしいセリフを真顔で言っていた気がする。

あの時は何とも思わなかったが、今のように焦っているとこんなにも嬉しくなる。

そしてティータさんは立ち上がってニコリと微笑んだ。

「さあ、行きましょう。早くしないとこの家を誰かに取られてしま
うよ」

それを聞いた俺は慌てて先へと進むティータさんの後を追った。

数日後、俺は驚かせたいものがあると言ってキツカ、アイラ、ユキ、そしてクロスを連れ出した。

「ねえ、どこに行くの」

初めて乗る馬車に戸惑っているのか所在なさげにしているキツカ。

それに俺は「着いたら解る」と笑った。

そして到着。

「ここは何だと思う?」

俺が4人に聞くと、しばらく考え込み、最初にアイラが手を上げた。

「立派な屋敷ですね」

「そう、立派な屋敷だ。で、これは誰のものだと思う?」

ここまで言うときアイラをはじめ全員が理解したらしい、目を丸く見開いてありえないというように首を振った。

「まさかこれは」

「そう、アイラの想像通り、俺達の家だ」

それを示すかの様に表紙には俺達五人の名前が記されていた。

「そして、さらにサプライズがある」

俺は隠していた小箱を目の前に持ってくる。

「家を持ったということは社会的地位があるということだ。どういうことだと思っ？」

俺が尋ねると今度はユキが。

「……市民になれる」

「そう、その通り。これが俺達5人の市民証明書だ」

ティータさんに用意して貰った羊皮紙を一人一人に手渡す。

この市民証明書は『市民』になるために必須なものだ。

これで俺のステータスが『浮浪児』から『市民』に昇格できる。

『市民』になると出来ることがグッと広まる。

病院で診てもらえるし、図書館も利用できる。政治にも関わることが出来る。

そして何より俺は自分で作った物を自分で売ることが出来るのだ。

何せ『市民』だから。

人間と認められた証だから闇の者もおいそれと手出しが出来ない。

つまり、遠慮なく商売が出来る。

あ、もちろん薬だけはティータさんの所で売るよ。

そうするのが礼儀というものだろう。

はい、感傷終わり。

「さてと、入ろう。俺達の城」

「待って下さいー！」

俺がそう宣言して一歩踏み出そうとした時、突然クロスが大声を出した。

俺はつんめのってしまっ。

「これさえあれば自分達は市民なんですよね」

「まあ、そうなるけど」

ぶつけてしまった鼻頭を押さえながら俺は答える。

すごく痛いし、それ以上に恥ずかしいぞ。キツカもクスクスと笑

っているし。

「学校にも通えるんですよね」

「市民だから当然の権利だな」

「だったら、お願いします！」

クロスは両膝をついて地に頭を擦りつけ始めた。

この出来事には俺を含めて全員が驚く。

「自分達を学校へ通わせて下さい！」

そしてクロスは思いの丈を語り始めた。

「僕は昔から騎士に憧れていました。将来は騎士となって国を守りたいと考えてきました。けれど僕は市民権を持たない浮浪児です。騎士になるための試験など受けることが出来ません！」

普段は温厚なクロスがここまで熱く語るとは。

よほど騎士への思いがあるに違いない。

さて、どうしよう。

学校へ通うとなるならばそれだけお金が必要となる。しかも騎士の養成学校となればなおさらだ。どれだけ低く見積もって通常に3倍はかかるだろう。

「けど、まあ良いか」

あのクロスが自己主張しているんだ。

普段から我がままを言わないことを鑑みればそれぐらい良いだろう。

幸いにも『市民』になったから金策のあてはあるし。

「分かった、学費は俺が何とかしよう。だから君は学校に行ってくれば良い」

俺はそう言って立ち上がりませようとしたがクロスは頑として動こうとしない。何故かと燻しんでいるとさらに言葉を紡いだ。

「僕だけじゃないんです。キツカやアイラ、そしてユキも一緒にお願いします」

「く、クロス!?!」

「何を言っているのですか!?!」

「……………」

それにはさすがにキツカとアイラ、そしてユキが反応した。

「キツカは冒険者に、アイラはレンジャーにそしてユキは魔法使いになりたいのです。ですから、僕だけでなく彼女達も一緒にお願いします!」

「ふむ、それは本当か？」

俺がジロリと視線を向けると、3人はバツが悪そうな顔をするが、イエエとは答えなかった。つまり彼女達は学校に通いたいのだろう。

「しかし、まあ揃いも揃って学費が高い所ばかり」

どれもこれも全部学費が通常の学校と比べて高い。

そして最も高いのが、ユキが希望する魔法使いのための学校で、これは通常の学校の学費の五倍はする。

4人全員にかかる学費を合わせると、通常の学校に14人送り込めるほどの莫大な金額が掛かる。

これはさすがの俺も躊躇してしまつ。

この家も20000Gの借金があるし。

俺は4人を見ながら思索する。

果たして4人にそれだけの投資をする価値があるのだろうか。

それらの学校では良い教育を受けられるから、もし4人全員が付いてきてくれるのならば工業都市ジグサールまでへの道のりは楽になるだろう。

ジグサールさえ辿り着ければ何とかなるから俺についてくるなり別れるなり好きにして貰っても構わない。

しかし、それはあくまで順調に事が進んだ場合だ。

もし俺に何かあれば学費の支払いは不可能になり、彼らは学校を辞めてもらうしかない。そうなれば今までの投資も水泡に帰してしまっ。

逆に彼らが問題を起こしてしまっても水泡に帰す。

ここは重要な分岐点となる。

学校に行かせるか否か。

投資をするか否か。

考え、考える。

キツカ、アイラ、ユキ、そしてクロスを順に眺めながら俺はどうするか思考をフル回転させる。

20分ほど経ったのだろうか。

その間誰一人声を出さなかった。

その様子を見て俺は四人の覚悟を知った。

「Be ambitious 大志を抱け」

俺はそう口ずさんだ。

誰かが言ったのかを忘れたが、とても良い言葉だった気がする。

よく考えると俺は現実世界でも目の前の彼らの様な友人もいなかったし、将来はこうなりたいと考えることも無かった。

ただ、ゲームをしてさえできれば何も要らなかった。

だからこそ俺は彼らが眩しく映る。

俺に持っていない何かを持っているキツカ、アイラ、ユキそしてクロスが羨ましい。

「良いだろう」

俺は呟く。

「そこまでやりたいことがあるのなら、全てを出し切れ」

「では」

クロスが目を輝かせたので、俺は深く頷いて。

「自分が望むままにやっていい」

「……あ、ありがとうございます」「」「」

4人全員が感激した面持ちで同時に頭を下げてきた。

「さてと、これからが大変だぞ。お前達は字が読めるか。それが出来ないと話にもならん。だから明日から特訓だ」

俺は照れくさかったので踵を返し、これからしばらくお世話になるであろう家に歩を進めた。

柄にもないことを言ったと自覚している。

今の俺はきつと変な顔をしているだろう。

このまま何事もなく自室に閉じこもって暴れたい衝動に囚われて集中力が疎かになった結果。

「大好きー!!」

「必ず応えます」

「……一生忘れない」

「ありがとうございます!」

「おわあ!」

キツカ、アイラ、ユキそしてクロスから抱き付かれてもみくちやにされた。

目標達成（後書き）

予告通りクロスが主人公にお願いしました。

けど、失敗した感が否めません。

慣れないことはするものではないと痛感しました。

これで第一部は終了です。

無一文から家を持つまでの流れでしたが、流れが速過ぎたのではないかと反省しております。

第二章入る前に番外編としてアイラ視点でこれまでの流れを紹介したいと考えています。

番外編 アイラの視点（前書き）

番外編です。

ですので読まなくとも小説の流れに差し支えはありません。

主人公が拾った四人組の一人であるアイラ視点で第一話から第五話まで進みます。

アイラが主人公の活躍を見てどのように感じたのかを想像して頂けると幸いです。

番外編 アイラの視点

『市民』になること。

それは私を含めた全浮浪児が持つ願いであり叶わない夢であった。

私、アイラは親の顔を覚えていない。

物心ついた時には既に浮浪児としてその日その日を生き抜くのに必死だった。

ましてや私は女の子。

一人だと喰われて終わり。

だから生きるための知恵として私は仲間を組んでいた。

思い切りは良いけど猪突猛進なキツカ。

天然不思議系のマスコットキャラクターであるユキ。

気は弱いけど力と体格は規格外のクロス。

そして常に周囲の気を配って策謀を張り巡らせる私。

この四人で徒党を組んで過ごしていた。

盗みは日常茶飯事、詐欺や置き引きも普通にやっていた。

基本的に計画の立案は私で実行するのがキツカ。

たまに他の浮浪児グループと一触即発状態になった時はクロスの出番。

あいつは気が弱いけど力が強いから大抵の浮浪児は彼一人でどうにかなる。

ユキは……何でいるのか私も分からないわね。

いつの間にか私達の仲間に加わっており、気が付けば行動を共にしていたみたい。

邪魔にならないようだからチームのマスコットとして置いている。

それだけ。

それだけのはずだったのに、ユキがあいつを見付けてきたのは驚いたわ。

ユキは珍しくパンの入った袋という戦利品を手中にして戻って来たとき、私はパンの持ち主について興味を持った。

このパンは浮浪者専用のパン屋でしょう。

ならば必然的に持ち主は市民証を持っていない浮浪者ということ

になるわね。

ユキが言うにはこのパンを一人で持っていたという。

この量のパンを一人で？ 仲間もないのに？

少なくともただの浮浪者じゃない。

身元の知れないユキにあっさりとパンを奪われたことも相まって私は会ってみたいと感じた。

よほどの大馬鹿者かそれとも……

「提案があります」

久しぶりのまともな食事ではしゃいでいる三人に向かって私はあの考えを披露した。

結論的に言えば、ユウキという少年は想像以上だった。

あの時の「私達を買って下さい」発言は吊り橋を目隠しで渡るぐらい危険な賭けだったけど、その分見合った報酬 きれいな服とお金を手に入れたわ。

今、ユウキはベッドで熟睡している。

私達にきれいな服を作ってくれたのに、ユウキはボロの服を着ているのは多分自分の分の服を作り忘れたのだろう。

可愛いところあるじゃない。

ユウキはしばらく食べられるだけのお金を置いてくれたから、私はここから逃げ出そうかと提案したけど反対多数で却下となった。

いつもは賛成してくれるキツカが反対するとは珍しい。よほどユウキが作った服に感動したのね。

私の考えは却下されたけど、不思議と腹は立っていなかった。

それは無意識の部分で彼について行ったほうが良いと訴えているのかもしれない。

まあ、今すぐに離れる必要はないわ。

幸いにも明日は貰ったお金で色々と遊べるから思いっきり楽しもうかしら。

その途中で他のグループと会ったらどうしようかな。

洋服を着てお金を持っている私を見た彼らはきっと悔しがるだろうな。

思いっきり自慢してやろうかしらね。

……自慢した結果、私は毎日常服や靴をスラム街の入口に置く約束をさせられたわ。

どうやら舞い上がっていたみたい、反省しなくちゃ。

そして、驚いたことにユウキは毎日服や靴を作ることを快諾したのよ。

いえ、良かったのよ。

でないと私達のグループは全浮浪児の敵になっていたから。

ありがとうございます、ユウキ。

どうやらユウキは私達を驚かせるのが大好きなようね。

いったいどこの世界に銅貨や金属ゴミから武器防具を作る浮浪児がいるのか。

Bの銅貨と錆びた水道管から青銅の盾を製造したのも十分驚いたけど、鋼の大剣まで作ってくるとは私の常識の範疇を超えていた。

確かに、鋼の大剣を作る設備が鍛冶屋にあるとはいえ（王都だから）限度というものがあるでしょう。ここまで運んできた鍛冶屋の若い職人が呆然としていましたよ。「俺ってまだまだ井の中の蛙だったんだなあ」とブツブツ呟きながら帰っていったわ。

ユウキはそれどころじゃないくらい疲労してベッドに倒れたから

知らないでしょうけどね。

それに、鋼の大剣を普通に買おうとすれば2000Gは下らないわよ。

どうやってそれを一個55以下の屑鉄から製造できるの？

ユウキに尋ねると「俺はもっとすごい武器を作っていた」と、冗談なのか本当なのか判断に悩むセリフを吐いたわ。

「いゝやゝ、たゝすゝけゝてゝ！」

キツカが叫んでいるけどこればかりはどうしようもないわ。

だって勉強しないキツカが悪いんですから。

知恵を働かすには知識が必要。

知識を蓄えることを怠れば芳しくない結果が待っているわ。

さて、私達は外で飲み物でも飲みながら一服しましょうか。

鬼の居ぬ間に洗たく。

ユウキがキツカに構っている間は存分に休めるわ。

キツカの要望通りユウキは全員分の装備を作ってきた。

キツカは当然のことだけどクロスも重装備に身を固めて満更じやなさそうだったわ。

そう言えばクロスは最近騎士になりたいとか呟いていたわね。

浮浪児だったあの頃はそんなことを言わなかったけど、やはり衣食住が安定すると夢を追いたくなるのかしら。

キツカも前よりまして行動力が上がっていたわね。

前々から底なしのエネルギーの持ち主だったけど、近頃は輪をかけてその傾向が強いわ。

あんなにも快活で生き生きとしたキツカなんてしばらく見てなかった気がするわね。

そして、ユキに魔法の才能があることは素直に驚いた。

ユキは前々からユウキと何をしているのか分からなかったけど、どうやら魔法を教えられていたらしいわね。

後でユウキにそのことを追及するとユウキは「ユキが黙っておいてくれと言うから」とユキが口止めしていたみたい。

あの子にも誰かを驚かせたいと思う所があったようね。

まあ、そんな私も皆を脅かせようと密かにユウキからボウガンの扱い方を学んでいたけど。

けど、その驚きの半分はユキに取られちゃった。

少し悔しいわ。

後でお礼として詐欺師が使う人の騙し方について教えてあげてください、少々厳しめにレクチャーしようかしら。

ユウキがブチ切れる可能性があるけど、しばらく一緒に暮らしたからある程度怒りの境界線は判断できるわ。

ふふ、こんなところで浮浪児だった経験が役に立つとは思わなかった。

今日も私は一人で魔物を狩る。

始めの内は四人揃ってから魔物を狩っていたけど、段々とそれがじれったくなつたので各自がバラバラに行動しようと提案したのよ。

ユウキは「それは危険だ」と難色を示していたけど、私から言わせればスラムより百倍安全だわ。

武器もあるしポーションも持っているからそうそう大事にならな
いわよ。

スラムで培った危険を察知する能力を舐めないでちょうだい。

そういった説得の結果、渋々ながらもユウキは単独行動を認めてくれるようになったわ。

私は街の外にある森に身を隠し、気配を絶つてあるポイントに魔物が来るまで待ち続ける。

そして、魔物がそのポイントに入った瞬間に矢を放つ。

ユウキの作ったボウガンの糸は鋼糸を使用しているので、通常より何倍も強い。

至近距離ならばベアー程度の頭蓋骨を貫通する程よ。

全く、本当に危険な代物を作ってくるわね。

急所を貫かれて絶命した魔物を確認した私は愛用のボウガンをつんと叩いた。

「あら？」

私は肉が焦げる匂いが漂ってきたのを感じた。

「どつちやらユキもやっているようね」

ユキも積極的に狩りを行っているわ。

順番でいうとキツカ>私>ユキ>クロス>ユウキね。

ユウキはポーション作りがあるから仕方ないにしても、クロスはもうちょっと頑張れないかしら。

あれだけの重装備に身を固めているならばちょっとやさっとのこ
とで死なないから思いつきり戦っても問題ないはずなのに。

私はクロスの臆病さは騎士としてやっていけるのか憂いた。

「つとと、今はそれよりもユキね」

ユキは魔法使いなので、私達より打たれ弱い。

万が一があつたら困るので私は様子を見に行くことにしましょう。

誤解の無いように言っておくとポーションのための材料は日替わ
りローテーションで個人個人が集めてユウキに渡しているわ。

さすがに材料集めを行わないほど私達は恩知らずでないと自覚し
ているわよ。

どうやら私も三人に感化されたようね。

ユウキがいない時に私達が集まると、決まって話すのが将来につ
いてだったわ。

どうも私は隠密行動を好む傾向があるから、将来はレンジャーと
して活躍したいわ。

キツカは冒険家、ユキは魔法使いでクロスは騎士。

ちょっと前の自分達が今の私達を見たら絶対驚くわね。

そして、キツカは魔物狩りをこの近辺だけでなく、隣街の周辺にまで足を伸ばしたいみたい。

けど、そこまで行っても私達は浮浪児だから通行証がない。

通行証があれば一度自分が行った街だと一瞬で行ける装置が使えるのだけど、市民しか貰えない。

ユウキがいてくれれば問題ないのだけど、生憎とユウキはポーシヨン作りで忙しい。そしてユウキ抜きで外で一泊できる程私達は自惚れていないわ。

そして、魔物狩り以上に私達は独学の限界を感じ始めていたわ。

もちろんユウキが教えてくれるのだけど、ユウキは体一つしかなく、食い扶持を稼ぐために私達に構ってあげる時間がない。

私達が満足するまで教えてくれる場所は学校にしかなかった。

私が行きたいのは弓など隠密行動を主とするレンジャー育成学校。

ここはレンジャーの登竜門と呼ばれるほど徹底的に教える学校。

ここを出れば私の夢へまた一つ近づく。

けれど問題が一つ。

学校に通えるのは一部を除いて市民以上の称号を持つ者のみ。

残念ながら私達は市民じゃないので学校に通えないわ。

もしかしたらユウキなら何とかしてくれる。

一瞬その思考が頭によぎったけどすぐに打ち消したわ。

おそらく皆もユウキに頼むという選択肢についてはあったのかも
しれないけど、誰も言い出さないでしょうね。

何せユウキには非常にお世話になっているわ。

私達四人を養うために毎日ポジションを作り、暇を持て余した私
達に武器や防具、そして戦い方まで教えてくれる。

そして最も凄いの、それらのことに関してユウキは全く文句を
言わずに平然としていることよ。

私ならユウキの様な対応は無理だと断言できるわ。

「まさかこれは」

「そう、アイラの想像通り、俺達の家だ」

……もしかして私はとんでもない人物に出会ったのかもしれない。

ユウキは買った屋敷の前で得意げにしているけど、普通の常識で考えて12歳の子供が家を持つことなんてあり得ないのよ。

今更ながらにあの時の選択について考えると寒気がするわね。

もし、あの時パンの持ち主に興味を持たなかったら。

金貨を貰って引き下がっていれば少なくとも私は今この場にいなかった。

匂いすら感じさせずに通り過ぎ去る。

本当にチャンスというものは分からないものね。

あら？ まだ何かあるのかしら。

ユウキが小箱を持ってこちらへ向かってきます。

そしてそれを目の前で開け、入っていた物は。

「そう、これが市民証明書だ」

もう説明は不可能ね。

私が。いえ、私達があんなにも望んでいた物が目の前に出てきたのだから。

本当にユウキは何者なの？

今なら私はユウキが神様だといっても「ああ、やっぱり」と納得するでしょうね。

そんなユウキは気を良くして屋敷へと向かう。

と、ここでアクシデントが起こったわ。

普段は物静かなクロスが大声でユウキを引き留めたのよ。

ユウキがつんめのもって扱ける様は失礼だけど笑ってしまったわ。

「ふむ、それは本当か？」

普段とは全然違うユウキの気迫に私は生きた心地がなかったわ。

ユウキ、あんな目もできたのね。

まあ、あれだけの力量を持っていればたかが浮浪児ぐらい黙らせるのも訳ないわね。

およそ20分の間ずっと黙っていたけど、私の人生の中でこれほどの威圧を経験したことはなかったわ。

たった一言、「学校に行かない」と言えば良かったのかもしれないけど、それは言えなかった。

目の前のユウキから発する『恐怖』よりも『願望』の方が強かつ

たのよ。

それは皆同じ。

だからこそ、誰も言葉を発さなかったのよ。

「Be ambitious 大志を抱け」

ユウキが呟きました。よく聞き取れませんでした。ユウキは一つの決心をしたようです。私達は息を殺して次の言葉を待ったわ。

「良いだろう」

その瞬間、周りの空気がふっと軽くなっただわ。

クロスも「では」と言葉を紡いでいたから、それは錯覚じゃない。

「自分が望むままにやってこい」

ユウキはそう紡いだ後、ふっと微笑みました。

その笑みは遠い記憶の中の顔も知らない両親を彷彿させるような慈愛の表情。

「「「「あ、ありがとうございます」」」」

いつの間にか私達は自然と、心から頭を下げていたわ。

よく師匠に弟子が頭を下げる場合があるけど、その時の弟子の心境がようやく理解できたかもしれないわね。

敵わないのよ。

自分のためにこれほど多大な労力と時間を割いてくれる存在がありがたすぎて何も言えない。

だから私はこのままユウキ、いえ、ユウキ様がいなくなるまで頭を下げようと考えていたけど隣のキツカが震えだし、そして突然奇声を上げてユウキ様に突撃し出したわ。

よく見るとユキやクロスも駆け出している。

これは遅れるわけにはいかないわ。

ユウキ様ごめんなさい。

最後のわがままです。

感謝の気持ちを表現させて下さい。

「必ず（ユウキ様のご期待に）応えます」

その後の私達は学園の筆記試験のためにユウキ様自らが字の読み書きについて教えてくれました。

これ以上ユウキ様のお手を煩わせたくないという想いは全員が共通していたようで、あのユキでさえ真面目に勉強していたわ。

その甲斐あってか私達全員が試験に合格。来月の入学式に参加できるようになったわね。

しかし、最難関と名高い王立魔法養成学校にユキが合格できるとは予想できなかったわ。

噂によるとユキが唯一の市民だとか。

いつの間にか私達の仲間に入ってきたことといい、ユウキ様を見つけてきたことといい本当にユキは何者かしら。

「もう準備はできたか？」

ユウキ様が私の荷造りについて心配してお声を掛けてくれました。

私達を通う学校は全寮制で寄宿舎暮らしです。

そのため昨日は全員で下着や制服の素材やらを買いに出かけ、ユウキ様が徹夜で全て仕上げてくれました。

「はい、もう少しです」

私は努めて平静に答えます。

本当はユキのことを考えて全然進んでいないことは口が裂けても言えません。

ああ、そうだ。約束を忘れていたわ。

「申し訳ありませんがユウキ様、少々時間を頂けませんか？」

「そう言ってもそろそろ馬車が来るぞ」

「はい、承知しております。しかし、これから先しばらくキツカ達と会えなくなりますから最後に言葉を交わしたいのです」

「ああ、そういうことか。それなら仕方ないな」

ユウキ様は一つ頷いてこの場を去っていきます。ありがとうございます。ユウキ様。

大急ぎで荷造りを終えた私は集合場所へ向かったわ。

その場所は屋敷の裏側にポツンと生えた木。

「急いで急いでアイラー」

「……遅い」

「転ばないよう気を付けて」

どうやら私が最後のよう、本当に恥ずかしい。

さてと、気を取り直して私は木の前で円陣を組みました。

これから先はしばらく会えない。

だからこそ、最後に皆の心を合わせるために円陣を組もうという提案をしたわ。

ここが第二の人生。

ユウキ様の目となり手となり、そして足となって動くための生活が始まる。

キツカやユキ、そしてクロスの様子を確認すると皆固い意志を瞳に宿していた。

うん、満足。

私だけじゃないみたい。

全員でユウキ様を守り抜く決意が満ち溢れている。

まず始めにキツカから。

「私達は」

「「「「一心同体」」」」

次にユキ。

「……最後まで」

「「「「信じぬく」」」」

クロス。

「後悔は」

「「「「ありえない」「「「「

最後に私です。

「この命を誰に捧げる」

「「「「ユウキのために」「「「「

番外編 アイラの視点（後書き）

稚拙な駄文を最後までお読み頂きありがとうございました。

普段の生活（前書き）

大幅変更しました。

普段の生活

14歳になった俺は以前と比べて大分力が付いた様に思える。

身長も伸びたしやれることも増えた。

だが、俺の心は未だにあの時から動こうとしない。

ベッドに寝ていた俺は何となくステータスウィンドウを開いてみる。

名前、装備、スキルなどが並んでいる枠の中に一つだけ空白が存在していた。

「やはりログアウトできないか」

その項目は夢から覚めるための必須場所。

それが無いということは、覚めない夢と同じこと。

覚めない夢＝現実と置き換えることはできると考える。

つまり俺はこの世界は仮想空間でなく、現実ではないのかと疑い始めていた。

いくらゲームが好きだといえ1年以上ゲームの世界に浸ることなど出来やしない。

精神はともかく体がもたないのだ。

だが、今のところ俺の体に変調はない。

つまり体は元気そのものだということになる。

「この世界は妙に現実感があるんだよな」

ゲームの世界ではありえなかつた空腹や病気などの異変。

現実ではありえないステータスウインドウの出現。

「……胡蝶の夢」

俺は何ともなしに呟く。

胡蝶の夢とは中国の荘子の偉人が思想であり、ここが現実か否かを論ずることよりも蝶なら蝶で、皇帝なら皇帝でその場を精いっぱい生きれば良いということを説いていた。

次に俺は自分のステータスを確認する

名前： ユウキカザクラ

装備： 武器 ミスリルダガー

防具 風のマント

頭 ミスリルヘルム

足 軽業師の靴

装飾品 厚手の手袋

お金 54600G

ステータス

剣 35

魔法	2	0
採取	2	5
料理	5	
鍛冶	4	5
調合	5	6
裁縫	4	3

アイラ達と別れてからもう2年が過ぎ、昔と比べて相当スキルが上がった。

特に鍛冶や調合等はもうそれで食べていけるレベルだ。

「あいつらの学費を稼ぐために相当頑張ったからなあ」

俺は過去を振り返る。

4人が学園に向かった最初の一年は特に忙しかった。

入学金やら学費の支払いやらでお金がどんどん飛んでいく。

必要な金を稼ぎ出すために俺はポーションのほかに武器や防具を作って売っていた。

始めは正体を隠すつもりだったがもうそんなことを言っていない状況じゃない。

これまで封じていた露天商まで行って金を稼ぎ出さなければならなかった。

幸いにも露天商を行っていた期間で闇の者が絡んでくることは無

くてホツとする。

半年ぐらい続けると俺の作った物は出来が良いと評判が出来て、次第には俺の家まで押しかけて来る冒険者が現れる始末。

商売も軌道に乗ってとりあえずは金の心配はなくなったのが1年前。

今はわざわざ売りに行かなくとも待つていれば客が来る状態だ。

だから俺はボーっとしていて良い

していて良い……はずなんだけど。

「いつまで寝ているのですかこの怠け者が」

罵声とともに俺は文字通りベッドから叩き起こされた。

「さっさと起きなさい。今日の分の仕事は山のようにあるのですよ」

「エルファさん、一応俺は主だよ？」

俺が涙目で抗議するがエルファさんは素知らぬ顔をしてさっさとベッドメイキングに取り掛かっていた。

俺を罵倒するのは最近雇ったメイドさんのエルファ「ララフルだ。

年は17歳前後。きめ細かい白磁の肌と鮮やかな緑色が映えた腰まである長い髪と瞳が印象的な少女。例えるならフランス人形、ただそこに佇んでいても絵になる美しさを秘めていた。

しかし、エルファさんは謎が多すぎる。

名前： エルファ「ララフル」
装備： 武器 アサシンダガー
防具 メイド服
頭 カチューシャ
足 ニーソックス
装飾品 薄手の手袋
ステータス
小剣 85

隠密	6	9
料理	7	5
裁縫	5	6
音楽	6	5
鑑定	7	5

「……一体何だこれは？」

顔合わせした際にエルファさんのステータスを見せてもらった感想がこれ。

どれもこれも高レベルだが、いかんせん方向性が色々とおかしい。

隠密ってなんだ？ どうしてそんな特殊スキルがここまでのレベルになっている？

小剣と隠密がここまで高くなるのに思い当たる職種が一つあるが、それはあまり考えたくない。

何故ならそれはアサシ

「主、さっさとして下さい」

エルファの催促に俺をぎくりとしながらも頷く。

まあ、人の過去など詮索しても仕方ないからここは聞かないでおくのが正しいか。

ティータさんが推薦したんだ。警戒しても仕方ない。

そのステータスから想像できる通り、食事も掃除も文句の付けようはないが、主を主とも思わない言動が玉に傷の、扱い難い困った人だった。

本人いわく、ちゃんと主らしく振舞えばこちらも誠意ある対応を取るらしいが、エルファが納得する主の振舞い方とは一体何だろう。

前に聞いてみると。

「人に聞く時点で主失格です」

……一言で切って落とされた。

言っておくが俺にM属性はない、貶されて喜ぶという特殊な性癖は持っていないぞ。

どうしてエルファさんがここにいるのか。それは2年前に遡る。

俺は4人を見送った後、屋敷が広すぎてとても1人では管理出来ないと悟った俺は誰かを雇うことにした。

そのことをポツリとティータさんに漏らすと「じゃあ良い人を知っているわよ」と人を紹介された。

ティータさんの紹介なら何かと大丈夫だろうと判断した俺はろくに面接もせずに採用した。

しかし、それが運の尽き。

ご存じの通りエルファさんは俺に対して人間扱いしてくれませんか。

ティータさんは「愛情表現よ」と笑っていましたが、どこの世界に愛情をサドな言動で表現する輩がいますか。

「なにボサツとしているんですか、朝飯が冷めるからさっさと起きてください」

はい、分かりました。すぐに下へ向かいますから毛布でバサバサしないで下さい。

俺は高速で着替えた後、逃げるように下の食堂へ向かった。

食堂には人20人が座れるほど巨大な長テーブルが置かれている。で、入口から見て最も遠い上座の位置に俺の朝食が用意されていた。

パンに牛乳、季節のサラダやベーコンエッグで、デザート付きなど、普通の水準から見れば豪華な部類に入る料理が並んでいた。

俺はまだ湯気を立てているパンを齧ってみる。

パンは出来立てらしく口に含んだ瞬間にほっこりとした。

「うん、美味しい」

食堂は清潔が行き届いており、敷いてあるテーブルクロスも皺一つなかった。

綺麗なことは綺麗だが、アイロンもない時代にどうやって皺を伸ばしているのか。

「失礼します」

その方法について頭を悩ませているとエルファさんが手にある物を抱えて食堂に入ってきた。

「何を聞きますか」

エルファさんはバイオリンを肩に乗せて俺にリクエストしてくる。

「そうだなあ、少し明るい感じで」

「了解しました」

俺の意向を聞いたのか、エルファさんが知っている中で楽しめの

ポップな旋律がバイオリンから響いてくる。

その演奏はとてもアマチュアとは思えないほどレベルが高い。

「しかし、まあ」

俺は演奏に集中しているエルファさんを眺めながら考える。

確かに言動は最悪だが、それを補って余りある程の長所を彼女は有している。

俺がエルファさんをここに置いている理由もそれだ。

料理も美味しく、掃除も行き届いてかつ演奏を楽しめるのであれば多少の言動ぐらいは我慢してやろう。

「次は悲しめの曲で」

そろそろ終わりそうだったので俺は新たなリクエストをエルファさんに注文した。

「師匠、おはようございます」

朝食も食べ終わり、紅茶を飲んでいるとその声と共に食堂に入ってくる人影。

親のお下がりなのか頑丈なつなぎ服に身を纏っている。しかし、それによって美しさが失われることはない容貌を持っているのは。

「ああ、サラか。おはよう」

俺がそう微笑みかけるとサラは恐縮したのかペコリと頭を下げた。

俺より頭一つ分高い身長と大人びた物腰ゆえに見た目20歳実年齢14歳という年齢詐欺を犯しているサラ「キュリアス。親が職人で、幼い頃からの手伝いをしているせいかな作業しやすいようにレンガ色のくすんだ髪を肩口で揃えており、体も同年代の女子と比べるとやや筋肉質だった。

「師匠、今日は武器を作るんですよね」

目をキラキラさせて尋ねてくるサラに俺は苦笑して肯定する。

サラは俺のことを師匠と呼ぶ。

サラ曰く、鍛冶屋である親の所に、武器の修理に訪れた冒険者がその武器を絶賛していたので、冒険者に頼んで試しにそれを奮ってみると雷にしびれた様な衝撃を受けたそうだ。

あれほどきめ細かい出来栄なのに実践重視で作られている。形式美と機能美を兼ね備えたあの武器を作ったのは一体誰なのかを知りたくて探った結果、俺の家に辿り着いたらしい。

「師匠、見学しますから」

サラは俺と同レベルの鍛冶職人になりたいそうだ。しかしまた、女性で職人とは厳しい道を選んだものかと感嘆する。

鍛冶職人の中の暗黙のルールとして子供はともかく鍛冶場に女を入れないというのがある。よく分からないがそういう決まりがあるから、彼女が鍛冶職人として生きていくのは厳しいだろうと俺は考えている。

が、ドエスのエルファ曰く、常識無視の塊である主の弟子が職人達から村八分にされるわけがない、例え敵に回したとしても、あんな腕前なら例え前人未到の場所でも武器を求めて買いに来る客が後を絶たないとえらく捻くれた褒め言葉を頂いた。

俺から言わせるとエルファさんの方が常識無視なんだけど。

小剣レベル85って一体何？

閑話休題

実際問題として職人達から嫌われたとしても、サラが後悔せずに生きていけるんだったらそれで良い。

そう結論つけて俺はこれ以上考えるのを止めた。

「師匠、何の武器を作るのですか？」

離れの竈に向かって共に歩いているとサラがウキウキした様子で聞いてくる。

「鋼の剣に風属性である『風の石』を付加させてカマイタチを飛ばせる『風の剣』を作ろうと思う」

一般的に武器は鍛冶屋によって性能が若干異なるが、それでも俺の域までには及ばないだろう。鍛冶レベルが低かった頃にも同じ材料で重さや切れ味が数段上なのをいくつも作っていたが、鍛冶レベルが20を超えると俺は本格的に独自路線を歩み始めた。

簡潔に言うと武器に属性を付与。

常に高熱を発する槍や帯電している斧などを作って売っていた

俺の武器は既存の概念をひっくり返すほどの衝撃を与えたらしく、鍛冶職人の間では俺のことを鍛冶職人の始祖であるメテルギウスの生まれ変わりと持て囃された。

まあ、呼び方なんてどうでもいいので、俺のことをなんて呼ぶかは自由に任せている。

とにかく、俺は武器に属性を組み込める唯一の鍛冶職人として評判を得ていた。

そう、俺は武器に属性を付与させるといふ困難な技術を習得している。

経験がある今でこそ簡単に出来るが、ログアウトが可能なプレイヤーの時は難しかった。

属性付与は豪快な腕力と繊細な技術の2つが必須である。

その相反するものを両立させるにはどれだけ困難か。

繰り返される失敗に心が折れかけたことは一度や二度でない。

さらに付与させる属性を増やすとさらに難易度が上がる。

『火』『水』『風』『雷』『土』『闇』『光』7種類全ての属性付与ができたときは冗談抜きで死んでもいいと思った。

鍛冶に関しては俺と肩を並べるプレイヤーはいなかった。

つまりすごいわけ。

だから、そう。

「師匠、1つの属性付与なんて言わずにもう2、3個属性を付け加えましょう。私は『風』と『雷』を付け加えた『風雷の剣』を作れますから」

出会ってから一年にも満たないのにここまで出来るのは天才を通り越して異常だぞ。

サラ曰く、師匠のやり口を真似ているだけですからすぐに覚えられたのであって、もし独学なら1つの属性付与さえ無理ですよ。と言っているが鍛冶は見て出来るものでなく、経験が重要なものだから、やはりサラは天性の何かを持っている。

だってステータスが。

名前： サラ＝キュリアス

装備：

武器 なし

防具 丈夫なツナギ

頭 なし

足 火モグラのブーツ

装飾品 力の指輪

ステータス

鍛冶 105

そのステータスを見たとき俺は目を疑ったよ。

ハンマーすら握ったこともないサラが鍛冶レベル3桁。

しかもそれ以外は全く使えない。

難しい剣の製造方法は一発で理解できる癖に、本を読むとなると
どれだけ優しくとも3行で眠ってしまう。

エルファさんとは別の意味で驚いた。

「それもいいが生憎と材料がない。だから今日はこれで我慢してほ
しい」

「えー、何で材料が無いんですか？」

「キツカ達の試験が近いからな素材を取りに行く余裕がないんだ」

最初の1年はともかく、2年目に入るとキツカ達も学校に慣れて
きたのか4人は冒険に出かけて魔物を倒し、その際のドロップアイ

テムを俺に届けるようになってきた。

俺としては素材が格安で手に入り、キツ力達は小遣い稼ぎそして学費返済と双方ともに利益があるので結構長い間続いている。

「一応キツ力達の名誉のために言っておくが、この風の石は市場に出回らない非売品だぞ」

一般に流通しているのを市販品なら、闇市や冒険者から直接買わないと手に入らない素材が非売品である。

で、属性付与させるための素材の大半が非売品だからキツ力達の存在がどれだけありがたいか。

いやいや、本当にキツ力達を拾って良かったと思う。

「はい、わかりました」

俺の言っていることが通じたのか、しびしびながらも引き下がってくれるサラ。

もっと強くなりたいという向上心は称賛に値するが、感情をストレートに出すことをもう少し抑えてくれないものだろうか。

まあ、そのところは壁にぶつかれば改善するかと思っている。やはり人間には挫折というのが必要だということかな。

そして俺は頭を切り替えて原材料の鉄鉱石と風の石を手元に並べる。

どのように配分すれば出来上がりの剣に風を付与できるのか、俺はゲーム内での記憶にある精製法を引っ張り上げた。

「うん。よし、これでいくか」

頭の中で一通りまとまった俺はハンマーを持つ。

「サラも近くで見っておけよ。こういうのは基礎だから反復させても損はない」

サラが頷き、真剣に見ているのを気配で感じた俺は灼熱に溶けた鉄鉱石を打った。

カーンっ！ っと、小気味の良い音が辺りに響いた。

武器の生成は一日に一本。

今回は単純に一属性だけ付与するので二時間あれば完成するが、もし全ての属性を付与するとなれば今日だけでは間に合わない。少なくとも明日までかかる。

サラの体力上まだ5つは厳しいだろう、となればそこがサラにとっては壁になるかな。

俺はそんなことを考えながら、完成したばかりの『風の剣』を振ってみる。

軽く振ったつもりだったが、発生したカマイタチは一般の魔術師が放つウィンドと同威力だった。

「ほら、振ってみる」

サラが試し切りしたそうだったので渡す。

「さすが師匠、私が作ったのと比べても段違いに強いし軽いです」

するとサラは大喜びでカマイタチをあちこちに放った。

サラの実家は鍛冶屋のためたまに俺から材料を貰って作ることがある。完成品を俺に見せてくれるのだが、いかんせんまだ俺の領域にまで達していないとみる。

「まだまだサラには負けないつもりだ」

サラが放つかマイタチを避けながら俺はそう言い放つ。

「さすが師匠です。これだから越えがいがあります」

剣を俺に返しながらサラは喜色と闘志を混ぜ合わせた感情を瞳に浮かべてニツコリと笑った。

「完成しましたが、そろそろ昼食ができますのでそれまでに汗を落としてください」

レディーファースト。だからまず始めにサラを水場へ行かせる。

サラは「師匠より先に入るなんてとんでもない」とよく分からない所で恐縮していたが、俺が入るよう命令すると従ってくれた。

俺に対する敬意を持っているのは構わないけど、その使う場面が間違っているのではないかと考える。師匠の言葉に嫌な顔を浮かべて「えー」は無いだらう。

そんなことを考えているとサラが上がったらしく、次に俺が入る。

屋敷の一角に備え付けてある水道は特別製で、常にお湯が出るよう改造されている。この発明はエルファも嬉しかったらしく「たまには良いことしますね」と呟いてくれたのが印象に残っていた。

「サラ、先程の工程は覚えているか？ 昼食を食べた後はサラが同じのを作るんだぞ」

「はい、バッチリです。師匠の作品を超えた逸品を作り上げてみせます！」

その意気込みは素晴らしいが、空回りしないようにな。何せ後始末は俺がしなくちゃならないから。

エルファさんが昼食を用意している間に俺は午後の予定を確認する。

「エルファさん、テイータさんから頼まれごとか何か無かった？」

「そろそろポーションが切れそうですので納品してほしいとか」

「パスタとスープを乗せた盆を運びながらそう受け答えるエルファさん。」

「うん、分かった。サラの鍛冶が終わり次第ポーション作成に取り

掛かるから準備をよろしく」

「畏まりました」

エルファさんはそう述べた後、定位置に座ってバイオリンを響かせ始めた。

慈善事業

「そろそろかな」

「その通りかと」

来客室に備え付けられている椅子に腰かけていた俺の呟きに控えていたエルファさんが答える。

サラはいない。

と、いうのも昨日に「明日は修行なしだから実家で自己練習しろ」と言い含めていたから来るはずがないだろう。

「主、お客様です」

「本当に、よく分かるな」

エルファさんは気配を感じ取れる性質らしく、呼び鈴が鳴らなくとも来客が訪れることを察知できた。

「さてと、お迎えいたします」

エルファさんは音もなく歩いて玄関に向かった。

派手な装飾が好かない俺は屋敷のそれを必要最低限に抑えている。

簡潔に言つなら揃えるのがめんどくさかつただけ。

だから生活必需品以外の家具はろくに買い足さなかった。

が、エルファさんはそれが嫌だったようだ。

お金がない時は自制していたみたいだが、余裕が出てきても装飾品に金をかけなかった俺に業を煮やしたのかエルファさんは俺の許可なしに絵画や美術品を購入した。

その際に一悶着あつたのだが、ティータさんがエルファの擁護に回ったため俺が悪いということになった。

「ボクは他人の目というのをもう少し気にした方がいいわよ。ここに来る人の相手をしているエルファの心情をくみ取りなさい」

と、逆に説教されてしまった。

で、そこから反省した俺はとりあえず来客室くらいは見られるようにしようと頑張った。

そして、頑張った結果が。

「こんにちはは、何度訪れても豪華な部屋ですね。金で出来た彫刻にプラチナの甲冑。まるで王宮にいるみたいですよ」

来客室に訪れる人が異口同音にそんなことを漏らすようになってしまった。

「やりすぎです。掃除する身にもなってください」

そんな陰口を叩かれた覚えがある。

「お褒めいただき光栄ですヒュエテルさん」

目の前の人物はヒュエテル「クーラー」。

俺が設立し、援助している孤児院の園長で、保母さんという表現がピッタリくる人だった。

20代後半の貴婦人で豊かな胸が特徴の、全てを優しく包んでくれそうな雰囲気を持つ人物だった。いつもニコニコと微笑んでいるのは母性からくるものなのだろう。そして、この笑顔こそがささくれた孤児を癒してくれていた。

「ユウキ様のご尽力によって多くの孤児が悪の道に走らずに済みました。このことは感謝に堪えません」

そう言っってヒュエテルさんは頭を下げる。

金に余裕が出てきた俺はあのスラム街を何とかしようと思案していた。

キツカ達が何かをやらかしたので、俺は靴や服を作ってはスラム街に届けていたのだがスラムの環境が酷いこと酷いこと。

暴力や無関心が横行し、路上で人が死に、悪臭が漂っていることが日常の光景としてそこにあつた。

そして、何よりも一番衝撃を受けたのは俺やキツカと同年代の子

が盗みや暴行を働いているのを目撃したことだ。

「仕方ないわよ、ああしなければ生きられないんだから」

キツカが慰めてくれたが、平和な日本で暮らしていた俺には衝撃が大きすぎる。

この現状を何とかしたい。

と、言っても後数年で滅びる都市なので腰を落ち着けてやれることはできない。

さんざん悩んだ末に出た答えが未来ある子供たちだけでも救おうということだった。

だから俺は小規模ながらスラム街を何とかしようとなんか炊き出しを行っているヒュエテルさんと接触し、彼女に孤児院の管理を任せた。

「いえいえ、僕のやっていることはお金を渡すことだけですから、実際に活動しているヒュエテルさんには敵いません。むしろ私が頭を下げたいぐらいです」

始めはヒュエテルさん1人とおんぼる建築一戸なので、10人も世話できなかつたが、次第にヒュエテルさんの心情に共感してくれる人が現れ始め、さらに孤児達のリーダー格の人が協力してくれたので、今では4ケタに迫る孤児達を保護できている。

そのことが可能になったのはヒュエテルさんが孤児を救うために奮闘し、職員の増加や建物の増築など孤児院に関する責任を一手に

引き受けてくれていたからなので、俺としては頭が上がらない。

目の前のヒュエテルさんは笑顔だが、その裏に壮絶な戦いがあったのだと想像すると本当に申し訳なくなる。

「ご謙遜を、資金がなければ何も始まりませんでした」

そう言っただけで貰えるのはありがたいが、俺は資金を渡したただけなので大した活動はしていない。

「いえいえ、私でなくとも他の人が援助したかもしれませんが」

「ユウキ様ほど多額の、そして安定して援助してくださる方は他にいませんよ」

属性付与させた武器と言うのは相当高値で売れる。何せそれを製造できるのはこの世界でも数えられるほどで、さらに俺以上の品質を作る職人がいないからその値段を具体的に言つと風の剣一振りあれば大人10人が1年遊んで暮らせるほどだ。

その金を資金として流していたから、普通の孤児院よりも数段立派なモノができるのは道理。

下手すれば貧乏な市民よりも豪華な生活を孤児達は送っていた。

「ヒュエテル様、そろそろ本題に入りませんか」

ちょうど良いタイミングで紅茶と菓子を運んできたエルファさんが次を促す。

傍目から見るとエルファさんの態度は無礼かもしれないが、これがエルファさんなのでお互い何も言わない。

そして、ヒュエテルさんは居住まいを正すと徐に切り出した。

「ユウキ様のご尽力によってスラム街に巢食う孤児はほぼ一掃されました。孤児達も施設での生活に戸惑っていましたが、現在は落ち着いています」

「それは良かった。スラム街の治安も良くなったんじゃないかな」

俺の問いにヒュエテルさんは頷く。彼女曰く、まだ暴力は残っているものの1年前と比べると大分ましになってきたそうだ。

「で、私としては次の段階に進めたいと思います」

「次の段階？」

俺が聞き返すとヒュエテルさんはゴクリと唾を飲み込み、意を決して話し始めた。

「スラム街の大改造を行いたいと思います。具体的に申しますと給金を彼らに払い、彼ら自身の手でスラム街を解体させるのです」

「……なるほどねえ」

ヒュエテルさんの提案に俺は考え込む。

スラム街に集う連中が全員悪の道に走るわけではない。中にはやむに已まれず故郷を捨ててそこに落ちぶれた人間もいる。

そして、彼らを更生させるに一番手っ取り早い方法は職を持たせること。

もちろんそう上手くいくとは限らないが、それでもあそこで腐らせるよりかはずっと建設的だろう。

が、ここで問題が出てくる。

それはこの都市があと3年ほどで滅びるということ。

つまりそんな大規模政策を行ったとしても効果が出る前に終わってしまう可能性が十分にある。

もしそうなると金をどぶに捨てるのみならず、何よりもヒュエテルさんの願いを踏み躪る結果になりかねない。

「……僕的には孤児院に常勤教師を招き、孤児達全員に高等教育を施したいのですが」

そこから離れられない住居と違って人なら移動できる。彼らがどこに行っても生きていられるよう訓練するのなら俺は金を出すと提案するが。

「しかし、私はスラムを何とかしたいのです」

「おそらく3年後には全てが消えますよ」

「万が一そうなるかもしれませんが」

「……信じてほしいのですが」

実はこれまで何度も近いうちに国が滅びると訴えているのだが、誰も彼もが信じてくれなく、挙句の果てには胡散臭い人間が寄ってきて寄付を迫ってくる始末。

「なら、こうはとうですか？ その大規模工事は3年後に行うと、それまでの期間は区画整理や住民の説得などを行うというのは」

「それなら納得です」

信じてもらえないのであれば妥協案を提示しよう。

どうせヒュエテルさんの構想は一朝一夕で出来るものではない。行うにしてもここまで大規模になると国の許可が必要だろう。そして何よりも大金が必要なのでこの提案には頷いてくれた。

「では、積立金として毎月これくらいはどうでしょうか」

「そつだなあ……」

ヒュエテルさんが予め試算してあった金額を見て俺達はこのことで少々議論し合った。

「さて、ではそれまでの間、僕としては孤児達に高等教育を施すために教師を招きたいのですが、伝手はありますか」

「ボランティアの内数人が私塾の講師を行っています。あの人達に

声をかければ了承してくれるかもしれませんが」

「それは良かった、早速お願いします。で、給金の方は一般学校の教師より1割増しだということを打診して下さい」

「分かりました。しかし、給金1割増しという公表はまだ控えます」

「どういうことですか？」

俺が聞き返すとヒュエテルさんは少し笑って。

「そのことを示すと単にお金に惹かれた輩が集まりかねません。それはなるべく排除したいので、まずはその事実を伏せておきます」

ヒュエテルさんは孤児院の経営も兼ねていたので金勘定の力量が大いについていた。おかげで巷では『金庫番』という2つ名までつけられている。

俺としてはそこまで徹底的にやってもらうつもりはなかったのだが、ヒュエテルさんは貰うだけでは申し訳ないと言っている。

まあ、払う分が減るに越したことはないけど。

その後、孤児院の現状や備品の過不足など細かい協議を終えたヒュエテルさんは席を立ち、俺は玄関まで見送る。

ヒュエテルさんが来訪したのはまだ日が高いうちだったのだが、いつの間に完全に帳が下りている。

「実りの良い会合ができました。私達にここまで目をかけてくださり本当にありがとうございます」

と、礼を残して屋敷から立ち去っていった。

「変わっていますね」

2人きりになるとエルファさんはそんなことを切り出し始める。

「普通孤児なんて見捨ておかれる存在ですよ。ですから国も知らぬ振りをするにも関わらず主は彼らを救おうとするのですね」

エルファさんの問いに俺は背伸びをしながら頷く。

「これは俺の心によるものだな。俺のいた国では見捨てられる命なんてなかった。だからこの現状を見ると何とかしたくなるんだよ」

理屈ではない。

ただの感情であり、自己満足だということは己が一番身に染みて分かっている。

「しかし、今のところは問題がありませんので目を瞑ることにします。ただし、やりすぎには注意して下さい。いくら手を差し伸べたいとしてもそれで主が潰れるようでは本末転倒です」

「ああ、そこは分かっているよ」

「本気で危なそうでしたら私が無理やりにも止めさせますから」

エルファさんなりの忠告なのだろう。俺はそれに大きく頷いた。

「さて、そろそろ夕餉ですので主は少々お待ちください」

エルファさんは1つ完璧な礼をして屋敷の厨房へと歩を進めていった。

浅はかな考え

「さて、次はどうしようか」

夕食を食べながらそんなことを呟く。

「師匠、決まっているでしょう！ 私にみっちりと教えることですよ！」

「……本当に元気だな、サラ」

俺はげんなりした眼でサラを見つめるが、サラは俺の感情などどこ吹く風でフフンとばかりに胸を張る。

「当たり前です。何故なら始めて5つの属性を付与させた武器の製造を目の当たりにしたのです。これが興奮せずにいられますか！」

そう、俺はつい先程まで7属性の内光と闇を除いた5属性を付与させた武器を製造していた。

簡単に見えるが実際は言語で語り尽せないほど難しい。

何せ火と水、雷と土と言ったように属性の相性というものがあるために各属性を相殺させないよう絶妙なバランス感覚が必要になる。

で、どうしてそんな俺は作ったのかということ、そろそろサラに壁というものを経験させるためだった。

最近サラは天狗になってきたのか遠慮もせずによくの属性を付与

させた武器を作ってほしいと催促し、それがあまりにしつこいと感じた俺は不可能な課題を出してやった。

サラの力量ではせいぜい3つの属性を付与させるレベル。

おそらく成功しないだろう。

が、不安というものもある。

何せサラは天才だ、凡人たる俺の思惑など易々と裏切ってしまう展開が頭から離れない。

「……まあ、それでもいいか」

俺を追い抜く風景が一瞬頭をよぎったが、俺はそれを認めることにする。

その時は7つの属性全部付与させた武器でも作らせれば問題はないだろう。

閑話休題

「で、とりあえず今日は飯食ったら寝る。今日は親に連絡しているだろうから問題ない」

早朝から製造を始め、完成したのがつい1時間ほど前。その間は気を抜くことが許されず、つきつきりで打っていたため、身体も精神も疲労がヤバい。今すぐにも倒れたい気分だ。

「むー、師匠。つれないですねえ。ちょっとぐらい先程の鍛冶につ

いて教えて下さいよ」

「頬をふくらませて剥れて俺を萌え殺させるつもりか？」

「師匠？ 何を言っているんですか？」

「……忘れてくれ」

どうも疲労によって思考能力が変になっている、俺は何て戯言を口走ってしまったのだろう。

「明日だ、明日サラに同じものを作ってもらおうから今日はよく寝ておけ」

「しかし、私は興奮で眠気など起きないのですが」

「そうなのか？」

「はい、今にでもそこら辺を笑いながら走りたい衝動に駆られています」

どうやらサラは疲労が一線を越えるとテンションがハイになるらしい、新たな発見に俺は何となく頷く。

「が、そんなことをしている場合ではないので俺は課題を出すことにする。」

「それなら宿題だ。今、エルファがベットを整えているからそれが終わり次第そこで5分近くじっとしていること」

「嫌ですよ、私は眠る気分じゃないんです」

サラがそう言うてごねるので俺は新たな言葉を紡いだ。

「5分間ベッドで横になっていれば今すぐ5つの属性を付与させた武器を作っても良いぞ」

「分かりました、約束は守って下さいね！」

サラはそれを聞くやいなや2階の寝室へすっ飛んで行った。

20分後

「御馳走様」

「御粗末様です」

エルファさん曰く、サラはベッドに入ってしばらくは目がギンギンに冴えていたようだが、突然スイッチが入ったかの様に眠りに入ったようだ。

あまりに予想通な展開に俺は苦笑するしかない。

「さて、俺も寝させてもらっぞ、戸締りは任せる」

欠伸を一つした俺は食堂を出ていった。

鍛冶場には俺とサラの2人しかいないが、その場は和気藹藹とした雰囲気ではなく悲壮感に充ち溢れていた。

「サラ。もう分かっただろ、今のお前には無理だ」

もう何回言っただろう、数えることすら億劫になる程繰り返した台詞を紡ぐのだが。

「もう一度だけ、もう一度だけチャンスをお願いします」

サラは付与に失敗し、跡形もなくなった剣を握りしめながら涙ながらに訴えた。

始めは驕り気味のサラに灸を据えるつもりで今回の提案を出したのだが、ハッキリ言って今は後悔している。

てつきり俺はあまりの難しさに諦めて素直に俺の教えを請うと予想していたのだが、まさかサラは困難にぶち当たるとポロポロになるまで挑戦するタイプだとは知らなかった。

「師匠命令だ、明日にでもやれ」

俺は溜息を吐くとサラにそう中止を命令する。

無論サラは抵抗したのだが、すでにハンマーすら握れないほど手がポロポロになっていることを指摘すると不承不承ながらも頷く。

「また明日やりますから」

去り際にその言葉を残していったのが印象的だった。

2、3の属性を付与させるにはともかく、4つ以上になると相反する属性を同居させるために一般の鍛冶屋には置いていない特殊かつ巨大な設備が必要なので俺の鍛冶場は一辺10mという広さを持つていた。

そこにポツンと一人残された俺は先程までサラが打っていた失敗作を拾い上げる。

それは付与された属性同士が反発して無残な形となった剣だが、前のと比べると僅かにだが出来が良い。この調子だといずれかは成功するだろうと思われる出来だった、が。

「その前にサラが壊れそうだな」

悲しいかな、今のサラは才能に肉体が追い付いていない。

この調子だとサラに致命的な何かが起こってしまうことは十分に予想できた。

一応俺はサラの師匠なので、弟子であるサラの面倒を見なければならぬ。

で、サラがこのままだと不幸な結果が待ち受けているのならやることは一つだ。

「俺はサラにしばらくここに来ると言わなければならぬ」

突然の禁止にサラは混乱するだろうし、もしかすると勝手に鍛冶

場へと侵入するかもしれない。

「言い訳かもしれないが鍛冶自体を禁止するわけじゃないぞ」

サラの身が危険なのはあくまで4つ以上属性を付与させることで
2、3の属性付与させた武器の生成を禁止しているわけではない。

そして、4つ以上は俺の鍛冶場のような設備が無いと無理であり、
この設備が置いてあるのは王宮公認の鍛冶屋か研究施設のみだろ
う。

「まあ、何を囁ろうともこれは俺の浅はかな行為が招いた結果に変わりはしないけどな」

全ては俺が5つの属性を付与させた武器をサラに作らせたことにある。

身を切り刻まれる悔恨に顔を歪めながら俺は自嘲した。

「今日で4日目ですね」

エルファさんの言葉に椅子に座っている俺はゆっくりと頷く。

俺はサラに療養を言い渡そうと表情を硬くして待ち構えていたのだが、サラはあの日以来一向に姿を見せていなかった。

自宅へ帰って頭を冷やし、今の自分では完成できないと自覚して体を休めているのなら好ましいが、おそらくそうではない。

あのサラの性格上自らの意志でここに来ることを止めることはありえない。

十中八九サラの容体を重く見た両親が止めたのだろう。

「迎えに行くのですか」

エルファさんの問いに俺は応える。

サラは未熟だが、いずれは世界最高の鍛冶師になる可能性を持つ逸材。

休養させるならまだしも、二度と鍛冶に触れさせないとされたら俺は悔やんでも悔やみきれない。

「馬車を用意してくれ」

俺の要望にエルファさんは「畏まりました」と礼をしてこの場を去っていった。

違引き？（前書き）

サラの話は次で終わりです。

やれやれ、本来なら1話で終わらせる予定だったのに……

違引き？

世界最高峰の鍛冶職人という名は伊達でない。

高名な冒険者も大富豪も俺の武器を求めに来るため俺はあまり外へ出られないし、所用があつて外出するにしてもこの馬車のように外から中の様子が伺えない様カーテンで外部と遮断されていた。

「まあ、有名税といったところか」

俺はフフンと鼻で笑うことにする。

と、いつか笑うしかない。一体何が悲しくて屋敷の外から出られない実質軟禁生活を送らなければならないのか自問してしまつたため、ここは優越感に浸っておくことにしている。

「が、今はそんなことを考えている場合でない」

ダークサイドに陥るのは後でいい、今はもっと大事なことがある。

灯りがランプしかない中で俺は帽子やマフラーなどで顔を隠して準備をした。

エルファさん曰く、サラの実家は中堅どころの鍛冶屋らしくそれほど人気があるわけではないにしろ、それでも客はいるので変装しておいた方が良くとアドバイスをされたから。

正直な話、この程度で騙せるかなと不安だったのだがエルファさんは。

「経験上、人なんて顔さえ隠せば大概何とかなるようなものです」

と、非常に説得力がある言葉を紡がれたため俺は観念して従った。

変装を終えた俺は腕を組んでこれから起こることを予想してみる。

サラからの情報によると、自分は一人娘で他に子供はいないことからサラの両親はサラを目に入れても痛くないくらい溺愛しているだろう。

そして俺はその愛娘に無理をさせてしまった。

サラの両親の怒りは相当なものだろうと予測できる。

「今日はサラ本人に会うことは出来そうにないな」

アポもなしに突然訪れたのだから当然として、多大な親の怒りをぶつけられることは覚悟しておかねばならない。

「まあ、それは俺の所業に対する罰として受け止めればいいのか」

重要なことは如何にこちらの誠意を相手に分からせるかだ。

確かに今回俺はサラを傷つけたが、それはサラの才能が大きすぎたから。嫉妬の感情も交じっていたと正直に述べよう。その上でサラの素直さを褒め称えれば両親も理解してくれるだろう。

「よし、これでいこう」

俺が頷くと同時に振動が大きくなったのは、石畳が敷き詰められている地区に変わったからだろう。

「ここ到着しました」

その言葉と同時に業者は恭しく扉を開ける。

その通りはティータさんが薬屋を営んでいる地区と比べるとやや活気が劣るものの、その場所に漂う空気は実戦向きというか緊張感が溢れている。

そこを歩きかう人を眺めても、油断ない雰囲気を漂わせていることから熟練の冒険者達だということが分かった。

古びた石畳を通り抜け、少し奥まった場所にある年季の入った店の前で俺は立ち止まる。

『キュリアス鍛冶屋』

ここが俺を師匠と呼ぶサラハキュリアスの実家とみて間違いなかった。

「さて、入るとするか」

俺は己に発破をかけ、唾を飲み込んでから中へ入った。

入って2歩も歩かないうちにカウンターがあり、武器が壁に所狭しと並べられている。

少々狭いのではないかと感じたが奥から鉄を打っている音が響いてくることから売り場と鍛冶場、そして住居区がこの場所に詰め込まれているのだろうと考えると納得できた。

「あら、いらっしやい旅人さん。今日はどのような依頼で」

そう店内を見回しているうちに奥から40代半ばの物腰の良い年配の女性が出てきた。

よく見ると目の辺りとかサラの面影が見えるのでサラの母親ではないのかと推測する。

「あら、どうしましたか？ 何か私の顔についていますか」

頬を撫でながらそう聞いてきたので俺は首を振った。

俺は気付かなかったが、長い間彼女を見つめていたのだろう。そこは反省せねば。

と、まあそこら辺は置いて俺は本題を切り出す。

「サラの師匠、ユウキカザクラが参ったと伝えてください」

俺がそう述べると、サラの母親はビシリと硬直した。

「……………」

これ以上言葉を重ねても意味がないだろうと判断し、俺は口を噤んで相手の判断を待つ。

1分、2分とお互い沈黙を保ったまま時間が過ぎる。

「主人を呼んできます」

サラの母親は辛うじてそう告げるとそそくさとその場を後にした。

で、残された俺は扉にもたれかかって相手が出てくるまで待つことにした。

この間は非常に長く感じられる。緊張してのどが渇き、気持ちが悪く落ち着かないので視線をあちこちに彷徨わせて気分を紛らわせる。一瞬外に出ようかと頭に過ったが、ここでそんなことをしてしまうと二度と来れないという確信があった。

そんな風に自問していると、奥からの音が止んで誰かがこちらに向かってくる足音が聞こえてきた。

「ここからが本番か」

俺は唇を舌で湿らせながらそう呟いた。

世の中には不条理というものが存在する。

こちらがいくら友好を訴えようと、手を取り合っていこうと手を差し出しても相手がその聞く耳を持たなければ意味がないとい

うことだ。

俺は今、その不条理を心の底から味わっている、何せ。

「……問答無用で外に放り出されるとは思わなかったな」

俺は服についた土ほこりを払いながら毒づく。

あの時、サラの父親が現れたので俺はサラが如何に素晴らしいか、今後このようなことは起きないよう宣誓しようかと口を開いたのだが、言葉が出る前に俺は胸を掴まれて外へと投げられた。

まさかサラの父親がいきなりそんな強硬手段を取ってくるとは思ってもしなかったので俺はさしたる抵抗もできず、なすがままに任せしかなかった。

で、俺としてはこのまま終わるわけにはいかなかったので、もう一度中へ入ろうとしたのだが扉は固く閉ざされている。

なるほど、つまり俺と話すつもりは全くないということか。

「せめてサラとお話しさせてください」

俺は扉をガンガンと叩きながら訴えるが返事は全くない。

仕方ない、根比べと行くか。

俺が叩くのをやめるか向こうが俺を招き入れるのが先かと考えたのだ、が。

「おい、ドアを叩いている少年はもしかするとユウキ＝カザクラじゃないか？」

いつの間にか仮面が取れていたらしい。俺は慌てて装着するがすでに後の祭り。

このままだと取り囲まれて身動きが取れなくなると判断した俺は止めてあった馬車に乗ってこの場を後にする。

「……仕方ない、最終手段といくか」

乾いた唇を舌でペロリと舐めて俺はそのことの算段を始めた。

夜 この世界には電気というものがいないため、必然的に明かりはランプなど油を使ったものになる。油は貴重なため、わざわざ街灯にするのは宿場街などよほど人の出入りが多いところだけ。

こんな一角など存在しているはずがないだろう。

明かりは外から漏れてくる光と月と星の光のみなので夜中遅くなると安全のため家に泊まらせた理由もこの暗さなら納得のいくものだ。

こんな場所で襲われたらおそらく完全犯罪が成立してしまうだろう。

「今はこの暗さがありがたいな」

で、俺はといえばその闇夜に紛れてサラのいるであろう2階の部屋のベランダによじ登っている。

フェザーブーツを使って己の体重が軽くなったとはいえ、この代物は空を飛べるわけではないので俺はフック付きロープを併用していたわけだ。

「これで見つかったら言い訳できないな」

俺の今やっていることはどう見ても犯罪、弁明など期待できないだろう。

「さて、エルファさんからの情報によると今がサラは一人の時間帯だな」

一体どこで調べたのか、エルファさんはキュリアス家の部屋配置はおろか全員のスケジュールまで割り出していた。

「これぐらい造作ありません」

素でそんなことを言っただけのけたエルファさんにドン引きした俺を責められるものはないだろう。

閑話休題

俺は一つ咳払いすると窓をコンコンとノックする。

「誰ですか？」

しばらくするとやや緊張気味ながらも返事をしてくれた。

今は少し張りが無いが、その声はサラだろう。サラの両親でなくてホッとする。

「サラ、俺だ」

近所迷惑にならない程度でそう囁くと、突然カーテンを引かれ、窓を開けられた。

「師匠？ どうしたんですかこんな時間に!？」

サラは突然現れた俺に混乱しているのだろう、目を丸くしている。

「シーっ！ それを含めて説明する。だから中に入れてくれ」

俺の要望にサラは頷き、俺を中へ招き入れた。

「ありがとう、おかげで助かった」

サラの部屋に潜り込んだ俺はサラに一礼。もしあそこで叫ばれでもすれば俺は決死の逃避行を演ずる羽目になっていた。

で、サラの部屋を見渡した印象が。

「……独特の部屋だな」

俺は苦笑いするしかない。

俺の偏見かもしれないが、普通女の子の部屋というものは人形や服など可愛い物が置いてあるものだと考えている。

しかし、サラの部屋は。

「どうですか？ このブラックアックス！ これは師匠ほどではありませんが、有名なギルロティイ・イエスマンが闇属性を付与させた逸品です。さらにこのアイスランスは……」

部屋の壁一面に飾られているのは武器。

それもほとんどが属性付きという高価な物ばかりだ。

サラの両親の身なりや店の規模からあまり繁盛しているとは考え難いので一体これらの武器を買うお金はどこから出てきたのだろう。

「ああ、これは私が生成した武器と交換したんですよ。私はこの都市でナンバー2を自負していますから。あ、もちろん一位は師匠ですよ？」

どうやらサラは商品として販売できるほどの技術を身に付けていたらしい。俺は誇らしい反面寂しい気持ちになる。

「で、師匠は何故来たのですか？」

そんなことを考えているとサラはそんな質問をしてきたので俺は咳払いを一つして口を開く。

「今日の昼ごろに尋ねたのだがそれは知らないか」

その答えに首を傾げる様子からサラの両親は俺が来たことを伝えていないようだ。まあ、俺が来たことなんて知っても両親にとって

は面倒が増えるだけだから正しい選択かもな。

「まあいい。俺が来た理由は簡単だ、サラの様子が知りたくてな。あの日から来なくなっただけで心配したぞ」

「アハハ、ありがとうございます」

俺の言葉にサラは唇を綻ばせるもすぐに俯く。どうやら両親との間で何かあったようだ。

「サラ、どうした？ 元気がないぞ」

俺はさらに少し近づいて聞くと、サラはキッと眼を上げて俺を見上げた。

「師匠、私を連れて行ってください」

「は？」

思わず間抜けな声を出してしまった俺を責められる者はいないだろう。が、サラは続けて。

「両親は私に二度と鍛冶に関わらせようとしません。そこらの娘としての人生を歩んでほしいみたいです」

「まあ、両親からすればそれが一番だろうな。誰が子供に好き好んで苦難の道を歩ませるものか」

俺に弟子入りするといい、これら高名な鍛冶師の武器と交換できる腕前といい、サラの行動力と才能は常軌を逸している。

「鍛冶に関わる以上サラはまともな人生など歩めまい。下手すれば想像を絶する不幸が待っているだろうな」

「勝手に決めないでほしいです！ 誰が何と言おうと、地獄が待っているように私はこの道を選びます」

サラは脊髄反射の様に俺に跳びかかって胸ぐらを掴む。

「サラ、詰め寄る相手が違つたろう。俺に食つてかかっても仕方がない」

「ああ、そうでした。ごめんなさい、興奮しまして」

タハハと笑つて俺から身を離すサラ。

先程までサラの瞳がすぐそこにあつたので動揺を見せないようポーカーフェイスを保つのに苦労した。

「とりあえず俺は3日後にまた来るからそれまでに答えを決めておけ」

「何ですか？ すぐに行きましょうよ」

そう言つて急かすサラを見て俺はため息が漏れる。

「サラ、今のお前は混乱している。突然親から鍛冶を取り上げられ、そして俺が現れたから冷静な判断を下せない状態だ。そんな状態で俺についてきてもサラが苦しむだけだぞ」

俺は窓に手を掛けて外に出る準備を整え、最後にこう言い残した。

「最後にだが俺もサラの両親もお前のことを気遣っている。だからサラが鍛冶を捨てても俺は引きとめたりはしない」

まあ、口ではそう言いつつも本心では3年後の魔物大進行が起る前にサラを助け出して鍛冶に関わらせるつもりだが。

俺は個人の幸せのためなら才能を腐らせてもいいと唱える善人ではないぞ。

父親の偉大さ（前書き）

これを書きたいがために前の2話を書いたといっても過言じゃないですね。

ふう、ようやく次へ進めることができる……

父親の偉大さ

「……激しい雨だな」

夜

自分の部屋でランプに明かりを付け、眠気がくるまで安楽椅子で揺られていた俺はふと外を眺める。

窓には大粒の雨が打ちつけ、外の景色は自宅の庭の全貌さえ見渡せないほどの土砂降りだった。

「おお、雷だ」

突然一本の閃光が走り、次の瞬間には山が崩れ落ちた様な雷鳴が鳴り響く。

くわばらくわばら、念じていると俺の口からあくびが漏れた。

ようやく眠気が来たようだ。

俺は蠟燭の明かりを消してベッドに潜り込む。

「結局サラは断ったな」

先日の夜　俺はサラの答えを聞きに行った時のことだ。

「すみません、師匠」

俺が窓から入るなり額に頭を擦りつけて詫びるサラ。

「まあ、サラが選んだ道なら仕方ない」

だから俺は肩を竦め、努めて何でもない風に演じる。

本心としてはかなり落胆していたが、それを表に出したところで誰も得をしまい。そう、サラに罵声を浴びせて弾劾しても、期待外れだと切り捨てても双方共に苦しくなるだけだ。

「確認するが、サラは鍛冶を捨てて一人の娘として生きると」

俺の問いにサラは頭を上げてコクリと頷く。

「両親を捨てるなんていう選択などできません」

よく考えてみればサラはまだ14歳、親が恋しい年ごろだろう。

あの時は激情に任せて家出すると宣言したが時が経つにつれて心細くなつていったと想像する。

「師匠、何て言葉を申し上げれば良いか……」

「気にすることはない。俺は前にも言ったとおりサラの将来を案じている。だからサラがそう決めたのであれば俺からは何もなし」

「しかし……」

俺の受けた教えを全て無駄にするという罪悪感からか弱々しい声。

「そんなに苦しいなら3年後にサラを招待するから受けて欲しい。それで償いになる」

サラが鍛冶を捨てようが捨てまいがどっちみちサラを救う予定だ。

そこでサラがハンマーを手に取るかは分からないが見殺しだけはしない。

「何せ俺の近くにいた人間だからな」

心が弱くても頼りなくても俺と触れ合ったのは何かの縁。

救いの手だけは差し伸べるつもりだ。

「それじゃあサラ。また3年後に」

「はい……」

やれやれ、最後ぐらいはもっとシャキッとして欲しいものだ。

サラと最後の別れのことを考えながらうとうとしていると、突然ドアがノックされる。

「主、起きていますか？」

「エルファか、入れ」

「失礼いたします」

ガチャリと開けられて三つ又の蠟燭台を持ったエルファが慇懃に入ってきた。

ティータさんに「メイドにさん付けはおかしいわよ」と注意されたから、今はエルファのことを呼び捨てにしている。

フランス人形の様な整った顔立ちと鮮やかな緑色の髪が蠟燭に照らされてよく映える。外見はこれ以上ないというくらいメイドのだが、いかんせん俺を主として見ていない節があるのが玉に瑕だった。

「で、どうした？」

俺は促すと、エルファは書類を読み上げるかのように淡々と語り出す。

「先ほど、玄関からドアを叩く音が聞こえたので外を確認すると、サラが玄関先で蹲っていました」

「サラが？ どうして」

俺は眠気も吹き飛ばすような大声を上げたが、エルファは動じずに先を紡ぐ。

「詳しいことは本人に聞いてみないと分かりませんが、長時間雨に打たれていたせいか酷く憔悴しています。この状態では話すのを酷だと判断しましたので、濡れた服を着替えさせて温かい飲み物を飲

ませ、客間で寝かせました」

「そっか、御苦労」

サラがどうしてこんな夜中に来たのか、すぐにも理由を知りたいが本人が話せる状態でないのなら無理させることはない。

「明日の予定は全てキャンセルすることにする。そして明日はサラの分の朝食も用意してくれ」

「はい、畏まりました。しかし、明日の予定といいましても実質予定なしなので格好付ける必要はないかと存じます」

そんなことを言う必要は無いだろう。

俺の無言の抗議が伝わったのかそれともいないのか。エルファの表情から判断することは出来なかった。

翌朝、サラの様子を気遣いながら俺はパンをかじる。

俺の向かいにいるサラは以前と打って変わって塞ぎ込む様子は痛々しい。

「サラ、食べないとスープが冷えるぞ」

俺は何とか会話しようとサラに話題を振るのだが、サラはずっと俯いていた。

一体どうすれば良い？

俺は無言で後ろにいるエルファに助けを求めるが、エルファはピクリとも動こうとしない。

……本当に薄情だなエルファは。主が困っているんだから助けてよ。

エルファはあてにならないので、俺はどうしたもんかと首をひねる。

「まあ、言いたくないのなら言わなくても良い」

出てきた答えが無難な言葉だった……まあ、俺は誑しじゃないからそれでいいと思いつつも。

「部屋もあるし食事も心配するな。好きなだけ滞在してもいいから、気が向いたら話してくれ」

「……」

本当に、何か反応ぐらいしてくれよ。この空気は居た堪れないのだぞ。

俺は頭をバリバリと掻き繕う。ああ、どうして俺はこんな朴念仁なんだ。これならもっとと女性と付き合って経験を磨いておくんだっ

「主、それは方向性が違います」

え？ 心の中を読まれた？

俺は驚愕の面持ちで振り返るのだが、相も変わらずエルファはそこに佇んでいた。

こうしている間にもこの気まずい雰囲気はどんどん進行していく。

仕方ない、あれを試すか。

俺はコホンと咳払いして立ち上がり、サラの隣にまで移動する。

「……………」

サラは放心状態なので、俺が隣に来ても何も反応しなかった。

本当に、やって良いのか？

俺は最後の確認という意味でエルファに視線を送ると、エルファは微かに顎を縦に振った。

ええい、後は野となれ山となれだ。失敗しても知らん！

俺はサラの手を掴んで引っ張った。

突然手を引っ張られたサラはバランスを崩し、俺の方向へと吸い寄せられる。

「はっ、え？」

サラは俺より身長が高いが、今は椅子に座っている。だからサラ

の頭がちよつと俺の胸あたりに来た。

「ちよ、ちよつと待つてください師匠!? 何をやっているんですか?」

サラがバタバタと暴れるが、俺はサラを離さない。

体はサラと同じ14歳だが、普段から武器作りで鍛えられた体はこの程度の抵抗でビクともしないぞ。

「大丈夫、大丈夫だから……」

俺はそう囁きながらサラの背中を優しく撫でる。そうするとサラは初めのうちは暴れていたものの、徐々に大人しくなっていた。

「ふむ、少々ありきたり感があり、さらに行動も遅かったです。第点と言ったところでしょうか」

それら一連の行動をそう論評するエルファ。

……お前、本当に俺のメイドか?

この時ばかりはエルファに殺意を覚えた俺がいた。

俺はエルファを食堂から叩き出そうとした。が、エルファは俺が全力で押しても岩のようにビクとも動かない。それでも俺は諦めずに押し続けているとサラが「もう良いです」という形で仲裁に入っ
て現在に至る。

「家を追い出されました」

サラはそう口火を切って昨日のことを話し始めた。

昨日の夕食時にサラが両親にもう師匠の家に行かない、鍛冶も辞めると宣言したそうだ。

サラはこれで終わりだと思った。これで今までギスギスした雰囲気が消えて元の暖かい空気が戻ってくると考えていたが実際は違った。特にサラの父親から発するのが剣呑になっていたのだ。

「父は本当にそれで良いのかと聞きました。だから私は頷いたのですが、父は嘘を付くなど怒鳴り、私を外へ放り出しました。そして私が呆然としている間にドアをピシヤリと閉められたのを覚えています」

「ごめんなさい、そこから先の記憶が曖昧です。私は家の扉を叩いていたはずなのですが、気が付いたら師匠の家で寝かされています」。

そう言ってタハハと笑うサラ。無理にでも笑おうとしているのが顔がぎこちない。

「……」

俺はすべてを聞いてサラの父親が何をしたいのか考える。

俺が直接向かった時にはサラと話もさせなかったもので、サラの父親はサラに二度と鍛冶をさせないつもりだろうと考えていた。

が、実際にサラが鍛冶を止めて家にいると宣言するとサラを勘当した。

「うーん……」

サラの父親は職人というものを体現した人物だ。

己の信念を貫き、決して外部の圧力に屈しない気質を持っている。

あの時もそうだ。

職人の間で女を入れることがご法度なのは周知の事実。

俺も当初のころにサラを弟子入りさせ、それを妬んだ俺の弟子入り志願者が職人組合に密告して相当叩かれた。おかげで一時は俺の武器を持っている奴はこの街の鍛冶屋は相手にしないとここに来る商人や冒険者に通知され、「ユウキ」カザクラの作った武器は欠陥品」と誹謗中傷の連続だった。

彼らも鍛えればそれなりの鍛冶職人になるのだが、サラと比較するとどうしても霞んでしまう。

例えるなら人工の山と天然の山ぐらい違う。

どれだけ土を盛り、木を植えて景観を良くしようとも所詮は作られた物。天然の山のみが持つ雄大さには何一つ敵わない。

だからこそ俺は始めて訪れたサラのみを重点的に鍛え上げていた。

サラを育てていたから村八分による精神的な攻撃は辛くなかったものの、金銭面で苦汁を味わったのを覚えている。

本当に、ティータさんがいてくれて良かった……

幸いにも俺が属性を付加させた武器を生成できることが広まり、職人組合よりも俺の武器を選ぶ者が増えたのでそういった弾効運動は潜んだはずだが。

「サラの父親はあの時でもビクともしなかったのだが」

危害はもちろんサラの自宅にも向かっていた。そこでも俺と負けず劣らずの非難を浴びたのだがサラの父親はサラがここに来ることを禁止しなかった。

「この無神経が」

どうしてエルファに毒づかれなければならないのか、全然わからん。

しかし、突然の出来事に戸惑っているのは俺も同じ。これは一度親父さんと話す必要がある。

よし、行くか。

俺は自分に気合を入れると勢いよく立ち上がった。

「サラ、俺はちょっと用があるから席を外す。何か困ったことがあればエルファに申し付けてくれ」

「え、ちょっと、どこに行く気ですか」

俺の突然の行動にサラは動揺した。ここでどこに行くのか話すのは得策でないと判断した俺は嘘をつく。

「日課の散歩だよ。だから心配しなくていい」

サラが次の言葉を述べる前に俺は背を向けて食堂を後にした。

「こちらでございませす」

俺が来ることを予想していたのだろう。突然現れた俺にサラの母親は多少目を見開きながらも前回のようない硬直はなかった。

前に来たときは店先で終わってしまったため、奥まで入ることはなかったが今回は違う、俺はサラの母親に案内されて小さい居間に案内される。

そこは年季が入っており、多少汚れているが、日ごろの掃除のたまものなのか見かけほど酷くは無さそうだ。

「主人はもうそろそろ来るとおもいます」

サラの母親は身長こそ俺と同じだが、横が俺の二倍ほどある。かといっても、それは不快に感じることはなく、逆に包み込む暖かさを内包しているように見えるのでむしろ安らぎさえ感じた。

「ありがとうございます、おばさん」

ふっくらした顔立ちの、笑顔が似合いそうなのだが昨晚の件が影響しているのだろう。多少やつれて見えた。

「……」

俺はサラの母親が淹れてくれた水を口に含みながら静かに時を待つ。

すでに賽は投げられた、オロオロしていても仕方ない。

二、三口ほどコップを傾けると、親父さんが奥からノツソリと姿を現した。

例えるなら岩。体は鋼のように鍛えられ、服の上からでも筋肉が盛り上がっているのを確認できる。そして、その瞳はキラキラと輝いており、生半可な覚悟ではその瞳の前にたちまち吹き飛ばされてしまうだろう。

「こんにちは、おじさん」

俺は背筋を畏まらせてまず始めに挨拶した。

「サラの師匠を務めているユウキ〓カザクラです。よろしくお願ひします」

「キュリアス鍛冶屋のジド〓キュリアスじゃ。ユウキ殿の活躍は耳に届いている」

本人は何気なく言ったただけだが聞いているこちらとしては体の奥

にまで響く重低音の響きがある。さすが長い間この店を守ってきただけのことはある。貫禄が滲み出ていた。

「サラについて伺いました。事情を聞いてもよろしいでしょうか」

「話す必要はない」

つつけんどんに突っ張られる。その言葉に俺はどう反応していいか困っていると、さらにジドさんが言葉を重ねる。

「あいつとはもう親子の縁を切った。もう赤の他人じゃ。ユウキ殿が煮ようが焼こうがわしには関係あるまい」

どうやらそれで話は終わりのようだ。ジドさんは立ち上がろうとしたので俺は慌てる。

「ちょっと待って下さい。サラは、サラは突然のことで混乱していました。せめてサラに何か言葉を掛けてあげてください」

「サラという娘は知らん。だからワシには関係のない話じゃ」

どうやらこれで話は終わりらしい。ジドさんは立ち上がって背を向けた。

「お前ほど自分勝手な人間は見たことがない!!」

俺は敬意をかなぐり捨てて腹の奥から叫んだ。ジドさんの足がピタリと止まる。

「サラを鍛冶から引き離すかと思えば勘当して家を追い出す！ 何

をしたんだ、あんたは！ サラを苦しませただけなのか！」

「そんなことあるわけなからうが！！」

大地が揺れたと思うぐらいの一喝。俺はすぐにでも逃げ出したい衝動に駆られたが、ありつたけの力を込めてジドさんを見返す。

「わしはな！ サラが赤子の時から知っておる！ サラが生まれてから今までの間！ サラのことを考えんかった日など！ 一日もあるまい！」

こちらを見下ろしながら放つ一言一言が魂を抉り取るような衝撃を持っている。怖い、止めたい。そんな弱気な感情が胸の奥から出てきてしまう。

「じゃあどうしてサラを苦しめる！ サラがどれだけ憔悴しているのかわかっているのか！」

「黙れ若造！ 青二才が知ったような口をきくな！」

人間は本当の恐怖を感じるとその場に凍り付くことを思い知った。ジドさんから発する冷たい怒りに俺は身動きすら出来ない。

「サラは貴様のことを話すたび目をキラキラさせよる！ いつかは貴様のような武器を作りたいと訴えておる！ そのために己の体を壊しても良いというぐらいにな！ 娘が傷付いていく様子を眺めていたわし等の気持ち貴様に理解できるか！」

ジドさんの魂の叫びに俺は狼狽えてしまう。サラの態度に辟易していた俺が悪意ある課題を出してしまったのは事実。そしてそのた

めにサラは己の身を省みずに鍛冶に打ち込んでしまった。

もし俺があんなことなどせず粘り強く接していれば今回のような事態にならなかつただろう。つまり事の発端は俺にあるわけだ。

「……………これだけは言える」

だからこそ、俺は筋を通す。

殴られようが罵られようが言わなければならないことがある。

「俺とあんたはサラに対する対応を間違えた！ もう少しサラのことを考えていればこんな事態にならなかつた。そして、間違いはやり直せる！俺とあんたとサラの3人で話し合えばまたやり直せる！」

俺のミスはサラの欠点を知りながらも無理な課題を出してしまつたこと。

ジドさんのミスはサラの性格を知りながら鍛冶から引き離してしまつたこと。

この2つの間違いを正せば大丈夫だと俺は考えていた。

「……………」

「……………」

しばらくの間、俺とジドさんは見つめあつたまま動こうとしない。

俺のほうはほぼ空元気だったが、ジドさんはどうなのか分からない。まだ底があるのかもしれないが、それでも俺は最後まで付き合おうと決めていた。

「……やはりユウキ殿は見かけによらず強いな」

ジドさんがそうポツリと洩らして目を瞑った。

「娘のような世間知らずに対しても目くじら立てず、それ以上に娘の身を気遣う。そんなユウキ殿のような方であれば安心して任せられる」

先ほどの剣幕が嘘のように消え、ようやく息が楽に据えるようになる。

「そらならサラに会って下さい。そして、3人で話し合うべきです」

俺はそう提案したが、ジドさんは寂しそうに首を振る。

「会えばわしはサラをここに引き留めてしまふ。だが、それだとサラの夢を壊してしまうからそれは無理じゃ」

「そんな、それとこれとは別でしょう。鍛冶職人とジドさん、両立できる道があるかもしれませぬ」

「はっはっは、ユウキ殿よ。今回のサラの態度を見たであろう。サラは弱い子じゃ。弱いがゆえに自分の夢よりもこの老いぼれを選んでしまい、弱いがために鍛冶職人への未練を抱きながら人生を過ごすことは容易に想像できる」

「それは……」

俺が何と言おうか言葉に詰まっているとジドさんは続けて。

「サラにこう伝えてくれ『生まれてきてくれてありがとう』と」

ジドさんは最後にそう言い残し、その場を立ち去った。

「お水をありがとございました」

俺はしばらくその場で呼吸を整えた後に席を立つ。

もうここに来ることはあるまい。

何となくだが、そんな予感がする。

「待って下さい」

俺はそのまま立ち去ろうとしたが、その背に声が掛けられる。何だろうと思っただけ振り返るとサラの母親が一抱えある荷物を両手に持っていた。

「サラの私物です。身一つで飛び出してきましたから、ユウキさんにさぞかしご迷惑を掛けているでしょう。少しでも軽くなればと思いますして」

その中にはサラの服といくらかのお金が入っていた。金は要らないと断りたかったのだが、サラの母親は頑として受け取るうとした

い。

こういうところは両親に共通しているんだなあと心の中で苦笑していたが、手荷物の奥の方にある一品を見て俺は目の色を変える。

「おばさん、これは家宝だ。さすがに受け取れない」

俺が突き返したのは一本の古びたハンマー。相当年季が入っているがそのハンマーの材質は史上最高の硬さを誇るオリハルコン。おそらくこれ一本で俺の屋敷が買えるほど高価な代物だ。

「道具は使ってこそ意味があります。主人はこれを使うほどの武器を生成する技術を持ちませんでした。サラならこのハンマーを使ってくれると信じています」

俺は思わず奥の方に目を向けると、ジドさんが背中を見せながら佇んで頷いていた。

「おばさん、サラについては安心してください。必ず後悔させません」

オリハルコンのハンマーを背負った俺はサラの母親の手を握りながら力を込めて訴える。

「本当に、本当にサラのことをよろしくお願いします」

サラの母親は腰を深く折り曲げて俺を見送った。

「おかえりなさいませ、主」

「サラはどこにいる？」

「サラ様は客間です」

自宅へと帰った俺はエルファにサラの居場所を聞いて客間へと向かう。

サラはまだ元気がなかったものの、朝から大分回復したようだ。

「これ、サラの母親から」

俺はまずサラの母親から受け取った荷物を渡す。

「……お母さん、お父さん」

サラはそれを見るとつつすらと涙が滲んできた。

「後、父親からの伝言だ。『生まれてきてくれてありがとう』」

俺は居心地が悪くなったので背を向けながらジドさんからの伝言を伝える。

案の定、鼻をすすする音が後ろから聞こえ、さらに嗚咽が漏れてきた。

これ以上この場にいるのは耐え切れない。

俺は早足でその場を後にした。

扉を閉めると同時に部屋から泣き声が聞こえてきたのは言うまでもない。

「やれやれ、今日は疲れた」

俺は歩きながらそう呟く。正直な感想、キツ力達を拾った出来事と並ぶほど忙しかった。

「ん？ エルフア、何か用か？」

途中でエルファが待ち構えるように立っていたので俺はそう声をかける。

「いいえ、何も。ただ、今日の主は主に近づいていましたよ」

「それはありがとう」

俺は艶然と微笑むエルファの横を通り過ぎて自室へと戻っていった。

ジグザールへ（前書き）

超展開かもしれませんがお読み頂けると幸いです。

ジグサールへ

「師匠、武器ができました」

そう言っつて俺のもとへ走ってくるサラに俺は冷や汗をかきながら。

「転ぶなよ、絶対転ぶなよ。転んだら地震で俺の屋敷が倒壊するか
らな」

サラが先ほど作ったのは土属性を付与させたハンマーなのだがこ
の代物、効果が半端なく強い。

正式に俺の屋敷に住みこむことになったサラは少しだけ落ち着き、
物事の分別がつくようになった。

「今の私には5つ以上の属性を付与させることはできません」

と己の非力を認め、代わりとして1つか2だけの属性を付与させ
た武器の精度の底上げを行っていた。

サラの武器はそれこそ町職人のはるか上をいつているが、王宮専
属や俺レベルから見るとまだまだひよっこ。

なのでサラは多くの属性を付与させる代わりにまず1つだけ付与
させた武器を作っている最中だ。

が、そこまでなら美談なのだがサラは天才。

1年ちよつとで俺と並ぶぐらいに成長してしまった。

サラの将来が恐ろしい。

「主、お客様です」

サラと2人でサラが作った武器を論評していた矢先にエルファが現れてそう告げる。

「ヒュエテルさんか」

俺の問いにエルファは首を動かした。

「これを見てください」

開口一番そう切り出して両手に抱えた大きな袋を置くヒュエテルさん。

俺はその中身が気になったので開けてみたのだが中から出てきた代物に俺は目を丸くした。

袋には金銀宝石が詰まっている。袋の中を総計すると俺の全財産の内約3割に相当するだろう。

「『恩を返します』と銘打たれていますので、おそらくユウキ様が保護をした孤児達の中でその道専門の高等教育を受けた孤児の誰かだと思います。」

確かに俺は4ケタに迫る数の孤児を保護したが、社会に出ている

のはその3割に満たないだろう。だから俺は目の前の金貨が信じられない。市民の給料は月15〜30Gだということを考えると、まっとうな方法で稼いだわけでは絶対ない。

俺の驚きが伝わったのかヒュエテルさんは説明のために口を開くのだが心なしか戸惑っているように見える。

「ええと、言い難いのですが最近貴族の家のみ侵入する義賊が流行っているのはご存知ですか」

俺は首肯する。

今の俺の暮らしぶりは貴族から見ても上の方なので義賊に狙われる一つとして役人から注意するよう忠告されたことがあるからだ。

「ちょっと待て、つまりそれは」

俺の懸念が当たったようだ。ヒュエテルさんは困ったように首を苦笑して。

「ええ、お察しの通りその義賊はユウキ様が保護した孤児達の一部です」

「……最悪だ」

俺は額を抑えて天を仰ぐ。

何をトチ狂っているんだか。

彼らは良かれと思ってやったことかもしれないが、彼らが捕まっ

てその身元がばれてみる。知識と技能を与える環境を作った俺は一気に窮地へと陥ってしまうぞ。

「止めさせられないのか」

俺は一縷の望みをかけて聞くが、案の定ヒュエテルさんは首を振る。

「このお金は私が知らない間に置かれていますから止めることはできません」

これを役人に届けると俺が疑われる。つまりこのGを受け取るしか選択が無いようだ。

「けどなあ、今の俺はGに相当余裕があるからこんなリスクの高いものを受け取りたくないのだが」

俺自身を作った武器に加えてサラの作った武器も取り扱った結果、濡れ手に粟という表現がぴったりくるぐらいのGを稼いでいる。

おそらくこのシマール国の鍛冶職人の中では最もGを持っているかなと本気で考えてしまうほどだ。

ヒュエテルさんは俺の苦悩も分かっているのだが、ヒュエテルさんがこのGを持っていると聖者というイメージが崩れ、下手すれば俺以上の迷惑を被ってしまう。

だからこそヒュエテルさんはこのGを持ってきたのだろう、自分では処理できないがゆえに。

「それでは私はこれで失礼します。またお金が置いてあればユウキ様にお届けします」

そう言っただけで去っていくヒュエテルさん。

そして残されるのは俺と大量のGのみ。

「どうしたもんかな……」

腕組みをし、無然とした様子で俺は鼻を鳴らす。

仕方ない。

このGは目立たない様に恵まれない人達へ施すか。

妥当な考えに一つ頷くと俺は袋の口を閉じた。

「私に提案があります」

いつの間にも近くへ寄っていたのだろう、気が付くとエルファが俺の隣に立っていた。

「このGと主が貯めたGの何割かを私に任せてもらえませんか」

「別に良いが、理由を聞いても良いか？」

「はい。確か主は工業都市ジグザールに移住を希望していたと考えます」

その通りなので俺は頷く。

「で、つい先程宮廷闘争に敗れてジグサールへ左遷されたツバイク伯爵が逃亡しました」

「ほっ……」

この状況でそんなことを知らせる理由はただ一つ。

知らず俺は唇を歪める。

「なるほどね、それは面白い。ただ、街や都市を治めるのは貴族の特権だ。市民である俺がどうしてそこを治められるのか知りたいな」

そう聞くとエルファはクツクツクツと喉を鳴らし。

「このご時世、Gさえ払えばシマール国は爵位を与えてくれますよ」

と、囁いた。

「この国の腐敗はそこまで進んでいるのか」

Gで名誉を買える。

国の威信をかけて贈る称号をGで手に入れることが出来るのを聞いて俺は複雑な気分になった。

滅びた国のことなのであまり注意を払っていなかったが、シマール国が滅びた原因は魔物大進行だけではなさそうだ。おそらく長年かけて溜まっていた膿が溢れ出し、そして魔物大進行が引き金となったのだろう。

「やはり肝心なのは人か」

あらゆる万物は外側からの攻撃に強くとも内側からの攻撃にはえてして弱い。これが内と外の両方から攻められるといかに頑強な城であつても名将と呼ばれる人物が率いてもなすすべなく陥落するだろう。

「まあ、俺には関係ないか」

考察はここまで。

これ以上考えても意味のないことに気づいて俺は思考を止める。

「どうも話がつますぎるんだが、Gで爵位を買った市民に街の治安を守ることを他の貴族が許すか？」

貴族は保守的で嫉妬深い。突然俺みたいな市民が出ると叩かれそうな予感がしたが、エルファは何の心配もないと首を振る。

「ジグサールは周辺の魔物が強く、交通が不便な国の辺境にある都市です。あそこを治めるのは左遷された貴族ぐらいなものですから、さしたる妨害などなく手に入れますよ」

「あそこはまだ辺境だったのか……」

その事実には俺は眩く。

ゲーム開始のころには有数の都市として名を馳せていた記憶があるのだが、どうもそれはあてにならないらしい。

「まあ、いいか」

辺境で誰の目にも映らないのであれば好都合。それなら周辺の反対も少なく、思う通りの改革が進められる。

「エルファ、できれば早いうちがいい」

善は急げ。ここはツバイク伯爵の後任が決まらないうちにさっさとジグサールを手に入れてしまおう。

エルファは「畏まりました」といういつものお辞儀を行ってこの場を後にした。

数日後 国からの要請で俺は男爵の地位を手にいれ、めでたくジグサールの赴任となった。

そして俺は单身ジグサールへと向かう。

サラはカリギュラスに残りたいと言ったのでお目付け役としてエルファを置いてきた。エルファは付いて来たさそうだったが、ヒュエテルさんの対応もあるのでエルファはカリギュラスから離れさせられないと説き伏せている。

まあ、実際の理由は今回の手腕の敏腕さに傍で置いておくのが怖くなったから。何故伯爵の逃亡という情報を察知できたのか何故こんな数日の間に爵位と領地を得られたのか、その理由が知れるまでエルファにあまり近寄られたくなかった……チキンだと罵ればいいぞ。

そして、キツ力達は学校を卒業した後4人でパーティを組んで冒険がてら試金石となる素材を集めてくれるので何も言うこと無し。

で、俺がジグサールへ赴任した際の第一印象が。

「見事に何も無いな」

屋敷に入った俺は帳簿を確認してそんな感想を漏らす。

俺の知っているジグサールは多くの腕の良い職人を抱える鍛冶場が乱立している都市だ。この都市に住む人々の大半は職人で、外部からは良い武器を買い求めようと遠方からやってくる冒険者で溢れかえる活気ある都市だった。

しかし、目の前に広がる光景はそれとは程遠い。

今のジグサールには何軒かの古びた工房と空き家だらけの住宅群しかない。都市に現在唯一開いている中央商店街は店の大半が閉まっている。

この都市の人口の大半はどこからか流入してきた身元不明者であり、まともな身分を持つ者の方が少ない。

王都であるカリギュラスの市民と貴族の割合は9割で、このジグサールは3割しかないことを鑑みるとどれだけ酷いか理解できるだろう。

「金も無ければ人手もいない、拳句の果てには物も無い」

周囲の魔物が強すぎるためにここまで訪れる行商人が少なくなり経済が停滞して人口が流出する。人口が少なくなるとさらに訪れる行商人が減るといふ悪循環に陥っていた。

ツバイク伯爵が失踪した理由も分かる。

これだけ悪条件が揃えば逃げ出したくなるだろう。

事実、俺も始める前に心が折れそうだ。

ここがプレイヤー時代に親しんだ都市でなければ受けようと思わなかった。

「郷土愛って言うのかな」

我知らずそんな咳きが漏れる。

「まあ、泣き言はここまで」

俺は頬をピシヤリと叩いて気持ちを切り替える。

周囲の魔物が強いということはその分手に入る素材も上等な物が多い。

ヒュエテルさんと相談して冒険心溢れた腕っ節の強い孤児をこちらに回してもらおうか。

監督はキツ力達に任す。

そして、彼らに素材を集めさせて加工して売る。

まずはG。

それが無ければ改革など夢のまた夢。

治安や人口問題などやるべきことはたくさんあるが、今はGを溜めることに決めた。

「さてと、やりますか」

俺はそう頷くと筆を手に取ってヒュエテルさんに手紙を書き始めた。

魔物大進行まで後2年。

急ぐ必要があるな。

名前： ユウキⅡジグサリアスⅡカザクラ
装備：
武器 アダマスタガー
防具 貴族のマント
頭 シャインヘルム
足 黒龍革の靴
装飾品 サファイアの指輪
お金 324600G
ステータス
剣 35
魔法 20

支配	裁縫	調合	鍛冶	料理	採取
5	4 3	6 6	7 5	5	2 5

貴族になったのでおれはミドルネームとスキル『支配』を手に入れた。

ジグサールへ（後書き）

読者様からの要望を考慮して主人公を単身ジグサールへと向かわせました。

次話から新キャラが登場しますが、読者様にとって魅力的に映るよう努力します。

番外編 エルファの追憶（前書き）

第3章へ移る前にちょっとした小断を用意しました。

読まなかったことで本編に影響はありませんので無理に読む必要はありません。

番外編 エルファの追憶

殺せない暗殺者は不必要。

確かにその通りだと私 エルファ＝ララフルは首肯します。

暗殺者は人を殺すから存在意義があります。

汚れ仕事を行うために生きています。

では、人を殺せなくなったら。

殺す瞬間に突然ナイフを持つ手が震え、胃の中のものを戻してしまふ錯覚に囚われてしまった暗殺者はどうなるのでしょうか。

答えは簡単。

ただこの舞台から消え去るのみ。

私は私を終わらせるために街の外へ出ようと思いました。

「あら、エルファじゃない？ どうしたの？」

懐かしい声が出た方向を振り返るとそこには昔の面影を残した薬売りが立っています。

「……ティータ」

辛うじて私はそれだけを呟きました。

「ふーん、お仕事を首になったのね」

私はティータとすぐに別れようとしたのだが、ティータは私が尋常ならざる雰囲気を持っていることに気づき、半ば無理矢理に近くの店へ連れて行かれて今に至ります。

そこで根掘り葉掘り聞かれましたが、肝心な個所はぼかして答えました。知ったことによつてティータが危険に晒していい道理はありません。

「でもまあ、それで死ぬことはないんじゃない？ ほら、人生つて仕事だけが取り柄じゃないし」

一般の職業はそうかもしれないませんが、生憎と私の仕事は闇の領域に入る部類です。職業上の秘密を守る必要があるため墓場に行かなければなりません。

「もういいでしょう。これは私の問題です」

そう言つて私は席を立ち上がろうとしますが、ティータは袖を引っ張り離してくれません。

「私の問題は私の問題、エルファの問題も私の問題よ」

真顔でハッキリと言い切るティータを見て私は「ああ、昔と一緒にですね」と苦笑します。

思えば幼少時代もそうでした。

私とティータは記憶がある頃から一緒に、私にその道の才能があると判断される8歳まで一緒にいました。

寡黙だった私にいつも目をかけ、他の友達よりも私と共にいることを望んでくれました。

明るく、面倒見の良いティータが私の傍にいて鬱陶しいと感じたことも良い思い出です。

閑話休題

「じゃあエルファはお仕事が見つければいいのね」

しばらくの押し問答の後ティータが疲れた様子でそう聞いてきましたので私は首肯します。

しかし、私はその質問に意味はないと考えています。

どこの世界に重大な秘密を抱えた人物を野放しにする阿呆がいるでしょう。

この都市に留まっていると早くも数日後には私は屍を晒しています。

街を出ようにも私はこの生き方しか知りません。

つまり私は死ぬしかないのです。

「失礼していいですか」

これ以上話す必要はないと判断して私は再度席を立ちます。

今度は袖も引つ張られませんでしたので私は踵を返しました。

「ユウキ〓カザクラって知ってる？」

その質問を聞いた私は足を止めました。

最近現れた正体不明の浮浪児が市民権を手に入れて一角の人物になったので、念のために監視を付けるといふ話を聞いたことがあります。

私が振り向くとテイータはしめたとばかりにニコーツと笑って。

「興味を持った？ あの子ってただの浮浪児には過ぎたる技能を持っているから不安なのよね。そういえばエルファって昔から強かったからあの子のボディガード兼メイドになってみない？」

特段私は生きることに関味が無いわけではなく、死ぬしかないから死のうと考えていたのです。

生きることができるとなら私は垂れ下がった蜘蛛の糸も掴みましよう。

後日

ユウキ〓カザクラのメイドとして侵入に成功できたことで、私は死から免れることができました。数日に一度報告書を書かされます

がそれは仕方のないことでしょう。

さて、メイド服に袖を通すのは初めてですが中々着心地がよろしいですね。下手すれば前に着ていた黒装束よりも動きやすいかもしれません。

「これはあの子が作った代物なんだけどね」

そう言っただけでテイータは苦笑しますが私には笑えません。これだけの逸品を作るユウキは何者なのでしょう。このメイド服は王宮の備品と嘯かれても大多数の人が信じる出来栄です。

テイータに付き添われ、私は扉の前に立ちます。

呼び鈴を押されて中の主がこちらへ向かい、そして扉を開けました。

「ああ。テイータさんか、こんにちは。で、隣の女性は誰かな？」

私はテイータにせつつかれたので一歩前に進み出て頭を下げました。

「お初にお目にかかります主。私の名はエルファ＝ララフル。横のテイータ＝エルマライの紹介により主のメイドとして参上いたしました」

「へえ、エルファさんってバイオリンも弾けるのか」

ある日、朝食を作り終えて手持ち無沙汰だった私は何気なくバイオリンを手に取って弾きました。

こう見えても私の趣味はバイオリンです。

仕事を始める前と終わった後に自分を切り替えるためにバイオリンを弾いていました。

喜んでもらえて何よりです。

一曲弾き終わった私はバイオリンを元の位置へ戻しているところ、主がしみじみと呟きます。

「料理も掃除も大分マシになってきたことだし良かったな」

恥ずかしながら私は料理や掃除などメイドとして必要な技量を身に付けていませんでしたが、主はそのことに文句一つ言いませんでした。

しかし、主は許しても私のプライドが許さないので。

仕事は完璧に。

それが私のポリシーですから、しばらくの間メイドとして技量を身に付けるために努力しました。

そのために犠牲となった食材と装飾品には合掌を送るしかありませんが。

「このところ、私は主に対してイラつきがあります。」

他の家の従者から見れば贅沢だと非難されると思いますが言いたいことがあります。

主は怒らないのです。

いえ、怒らないというより全ての出来事に対して無頓着と言っべきでしょうか。

無礼な客が訪れて弾劾されようとも、柄の悪い冒険者に脅されても主は何の関心も払いません。形だけとはいえ仕えている者にとっては主が私以外に馬鹿にされるといっのは酷く屈辱的な光景です。

しかも主はそのことをどうでもいいとしか感じていません。

これは少し喝を入れるべきでしょうか。

手始めに来客室に豪華な品を並ばせましょう。

それで怒ってくれれば私としては喜ばしいことです。

……まあ、主を苛めることに若干の悦びがあったことを否定しません。

「師匠、今日も来ました」

そう言ってニツコリと微笑みかけるのは最近出入りするようになったサラキキュリアスです。

主と接触しに來ましたので、念のため裏を探ってみましたが無も出てきません。これは正直に主の鍛冶の腕前に惚れたというところでしょうか。

このメイド服もそうですが、主は物を作るといふことにかけては常軌を逸していますから気持ちもわかります。

「師匠、今日も見学しますね」

そう馴れ馴れしく主に近づくサラ様。私が言うのもなんですが、仮にも師匠と崇め奉っているのですからもう少し敬意を払うべきでしょう。

と、主のメイドである私は思います。

私は人を殺せません。

いや、殺せなくなつたと言いましょか。

そのために私の能力は大幅に低下しています。

しかし、そうは言っても「はい、そうですか」とやられるわけにはいきませんが。

「ば、化け物め……」

大広間で現在立っているのはそう発したリーダー格の男と私だけです、他は全員眠ってもらいました。

主は闇の世界でも有名らしく、どうにかして主を手に入れようと画策している輩がいますが、その中に今回の様な乱暴な手段に出る者の後が絶ちません。

「さすが『氷の死神』と呼ばれただけはあるな」

懐かしい名を出してきた相手を私はジロリと睥睨します。

よくわかりませんが、私はやるべきことをやっているとなんな？
つ名で呼ばれ始めました。

老若男女問わず人を殺す時は顔色一つ変えないからだそうです。

まあ、今となっては興味などありませんが。

リーダー格の男はこの場から脱しようと思いましたが、それを見逃す私ではありません。

得意のスローイングで彼の背中にダガーを投げつけました。

主特製のダガーですから当たると確実に眠ります。

やれやれ、こんな代物を作るから狙われるのですよ。

侵入してきた輩を縛りながらそんなことを考えます。

「お疲れ様」

全てが終わった頃に主が地下室から戻ってきました。

襲撃があつた場合、身の安全を確保できるまで主は地下室で過ごしてもらつことにしています。

「ふわー、エルファさんって凄いんだね」

一緒に避難していたサラ様もそんな感嘆の声を上げます。

「ありがとうございます」

このような場合は謙遜するのが一番だろうと考え、私は一礼しました。

どうでもいいことかもしれませんが、サラ様に身の危険が迫ると主が困るため他の『草』が常に張り付いています。

ヒュエテル様と主が孤児達をどうするかで話し合っています。

本人達は良かれと思ってやっているかもしれませんが、警護するこちらの身にもなってほしいものです。

主が行っている孤児しかりスラムの解体を行って一番困るのは闇の人間です。

彼らは汚れ仕事をそういった使い捨ての人間に行わせるのですが、

主達の行動のおかげで人間が集まりにくくなり、結果として彼らの行動を制限しています。

闇の人間は国にとっても害悪でしかないので国は主の行動を好意的な目で見ていますが、主達に対する報復活動が行われているのは事実。最近になって襲撃回数が増えてきました。

襲撃を行うファミリーはすでに見当を付けているのですから、国は早いところ解体させてほしいものです。

主も人の子だということが分かった出来事でした。

サラ様の態度に主もとうとう堪忍袋の緒が切れたようで、無謀な課題を出しました。

普通ならそこで終わりなのですが、サラ様は私と同じで己の身よりも課題をこなすことのほうが重要なようです。

その姿勢は仕事を完璧にこなす私は共感ができますが、主はそうではなかったようです。サラ様をどう止めようか狼狽して苦しんでいます。

仕方ありません。

私はそつとため息を吐いた後、サラ様の父親へ会いに行きました。

主に汚れ役を押し付けるわけにはいきませんから。

サラ様の父親は子煩悩なようです。

まさか話し合いに来た主を問答無用で投げ飛ばすなど想像できませんでした。

今の事態は私の責でもありません。

それを償うために今回は主を手助けいたしましょうか。

私はキュリアス家の行動パターンを整理して主に手渡しました。

主の笑顔が若干引きつり気味だったのは気のせいだということにしましょう。

サラ様の件で私はようやく主の人間らしい面を知ることができました。

ですので私はサラ様を慰めた主に対して賞賛させていただこうと口を開きました。

最近王宮がきな臭いです。

現国王の容体が悪化し、次の国王を誰にするか迷っているようです。

世襲的に見れば第1王子のフォルター宰相。

能力的に見れば第2皇子のキルマーク騎士団長。

現在王宮はこの2派閥に分かれて争っているようです。

王宮闘争に興味などありませんが、このままですと近いうちに権力とは違った力を持つ主が巻き込まれるのは必至。

せつかく得た安住の地を手放すわけにはいきません。

天が与えた機会とでも言いましょうか、目の前には義賊が奪った金銀財宝があります。

これと少しの主の財産を使えば王宮闘争の及ばない地へ逃げることができるかもしれません。

「主、提案があります」

私は前々から思索していた考えを披露しました。

主は単身ジグザールへ向かいました。

本来なら私も同行したかったのですが、そこは王宮からストップがかかりました。

大方私まで連れて行くと王国にとって主が脅威になると考えたのでしよう。

まあ、その通りでしょう。

主は大きな力を持つ反面、隙が多すぎます。

どこかの刺客に狙われたら高確率で命を失うでしょう。

しかし、それは主が一人の場合です。

私は密かにヒュエテル様と相談し、主の身辺を守るための教育を受けた孤児を何人が主の傍に置くことにしました。

私が太鼓判を押した孤児達です。

そこら辺りの刺客では相手にならないでしょう。

さて、私は主の代わりにサラ様の警護を行うことになりました。

サラ様は主ほどではないにしろ脅威ともいえる力を付け始めています。

上が上なら下も下と言いましょるか、隙の多さは主と勝るとも劣りません。

主は落ち着いたら全員をこちらに呼ぶと仰っていますから、その時までサラ様の身の安全を守りましょるか。

鍛冶場工房は主特製の施設ですので、使用中なら誰も入ることはできません。ですので今の時間帯は自由に行動できます。

「あら？ エルフアじゃない」

街中を進んでいるとそんな声が聞こえました。

「ティータですか、どうしました？」

私がそう尋ねるとティータは何が嬉しいのか笑いながら頷いていました。

「良かったわと一安心している最中よ」

「何を訳の分からないことを」

「アハハ。いいじゃない、別に。ところでエルフア、なんでメイド服を着ているの？」

「これですか？」

私は服の裾を摘み上げます。

色々理由はありますが、やはり安心するからでしょう。

さすがは主と言いますかこのメイド服はとても肌に馴染み、動きやすいので同じのを何着も持っています。

「エルフア、注目の的よ」

確かに言われると多くの視線が私に集まっています。おかしいですね、私の他にもメイド服を着て歩いている人がいるのにどうして

私だけ。

「エルファは少し自分の容姿を気にするべきね」

ティータが呆れ気味にそんなことを呟きました。

「ところでエルファ、今暇？ 時間があるなら少しお茶しない？」

そうティータが誘ってききましたので私は頷くことにします。

帰りは多少遅くなるでしょうがサラ様は気にしないでしよう。

「もう3年か、月日が経つのは早いものね」

3年前と同じ店の同じ席に座ったティータはしみじみとそんなことを呟きます。

確かにこの3年は殺し一色の日々と違い、充実していました。

「ティータ、ありがとう」

感謝の意味を込めて私は頭を下げます。

「ティータがいなければ私はここにいなかった」

私は自然と旧友に頭を下げます。

で、それを見たティータの反応は。

「どSのエルファが頭を下げるなんて、今日は雨でも降りそうだわ」

……失礼なことを言いますね、ティータは。

私は無言で目を細めました。

番外編 エルファの追憶（後書き）

追記 エルファが暗殺者として活躍していたのは8歳から15歳までで、主人公のメイドとなったのは16歳からです。

……かなり早熟ですがエルファは17歳という設定に合わせるために見逃してください。

まずは金、とにかく金(前書き)

タイトルについては何も聞かないでください。

まずは金、とにかく金

まずは金！　とにかく金！　金がなければ全てが始まらない！

「そう！　いくら高性能の自動車でもガソリンなしでは動かない！
どんな精兵であろうとも食料がなければ弱卒以下だ！」

「一体何を吠えているのですか？」

俺がそう叫んでいると横から呆れ気味の質問が聞こえた。

「まあ、気合付けだ」

さすがに誰かから今の痴態を見られ、咎められるのは恥ずかしい。
俺は誤魔化すために笑う。

横にいる女性はレア＝レグトリア＝ツバイク。

海を映し出した深い青色の髪を腰まで伸ばし、瞳は涼しい色合い
を持っている。年は俺と同じ16歳なのだが、身体の成長は16歳
と思えないほど進んでいる。身長こそ俺より少し低い程度で胸はあ
まりないのだが、それを欠点と思わせないほどしなやかでスレンダー
な体つきをしていた。

ジグサールを治めていたツバイク伯爵の双子娘の片割れだ。

先日失踪したツバイク伯爵の人質として娘達をカリギュラスに留
めていたのだが、この辺境を統治するよりも娘を見殺しにしてまで
他国へ亡命したかったらしい。

で、亡命したツバイク伯爵の代わりに責を負うとして奴隷に成り下がりそうだったのだが、エルファの進言によって俺が引き取り今ここにいる。

「頼んでいた財政の案件は整理できた？」

俺が問うとレアは間髪入れずに頷く。

「隠れ借金や脱税など多岐に渡ってありましたが、すでに山場を越えました。後は事後処理だけです」

レアは事務能力が高いのでジグサールの内政の総責任者となってもらっている。

貴族の娘なのにどうしてここまでしっかり管理しているのか聞いてみたところ、博打好きの父のおかげで自分しか財政を操れる人間がいなかったかららしい。

せめて帳簿をつけることができるぐらいの人間は雇っておけよ。

家が困窮するほど博打に嵌ったことからツバイク伯爵はかなり無能だったのではないかと推測する。

「さて、そろそろ戻ってくるかな」

約束の時刻はもう過ぎてているが俺の待ち人は現れる気配もない。

「毎度毎度のことだからもう気にならないが、何とかならないものかなあ」

俺の呟きにレアが困ったように笑うと、ようやくこちらに向かつてくる足音が聞こえてきた。

「ごめんごめん、また商人が放してくれなくて」

「姉さんは余裕というのを覚えるべきよ」

レアはフィーナに説教を始めるがフィーナは堪えた様子もない。

矢のように走って俺の前で謝るのはフィーナ「レグトリア」ツバイク。レアの姉である。

フィーナとレアは双子で、しかも一卵性双生児であるがゆえに姿形は全く同じ。シャツフルされると全く見分けがつかなくなるほど似ている。

ヒュエテルさんも双子でここまで酷似するのは珍しいと評することから如何に2人が鏡写しなのか分かるだろう。

が、残念ながら性格までは似なかったようだ。

妹のレアは几帳面で受け身な性格に対して姉のフィーナは活発的でアクティブに行動する。

レアは暇な時は本を読み、フィーナは外へ出る。

姿形がそっくりだった分を性格でバランスを取ったのかなと考えってしまうことなど何度もあった。

閑話休題

「で、フィーナ。どうだった？」

「ええ、大手の商会在ジグサールに支店を置く契約が決まったわ」

フィーナは笑顔で首肯する。

フィーナは相手の警戒心を解かせる素質を持っているので主に外交を中心に行わせていた。

宮廷暮らしのお嬢様が海千山千の怪物達と話し合えるのか不安に思っていたがそれは杞憂に終わり、今ではこのジグサールの顔としての位置を占めていた。

レアとフィーナが揃ったところで俺は次の計画を打ち上げる。

「では、そろそろ本格的に動きたいが街の治安はどうなっている？」

レアに先を促すと、彼女は手にした報告書を読み上げる。

「ユウキ男爵の財力とクロスとアイラが率いる孤児達のおかげで中央商店街周辺の治安は確保しました。全体からみると小さな地域ですが、あそこだけなら窃盗や暴行など起きず、安心して外部の者を招けると断言できます」

その報告に俺は満足して頷く。

ここに赴任してからすでに数カ月がたった。その間俺は何をしたかというと、まず都市内で安心できる場所を作る準備をしていた。

人を呼び込むためにはそこが安全だということを知らせないとならないのでこの事業には金と人手を惜しまず注ぎ込んだ。

ここでクロスの騎士養成学校での経験が生き、クロスを治安維持の筆頭に任せたところ十二分の働きをしてくれた。クロスがいなければ中央商店街の治安維持はさらに数カ月はかかったといえる。

もちろんクロスを支えてくれたアイラも外せない。

道理を通せば角が立つように、逮捕された不逞な輩からの報復を未然に防いでくれたのはアイラの功績だ。ここはアマチュアであるならず者とプロのレンジャーであるアイラの違いが出たということか。

その報告に続いて今度はフィーナが口頭で述べる。

「キツカとユキが中心となって集めてくれた素材が規定量に達したのでその一部を各都市の腕の良い職人に渡したところ、評判は上々よ。身の安全を確保できるならばらくジグザールに滞在しても良いという返事を貰えたわ。そして、各都市にユウキ男爵を含めた腕利きの鍛冶屋が集結するという噂を流したから早くも行商人はここに向かって動き出しているわ」

上々の結果に俺は口元を綻ばせる。

俺も職人だから彼らの気質を少し理解できるのだが、一流の職人ほど生活のためでなく優れた品を生み出すことに精を出す。

そんな職人達に普段は扱えない希少な素材に加え、俺が鍛冶を行

っている場面を見学させるのであれば断らない手はないだろう。

「本当にキツカとユキには感謝だな」

職人を呼び込むための素材を集めてくれたのはキツカとユキだ。彼女達が危険を顧みず最前線で活躍してくれたからこそ職人を呼び込めるだけの素材を集められた。

良い素材が大量に採れるとそれを加工する職人が来る。

腕の良い職人が集まるとそれを買い求める冒険者や行商人が寄ってくる。

そして彼らが来れば都市にGを落としてくれる。

その結果、都市が潤う。

「さて、これが成功すると冒険者がこの都市に滞在すると予想されるが、彼らが宿泊するであろう宿や酒場について抜かりはないかな」

「はい、従業員はこの数か月でしっかりと教育を施しました」

うん、それはよかった。もし不祥事が起こってしまったえば客足が遠のいてしまうからそれは避けなくてはならない。

「冒険者のレベルに合わせた場所へ誘導できるか？」

「都市の入り口に情報屋を配備します。そこで聞けば今のステータスと装備でどの場所で狩るのか適切な場所を教えてくださいます」

未熟な冒険者が己の力量も顧みれず、無駄に命を散らせると後の風評に響く。だから死なせるわけにいかないし、それ以上にこの都市周辺でステータスを上げてくれればこちらとしても儲かる。

「そういえば1つ提案があったのだけど」

「何かな？ フィーナ」

「娼館や賭博場なんて作れないかな。ほら、あれって禁止しても無理な類のものだし」

「あー……それが」

プレイヤー時代はそういう類いのものをしなかったから失念していた。確かに人が集まるとそのような施設も必要になってくる。

「ねえユウキ男爵、もし良かったらそれらの指揮を私に任せてもらえない？」

「フィーナが？」

俺が聞くとフィーナは笑顔で頷く。

「ああいったものを一度でいいから運営してみたかったの。いつも父の傍で見ていただけたからとても気になって」

「うーん」

それを聞いて俺は一気に不安が高まる。

フィーナは自分がしたいことに関して一切の容赦がない。

以前手っ取り早く金を稼ぐために金貸し屋から不良債権を集め、その回収をフィーナに任せたら返却率が100%に近い状態へなった。それだけなら構わなかったのだが、フィーナがやり始めてから店や家を失う人が増えて治安に大きな影響を与えた。

「借りたものは返す。これ、正論でしょ？」

素でそんなことを言っただけのけたフィーナに内政担当のレアが珍しく火を噴くように怒り狂ったのは記憶に新しい……そんなに大変だったのか、レア。

俺が唸っているとレアが口を開いてフィーナを擁護し始める。へえ、何だかんだ言っても姉妹なんだと俺は感心する。

「今回なら大丈夫です。二重三重の警戒網を張り巡らせ、もし引っかけた場合姉さんはしばらくハードプレイ専門の娼館で働いてもらいます」

「ちょっと！そこまでやらなくていいじゃないの!？」

訂正

全然許していなかった。

レアが笑っていることから本気でフィーナをそこで働かせたがっている。

「まあ、そこまで言うのなら構わないか」

俺は許可を出す。娼館もカジノもいずれば建てなければならないのなら早い方が良かったろう。

大きな案件はここまで。後は小さな報告のみを済ませてこの場は解散した。

「ねえ、確認するけど娼館で働かせるというのは冗談よね？」

「さあ？ どうでしょう」

フィーナが震える声で尋ねてくるのに笑顔で返すレアが相当怖かったことを追記しておく。

まずは金、とにかく金（後書き）

誤字脱字やご意見、ご感想をお待ちしています。

治安向上

「」

「ご機嫌だなレア」

俺とレアがいつも通り執務室兼会議室で仕事を行っているのだが、時折レアから鼻歌が聞こえてくる。

本人は自重しているつもりなのだろうが、頬の緩み具合や眼が生き生きしている様子から喜びを抑えきれないようだ。

「ええ、何故ならここまで上手くいくとは思いませんでしたから。内政を預かる身として冥利に尽きる結果です」

普段表情を崩さないレアがそこまでご機嫌になるのは3か月前から行った都市の活性化が想像以上の利益を落としてくれた。

この利益のおかげでこれまで予算がなく、実現できなかった案件に手を付けられるのだからレアとしては笑いが止まらないだろう。

「まあその通りだな」

俺としてもこれからの方針を進めるにあたっての第一段階をクリアできたから万々歳。

レアも喜び俺も喜ぶ結果と終わったのだが、残念ながら約一名不満な者がいる、それは。

「何なのよこの忙しさは！」

髪を振り乱して足音も荒く入室してくるのはレアの姉のフィーナ。彼女は豪商や貴族などの折衝を行う外交を主に行っている。

「馬鹿貴族どもが！ 袖の下とか利益供与とか便宜を図れとかなんて図々しい！ そんなに羨ましいのなら自分の領地で行えばいいじゃないの！」

フィーナがそう叫ぶのもわかる。

今回の町興しの成功を妬んだ他の貴族達が何とか甘い汁を吸おうと群がってきた。

で、その対応を一手に引き受けたのがフィーナ。

利益に目ざとい彼らの権謀術数を掻い潜り、相手に弱味を握らせずに奮闘していたのだからそれはそれは心労が溜まることだろう。

「ご苦労様、フィーナお姉さま。お姉さまの苦労がこのジグサールを支えていますよ」

言葉上は労っているように聞こえるがその実全然労っていない。

レアがフィーナをお姉さま呼ばわりするときには十中八九馬鹿にしている。

案の定フィーナが肩を怒らせてレアに詰め寄った。

「はいはい、もう分かったから2人とも止めてくれ」

このまま姉妹喧嘩にもつれ込みそうだったので俺は2人の間に割って入る。さすがのフィーナもこれでは不味いと悟ったのか渋々ながらも引き下がってくれた。

「……後で覚えておきなさいよ、レア」

(やれやれ、本当にお前らは仲が良いな)

そつ口に出すと2人から折檻されそうだったのでその言葉を口に出すことはなかった。

「さて、フィーナは貴族の対応に追われていたらしいが、前に任せると言った娼館やカジノの掌握はどうなっている」

その言葉にフィーナは態度をコロツと変えて勢い込んで話し始めた。

「順調も順調、商人との提携も上手くいったし、そこから闇の人間を追い出すことも成功したわ。だからもうぼろ儲けよ。この2か月の収入だけで1年は遊んで暮らせそうだわ」

事もなげに言ってくれるが、実際にやるとなると途方もない労力を使う作業である。

「彼らを制御するのに何かコツでもあるのか？」

と、聞いてみるとフィーナは手を振って笑いながら。

「ああいつのを扱う人間は最終的に利益さえ得られれば良いのよ。だからそこを思考の基に置けば彼らが何を考え、何を得たいか、そしてそのために何をしようとしているのかが手に取るように分かるわ」

と、簡単に言ってくれた。

俺的には商人は貴族より厄介だと考えているのだが、どうもフィーナは違っらしい。

「下らない誇りや地位に固執し、後先考えずに付き纏ってくる貴族の連中よりずっと可愛いわよ」

この言葉にはレアさえも頷いていた。

「前々から思っていたがフィーナは貴族をボロクソに貶すな」

「だってあんな血筋だけのお荷物に尊敬の念なんて持つことができないっ」

と、伯爵の爵位を持っていた元貴族のフィーナは非常に辛辣な言葉を返してくる。

……もつ何も言っまい。

同族嫌悪と思うことにしておこう。

「さて、街の活性化が上手くいったので次の段階に移りたいと思う」

その言葉に頷くツバイク姉妹。

だから俺は会議の始まりを宣言した。

「レア、現在の財務はどうなっている？」

「はい、収入と支出のバランスが崩れ、今は金余りの状況になっています。この量があれば大きな改革の1つや2つは起こせるでしょう」

レアの報告に頷く俺。

「よし、それなら軍を整備しようかと考えている」

「軍ですか」

レアが渋い顔を作る。

まあ、当然だろう。

軍というのは基本的に金食い虫なので内政を預かる者としては好ましい存在でない。

「が、俺が考えているのはレアが考えているような軍じゃない。もっと生産的な軍だ。」

「半農半兵、という表現が正しいかな有事の際は兵として活躍してもらおうが、それ以外は公共の福祉に力を注いでもらおう」

「具体的にどういうこと？」

フィーナが今一つ理解していなかったのでそう質問する。

「輪番制というものを採用しようかと考えている。つまり1日兵の訓練、1日公共事業そして1日休みという具合にな」

「それで上手くいくかしら」

「フィーナの疑問も最もだ。しかし、短期的にはともかく長期的に見ると相当な利益を生む。何せこのような形ならば普通より多くの兵を確保できるからな。だから頑張れレア」

「分かりました」

レアが多少沈んだ声だったのは気のせいにしておきたい。

「で、公共事業として何をさせるかという都市の整備が主な仕事。これから先、中央商店街以外でも治安を安定させたいからな」

「確かに。そろそろ都市の整備を行わなければ後々の業務に支障が出ます」

レアが納得するのわかる。

金が動けば人も動くと言うように、最近ジグザールへの人口の流入が著しく、このままだとまだ治安が整っていない場所に流民を住まわせなければならなくなる。

「これが街の整備の基本計画書。ヒュエテルさんが前々から構想し

ていたスラム解体の構図をジグサールに合うようアレンジしたものだ」

そう言っ て俺は2人にそれを配る。

このジグサールへ赴任する前にヒュエテルさんの所へ赴いてこのことを相談すると快諾してもらった。

そして俺はそれをアイラとその子飼いの孤児達にこの街の全容を説明してもらい、この計画書を作成した。

「人手はこの街に多数の身元不明者が在住しているから彼らを使う。で、その際に兵役も負うならば一定の給付金を毎週送ると下賜してほしい」

「ふーん、大体理解したけど彼らの監督は誰がやるの？ 私やユウキ男爵のような上品な存在に彼らが従うとは思わないんだけど」

「フィーナの疑問もわかる。だから彼らの総監督はキツカ、そして中級監督はヒュエテルさんが選んだ孤児達にやらせようかと考えている」

「キツカが？ 確か彼女つて根っからの冒険者でしょ、將軍には向いてないんじゃないかしら」

「フィーナの言うとおり、俺もそう思ったんだけどな。しかし、エルファの言葉によるとキツカは人を導くカリスマ性を持っているらしい。だから今回の人事に抜擢したのだけだな」

「エルファさんか、それなら納得」

自分を見出してくれたエルファはレアもフィーナも一目置いてい
る存在だ。そのエルファが推薦したのだから2人は頷かざるを得な
いのだろう。

「失礼ですがヒュエテル様が選んだ孤児というのは信用できるので
すか？」

「レアはそう思うだろうな。ただ、疑問に思うのは彼らの仕事振り
を見てからにしてほしい。ヒュエテルさんとは3年しか付き合っ
ていないが、その彼女が持つ人物眼は大したものだぞ」

4ケタに迫る孤児の確保と彼らを保護する施設の維持は1人の人
間にできる芸当じゃない。だが、ヒュエテルさんは目をつけた人物
にそれを任すことで可能としていた。

そのことからヒュエテルさんが持つ眼は優れている判断できる。

「エルファ様には敵わないと思いますが」

レアよ、どう答えていいかわからない言葉を口にしないでくれ。

「……とにかく、キツカからはOKを貰っている。だから具体的
内容はレアとキツカで詰めてくれ」

その言葉にレアが頷いた。

「さて、公共工事と兵についてはレアとキツカに任せるとしてフィ
ーナはクロスとともに治安を向上させてほしい」

「私も参加するの？ 彼が率いる治安部隊で十分じゃないかしら」

「その疑問は最もだな。しかし、これ以上治安を上げるとなると闇の組織 ブラッドレイ商会からの反発が予想されるからこの機にクロスの治安部隊で一掃しようと考えている。フィーナは反目し合っ
て同士討ちを誘発し、彼らを弱体化させてほしいのだが」

今まではパワーバランス上彼らに手を出すとこちらがやられる為
手出しできなかったが現在は違う。財政が潤い、こちらの味方も増
えた以上彼らに遠慮する道理はどこにもない。

ちようど良い機会だ。

フィーナの交渉能力とクロスの治安部隊を使って一掃してしまお
う。

「こちらの手足となって動きそんな人間の処遇についてはフィーナ
の裁量に任せる」

こちらに降って忠実な手下として動いてくれるのならそれでよし。

やはり彼らは彼らなりに使い道があるのが事実なのだ。

「ただ、助ける人間は選んでくれよ。後々こちらの寝首をかかれて
は堪らないからな」

言っまでもないとはかりに笑うフィーナを見て俺は成功を確信し
た。

踊り場（前書き）

今回は総括だけです。

話的にはあまり進んでいません。

しかし、内政って結構難しいですね。

試行錯誤の毎日です。

踊り場

「芳しくないな」

レアから輪番制による練兵具合そして都市の整備状況を聞いた俺はそんな感想を漏らす。

「申し訳ありません。予想以上に兵の士気が低く、中々従ってもらえません」

レアが恐縮するのだが俺はそんなに縮こまらなくていいと考えている。

元からの兵士ならともかく、つい先ほどまで浮浪者だった人間に兵のような働きを期待しても無理だ。幸いにもジグザールはこの都市の規模でまだ補える範囲なので急ぐ必要はない。

「キツカと送られてきた孤児達が今も奮闘しているのだろう。だから俺達は温かく見守ろうじゃないか」

「はい、今はその手しかありません」

レアが首肯したのでこの話題は終わり。

ふとキツカとその孤児達が頭に過ったので聞いてみる。

「ところでキツカと孤児達はどっ？」

ヒュエテルさんが選んだ人材がどうなったのか興味を沸いたので

伺ってみると、レアは恥じ入るように口を開いた。

「ヒュエテル様を疑ってしまい、本当に申し訳ありません。彼女が選んだ孤児は想像以上の働きをしてくれたおかげで最悪の形である失敗だけは防ぐことが出来ました」

こう言っただけだが、計画の失敗の回避よりもレアがヒュエテルさんを認めてくれた方が嬉しい俺がそこにいる。

「キツカについてはやはりエルファ様のご慧眼です。彼女が送られてきた孤児達を統制してくれたおかげで私の指示を全体に行き渡らせることが出来ました」

「ほう、それはよかった。ところでレアから見てキツカはどう感じた？」

その質問にレアは人差し指を顎に当てて考え、口を開いた。

「圧倒されました。普段は何の変哲もない小娘のはずなのですが、いざ指揮をするととなると彼女から溢れ出す何かを私を含めた全員を魅了します」

小娘って……まあ、良いだろう。問題はそこじゃない。

キツカは仲間内から永久機関の持ち主と呼ばれていたからな。その底なしの体力と気力が生み出す覇気にレアは吞まれそうになったのだろう。

「つまり当初の計画よりは遅れているがそれは深刻な影響を齎すものでなく、時間さえかければ解決する類のものなのだ」

俺がそう結論付けると同意するかのようにレアは頷いた。

「お疲れ様」

レアからの報告が終わるとそれに見計らうかのようにフィーナが顔を出す。

当初は3人が揃ってから報告会が行われていたのだが、報告する内容は事前に知らされていることから全員出席することに異議を唱えたのがフィーナ。

「大丈夫よ。聞きたいことがあれば出席するから」

そう言って席に着くフィーナ。

余談だがフィーナが最初に報告する際には必ずレアが遅れてくる。

性格は真反対なのだが妙な所で似ている双子娘のフィーナとレアだった。

「治安の件は？」

「もう大成功。アイラの助力もあつたけどクロスが率いる治安部隊のおかげでジグサル全ての場所に目が行き届くようになったわ。この調子だと夜に娘が1人歩いてても大丈夫じゃないかしら」

「へえ、それは良かった」

治安の向上は兵や都市の整備と違って緊急の用件だったためそれ

が上手くいって良かった。正直な話これが上手くいかないとな次の段階に大きな支障が出てしまうからだ。

「で、フィーナが担当していたブラッディ商会の件はどうなった？」

「ああ、それね。概ね成功というところかしら」

「具体的には？」

「ブラッディ商会は壊滅できたけど、有能な人材は手に入らなかったわ。それはこちらの就こうとした人間も何人かいたけど、彼らはとてもじゃないけど使えない。せいぜい鉄砲玉が良いところだから全員捕えたわ」

「当初の目的は果たしているから問題はないな」

人材が手に入らなかったのは痛いといえば痛いけどそれほど惜しむことじゃない。そういった人材はヒュエテルさんが送り出してくれるからあまり問題はない。精々優秀だったら拾ってやる程度の認識だった。

「ところでフィーナから見てクロスとアイラはどう見る？」

「そうねえ……クロスは責任感が強く、見ていて安心できるわ。だから彼の率いる部隊はどんな時でも動じないのかしら。何か事件があるとなすぐに彼の部隊が駆け付けて冷静に処理する様子は惚れ惚れするほどだったわ」

クロスの評判が上々で何より。これはまだ誰にも明かしていないが、クロスは後1年ちよつとで起きる魔物大侵攻の際に守衛の指揮

官を任せるつもりだからな。

「で、アイラは……ユウキ男爵は愛されているわねとしか言えないわ」

「ん？ どういうことだ」

歯切れの悪い答えに俺は首を傾げるとフィーナは言葉を選ぶように語りだす。

「人ってさあ、愛する者のためなら残酷になれると言っけど、まさしくアイラはそれを地で行っているわ」

その言葉にレアも頷く。

「確かに、アイラの心酔具合は私から見ても寒気を覚えました」

「少しでもユウキ男爵を貶める気配を感じたらアイラの瞳から感情が消えるのよ」

「その通りです。諜報関係でアイラと打ち合わせする時があるのですが、次の瞬間には首と胴体が分かれていそうでもビックビクします」

そう言って頷く2人を見た俺はどう反応していいのかわからない。

「これだけは言えますが、もし私達がユウキ男爵に叛意を翻したら次の日には物言わぬ屍になっていますね」

「そうね。しかも見せしめを兼ねて無残な死に様を晒すわ」

「よくお分かりですね」

だからこそ俺の後ろから響いてきた怜悯な声音に全員が固まった。

「……アイラ」

フィーナが呻き声をあげた先には渦中のアイラがそこにいた。

諜報部隊主任 アイラ「カザクラ

装備：

武器 スリープボウ

射抜いた相手を眠らせる。

防具 カメレオンマント

周りの景色と同化する。

頭 忍の頭巾

己の呼吸音を消す。

足 サイレントシューズ

己の足音を消す。

装飾品 神の不在証明書

己の気配を消す。

ステータス

短剣	4	6
弓矢	6	5
隠密	7	2
魅了	4	3
恐怖	8	2

4年前と比べて成長したアイラは、浮浪児の時と比べて印象が鋭くなったように見える。藍色の髪の毛のボブカットは変わらないが瞳はさらに鋭く光り、体も少女体型から女性の豊満な体型へと変貌していた。

「ベッドで人を殺せそうだな」

アイラの十分に育った果実から目を逸らして眩くと。

「その前に初体験をユウキ様で済ませてからですね」

腕を組んで胸を強調する姿勢を取ったアイラは至極余裕のある笑みを浮かべて返してきた。

その言葉は男として嬉しいが今は童貞を失う気が起きない。だから童貞を失ってもいいかなと思っただけならお願いしようと考えている。

「何場違いな会話をしているのよ！」

呆然状態から復帰したフィーナがアイラに食ってかかる。

「そうです！ 見張りはどうしたのですか？」

続いてレアもそんな声を上げた。

するとアイラはニツコリと妖艶な笑みを浮かべて。

「抜き打ち検査ですよ。このように不測の事態に対応できるかどうかという」

「へえ。で、結果はどうだった？ 会議室の外には5、6人が固めていたと思うが」

分かり切っていることだがここは聞いておくのが礼儀というものだろう。案の定アイラは唇を歪めて。

「全員鍛え直しですね。反撃はできなくともせめて声ぐらいは上げ

て欲しかったものです」

フフフとアイラは笑うが、仮にもヒュエテルさんが選んだ人材をこうもアツサリと無力化するのを見た俺は戦慄を禁じ得ない。

「いえいえ、私などエルファ様に比べるとまだまだ」

唇を笑みの形に広げながら謙遜するアイラ。それが本当かどうか分からないが、アイラにしてもエルファにしても化け物だと考えてしまう。

「それではこれで失礼します。会議を邪魔して申し訳ありませんでした」

驚きで声も出ない俺達を尻目にアイラはその場から出ていく。

「ああ、言い忘れていましたが。もしユウキ様を裏切ったらどうなるのか、とくと想像して下さい」

フィーナとレアにとってはこれ以上ないくらい不吉な言葉を残していった。

「……えーと、会議を始めていいか？」

アイラが去ってしばらく経った後で俺は2人に伺う。

「え、ええ。大丈夫よ」

フィーナの震える声から推察できる通り2人ともまだ立ち直っていないが、このまま時間を浪費するのも何なので話を進めることにする。

「まあ、とにかく。レアは引き続き兵の訓練と都市の整備を頼む」

「分かりました。ところで気になったのですがユキはどうしています？ 彼女だけ名前が出てこないのですが」

「ああ、それは私も思った。キツカやアイラ、そしてクロスはよく見かけるけどユキは最近見てないの。一体何をしているの？」

「そう言えばまだ伝えていなかったな」

今振り返るとユキがどうしているのか2人に伝えた記憶が無かった。

「ユキは今、魔法学園のOBやOG、そして同級生を尋ねて回っている」

「え、何で？」

「フィーナ、理由は簡単だ。ユキは近い内に創設する『魔導騎士団』のメンバーを集めてもらっているからな」

これは俺の構想の一つで、絶対数が少ない魔導師は1人で軍の一個小隊に相当する火力を持つ。そのため魔導師の数というのは軍の強さを表す一つのパラメーターにまでなっていた。

「しかし、そう簡単に集まるのですか？ 魔導師というのはその性

格上国や貴族が困い込む場合が多いのですが」

「レアの言うことも分かるな。ユキは最難関と名高いの王立魔導師養成学校で史上始めての市民で生徒会長を務めた天才だ。今でもユキに心酔している者が多く、国や貴族よりもユキの下で働きたいと表明している者が確定しているだけで20人は下らない」

「20人!……」

レアが驚くのも分かるだろう魔導師が20人ということは軍の一個大隊に相当する戦力だ。しかもその集団はユキを崇めている者で構成されているから結束力も並大抵でないだろう。

「何にせよフィーナの負担が増えることは確かだ。と、いうことで近いうちに魔導師を取られた国や貴族の抗議が来ると思うからそれを一手に引き受けてくれ。ああ、資金もある程度自由にしていいから決して魔導師を返さないように」

フィーナの悲鳴をバックにして俺はこの話題を打ち切って会議を終わらせた。

踊り場（後書き）

本当はアイラの登場予定など無かったんですけどね。
恐るべし、ヤンデレ。

作者の手を離れて動くとは。

大嵐（前書き）

キツカ大暴れ。

前半の内政パートが吹き飛ばすインパクトをキツカが与えてくれました。

大嵐

「報告出来るまでの仕上がりになりました」

「どこことなく嬉しそうに語るのは輪番制と都市の改革を任されていたレア。」

「当初の予定より遅れましたが、仕上がりは上々です。最大の労働力を手に入れ、さらに無法地帯を撲滅出来ましたからさらに多くの人をジグサールに受け入れることが出来ます」

3か月前は芳しくなかったものの、キッカと送られてきた孤児達の活躍によって俺が思う通りの仕上がりを見せてくれた。

モデルケースは中国の唐時代における長安の都の再現。

碁盤状に区画を整理し、一定区画ごとに治安部隊の詰め所を配置することによって都市の治安維持を図る。

さらにこの中央役所を中心として以下の様に区域を割り振った。

北には強力な魔物出没地域に繋がる北門ゆえにここは素材買い取り屋や情報屋、鍛冶屋そして薬屋など冒険者向けの店を揃える。

東から外部の者がやってくるためこの区域に宿屋や商店街など行商人や旅人を対象とした商業区とする。ちなみに娼館やカジノ、闘技場もここにあった。

南については現在建設中だがここら辺りに学校や病院、研究所、

裁判所の他に訓練場や教会、汚物処理場など公共の施設を置く。

西が最も治安が安定しているのでこの区域に住居区を構える。中央に近づくほど相場が高い。

中央に行政機関の中心となる役所がある。他にも有事の際にいつでも対応できるよう軍や治安部隊の本部も用意していた。

「南の区画に置く学校だが、技術者養成学校を優先的に立てて欲しい」

ここは工業都市ジグサール。

その名前に恥じないよう後継となる技術者は育てておかなければならない。

構想としては都市内にいる技術者を順に学校に招いてより実践的に行う予定だ。

「技術者を育てるためのGは惜しまないからいくらつぎ込んでも構わない」

俺の愛した工業都市ジグサールが着々と完成していく。

レアが「畏まりました」と頷くのを確認しながら俺はほくそ笑んだ。

そして次はフィーナからの報告に移る。

あのアイラの一件から身の危険を感じたのかレアもフィーナも出席義務の無い報告会へ顔を出すようになっていた。俺が出席しているにも関わらず自分達が出席していないという状況はアイラの怒りを買っんじゃないかと恐れた結果だから俺は何とも言えない。

……お前らは身の危険を感じないと出席しないのか？

閑話休題

今回はレアが輝く反面フィーナは沈んでいる。

まあそうだろう。

ユキが勧誘した魔導師の雇い主からの抗議を一手に引き受けていたのだから。

噂によるとフィーナは時折奇声を上げていたそうだからそろそろ壊れかけているのかもしれない。

と、言っても雇い主を鎮めるためにかかるであろう袖の下を予想の半分に抑えているからまだまだ余裕があるのかと考えてしまう。

「魔導師を引き抜かれた貴族からの抗議だけど何とか捌いたわ。これに関してはアイラに感謝しなくちゃ。フッフ、もうアイラに足を向けて寝られないわね」

聞いたところによるとアイラの諜報部隊が貴族達の弱みを握り、それを材料にフィーナが駆け引きを行うことによって黙らせたらしい。

フィーナはアイラを頻りに褒めているが、俺から言わせると押しが強すぎると貴族達の反感を買って孤立してしまい、かといって弱すぎると魔導師を取り返されるので針の穴を通すような絶妙なバランスを取ったフィーナはやはり天才なのだと考える。

「抗議してきたのは貴族だけか。国からは無かったのか？」

俺はそっちの方を恐れていた。

貴族からの反感を買うのは痛い、民衆からの支持を得られていたためすぐに影響が出ることはあるまい。魔物大進行が起こるまで持たせればいいだけの話だからな。

しかし、国の反感を買うともっと直接的な制裁が来てしまう。

罪をでっち上げられて犯罪者と認定されてしまう可能性があったので、国からの追及が避けられないのであればそちらは諦めるつもりだった。

するとフィーナはため息を吐きながら

「王宮は外部に目を向けるどころじゃないのよ、もう派閥争いが泥沼化してそんな抗議をする暇があるのなら王宮内で味方を付けた方が得というぐらい。だから外部の私達が何をしようがどうでもいいみたい」

「悲しいですね」

元貴族で伯爵の地位にいたレアが顔を顰めるのだが、俺はむしろ

好機と見ている。

何をしても許されるのであれば精々好きなようにやらせてもらおうか。

そして後でエルファに頼んで王宮内で有能な人材をこちらに流してもらおう。

そう考えている間にもフィーナの報告は進む。

「実際問題としてユキが連れてきた魔導師の大半は国が召抱えている宮廷魔導師よ。彼らは権力争いに巻き込まれるぐらいなら安全な私達に付こうという魔導師が多かったわ」

「なるほど、だからユキの連れてきた魔導師のレベルは高かったのか」

貴族や実力者が持つ魔導師にしては練度が高すぎると薄々勘付いていたが、まさかそんな事情があったとは。これは思わぬ僥倖だ。

そう内心俺は喜ぶ反面とあることに気付く。

そこまで王宮の腐敗が進んでいるのであれば民衆の生活は相当酷いことになっているのではないか。

俺の懸念を読んだのか今度はレアが口を開く。

「産業都市ジグサールの繁栄はこの国に轟いています。今でさえ多くの人が流れてきていますが、これから先はさらに増えると考えて下さい」

「具体的には？」

「アイラからの報告によると明日の食事さえ覚束ない人間がこの国全体の10%に上ります。最悪現在ジグサールの総人口の5倍にあたる人間が流れてくると考えて下さい」

「5倍!？」

フィーナが絶句するのも分かる。

シマール国の総人口は1000万人。

そしてその1割にあたる人口がここに流れてくればどうなるか。

豊かになったとはいえ一都市であるジグサールではそれだけの人数を許容できないのは明白だった。

余談だがユーカリア大陸に住む人口は判明しているだけで1億人である。

「レア、もしそれだけの人口が流れてくるとすれば今ある食料の備蓄で何か月持つ？」

「半年です」

「……厳しいな」

ジグサールは現在順調に発展しているが、それは工業による二次産業によるもので、農業や家畜などの一次産業は全然発展していな

い。

それはジグサールの地質によるものであり、強力な魔物が徘徊するこの地域に農業など土地に根付いたことは出来ないのだ。

血の滲むような努力の果てに作物を育てても収穫前に魔物が大挙して押し寄せて食い散らかされるのがオチだろう。

一分、二分と俺は瞑目する。

フィーナもレアも俺の決断を待っているのか何も言わない。

「……仕方ない」

しばらく時がたった後俺は目を開ける。

「フィーナ、近隣の村に掛け合って交渉してくれ」

このままでは難民が押し寄せて都市全体が餓えるのは明白。だからそれを避けるために俺はある考えを披露した。

「肥糧と農業用具、そして警備兵を無償貸与する代わりに村の拡張を頼んで欲しい」

ジグサールはドラゴンの糞や世界樹の枝などが取れ、そこから作り出される肥料は他と比べ物にならないほど作物がよく育つので、肥料は輸出品の目玉の一つだった。

それに腕の良い鍛冶師が作る鋤や鍬も一級品。農家からすれば喉から手が出るほど欲しい逸品である。

収入を上げるためには村を拡張すれば良いのだが、拡張した分だけ畑を耕す人と守る人が必要となるので、少ない人口では不可能だが誰だつて収入を上げたいと、村を拡張したいと願うのが普通。

だから俺はそれを叶える代わりに農作物の安定給与と将来訪れるであろう難民の受け入れ先を確保しておきたかった。

「構わないけどそれらの村を統治している貴族はどうするの？ 彼らからすれば自分の領地を勝手にされるのは面白くないと思うのだけど」

「それらの村が納める租税を2割増して払うと言ってほしい。最悪4割まで出せる」

レアの様子を伺うが反対する素振りは見せない。つまりそれだけの余裕はあるということだ。

フィーナは「また仕事が増える」とぼやいていたが、これは必要なことなので我慢してもらおう。

安心しろ、後に今の苦労に見合った報酬を用意するから。

……多分な。

「さて、これで会議を終了する」

大まかな方針を決定出来たのでこれ以上することはないと考えた

俺はそう宣言する。

フィーナは辛そうだったがそこはとうすることもない、頑張って耐えてくれ。

「ちょっと待って下さい」

立ち上がりかけたその時、レアがまだ報告があると言う。

「非常に言い難いことなのですが」

レアの目は泳いでる様子からかなり無茶な要求なのだろう。しかし、そういうのは会議の途中に言ってほしいな。

と、俺は苦笑しながらもレアに先を促した。

「先ほど申しました輪番制の成功はキツカの活躍と報告しました」

その通りなので俺は首肯する。上げられてくる報告を見てもキツカが重要な役割を果たしていることは明白だ。

「で、そのキツカが報酬を要求したのです」

「何だ、そんなことか」

身構えていた俺は拍子抜けする。

レアの深刻ぶりな様子からもっと重大なことだろうと予測していたが、そんなことなら何とでも出来る。

「しかし、それは普通の要求じゃないのです。具体的には」

「そこからは私が話すわ」

扉が開いて、コツ、コツ、と足音を鳴らしながら一人の戦乙女が姿を現した。

ジグザール軍総大将 キツカカザクラ

装備：

武器 竜骨の槍

防具 ワルキューレアーマー

頭 雷神の兜

足 コルクマリッドの靴

装飾品 大將軍の証

ステータス

剣	65
槍	78
探索	63
魅了	92
支配	83

キツカの身長はすでに180cmを越え、トレードマークである赤毛をポニーテールにしている。口元には常に笑みをたたえ、スラリと伸びた長身に合わせるかのようなスレンダーボディは少女時代と一線を画し、その佇まいは將軍のそれを思わせた。

「で、何をしたいんだ？」

突然キツカが現れたことに意表を突かれながらも、何の用件を持って来たのか尋ねる。

「ああ、簡単よ。そろそろ私も部隊も持ちたいと思っただから」

「部隊？ 変なこと言う。キツカはすでにジグサール軍の大將だろ
う」

前々からキツカは人を率いる素質を持つと睨み、その予想は今回の輪番制の件によって当たっていたと考えている。

おそらくキツカがいなければ兵も孤児も動かず、失敗していた可能性があっただろう。

が、そう言ってもキツカは首を横に振る。

「違うわ、私よりもクロスが大將に相応しい。だから私は別の部隊を持ちたいの」

「クロスはクロスで別の役割がある。だから大將はキツカしかない」

俺はそう言っただけで何とかキツカの叛意を促そうとしたがキツカの決意は固い。俺は諦めて何の部隊を持ちたいか尋ねる。

「私が持ちたいのは竜騎兵よ」

突然の単語にキツカと予め聞いていたレア以外がポカンとする。

「……騎兵か？ まあ、キツカなら騎馬隊でも隊長が務まると思っ
が俺は役不足だと考えるぞ」

聞き間違いだと判断し、俺は騎兵についてそう述べたのだが。

「馬じゃない、竜よ。竜騎兵の隊長を私は務めたいの」

聞き間違いじゃなかったので俺は頭を抱える。

こともなげに言ってくれるが竜を飼い慣らすというのがどれだけ大変なのかキツカは理解しているのか。

竜というのは知能が高く、誇りが高いので脆弱な人間に背中を貸す竜はまずいない。通常は卵の頃から育て、その竜と兵は一蓮托生というのが一般的だった。

そのため卵から面倒を見なければならぬので、1人の竜騎兵を作るためには少なくとも20年以上の月日が必要だった。

シマール国に竜騎兵など数人。数十人単位で抱えている国は大陸でも5つにも満たないことから如何に竜騎兵が貴重なことが分かるだろう。

「安心して、通常の卵から育てる方法じゃないから」

「どづいつことだ?」

そう聞くとキツカは花が咲く様な綺麗な笑みを浮かべながら。

「卵から育てるからそんなに時間がかかるのよ、成竜を従えさせれば問題は解決だわ」

それが出来たら誰も苦勞せんわ!

と、叫びたい衝動を必死で抑える。

「まあ、とにかく。竜の住処についてはあてがあるから3ヶ月ほど空けるわ。ああ、それと私が見繕った者も連れて行くから」

そう言っつてリストを見せるキツカ。

約30人ばかり載せられているそれを見た俺の感想は。

「……おい、キツカ。これに載っているメンバーを連れて行くって正気か？ これだけの人材が抜けたら軍が大変なことになるぞ」

リストに載せられていたメンバーはいずれもジグサー軍の中核をなす幹部ばかり。そして、幹部以外もリストに載せられているが、その人物達はキツカやクロスほどではないにしる一軍を任せられる将帥の器を持った将来性のある者だった。

「成童を従えさせるにはこれくらいの器を持ってなきゃ無理よ」

本当に、呆気なく言ってくれる。

もはや怒りを通り越して呆れてしまった。

「……反対しても行くのだな」

「当然」

俺の嘆息に即答するキツカ。

……もう何も言つまい。

「何か他に必要な物は無いか？」

「こうなれば自棄だ、とことん付き合ってやるぞ。」

「そうね、これだけの装備を一式揃えて欲しいわ」

「一式で良いのか？」

「ええ。戦うのは私一人だし、これを全員分揃えるのは多分無理よ」

そう言っただけでキツカが要求した装備は。

武器	風神のドラゴンキラー	ドラゴンキラーに風属性を3つ
付与	カマイタチを飛ばせる。	
防具	火土竜の鎧	火属性によるダメージを軽減。
頭	セイレーンの帽子	熱風から呼吸を守る
足	リザードマンの靴	溶岩でも溶けない
装飾品	韋駄天の魂	AGLを2倍にする

「……まあ、これは俺が作っておくから3日ほど待て」

キツカの要求した装備は優秀な職人が多いジグサーでも俺しか作れないだろう。これを30人分揃えらると俺は死んでいたかもしれない。

「うん、我儘を聞いてくれてありがとう」

実際は我儘で済む範囲でないのだがな。

用は済んだとばかりに去ろうとするキツカに俺はこう一声かける。

「キツカ、死ぬなよ。もし竜騎兵を得られたとしてもキツカがいなければ意味はないのだからな」

その言葉にキツカは振り返らず、大丈夫とばかりに親指を立てた。

キツカという嵐の前にはしばし沈黙としていたレアだが、とにかくキツカ達が抜けた穴を何とかしないといけないので、突然降って沸いた難事に呆然としていたレアに「軍の再編成をクロスと相談して行うように」と命令する。

「フッフ、仲間仲間」

一人だけフィーナが暗い声で唄っていたのが印象的だった。

大嵐（後書き）

今回は番外編としてキツカの学生生活を含めた内容を執筆します。

完成（前書き）

2回目の超展開です。
心してお読み下さい。

完成

「完璧だな」

魔物大進行まで後半年を前にして俺はレアとフィーナを前にして
そう宣言する。

それを肯定するかの様にレアが口を開いて。

「はい。技術の面ですが、ユウキ男爵の弟子であるサラがジグサー
ルに住み付いたためそういった技術関連が大幅に飛躍しています。
おそらくジグサールはシマール国どころかユーカリア大陸全体から
見ても工業の面においては他の追従を許さないでしょう」

治安が安定したのでようやくサラを呼べる環境が揃った。

ここに来た当初は危険すぎて招けなかったが今は違う。

今のジグサールに昔の荒廃したイメージはもはや無い。

国内有数の治安の高さを誇る都市へと変貌したのだ。

「ウフフ、本当に嬉しいわあ」

フィーナもやはり喜んでいる。

「エルファ様紹介のティータがあれば使えるなんてねえ。おかげ
で私の仕事も大助かりよ」

「ええ、私もヒュエテル様が財務を担ってくれたおかげでずいぶん楽になりました」

サラを呼んだついでにティータさんとヒュエテルさんも一緒にこのジグサールへと呼んでいた。

ティータさんはともかく、ヒュエテルさんは生まれ育ったカリギユラスから離れたくないと渋っていたが、俺は何度も出向き、いわゆる三顧の礼を尽くして説得した結果、レアの補佐兼財政担当を担ってくれた。

ヒュエテルさんは多くの孤児院と新しく建設した学校の運営を担っていたためその実務能力は折り紙つきだ。人を見抜く眼も持っているのでレアの意思が組織内に伝わりやすいよう人材を配置してくれた。

そして、ティータさんについてだが、これはフィーナの諸事情によつて急遽招いた。

俺の見立てではまだイケると考えていたのだが、妹のレアから「これ以上は危険」とシスターストップを宣告されたのでフィーナに補佐を付けることとなった。

その結果、エルファが推薦したのがティータさん。俺から見てもティータさんは気さくな人物でフィーナと通じるものがあつたからフィーナと相性は良いだろうと考えていた。

そしてその期待は裏切らず、ティータさんの活躍のおかげでフィーナは日に日に元気を取り戻していった。

「うーん、本当に嬉しいわ。近隣の村からも評価は上がっているし貴族からのやつかみも無い。こんな週休1日、1日10時間労働がずっと続けばいいのに」

……フィーナが仕事中毒になっているような気がする。

「ええ、その通りです姉さん。私も久しぶりに日付が変わる前に就寝出来ました。こんな日など一体何時以来でしょう」

フィーナどころかレアも仕事中毒になっていた。

……ごめんな、人手が余りに少なすぎたから君達2人に押し付けることになってしまった。

俺は密かに詫びる。

振り返ればジグサルへ赴任してから1年と11か月。俺は休んだ記憶が無い。

起きている間はずっと仕事をし、気が付いたらもう寝る時間だったというのがザラだった。

うーん。これはもしかすると全員が仕事中毒だったのかもしれない。

「よし、ちょうど良い機会だ。来週あたりに都市を視察しよう」

このままだと緊張の糸が切れて肝心な時に使い物にならなくなる可能性がある。

後半年後には魔物大進行によって嫌でも働かなくてはならなくなるんだ。

ここら辺りでガス抜きをしておくべきなのかもしれない。

「都市視察ですか、どのようになっていっているのでしょうかね」

「そうね、いつもは仕事だったからじっくりと見ていなかったけど、それはそれは素晴らしいに決まっているわ」

レアもフィーナも都市の視察に乗り気だ。

それはそうだろう。

何せ自分達の成果が見られるのだから。

何せそう論評する俺でさえ心が躍るのを抑えきれなかった。

待ち合わせの場所は中央役所の前。

タイトルは抜き打ち検査なのでアイラを筆頭とした部隊に守られているだけだ。もちろん有事の際にいつでも対応できるよう治安部隊も遠くに待機している。

どうも貴族という肩書には慣れない俺は一般の市民が着るような布の素材でできた簡素な服に身を包んでいる。

布のズボンにジャケットと、向こうの世界でも好んだ服装だった。

「遅れました」

その言葉と共に姿を現すのは清楚なワンピースに身を包んだ少女。ワンピースは青い髪に映えるような色合いを主とし、無駄な装飾を徹底的に排除しているのが印象的だった。

「お待たせ」

今度は対照的な派手な色合い。日傘に二重フリルのスカート、ブラウスには光物が散りばめられているので相当目立っていた。

前者が自身を引き立たせるための服装なら後者は自身すら飾り付けの一部ということだろう。

性格的に考えれば前者がレアで後者がフィーナなのだが。

「何をしているレアとフィーナ、どう考えても服が逆だろう」

「あれ？ やっぱりばれた」

「……一瞬で見抜かれるとは」

清楚な服に身を包んだフィーナが舌を出し、派手な服装のレアが瞠目する。

まあ、普段からあまり接していない人間なら判別がつかなかっただろうが、俺はもう2年弱もともにいる。いくら2人がそっくりだからと言っても間違っはすがないだろう。

「あーあ、残念。お父様でさえ見分けがつかないと評された私達が通じないなんて」

すぐに看破されたことに不満の声を上げるフィーナ。

「ええ、昔はこれで色んな人をからかっていたんですが」

レアも溜息を吐きながら呟く。

「じゃあそろそろ行くぞ」

これ以上コントに付き合うのは嫌だったので俺は先を促すと。

「ああ、ちょっと待って。いくらなんでもこのちんけな恰好じゃ恥ずかしいわ」

「ちんけですって！ フィーナの選んだだけばばしい服よりもましです」

フィーナが思わず漏らした本音に目をむくレア。

そしてそのまま姉妹喧嘩へと突入する。

「……………日が暮れる前に終わらせてくれよな」

キャンキャンと騒いでる様子を眺めながら俺はそんなことをぼやいた。

いつまでも続くと思われていた喧嘩はあっけなく幕を閉じる。

どこから現れたアイラがポツリと「何をしているのですか？」と呟くと2人は途端に硬直し、次の瞬間には仲の良さをアピールし始めたからだ。

この2人の阿吽の呼吸の良さは見ていて面白かったと付随しておこう。

「まずはどこに行く？」

俺は付き添っている両隣の姉妹に行先を聞く。ちなみにもう服は交換していた。

「そうねえ、やはり東を先に回りたいわ」

俺の右にいたフィーナがそんなことを口に出す。

「いえ、ここは西の住宅街でしょう。あそこがどうなっているのか気になります」

すると反対方向の左にいるレアがそう反論した。

俺的にはどちらでもいいが、なるべく早くこの場を去りたい。

実は俺たち、現在結構注目されている。

レアとフィーナは立ち止まって見惚れるほどの容姿を持つ美人だ。

ここら辺りはさすが貴族の女というべきか己の武器はしっかりと

磨いていた模様。

それだけでも目立つのに、2人は一卵性双生児で姿形は全く一緒なのに、服装は全く逆ということで注目度が相乗効果で上がっていた。

そして駄目押しとばかりに先ほどの喧嘩。

俺達を中心に輪が出来ていた。

「……とりあえず北からまわろう」

この注目から回避するために俺は2人の手を取り引っ張っていった。

北区画は冒険者が使うような施設を中心に置き、さらに人も冒険者が多いので必然的に緊張気味の雰囲気漂う。

「良いわねこの空気。このピリツとした感覚が交渉の時間を思い出させてくれるわ」

北区画の様子を見たフィーナがそんな印象を漏らす。外交官として戦場に身を置いてきたフィーナにとっては命がけで戦う冒険者に親近感を覚えるのであろう。

「そうですね？ 私からすればもう少し規則を守ってほしいものかと」

内政担当のレアらしい言葉だ。

確かにこの北区画は東区画を例外とし、それ以外の区画と比べて治安部隊の出動回数が多いから、それがレアにとっての悩みの種なのだろう。

「いいじゃないの、冒険者に規則を求めるなんて土台無理な話。そこから辺は大目に見てあげなきゃ」

現場重視のフィーナらしい意見だ。戦場というのは規則などなく、それどころか規則があるならまずそれを破ることが重要だからな。生き残るためにはあらゆる手段が許されんだよな、戦場は。

レアは経験していないことに口を出すのを控えたのかこれ以上反論することはなかった。

そして俺はこの北方面で最も大きい施設のキュリアス鍛冶屋へと向かう。

「あ、師匠。お久しぶりです」

鍛冶をしていた手を止めてパツと振り返るサラ。

このキュリアス鍛冶屋は最高基準の設備と30人以上の鍛冶師が常に待機している一大施設だ。

基本的にはサラの作る武器防具を周りの職人が観察し、その過程と完成品から同じ物を作るというシステムを取っている。

かなり面倒だが、サラは鍛冶以外の能力が致命的なためそうせざる

るを得ないと言つのが実情だった。

しかし、それで上手いところ回り、この施設から最先端の技術が産み出されているのだからそれで良いのだろう。

サラはこの2年で大人と呼ばれても違和感ないほど成長した。

「見て下さいこれを。ついに全ての属性を付随させることが出来ました」

俺が来るとすぐに見せたかったのだろう。

近くに飾ってあった剣を手にとって興奮を抑えきれないようにして見せる。

2年前はサラの身体能力的に無理だったが今は違うということを教えるのにこれ以上の物は無かった。

うん、この剣は俺に作れないだろう。

サラの圧倒的な才能と不断の努力があったからこそ、この輝きが生まれたのだ。

俺は感慨深げにこの剣を上に掲げる。

太陽に照らすと刀身が虹色に輝いているのでこれは間違いなく全属性を付与させていた。

「すごいな、サラは。で、この剣の名前は？」

「師匠が決めてください」

間髪入れずにそう返すサラ。

「この剣は師匠の存在なしでは姿を見せることができませんでした。師匠がいたからこそこの剣があるのです。ですから師匠が産みの親として名付けて下さい」

そう言われて悪い気がしなくてもない。俺は顎に手を当てて考える。

この剣の本来の名称はエレメンタルソードだが、それをそのまま名付けても面白味がないだろう。

1、2分ほど考えて出た名前が。

「サラの剣でいくか」

俺がそう名づけると案の定サラは慌て出したのだが、先ほど言質を取ったことを繰り返すと顔を真っ赤にしながらも渋々と頷いた。

「師匠、意地悪になりました」

最後にそう言い残していったのが印象的だった。

悪いな、サラ。

俺はこの2年間で鍛えられたんだよ。

北區画の次は住宅地のある西區画。

このご時世の住宅地というのは隙間のないくらい綺麗に並んでいるかまたは逆の蛇の道が多い無秩序な状態化かのどちらかだが。俺の構想した住宅地は一味違っていた。

「余裕というものは大事なのです。一定間隔に空き地といいますが公園を置いた結果、こんなにも外観が落ち着いて見えるのは」

レアがそんな言葉を漏らす。

これは俺の育った環境によるものだが、どうしてもきつちりと決まった住宅の違和感が拭えなかつたため、多少前例を壊してでも今の形に持って行ったというのが実情だ。

なににせよ、それが成功して良かった。

価値観が違うから受け入れられないんじゃないかと内心ハラハラしていたのは秘密だな。

「子供達が笑いながら遊んでいるわ。これがどれだけ貴重なのか国は分かっているのかしら」

公園で遊ぶ子供たち。

これは一見何でもない風に見えるが、王宮がガタガタなので民の生活にまで目を向けていない結果、大多数の民は明日の生活に不安を覚えている。

ジグサー外での状況をよく知っているフィーナの言葉に俺とレアは黙り込んでしまった。

「まあ、何にせよこの光景は守らないといけないな」

俺の呟きにレアとフィーナが同時に頷いた。

次は南区画。

南区画は都市が出資元である公共施設が主に建てられているので、雰囲気も北とはまた違った意味で硬い。

「これは駄目だわ。この堅苦しい雰囲気は私に合わない」

と、視察して数分で音を上げるフィーナ。

「うーん、もう少し従業員の数を増やすべきでしょうか。皆疲れているように見えます」

対照的にレアは眼を鋭く光らせて道行く人々を観察する。

レアはここで働く人と根本的には似通っているので苦を感じるどころか逆に生き生きしていた。

「改善点についてはヒュエテル様と相談し、予算の計上を行う必要がありますね」

何かを思いついては手に持った羊皮紙に記していくレア。

フィーナは早々にダウンして近くのベンチに寝転がり、俺は苦も
楽も感じなかったのだ。ただ漫然とレアの張り切りようとフィーナの
疲れぶりを観察していた。

うん、本当に2人は容姿だけ見ると良く似ているな。

……性格は真反対だけど。

レアの書留はまだまだかかりそうだったので俺はこの南区画で一
番立派な建物に入る。

この建物は南区画の総司令塔のような存在で、多くの公共施設が
立ち並ぶここを一手に総括する場所だった。

で、俺はこの建物の中で一番偉い人に会いに行く。

扉をくぐった先に書類仕事を行っているふくよかな体型に心当た
りがある人物は。

「ヒュエテルさん、こんにちは」

「ご存じヒュエテル「クーラー」

孤児院の元運営責任者で今はレアの片腕として財務の総指揮を任
されている人物だった。

「あら、ようこそいらっしやいユウキ男爵。どうしましたか？」

突然現れたにもかかわらず眉一つ崩すことなく笑顔で応対するヒュエテルさん。

この芸当は真似できないなあと考えた。

「王都に戻りたくはありませんか？」

前々から懸念していたことを聞いてみる。

ヒュエテルさんはカルギュラスで生まれ、カルギュラスで育ったから王都を離れることに難色を示していた。

王都を愛していたにもかかわらずここに招いたことを不快に感じていないのか知りたかった。

そういった旨を伝えるとヒュエテルさんは一瞬きよとんし、次の瞬間には声を立てて笑う。

「クスクス。ユウキ様、それは愚問というものです。もしそうならばこんな大役を引き受けていませんよ」

ヒュエテルさんはこの南区域を統括する立場なので、彼女の肩に降りかかる責任がいかに大きいのか理解している。

その意味から自分が王都に戻ることはありえないと言外に伝えていた。

「それは良かった」

ヒュエテルさんが王都に戻るつもりがないことを確認して安堵を漏らす俺。

それぐらいヒュエテルさんはこのジグサールにとってなくてはならない人材だった。

ふと、ヒュエテルさんが遠い目をし始めたのでどうしたのか聞いてみる。

「ええ、やはりこの国は一度滅びるしかないのではと考えまして」

国王が崩御してからの王都はますます荒廃の一途を辿った。

貴族からの信頼が厚いフォルター宰相と騎士団から尊敬されているキルマーク騎士団長。

現国王も未だ決まっていなく、この2派の争いが更に激しくなったので市民の生活はますます困窮していった。

ヒュエテルさん曰く、どんなに力を尽くしてもスラムは拡大し、貧困層の大量増加のため積み立てていた資金を切り崩しても間に合わないほどだったらしい。

「彼らを救えるのであれば私は喜んでこの都市を離れてユウキ様のもとで働きましょう」

三度目に訪れた際にヒュエテルさんがそう言った言葉を今でも鮮明に覚えている。

あのいつも微笑みを絶やさないヒュエテルさんが涙を湛えながら声を詰まらせる様子を見て俺は胸が痛んだ。

「まあ、いいか」

俺は頭を振って思考を止める。

過去のことを考えても今は仕方ないだろう。

全ては半年後の魔物大進行を乗り切ること。

それが終わってからだ。

「じゃあ、俺はもう行くから」

その言葉にヒュエテルさんはお辞儀をして送り出してくれた。

ジグサールで最も繁栄している区画と聞かれたら10人中10人が東区画と答えるだろう。

人の出入りが最も多い東区域に店や娯楽施設を揃えてきた結果、この東区画がジグサールの顔だと認識され、不本意だが工業都市ジグサールでなく、産業都市ジグサールと呼ばれている。

「嬉しいわあ、ここまで発展するなんて。この区画だけで毎日何百万Gというお金が動いているのよね」

この東区画に力を注いでいたのはフィーナ。

外交官として各地を飛び回っていた合間にここの手入れをしていたらしいのだが、よくもまあそんな方法でやってこれたなと頭を抱える。

「ユウキ男爵、フィーナはやりたいことならいくらでも才能と時間を惜しまない性質です」

確かにレアの言う通りだ。

心身に異常をきたす寸前にも関わらずここの監督に勤しむフィーナは鬼気迫るものがあつたと付随しておく。

「こんな区画を作る暇があれば休めばいいものを」

フィーナはご機嫌の様だが対するレアは違う。

まあ、この区画は最も治安が悪いからな。

治安部隊の出動回数も毎日2桁は越えている。

犯罪と欲望が渦巻く区画 東区画

そんな2つ名がこの東区画に付けられていた。

「ユウキ男爵、あそこへ行ってみる？」

そうフィーナが指差した場所は18禁指定の店が立ち並んでいる。

「これは……」

俺が思わず引き攣ったのも分かるだろう。

まだ童貞の俺にここへ入る勇氣はない。

色っぽいお姉さんが立っていることや入る客は全員男性であることから、これらの店が何であるのか嫌でも想像がついてしまう。

「何馬鹿なことを言っているのですか、さつさと行きますよ」

幸いにもレアが氷の様な突っ込みを放って俺の腕を引っ張ってくれたためこの会話は終わった。

少しばかりの後悔はありそうでない様に見えるけど本当はある。

……ごめん、俺も何を言っているのか分からない。

「大体見回りは終わったな」

すでに日も暮れ、夜の帳が下りてくる中、俺は2人に声を掛ける。

「どうだった？ 見た感想は」

俺がそう振ると。

「素晴らしいです、あそこまで発展させたことが今でも信じられませんが」

とレアは頬を紅潮させ。

「そうよね。あれを見るためにあそこまで頑張ったと考えると今までの苦勞が報われるわ」

フィーナもウンウンと頷く。

俺も何よりだ。

少し予定が違ったが、概ね俺が愛したジグサールの姿だ。軍隊の方もキツカやクロス、そしてユキの活躍によって大幅に増強され、魔物大進行が起こっても全くの被害を出さずに終わらせる可能性も出てきた。

「さて、明日からはまた仕事だ。2人とも気を引き締める様に」

俺の言葉に2人はしっかりと頷いてくれた。

竜騎士キツカの誕生（前書き）

首輪登場。

異論は受け付けない。

竜騎士キツカの誕生

「予想以上の展開になりましたね」

扉の外で待つていたククルスが嬉しそうにそう言って私を出迎える。

彼女、ククルスⅡフォンテジーは私が冒険者のための学校にある寮で出会い、現在は私の補佐を務めている。

「あれだけの功績を残したキツカお姉さまにあの無能な連中は無下できるわけがありません、必ず吞まざるを得ないと考えていましたが、まさかこちらの要求を全て叶えるとは思いませんでした」

私をお姉さまと呼び慕うククルスは150?に届かない小さな身長や大きな瞳、愛らしい顔つきとフワフワの栗毛から小動物を連想させるけど、中身は結構腹黒く、私以外の人間を陰で罵倒する良くも悪くも小動物と言ったところが私の認識だわ。

しかし。

「いくらあなたでもユウキを馬鹿にするのは許さないわよ」

ククルスの性格の難点は知っているものの、どうしてもこれだけは譲れない。

ユウキがいなければ今の私は存在せず、あの街でゴミを漁っていたのだから。

「う、ごめんなさいお姉さま！ 決してお姉さまの機嫌を損ねたわけじゃなく……」

先ほどまでの嬉しそうな様子はどこにやら、一転して悲しそうに目を潤ませて平伏すククルス。

「ああ、誤解しないで。私は決してあなたを無下にしたつもりはないのよ」

「しかし……」

私はそう慰めるけど、ククルスの気分は晴れない。

これではククルスが普段通りに動くことができないから私はククルスの耳元に唇を近づけていつもの言葉を囁く。

「私がどれだけあなたを必要としているのかわかるでしょう？ 夜にその証拠を見せてあげるから元氣出さない」

「は、はい！ お姉さま。楽しみにしています」

するとククルスはパツと顔を上げ、目を潤まして返事をしたわ。

……うーん。

私のせいでもあるのだけどククルスの百合具合は半端じゃないわね。

こんな性質だけど彼女はそれを補って余りある才能を秘めているから困ったものよ。

輪番制の際にもククルスがいなければ私は総監督時に何をしていいのかわからなかったでしょうね。彼女は人を動かしやすい環境を作るのが得意なのね。

「ああ、お姉さま。今日はどのような行為で私を可愛がってくれるのか。前日の首輪プレイは最高でした」

「……最初の頃の私達が今の光景を見たら卒倒するわね」

うつとりと目を細めるククルスを横目で見ながら私はククルスと出会った当初の頃を思い出しながらそんなことを呟いたわ。

私達の関係はお世辞でも良好な関係でなく、むしろ反発しあっていたのよね。

冒険者の卵として日々教育を受けるのは苦痛だったわ。

いったい何が悲しくて長時間椅子に座らなければならぬのよ。

けれどそれを耐えなければ冒険者になることはできないので、私は必死に耐えていたわ。

それだけなら良かったのだけど、相方である学年首席のククルスが腹の立つこと。

勉強ができない私を軽蔑し、いつも蔑んだ瞳で睥睨してくるのはうっとおしかったわ。

で、その辛さをユウキに手紙を書いて送ったところ、ユウキから大量の薬瓶が送られてきた。

「……ブラッディーX？」

よくわからない薬品の名称をそう読み上げる私。

これまでの座学で冒険者の心得として多数の薬品を学んだ私です。えこのような薬はなかった。

「危ないものなのかしら」

一瞬そう考えたがすぐに否定する。あのユウキが意味もなく送ってくることはありえない。必ず私にとってプラスになるものだ。

「えーと、何々？」

説明書が付随していたので私はそれを読み上げる。

『この薬は成長率を上げる効果と引き換えに副作用が心配されるが気にするな、死にはしない』

「……止めておこうかしら」

どんな副作用が起こるかわからない薬を飲むのはいくら私でも躊躇われるわ。死にはしないとんでも体に異変が現れるのだからちよつとねえ。

そこまで考えて苦笑したと同時にククルスが部屋に入ってきた。

そして薬を手を持った私を睥睨して。

「あらあらドーピング？ まあ、そこまでしないと勉強できない人間って哀れよね」

「……」

胸に参考書を抱えて勝ち誇るように言い放ったククルスを見てこのブラッディーXを使用しようと心に決めたことは言うまでもないわ。

始めは飲んでも飲まなくてもそんなに変わらなかったのだけど、日が追うごとにその効果がハッキリと見て取れた。

頭が回るといつか、複数の事柄を結びつける作業が容易になりましたのよね。

そうして私はおちこぼれから天才と呼ばれるようになっていたわ。

と、同時に私の中で燃える様な感情を抱き始めていたわ。

カリスマっていつのかしら。

その衝動のままに言動を行うと周りの人間が先生を含めて私に羨望の目を向けるようになり始めるのよね。

今振り返るとあれが副作用だったのかもしれないわね。

現在では薬なしでもカリスマを発揮できるけど、あの時は未熟だ

ったわ。

まさか学園で革命を起こすなんて思わなかった。

ありえないけど本当なのよ。

若気の至りというか今では反省しているわ。

で、その時に参謀として私の騒動を大きくしたのがククルス。

ククルスは私と接する時間が長かっただけに、忠誠を通り越して依存の域にまで入っていたわ。

落ちこぼれだった私を蔑む様子から尻尾を振るような心酔具合までの変貌を見せられると、どうしても苛めたくなくなってきちゃった。

……今も続いているけど部屋でククルスに首輪をつけて主従ごっこをやっていたのは内緒よ。

閑話休題

ククルスは勉強だけができる嫌な奴と言う印象だったけどそれは改められた。

あそこまで人を動かすのに長けているのなら鼻持ちになっても仕方ないわね。

とにかく、ククルスが参謀を務めたおかげであそこまで騒動が大きくなり、ククルスが後始末に動いたから私は退学にならず、逆に学園に私の要求のいくつかを認めさせたわ。

で、本当ならククルスとはそこで終わりだったのだけど、彼女は私についてきたわ。

首席はギルドの幹部候補生として栄誉あるにも関わらずそれを蹴ってまで私に付き従うククルス。

ククルスの意志は固く、翻意を促せないとして妥協案で学年次席がギルドの幹部候補生になったわ。

学園長が送る言葉に「キツカとククルスが在籍したこの3年間は学園で永久に語り継がれることは間違いないのです」と名指して涙ながらに語っていたのが印象的だったわね。

革命以外にも私とククルスは色々とやらかしたから仕方ないかもね。

「さて、ククルス。竜が住む場所の特定はできているのでしょうかね」

回想はここで終わり。私は頭を切り替えて次の算段について尋ねる。

「は、はいお姉さま。アイラからの情報もあってしつかりと掴んでいます」

ククルスの言葉に頷いた私はリストに載ってあった者の下へ向かったわ。

さあ、憧れの竜に乗れる日はすぐそこにあるのよ。

竜が住むとされる場所は人が踏み入れられない秘境にあると聞いていたけど、本当に前人未到の場所にあるのね。

ジグサールの周辺ほどではないにしろ、ここまで魔物が強く悪路が続く道は容易に人を奥へ進ませないわ。

「皆、ついてきてる？」

人の方向感覚を狂わせる樹海の中、一定時間ごとにそう聞いて回るんだけど誰一人として遅れる者はいない。

さすが幹部や幹部候補生とだけあって体力と精神力は並大抵なものではないわ。

「そろそろ目的地へ着きます。ですのでここら辺りで休息を取るのはどうでしょうか」

ククルスがそう進言してきたので私はそれを取り入れ、皆に休憩を言い渡したわ。

皆疲れているのだけど眼はキラキラと輝いている。

そうでしょうね。

後数時間後には竜と出会い、さらに上手くいけば竜に乗れて大空を飛びまわるのであればこれまでの苦勞など吹き飛ばしましょう。

「あの……お姉さま、大丈夫でしょうか」

けど、一人だけ例外がいるわ。

ククルスだけは当初から浮かない顔でしきりに私のことを心配してくるのよ。

だから私は安心させるようにククルスの頭をなでる。

「大丈夫よククルス、もし失敗しても私だけが犠牲になるだけだから」

「それが駄目なんです！」

ククルスは通常出さない音量で私を責めた。

「私はお姉さまが全てなんです！ お姉さまがいないのならこの世界は要らない！ お姉さまのためなら全てを敵に回す覚悟はあります」

……正直驚いたわ。

まさかあのククルスがそんなことを宣言するなんて想像できなかった。

私は嬉しく思う反面悲しくもある。

もし私がいなければククルスは今頃ギルドの幹部候補生として片手団扇な生活を送っていたわ。

しかし、薬の作用によって私に依存してしまったからククルスは私の片腕として過酷な場所に身を置かざるを得なくなってしまった。さすがの私でも多少の罪悪感を感じているのよ。

「死ねないわね」

ククルスを抱き締めながらそう心に誓う私。

おそらくククルスは私が死ぬとすぐにでも後を追ってくる。

ククルスをそうしたのは間違いなく私の責任だ。

ユウキとそしてククルスのため。

私はこの挑戦を必ず成功させなければならぬと心に決めた。

樹海が終わり、その先にあるのは渓谷だった。

「……なんとというか」

「壮観ですね」

「俺はこの光景を一生忘れないぞ」

後ろに控えている隊員のメンバーが口々にそう呟くのも理解できるわ。

普通竜というのはお目にかかれる存在でなく、あつたとしても一生に一度あるかないか。

そんな希少な存在が、目に入るだけでも20は下らない光景に出くわせばそんな感嘆が漏れても仕方ないわね。

「さて、ここからは私一人でいいわ」

竜のテリトリーに入る一歩手前で私はそう命令する。

「この内の何人かはククルスを抑えておきなさい。その他の隊員は何があつてもここで待機。そしてもし私が死ぬことになれば一目散に逃げなさい。いいわね、ククルス？」

あえて名指しでそう呼ばなければククルスは私についてきただろう。ククルスが何か抗議を上げる前に私は背中を向けて竜の住処へと踏み入れた。

案の定、私が一歩侵入すると近くにいた竜が容赦なく咆哮を上げ、火炎を吹きかけてきた。

「本当にユウキの武器防具は大したものね」

鉄すら燃やし切るブレスを身に受けながらそんな感想を漏らす。

多少熱くは感じるけどその程度よ、我慢できる範囲内だわ。

ブレスが効かないと悟った竜は大きな巨体を生かした突進を仕掛けてくる。

「まあ、この程度は予測済み」

韋駄天の魂によって強化された私には八工が止まるかのような速度に見えてしまう。十分な余裕をもって攻撃を躲した後、手に持った私の身長ほどある風神のドラゴンキラーが生み出す衝撃波を放った。

竜の皮膚は何人も通さないとされているけど、ユウキ特製のドラゴンキラーの前では無意味みたい。軽く振った程度なのに竜の背中には大きな傷跡が作られていたわ。

「下がりなさい！ あなた達では相手にならないわ」

「こつこつのは気迫がものを言うのよ。」

言葉は通じていないと思うけど私の意図は伝わったと思うわ。

そのせいか竜達の唸り声が止み、奥から老竜と呼んでも差し支えないほど皺くちやの竜が姿を現したわ。

「人間よ、我らの地に如何なる用で参った？」

何これ？ 直接頭に響いてくるのだけど。

「テレパシーと言うものじゃ。エルフなど高等生物が使う一種の意思疎通手段じゃな」

へえ、便利なものね。私にも使えないかしら。

「先ほどにも言ったであろう。テレパシーが使えるのは高等生物の

みじゃ』

ふーん、そう。まあ使えないのなら仕方ないわ、どうしてもほしいものじゃないし。

『お主は変わっておるのお。ここまで蔑んでも感情に起伏は見られん』

と、そこで老竜は私のことをまじまじと見つめてきたわ。

その年齢を重ねた瞳で見つめられると私の全てを見透かされそうで不快ね。

『ふむ……キツカというのか。そして竜を従えにここまで来たと』

私は何も話していないのによく分かったわね。

『お主が何を想い、何を考えているか。100も生きられぬ人の子の考えなど手に取るように分かる』

まあ、別にいいけど。知られたからと言って減るもんじゃないし。

「で、どうするの？ 私の要求はただ一つ、従うか否か」

『その答えはすでに分かっておろう。我らは人に頭を下げることなどない』

「ふづん、そう。なら力づくで従えさせるしかないけどそれでも良いっ。」

私は手に持ったドラゴンキラーをコツコツと叩きながらそう言い放つ。私の挑発的な物言いに他の竜達が騒ぎ始めたわ。

「まあ、あんた達が戦うのなら別にいいけど。こう言うては何だかどおそらくあなた達は私に触れることすらできずに全滅するわよ」

ユウキの作った装備を舐めないでちょうだい。大陸最高の腕前を持つユウキ。カザクラの名は伊達じゃないわよ。

『鎮まれ！ 馬鹿者！』

氣勢を上げていた若い竜達を一喝する老竜。

『確かに、お主の力量はわしらのそれを大きく超えておる。おそろくわしら全員でかかったとしても、後に残るのは我が同胞の亡骸じやろつな』

へえ、よく分かっているじゃない。

『お主が親と仰ぐユウキ。ジグサリアス。カザクラと会わせてほしい。彼の態度次第でわしらは誇りか服従かを選ぶ』

まあ、妥当な提案ね。

いくら何でも突然現れて「従え」なんて無茶な注文だから仕方ないかもしれないわ。

「お姉さま」

交渉？ を終えた私は隊員が待機している場所に引き返すとククルスが涙で顔をぐしゃぐしゃにしながら私に抱きついてきたわ。

「ちょ、ちよつとククルス？ いくら何でもこの場でこれは不味いんじゃない！？」

仮にも私とククルスは上司で見ている隊員は部下よ。部下にこんな様を見せて良い訳はないわ。

すると隊員は苦笑しながら。

「2人が禁断な関係にあるということとはもつとく知られています。つて。けど、安心してください。だからと言って自分達がキツカ隊長とククルス副隊長を軽蔑することはありません」

むしろこれがあるから自分達はあなた達についていくのです、と言われて私は何とも言えない気分になるわ。

……本当にこの人選で良かったのかしら

「良かったですね、私達は公認です」

ククルスのそのセリフに私は頭を抱えたのは言うまでもないわね。

後日

めでたく私達の部隊32人は全員竜騎兵として大空を駆け回るこ

とができたわ。

ユウキ曰く「突然竜が現れ、訳も分からず問答が開始されて驚いた。交渉の末、キツカが生きている限り我が同胞32体を貸し出すということを決着がついたぞ」とのこと。

つまり私が死ぬと自然と竜騎兵は壊滅してしまうのよね。

だったらなおさら死ねないわ。

大空を飛びながら私はそんなことを考える。

『グルル、小娘よ。長老の命で仕方なく従っているが俺はこの背中につけられた傷を忘れていないぞ』

そう唸り声を上げるのは前回私に攻撃を仕掛けてきたあの竜。血気盛んで喧嘩っ早いけどその分実力はあの竜の里で一番らしい。老竜はその竜が訳もなく無力化されたのを見て私には敵わないと見たらしい。

「分かっているわよ。だからそんなに威嚇しないのギール」

ギールというのは私が見つけた名前。これから一蓮托生なのだから名前ぐらいは必要かなと思ってつけたのよ。

ギールは嫌がっているけど満更ではないみたい。

だって名前を呼ぶと僅かに首が動くのだから。

「さあ、訓練を始めるわよ！ 全員！竜に感謝の心を忘れず気を引

き締めるように！」

手に持った竜骨の槍を天に掲げ、私はそう宣言したわ。

妖刀アイラの鞘（前書き）

2011/11/30

話を大幅変更しました。

妖刀アイラの鞘

「今日はここまで！ 皆もアイラのように精進するように！」

教官の号令と共に本日の訓練が終わる。

今日は短刀を使った内容で、得意分野である弓矢ではなかったけど難なく一番を取れた。

ここはレンジャーを育成するための専門学校で私は2年目に突入したわ。

あらゆる職種の中で最も死と隣り合わせとされているレンジャーのための学校よ。

そのせいか入学してくる生徒も浮ついた雰囲気を持つ者が少なく、どちらかというと復讐や妄念に凝り固まった子供が多い。

「……またやられているわね」

部屋に戻った私はその惨状に溜息を吐く。

私の私物は全て部屋にぶちまけられ、足の踏み場の無いほど散らかっているわ。

全く、こんな姑息な手段を使うとか本当に陰険な輩が多いこと。

そんなに私が憎たらしいのなら実力で示せばいいのに。

自室の掃除を簡単に終えた私は備え付けのベッドに横になりながらそんなことを考える。

ここに入る人間は大体協調性がゼロなので部屋は個人に与えられ、調理台や不浄場も付いていた。

「ああ、早くユウキ様のお傍に参りたい」

最近は何でも覚めてもそんなことを考える。

あのスラムから私達を引っ張り上げてくれたユウキ様。

私達のどんなに無茶なお願いにも快く叶えてくれるユウキ様。

私は親というものがどんな者なのか知らないけど、多分あんな感じなのだろう。

「少し疲れたわね」

今日の訓練は激しかったせいかな普段は感じない眠気が襲ってくる。

「10分だけ眠ろうかしら」

そう決めた私はベッドから起きて立ちあがり、壁にもたれながら目を閉じた。

こいつすると寝過ぎないで済むからちょうど良い。

起きた後は本格的に部屋の片づけでもしましょうか。

そこまで考えた私は心地よい睡魔に意識を手放した。

次の日

朝食を済ませた私は座学のため教室へと向かう。

まだ早い時間なので教室には人が少なく、まばらしかない。

「あ、アイラだ」

そう声を上げて近寄ってくるのは2位に位置付けているオーラユクリエス。

レンジャー志望には珍しく活発な性格で誰にでも声を掛ける人よ。

その気さくな性格から変人揃いであるこの学校でも人気がある。

確か前も誰かに告白されたと言っていたわね。

まあ、ユウキ様と関係ないからどうでもいいけど。

「また孤立しているね、本当に辛くない？」

彼女は何が楽しいのかいつもそうやって私に声をかけてくる。

全く、本当にうっとおしい。

「……全然」

だから私はそっけなく答え、追い払うように手を振るのだけどオーラは全然堪えない。

むしろ。

「嘘付かないでよ、あれだけ邪険にされて辛くないわけないじゃないか」

そう私を心配してくる毎日。

本当に邪魔よ。

私は天を仰ぎながらそんなことを考えていたわ。

「ウフフフフフフ」

「あ、アイラ？ 少し怖いよ」

隣のオーラが私を気味悪がるけど、どうでもいい。

何故なら次の課題が申告した人間をしばらくの間張り付くというものだからよ。

張り付く人間はもちろんユウキ様。

しばらく会えなかった分、しっかりと守らせてもらっわ。

ついでに害虫駆除も行おうかしらね。

オーラどころか教官さえも私に引いている様子を睥睨しながら私は心に決めたわ。

ユウキ様の屋敷の中で私は倒れていたわ。

「く……カハッ」

腹の底からせり上がってくる嘔吐感と闘いながら私は楽になるために体を丸める。

迂闊だった。

あのメイドの力量を見誤っていた。

ユウキ様に付き纏っているサラとかいう小娘は百歩譲って許すとしても、あのユウキ様を罵倒し責め立てると言う万死に値する言動を取るあのメイドだけは許せず、怒りのままに矢を向けた結果が今の様よ。

あのメイドにボウガンを構え、隙が出るまで張り付いた先に隙が出来たので私はその一瞬を逃さず矢を放った。

タイミングも完璧、軌道も問題無い。

私は仕留めたと感じた瞬間、あのメイドは首をこちらに向けて難なく矢を回避した。

失敗したらその場から逃げるのが基本。

それに忠実に従った私なのだけど、あのメイドにあっけなく追い詰められてしまった。

「まだまだひよっこですね」

私の鳩尾に膝を叩きこみながらそう教えることから、あのメイドは始めから狙われていたのを知っていたのでは。

そのために逃げるのが困難な場所にまで私を誘導してわざと隙を見せたのでは。

私は掌の上で転がされていた事実には気づき、二重の意味で悔いていたわ。

力が欲しい。

私は強烈に力を求めたわ。

だから私はユウキ様にどうすれば力を付けられるのか手紙を送ってみると数日後に小包が届いたわ。

その小包の中に収められていたのはブラッディーX 飲んだ人間の潜在能力を引き出す薬よ。

副作用の心配があるから異変を感じたらすぐに服用を辞めるよう

にと警告文があったけど私は気にしない。

力を得られるのなら私は全てを差し出すつもりだったわ。

その薬を飲み始めてから1ヶ月。

私は同級生から化け物と畏怖されるようになったわ。

飲み始める前も化け物じみていたけど、今では正真正銘の怪物だと。

教官ですら私に敵う者はいないまでになったわ。

でも、私の心は晴れない。

どれだけ称賛されようと畏怖されようと私の心は高鳴らない。

何故なら、私はまだ勝っていないから。

これまで何度も挑戦したけどあのメイドは私を苦もなくあしらう。

あのメイドと私の差は何なのか。

どうして敵わないのかずっと考える日々だったわ。

「アイラ、最近どうしたの？ とても怖いよ」

あなたは……確かオーラだったわね。どうでもいいから名前を忘

れかけちゃった。

あの薬を飲み始めてから酷く記憶が曖昧になってきちゃったのよね。

もちろん昨日食べた物とか授業で習った内容については逆に怖くなるくらい鮮明に覚えているのだけど、人の顔と名前が全然一致しなくなっちゃったのよ。

まあ、ユウキ様のことと全然関係ないから忘れても良い記憶なんだけどね。

そうこうしている内に授業が始まり、教官が講義を始めたわ。

すでに頭に入っている内容なので聞き流していたけど、途中で脱線した話に興味深い内容があった。

「狩人は見える罾と見えない罾の2段仕掛け行います。見える罾を回避したからといって油断していると獲物は見えない罾に絡め捕られます」

「これよ！」

突如私は電流に打たれたような天啓が閃いたわ。

これでようやくあのメイドを排除できる。

心の中から高ぶる歡喜に私は周りの奇異な視線などどうでもよかつたわ。

「こんにちは、オーラ」

あの金髪のボブカットと少し小さい瞳は確かオーラだった気がする。

「アイラ、どうしたの？ 私の部屋に」

突然現れた私に狼狽するオーラ。それはそうでしょう。

私が誰かの部屋を訪れるなんて初めてなのだから。

「少し聞きたいことがあってね……オーラ、あなたが私を苛めていた黒幕だったのでしょうか」

そう言い放つとオーラはビシリと顔を硬直させる。

「アハハ、いきなり現われて何を言っているのかな。私がアイラを苛める？ そんなわけないじゃないか」

ふうん、まだしらばっくれるのね。証拠も上がっているのに。

「オーラ。あなたのやり口は見事だった。私でさえ最初は無関係だと思っていたのよ」

オーラは直接手を下さず、間接的に情報を小出しすることで痕跡を残さず陰湿に私を責めていた。

「けど、あなたやり過ぎたわね。いくらばれにくくとも、何度も使

用すればボロが出てくるのよ」

「1つ1つだと分からなくとも、数が揃えばパターンというものが浮かび上がってくる。」

そのパターンというのは個人個人が持つ特有の匂いの様な物。

それを辿っていけば自然と真犯人へ辿り着くのよ。

「そんなに否定するのなら証人でも連れて来ましょうか？ ジェーンやキャシーが自白したわよ」

名前は確かこうであっていたはず。全く、本当に人の名前を覚える能力が低下しているわね。

そこまで問い詰めるとオーラは俯いたまま顔を上げなかったわ。

そしてそのまましばらく時間が過ぎた後、顔を上げてこれまで溜まっていたものを吐き出し始める。

「どれだけ頑張っても私はいつも2番。私は1番でいたいのに！ アイラがいるから私が1番になることを許なかったのよ！」

オーラは優等生の仮面を投げ捨ててそう叫ぶわ。

目を血走らせて恥も外聞もなく喚く姿はいつもの姿とは程遠いわね。

私はオーラの気が済むまで何も反論せず思うがまま叫ばしてやったわ。

「……私をどうするの？」

全てを吐き終え、息を切らしながら私にそう問いてくるわ。

「この事実を公表して私を除け者にする？ 別にそれでも良いわ。私は負けちゃったんだもの」

諦め、蚊の鳴く様な声でそう呟くオーラ。

ふむ、もう良い頃かしら。

「それじゃあ一つお願いを聞いてもらおうかしら」

オーラが頷いたのを確認した私はこれからの計画について話したわ。

私はオーラとともにユウキ様の屋敷へ赴いたわ。

「ね、ねえ。本当にやるの？」

オーラは初めて経験することなのか声音が震えている。

「大丈夫よ、先程も言った通りあなたは囃よ。奴の注意を引き付けてくれればそれで良いわ」

あのメイドがオーラを相手にした直後にこの矢を放てばいくら化け物でも反応できまい。

「これでようやくユウキ様に平穩を与えることが出来る。」

そう考えた私は逸る気持ちを抑えてじっとその瞬間を待ち続けたわ。

「……ねえアイラ。彼女って何者？」

「化け物よ」

私は吐き捨てる様にそう言い放つ。

「アハハ、化け物が誰かを化け物と呼ぶかあ」

オーラは何が楽しいのか廊下に転がったまま笑い始めたわ。

襲撃は見事に失敗したわね。

一応弁護しておくけどオーラは相当な体術と短剣の使い手よ。

ブラッディーXを飲み始めた私でもオーラと組み手を行えば結構手こずらさせられるわね。

そして私はあれから弓矢の技量も磨き、獣にすら気取られないほど殺気を抑えることが出来るようになったわ。

なのに完敗。

不意を突いたにも関わらずオーラは一瞬で無力化され、その数分後には私も廊下に伏していたわ。

私は痛む体に鞭を打ち、壁にすがりながらも何とか立ち上がる。

「……オーラ、もう良いわ。私を虐めたことは金輪際口にしないから。と、いうより私はこれから先あなたの前に顔を出さない」

「どういうこと？」

「決まっているでしょう、私はもう学校を辞める。これ以上あそこで学ぶべきことはないわ」

知識も技能も吸収した。

教官も全て倒した。

ならもう学校にいる必要はどこにもない。

「……それでどうするの？」

「奴に弟子入りする」

もう決定している。

おそらく学校で学べる技量では奴に敵わない。

そうならば学校に通う意味はないに決まっているじゃない。

「おめでどうオーラ、これであなたは一番になれるわ。精々楽しい

学園ライフを送っていないさい」

これ以上話すことはない。

だから私はオーラに背を向けて奴を探し始めたのだけど。

「……何をしているの？」

オーラは私の袖を引っ張って行かせないようにする。

「何か言いたいことでもあるの」

うつとおしいと感じながらも私は真意を問いただすと、オーラは口を開けてポツリポツリと語り始めたわ。

「私も連れて行って」

「は？」

突然そんなことを言いだしたオーラを私はマジマジと見つめる中、オーラは続ける。

「私は井の中の蛙だということを思い知ったわ。あんた達の様な存在を知っちゃったら学校で一番になっても満足できない。いえ、むしろよけい惨めになるだけよ」

オーラの決意は固いようです。

何が何でもついていくという気概が満ち溢れています。

「はあ、分かったわ。そんなに言うなら私も手助けしてあげる」

私はため息をついてオーラの願いを聞くことにしました。

「ん？ どういうこと？」

オーラが首を傾げたので私はブラッディーXについて話し始めました。

「なるほど、あれがあつたからアイラは常軌を逸し始めたのね」

あれを境に私が変化したのを感じ取っていたのでしよう。

「それを飲めば私もアイラ並みの強さを手に入れることができるのかしら」

「その可能性は限りなく高いけどお勧めしないわ。何せ強烈な副作用があるのよ。例えば私は感情が希薄になったわ。オーラもそう、それを飲めば心身に何らかの異変が現れる。もしかすると別人格に変貌してしまうかもしれないわ」

「構わないわ」

オーラは躊躇もなく答える。

「一番になれるのなら、強くなれるのならそれぐらい構わないわ」

オーラは瞳に決意の光を浮かべている様子から叛意を促すことをもう不可能でしょう。

私は手を差し伸べました。

「改めてよろしく、オーラ＝ユクエリス」

するとオーラも笑顔で手に取って握り返してきます。

「こちらこそよろしく、アイラ＝カザクラ」

お互い手に力を込めた瞬間、私は久しぶりに心から笑いが込み上げました。

「また私の侵入を許しました。一体あなた達は何の訓練を受けてきたのですか？」

私は定例会議の警備担当をしている者達を弾劾します。

彼らは申し訳なさそうに恐縮していますがそれで済まされると思っ
ているのでしょうか。もし万が一が起きれば彼らは生かしておけ
ませんよ。

もう少し彼らにそのことを理解させようと思いつ、さらに責めよう
と口を開きましたが。

「もうそれくらいにしておけば、アイラ」

「オーラ……」

呆れ調子のオーラがそう言いながら私の隣に立ちました。

諜報部隊副主任 オーラ ユクエリス

装備

武器 デモンズダガー 5%の確率で即死

防具 闇夜のマント 闇を生み出す

頭 影の帽子 光を吸収する

足 盗賊の靴 AGL上昇 足音を消す

装飾品 梟の瞳 隠れている敵を見つける

ステータス

小剣 67

素手 66

隠密 79

魅了 72

支配 67

2人揃って学校を辞めた私達はそのままエルファ様に弟子入りを志願しました。

エルファ様も何か思う所があったのかユウキ様に私達のことを知らされないことを条件に私達を受け入れ、エルファ様の手足として動いていました。

で、オーラにも私が飲んだブラッディXを施したところ、彼女は私と同じく技能が飛躍的に増大しましたが代償として。

「何かもう慣れたけど人を見上げるってしんどいわ」

オーラ曰く「私が8歳の頃とそっくりね」と言う通り幼児へと体

が退行してしまいました。しかし、体は幼女にも拘らず体力も技能も成人のそれと変わらないことからオーラ自身はあまり気にしていないようです。

……本当にブラッディXは摩訶不思議な薬です。

で、そのオーラが腰に手をを当てて私に説教を始めました。

「あなたはもう少し自分の力量というものを鑑みなさい。あなたが本気を出せば侵入を防げるのはエルファ様か私しかいないわ」

確かにその通りです、私を止めた者は今の所オーラしかいません。

「ほら、あなた達は行っても良いわよ。各自反省をしておくように」

オーラは私が一言も話さない内に勝手に解散を宣言しました。

「相変わらずユウキ男爵一筋ね」

残るのは私とオーラの2人だけになった時、オーラが感嘆とも呆れとも似付かない声を出します。

「皆がアイラと同じなわけないんだからもう少し加減しなさい」

「慰めるのはオーラの役目です。適当な所になれば止めてくれるから私は加減しなくてもいいでしょう」

「まあ、その通りだけど」

私の言葉にオーラは苦笑してしまいました。

信じられないかもしれませんがオーラは私の一番の理解者となりました。

エルファ様の下で共に過ごした仲故なのでしょうが、オーラと私はお互いの好みから行動、昨日何をしていたかまで全てを知っています。

余談ですがオーラと深い仲になって以降物忘れが止まり、今では感情を消したい時に消せるようになるまでコントロールすることが出来るようになりました。

具体的にはユウキ様の単語が出てきても感情を消すことによって相手の挑発に乗らなくなりました。

……オーラとの組み手ではそこを攻められて負け続けでしたからね。

「ユウキ男爵が大切なのは分かるけど、そこをつかれて熱くなるようじゃ駄目よ」

と、何度もオーラから注意されました。

「彼らの元へ行くのですか」

オーラはしばらく私と談笑した後踵を返します。

「ええ、アイラの折檻が原因で彼らが委縮してもらっては困るからね。彼らはあるでも将来有望の人材よ、フォローは必要でしょ？」

オーラはそう言って手を振りながらその場を後にしました。

「さて、私は情報確認でも行いましょうか」

残された私はこの国に散らばらせた多くの間諜が集めてきた情報を確認しに部屋へ向かいました。

妖刀アイラの鞘（後書き）

苛めっ子と苛められっ子の関係から親友へ。

その辺りをテーマとして書いたのですが、締まらない内容になりました。

うーん、何がいけないのかなあ。

魔女と呼ばれたユキ（前書き）

今回は短めです。

いや、キツカとアイラが濃すぎたと言っべきか……

魔女と呼ばれたユキ

魔導騎士団団長 ユキィカザクラ

それが今の私の肩書。

キツカ率いる竜騎兵軍団には敵わないけど、それでも戦の花形として持て囃される存在だ。

今振り返れば本当に色々なことがあったと思う。

あの時、私がユウキからパンを奪わなければ今頃はただのユキとして過ごしていたのかもしれない。

「どうしたんだい？ 団長」

どうやら深く考え事をしていたみたい。

魔法学園時代からの知り合いであるミアィキャストウィッチィヴアルレシアが私の目を覗き込んで心配そうに言った。

彼女はミドルネームがある通り貴族で由緒正しいヴァルレシア侯爵の長女だ。

身長ははすらりと長く、ボーイッシュな顔立ちで金色の髪を肩まで切り揃えている。気さくで活動的なのはキツカと一緒だけど、ミアはその動作の一つ一つに気品が溢れているのが大きな違い。

何をしても絵になるというのはミアのみが持つ才能だろう。

「気分が悪くなったのなら言ってくれよ、ボクはユキが心配なんだから」

その男勝りな口調なのは親が自分を男のように育てた結果だと言っていたつけ。

学園時代からその口調と容姿が相まって王子様と呼ばれ、男子よりも女子からの告白が多いという難儀な人だった。ミアは「可愛い物を愛するのは好きだけど百合百合しい雰囲気はねえ……」とよく苦笑していたのを覚えている。

そんなに嫌なら態度と口調を改めればいいのに思っているのだけど、ミアは幼少の頃からこれで通っていたからつい出してしまうらしい。

閑話休題

私は魔法学園の生徒会長だったけど、それはミアの尽力が大きい。彼女が私を全面的に支援したから私は生徒会長になれた。

で、それだけならよかったのだけど、何故かミアも副会長に立候補していた。

「やっぱりユキ一人にそんな重責を背負わせるわけにはいかないからね」

ミアはそう嘯いていたけど、実際は私と一緒にいたかったんでしょ。

私を生徒会長に推薦したのは他ならぬミアだし。

でもまあ、本当によく生徒会長として1年間勤められたと思う。

選民主義に凝り固まった魔法学園において史上初の市民での生徒会長になった私は、それはもう酷い仕打ちを受けた。

苦情や弾劾は当たり前。酷い時には私の命令に従えないと学園事業をボイコットされかかっていた。

生徒会長を辞めたかったけど、今度は市民出の教師陣から辞めないでくれと懇願される始末。

八方ふさがりになったこの状況をどう打開すればいいのかわからなかった私はユウキに手紙を送ると、後日に大量の薬瓶が送られてきた。

「……ブラッディーX？」

聞いたことのない薬品だ。色は真っ黒で毒々しく、私の本能がそれは危険だと訴えていたと思う。

だつて説明文を見ると。

『これを飲むと潜在能力を解き放つ代わりに人間が終わっていく副作用があるから気を付けるように』

……人間が終わるって何？ 相当碌でもない未来しか思い浮かばない。

「……けど、これしかない」

今のままだと私は貴族からの非難と生徒会長としての責任から壊れてしまう。

全てを失うくらいなら人間を失った方がまだ活路があるのかもしれない。

そう考えた私は覚悟を決めてそれを口に含んだ。

「ユキ、ボクはたまに君がとんでもなく恐ろしく見えるよ」

冷や汗交じりにそう呟くのは生徒会室で仕事をしているミア。会計や書記等の3人はまだ来ていない。

「それはボクも彼らがうつとおしいと感じていたさ。いなくなっても構わないとまで思っていた。けど、実際に退学させることはないんじゃない？」

「……私から逃げる？」

小首を傾げてそう尋ねるとミアは首をぶんぶんと振る。

「いや、ここまで来たらもう引き返せない。リーンヤルナ、イータと同じ様に最後まで共にいるよ……何故なら」

苦笑しながらミアは続けて。

「『魔女』に意見を述べられる立場を捨てようなんて思わないね」

魔女　そう、私はそう呼ばれていた。

あの薬を飲んで最も変わった点といえば悪知恵が回るようになったことだろう。

人を眺めているだけで、私はその人を貶めるにはどのようなことをすればいいのかを瞬間的に閃くようになった。

私は生徒会長としての権限とミアの人脈をフルに使い、敵対する生徒を社会的に抹殺していった。

ある者は原因不明の暴行に会い、ある者は女子の下着を盗んだとして学園を去っていった数は30人に上り、その中には教師も含まれている。

学園の皆はそれが私の謀略によるものだということが周知の事実。

しかし、そこまで畏怖されているにも拘らず私の評判はすこぶる良い。

それはそのはずで追放した生徒は学園の問題児ばかりであり、彼らがいなくなったことで学園内に類を見ないくらい平和な時が訪れているからだ。

彼らが消える前に必ず生徒会役員からの忠告があるのも大きい。

生徒会役員に逆らわなければ魔女に目を付けられることはない。

それが魔法学園全生徒の共通意見だった。

そんなわけで私は見事1年間生徒会長を務め上げることができた。

私の代の生徒会交代式は他と違って惜別の他に安堵が加わって教師を含む全員が泣いていたっけ。

……まあ、やりすぎてしまったのは認めるしかない。

で、そこでミアと別れたのだけど、すぐに出会うことになる。

ユウキが創設する魔道騎士団の団員を集めてほしいと言われ、私はまずミアのもとへ向かった。

キツカ達以外で最も長く接していたのはミアだったので彼女以外の副団長はいないとまで考えている。

案の定、ミアは2つ返事でOKを貰った。

けど、ここで問題が一つ。

ミアはヴァルレシア侯爵の跡取りなのでおいそれと抜けるわけにはいかない。

事実ヴァルレシア家の当主は首を縦に振らなかった。

「どうする、ユキ？」

さすがのミアも不安げな様子で私に尋ねるけど、私はなぜ無理だと感じているのかわからなかった。

私は魔女と畏れられた謀略の使い手。

綺麗な身の生徒ならともかく叩けば埃が出る貴族に要求を呑ませることは造作もない。

私は早速行動に移すためアイラに連絡を取った。

ヴァルレシア家の当主が快くミアを送り出したので、私は次に誰を誘うべきかミアと相談する。

「うーん、そうだなあ……生徒会役員の3人は加えるとして、他は調べてみるから少し時間をくれないか？」

火急の用事じゃないので急ぐ必要はどこにもないから頷くことにする。

「うん、ありがとう。シマール国最強の魔道騎士団の創設のために人材を選びすぐってみるよ。だから交渉はユキに任せる」

名門出かつ社交的な性格のミアは私と比べ物にならないくらい交友関係が広いのでこういう時は頼りになる。

軍の花形である魔導騎士団。

ユウキの期待に応えるためにも私は頑張らないといけないなと心に決めた。

後日 魔導騎士団総数50名をユウキの前に連れて行くことが
できたわ。

魔女と呼ばれたユキ（後書き）

次はクロス。

ブラッディ Xの副作用はどうしよう？

クロス将軍（前書き）

とりあえず判明したことは自分に恋話など無理ということでした。

クロス将軍

「全体！ 整列！」

僕の隣に控えている副官がそう激励を飛ばすと眼前に控えていた3万に上る兵が一糸乱れずに統率を取る。

今は合同練習の最中。

全兵のうち3分の1を動員して行われるこの訓練は文官は勿論のことキツカやユキ、アイラやユウキも見に来るので決して無様な真似を見せることは出来なかった。

「右へ習え！」

ザツザと足音を鳴らして全員が右を向く。

「各隊に分かれよ！」

その指示を受けてからわずか5分後には綺麗な長方形が10個出来ていた。

「魚鱗の陣！」

次から次へと出される命令に兵達は混乱することもなく所定の位置へ着いていく。100人や200人ならともかく3万の兵が生き物の如く動くというのは生半なことでは出来ないよ。

これはユウキが取り入れた公共事業による全体訓練の成果である

し、もう一つは。

「さすがレオナ教官ですね」

僕は右に控えている副官に向かって小声で称賛した。

するとレオナ教官は唇を僅かに綻ばせ。

「いえ。私は命令しただけであり、兵がここまで動いてくれるのはクロス将軍の人望です」

と謙遜するのは元僕の教官で今は副官の女性　レオナ＝カリスリン。

レオナ教官はどんな暑い日でも礼服に身を包んでいることで有名だ。

とある事情で右目を失って眼帯をし、左目はその分鋭い光を放っている。年は20代前半で身長は180cmを超えるであろう長身と腰まで伸びた金髪ストリート。人形のような整った顔立ち、そしてレオナ教官の最大の特徴である制服越しから盛り上がる胸があるせいでどんなに罵倒されようと僕他の候補生は喜んでいたのを覚えてる。

ちなみに僕の身長は2mを超えている。

「レオナ教官、僕と話す時の敬語は何かありませんか？　肌がむず痒く感じます」

「何を言う。上司であるクロス将軍に普段通りの言動をとれば軍の

規律に違反するだろう」

レオナ教官は大真面目でそう反論する。

「それに私のことを教官と呼ぶのは止める。私はクロス将軍の部下なのだからレオナと呼び捨てにするのだ」

「やっぱり厳しいなあ」

変わらないレオナ教官に僕は苦笑せざるを得なかった。

「私の目に狂いはなかった」

残った左目に感慨の色を浮かべながらそんなことを呟くレオナ教官。

すでに訓練が終わり、ユウキ達は引き揚げている。

隊長クラスとの反省会も終わって、この会議室には僕とレオナ教官しかいなかった。

「始めてクロス将軍を見た時からお前は将来大物になると直感し、例外的に幹部候補生の訓練を受けさせたことは正しかったと思う」

「僕はあれで何度も死にかけましたけどね」

あれは辛かった。僕は同年代と比べて体や力が大きいとはいえまだ13歳。

そんな僕が20歳以上の正騎士が受ける訓練に参加すること自体が無謀だった。

それだけでも辛いのにレオナ教官は僕にだけ厳しく当たる始末。

何回腕立て伏せをしたのかも覚えていないや。

ユウキから貰ったブラッディXが無ければ多分死んでいたと思う。

あの薬を飲むと血が沸騰したような高揚感と共に力が溢れてくる代わりに少し思い切りの良い性格になるんだよね。

「おかげで少し性格が変わりましたよ」

「フッフ、許せ。しかし、あの地獄を超えたからこそ今のお前がある。お前が率いるジグサール騎士団はシマール国で最強だ、近隣諸国と比べてもお前の騎士団には敵わない。これは王国騎士団元第二部隊の隊長だった私が保証する」

レオナ教官はその天才的な用兵術でエリート部隊である王国騎士団の部隊長を務めていた。彼女の指揮する部隊は精鋭と呼ばれ、どんな困難な状況でも必ず任務を達成することで有名だった。

「まあ、そんな輝かしい経歴を持つ私でもヘマはするものだ」

レオナ教官はそう言って影を落としたので僕は慌ててフォローする。

「そんなに落ち込まないで下さい！ あれは国が悪いのです。ユリカール子爵の反乱を鎮めるために1000の兵を連れ添ったそうですが相手は倍の2000で、さらに城に立て籠もられている状況で勝てと言つのは無謀です」

信念を通すレオナ教官は兵達に親しまれ、騎士団の中で最も人気があつたためそれを妬んだキルマーク騎士団長が仕掛けたのがその謀略だ。

結果は当然の如く失敗する。

多数の兵の命を散らし、国の名誉を落としたとしてレオナ教官は幹部候補生のお目付け役に左遷された。

「ああ、ありがとう。けどな、失敗したのは事実なんだよ。どれだけ言い繕つても死んだ部下は帰つてこないんだ」

レオナ教官はそう言つて右目の眼帯に手を添える。

その傷はユリカール子爵の鎮圧に失敗し、撤退している際に飛んできた流れ矢によってつけられたものらしい。

任務に失敗し、部下を失い、さらに自身の目も失つて追い打ちとばかりに名誉も失つたレオナ教官がどんなことを考えているのか僕には分らない。

「教官、僕はキルマーク騎士団長が許せない」

だからこそ、僕はレオナ教官をこの立場に追いやったキルマーク騎士団長を憎む。

「もし戦うことがあれば刺し違えても奴を葬り去ります」

それしか僕には出来ない。

だからそう力強く宣言することでレオナ教官を元気づけようとした。

するとレオナ教官は少し目を瞬いて僕を見、次にゆっくりと笑みの形を作る。

「その言葉は嬉しいが私はお前に死んでほしくないな。どこの世界に愛する人間の屍を見たいと思う？」

「いや、それはまあ……」

突然愛する人間とか言われて戸惑っても仕方ないと僕は思う。

そう慌てふためいている隙にレオナ教官は僕の隣まで近寄り、もたれかかってきた。フワリとしたレオナ教官の匂いが鼻腔に広がる。

「きよ、教官!？」

「今は教官じゃない、レオナだ。クロスの恋人としてのレオナだ」

「そ、そうか……ね、レオナ」

僕がたどたどしくそう呼ぶとレオナ教官はクスクスと肩を揺らし

「何だ、今の君はヘタレモードだな。剣を持った際に見せるあの君はどこにいる？」

その言葉に僕の顔が引き攣る。

ブラッディーXの副作用というかあれを飲んだおかげで力は付いたものの剣を握ると少しだけ気が大きくなってしまっただ。

「私に告白して振られた際、野獣のように無理矢理私を求めたあのクロスはどこに行ったのかな？」

「きよ、教官!？」

黒歴史を掘り起こされて僕は慌てる。

いつの間にかレオナ教官に恋心を抱き、意を決して告白したのは良いけどにべもなく振られた時のこと。

僕は剣を握っていないにも拘らず狂暴になってしまい、衝動のままにレオナ教官を求めてしまった過去がある。

「今振り返るとお前は殺されても文句は言えなかったな」

「それは、まあその通りです」

上司に恋心を抱き、それどころか無理矢理求めると言うのは極刑になってもおかしくない。

「まあ過ぎたことだ。キツカケはあれだったが、今はお互い恋人同士。終わり良ければ全て良しだ」

そう言ってカラリと笑うレオナ教官は本当に器が大きいと思う。

僕じゃ釣り合わないと思ってしまっただ。

そんなことを考えていると急に僕の唇が塞がれる。

驚く僕の眼前にレオナ教官の瞳が全く揺れずに僕を見据えていた。

しばらくの間、そのままの時間が過ぎる。

ようやく唇を離れたレオナ教官は普段とは違う震える口調で語りかけてきた。

「なあクロス。私は怖いんだよ。部下も名誉も何もかも失った私が今ではお前が傍にいて、さらに最高の騎士団を率いている事実が怖いんだよ。こんな幸せがあつて良いのか、いつ失ってしまうのかを考えると怖くて仕方ないんだよ」

レオナ教官から漏れる弱音を聞いて僕は胸が締め付けられる思いがする。

レオナ教官も人の子だ。

人なのだから完璧なわけがない。

「……ごめんね」

だからポツリと僕は謝罪を口にする。

「僕はレオナのことを疑っていた。レオナの器があまりに大きいら釣り合わないと思っていた。本当にごめん」

僕は精一杯謝罪したつもりなのだが、レオナ教官は僕の様子を見て噴き出した。

「ハハハ、何を言ってるんだ。私よりお前の方が器が大きいぞ……全く、本当に今のお前はヘタレモードだな。あの野獣モードのお前はどこに行った？ 私はあの本能丸出しで求めるあっちの方が好みだぞ」

「き、教官!？」

今までの雰囲気はどこにやら。急にレオナ教官は元気を取り戻してそんなことを言い始める。

「教官でないレオナだ。安心しろ、冗談だ。私は今のお前も好きだぞ」

「……本当に教官は冗談が多いですね。あの鬼教官とどっちが本当なんですか？」

「どちらかという私はこちらの性格だ、出来れば1日中冗談を言っただけで済ませたいくらいだ……しかし」

そう言ってカラカラと笑っていたレオナ教官だけど急に笑いを引締め、代わりに妖艶な雰囲気を醸し始める。

「ここから先は冗談でないぞ」

レオナ教官は自分の軍服に手を掛けてゆっくりと脱ぎ始めた。

クロス将軍（後書き）

意外ですがクロスはユウキより大分進んでいました。

まあ、ユウキがそんなことを知っても「あ、そう。おめでとう」「済ますと思います」が。

とある日の葛藤

「うーん……」

俺は机の上に作成した薬をどうしようか頭を捻る。

サラはいなく、エルファもどこかを掃除しているためこの部屋には俺1人だ。

「使うか使わないか、それが問題だ」

俺をこんなに悩ましているのは目の前に置いたブラッディXについてだった。

この薬は本来課金アイテムであり実際にお金を払うことによって得られる類のものである。

効能はこれを飲むとステータスが上がり易くなるというもの。

俺は金が無かったので使用できなかったが、サラリーマンなどお金はあるけど時間がないプレイヤーがよく使用している代物だった。

もしこの薬を自在に作れるようになればどうなるのか。

確実にこのゲームの支配者になれる。

そんな魅力に憑りつかれた1人のプレイヤーが違法ツールを使用してこの薬を自在に生み出せるようにした。

管理者側がそれを規制するまでの間、短時間で最強クラスのプレイヤーが大量発生したのは言うまでもない。

プレイヤー時代ではもうこの薬は作れないが、この世界だどうなるのか。

幸か不幸か俺はその違法ツールを知っていたので、調合レベルが規定以上に達したから違法ツールに書いてあった素材と手順から違法ブラッディーXを作ってみた。

「作れることは作れるんだな」

出来た代物は色も味も全てブラッディーXそのものだ。

だからこれはブラッディーXと判断していいのだが。

「正直な話、怖くて使えない」

ゲームの世界で禁止されたものをこの世界で使うとどうなるのか予想がつかない。

そんなに不安なら使わなければいいじゃないかと思うのだが、捨てるには未練がありすぎた。

「どうしようか……」

堂々巡りである。

「主、お手紙です」

そんなことを考えているとエルファさんが現れ、ペーパーナイフで封を切つて俺に渡して退出する。

「ふむふむ……」

手紙の内容はキツカからだつた。

勉強が大変でそれに相方も嫌な奴、本当に苦しいとの旨が書いてあつた。

「そうか、困っているのだな」

椅子にもたれてどうすればいいのか思案していた俺は机に置いてあつた違法ブラッディーXが目に入る。

「ちょうど良いかな」

俺はニヤリと笑う。

この薬をキツカ達に試してみよう。

たぶん大丈夫だ、死にはしない。

そう考えた俺は早速この薬を大量に作つてキツカに送つた。

「さてさて……どうなることやら」

後日談としてキツカの他のアイラ、ユキそしてクロスにも同じように送って効果を確かめた結果、めでたくお蔵入りとなった。

「やはり違法な代物は駄目なのだな」

俺は一つ学んだ。

とある日の高藤（後書き）

これで間章は終わりです。
ありがとうございました。

急転直下

『良いものだな』

俺を背に乗せているイズルガルドはジグサールの上空を飛びながらそんな感想を漏らす。

この老竜はキツカが竜騎兵の結成のために訪れた溪谷の長で、その時に俺と彼が交渉していくつかの竜を貸してもらったのだが、老竜は俺の何が気に入ったのか俺が生きている限りは共にいると言い始めた。

なのでその老竜をイズルガルドと名付け、普段は南区画の隅にその巨体を置いている。

「そうやって貰えると嬉しい」

眼前に広がるのは険しい山脈と活気ある豊かな街並み。

ここに赴任してから一年半 荒れ果てていた都市は秩序を取り戻し、民も魔物に脅えるようなことはなくなった。

「イズルガルド、悠久の時を生きるお前からすればこの発展はどう思う?」

何千年も生きていたイズルガルドにとっては人の営みなど一瞬にすぎないだろう。

だが、それでも俺はこの発展は繰り返すものなのか、それとも俺

だからこそできたのかが知りたかった。

するとイズルガルドはしばし沈黙した後重々しく意志を伝えてきた。

『わしはお主が何をなすのかに興味があった。そして、お主はその期待を裏切っておらん』

「……ありがとう」

詰まるところこの発展は俺だからこそ出来たと言っている。

それが嬉しくて俺は自然にそう感謝を述べることが出来た。

「イズルガルド、もう少し高度を上げてほしい」

俺がそう頼み込むとイズルガルドは承知したとばかりに羽を羽ばたかせ、それはジグサールが小指ほどの大きさになるまで続いた。

ここまで高くなると寒いと感じるが、それでも俺は見てみたい光景があった。

ジグサールの周辺は荒野や山脈が広がっているのだが、それ以東は不毛な地帯が続く『無限砂漠』。

そこはジグサール周辺の魔物など比べ物にならないほど強大な魔物が出没する地域である。プレイヤー時代においてはジグサールが東の果てにある街となっていたので、あの無限砂漠から脅威がやってくるなど考えなくて良いだろう。魔物大侵攻も東からではない。

続いて西に見えるはシマール国の王都　カリギュラス。

シマール国は平坦な土地が多い国なので馬や人などの交通手段が発達していた。また、温暖な地域に加え、肥沃な大地が広がっているためユーカリ大陸の中で最も農作物が豊富な国である。

が、今はその土地に胡坐をかいて財産を潰し合っているのが現状だ。国の荒廃はますます進行し、国民の心は離れていつているにも拘らず王宮は目を向けようともしない。

もはや末期症状なのではと俺は思う。

北西に目を向けるとそこは険しい山脈が広がり、最も自然の驚異を受ける地域一帯を治めるリーザリオ帝国。

あの国はシマール国と違い、気温も低くて土地が痩せ細っているので毎年のように餓死者や凍死者が出る国だ。常識的に考えるとそんな国などとうに滅びてもいいはずなのだが、土地に恵まれない分人が強い。

リーザリオ帝国の農民に至るまで兵士としての資質があり、とくに帝国が管理している傭兵団は大陸最強と呼び声が高い。そのため武力に物を言わせて何度もシマール国に侵攻してくるのだが、ワイマール砦の堅固さによって攻めあぐね、そして持久戦を迫れて何度も撤退している。

噂によると今年は飢饉だったそうだ。

シマール国は対して影響はなく、小麦の値段が1割ほど上がった

程度だったがリーザリオ帝国は死活問題だろう。このままだと例年より冬を越せない民が増えるのは必死なので、何かしら仕掛けてくるというのが俺の見立てだ。

最後に南西。

バルティア皇国は川が多数存在し、移動手段も船が主となっている。

聞いたところによると皇都とされている水上都市ファルケニアは雨季の時期になると道が水没し、完全に船のみの移動となるらしい。交通の段は極めて悪いが、攻める方にとってはこれほど厄介なものはない。

シマール国は陸地続きゆえに水軍というのが発達していない。逆にバルティア皇国の民は幼少の頃から水とともにあるため船での戦いはお手の物だ。

そのためシマール国は何度もバルティア皇国の侵攻に失敗している。

今のところは考えなくてもよいが、最近バルティア皇国は軍事活動が活発になってきているという報告があるため、気を抜かない方が良いだろう。

シマール国よりさらに西側には多くの国が存在してあるが、これら三国に比べると見劣りする。

時たま侵攻してくる場合もあるのだが、にべもなく撃退されてい

るのが現状だ。

「イズルガルド、シマール国が潰れるのには後何年かかる？」

シマール国が亡くなるのはもはや時間の問題。

俺が困るのは魔物大侵攻前に他国が攻め入ってくるからだ。

もちろん勝つことは出来るのだが損耗した状態で魔物大侵攻に突入すれば多大な被害が出る。

それが俺の中での懸念材料だった。

するとイズルガルドは重々しい様子で。

『2年』

と答える。

「……そうか」

それなら大丈夫だな。

『ユウキよ、なぜ安心するのだ？』

「簡単だ、あと半年もしないうちにこのユーカリア大陸にある国の大部分が滅びるからだ」

俺がこの世界に飛ばされて戸惑ったのはプレイヤーとしての知識が全然生かせられないことだった。

存在するはずのない国が多数存在し、出没する魔物も弱すぎる。

これはおそらく魔物大侵攻によって大陸地図が大幅に変わった結果だと考えている。

『ふむ、そんなことが起こるのか』

残念なことにもこの事実は誰も信じてくれない。

俺は孤独だが、歩みを止めるわけにはいかないという思いがあった。

「まあ、後半年だ。その時に俺は世紀の笑い者になるかそれとも預言者になるか決まる」

できれば後者であってほしいと願う俺は救いようのない阿呆なのだろうな。

いつも通りフィーナとレアの3人で仕事をしていた俺達なのだが、緊急の連絡があるとかで応接室にそろっていた。

「エルファ様が直接いらっしやるなんて始めてですね」

レアの言うとおり、エルファは普段カリギュラスに滞在しているためここに来る用件などない。それに加えてアポも取らずに来たということは重大なことが発生したのだろう。

椅子に座って数分が立つと扉が開き、そこからエルファが入室してくる。

「お久しぶりです、主」

エルファは普段と変わりなく平坦な様子で頭を下げてそう挨拶した。

「ああ、久しぶり。どうした？」

エルファがここに来た事はおそらく始めてではないのか。

サラを呼び寄せたからエルファも来るのかと考えていたがその予想は外れ、まだ王都に残って人材を俺の所へ集めていた。

「調子はどうですか？」

「ああ、上々だ」

そう言って当たり障りのない言葉を少し交わす俺とエルファ。

「ええと、主にお伝えしたいことが」

あの冷徹なエルファが珍しく戸惑っているのを見て俺は警戒心を強める。

「百聞は一見に如かずと言います、このお方を見て下さい」

その言葉とともに遅れて入室したのは一人の少女。

おそらく俺と同じ年代だろう。役所の中から現れたのは腰まである見事な銀色の髪を持っている。儂げな印象を醸し出し、純白と言っても差し支えないほど白い肌と相まって次の瞬間には折れてしまふいそうな雰囲気だった。

「ひっ！」

俺には誰だから分からなかったが、フィーナは即座に理解したよ
うだ。

口に手を当てて視線も落ち着かなくなっている。

「ま、まさかこのお方は」

レアも目に見えて狼狽する。

「えーと……紹介をお願いしていいか」

俺はこの中でただ一人状況を理解していないので助け船を求め

ると鮮やかな銀色の髪を持つ少女はツカツカとレアの前を通り
過ぎて俺の前まで歩き、目を覗きこんだ。

その底が知れない銀色の瞳で探るように俺をしげしげと観察して
くる。

そのまま俺と少女は硬直していたが、先に動いたのは少女の方だ
った。

視線を外して後ろへ2、3歩下がる。

「へえ、私を見ても動揺の欠片も無い。さすがエルファの好いた男
だわ、こんな反応を取った人なんて始めて見た」

アハハ、と何がおかしいのか高い声で笑い始める。

声を上げると一転。先程の儂い印象が霧散し、代わりに狂気その
ものの雰囲気彼女から溢れ出してきた。

「エルファ、レア、フィーナ。誰でも良いから彼女が誰なのか教え
てくれ」

「このお方は」

「いいわ、エルファ。私が名乗るから。でもその前に面白い情報を
あなたに伝えるわ」

口を開きかけたエルファを制した少女は何が面白いのか畏まって
胸に手を当てて話し始めた。

「『ユウキ』ジグサリアス』カザクラ男爵。貴殿は第1王女を暗殺
した咎として申し開きの場を開くも欠席したことによりこの咎を認
めることとする。よって逆罪の刑に処す』だって。近くこの都
市に騎士団を差し向けてくるらしいし、他の貴族も呼応しているよ
うだからこのまま無防備だと蹂躪されて終わるんじゃないかしら」

とんでもないことをサラリと言う少女。

王女を暗殺？

申し開きの場を欠席？

始めて聞く単語に俺は混乱する。

「どういうことだ？ 俺はそんな知らせなど聞いた覚えはないぞ、それに第一アイラからその類の情報は上がってきてない」

「そりゃそうよ。だって昨日王女が殺されてその日に裁判、そして今日に騎士団を出動させることが決定したのだから。で、あなた達はそんな重大な出来事が迫っているのに呑気に遊んでいた」

あっけらかんとそう言い放つ少女の瞳から喜以外の表情が見当たらない。

「どうしてフォルター宰相とキルマーク騎士団長が手を組んだのかというと彼らは前々から中立を保ち続けるあなた達の存在が目障りだったみたい。だからこの機に乗じて協力したのよ」

憎い敵のために手を取り合う、素晴らしいわね。

そう言ってアハハハハと今度は回りながら笑う。

「……一体何が楽しい。そして、お前は何者だ？」

まるで俺の不幸を嘲笑うような態度に俺は目の前の少女に煮えぎたる怒りを感じる。

「ああ、凄いわあ。そんな顔も出来たのね」

が、少女は全然堪えていなかった。

「ああ、そう言えば自己紹介がまだだったわね」

少女はそう言って回転を止めてこう言い放つ。

「私の名はシマール国第1王女、ベアトリクスⅡシマールⅡインフイニティ。殺されたはずの王女よ」

アハハハハハハハハハハ。

もう楽しくて仕方ないと言う風に目の前の少女　ベアトリクスは笑っていた。

立国宣言（前書き）

今回からしばらく戦いが続きます。
相当ご都合主義な展開が続くかもしれません
どうか寛大な心でお許しください。

立国宣言

突如振って湧いた出来事に俺は何と答えればいいのだろう。

つい先程までは俺達が心血を注いで作り上げたのを見て万感の思
いだった都市が、それが今にも崩れそうな砂上の楼閣になり果てて
しまった。

「あらあら、大変ねえ」

そんな危機を伝えた少女 ベアトリクスは何が楽しいのかまた
クルクルと回り始めた。

「誰か、こいつを」

捕える。と言う前にエルファが一步前に進み出る。

「お待ち下さい、主」

エルファはベアトリクスを擁護するかの様に俺の前に立ち塞がっ
た。

「何の真似だ、エルファ？」

場合によってはただで済まない。そんな気迫を込めて言い放った
が、エルファは瞳の揺らぎすら見えなかった。

「怒りにまかせてベアトリクス王女を捕えても何もありません。そ
れに」

そのエルファの相変わらずな冷静さに俺は少しだけ正気を取り戻した。

だから俺はエルファに先を促す。

「ベアトリクス王女は策略や姦計において右に出る者はありません。ここは王女を参謀として迎え、この難局で試してみても如何でしょうか」

「……」

「それに主は重大な勘違いをなさっています。ベアトリクス王女は謀略に巻き込まれた被害者です、この騒動はどう見ても王女に何一つ利がありません」

「謀略や姦計において右に出る者はいないのに策略に引っ掛かったのか？」

「それは……」

「これから先は私が説明するわ」

エルファが言い淀むとベアトリクスは回転を止めて俺に向き直る。

「私も馬鹿だったわ、国内だけに目を向けていたからこの様になった。まさか隣国のリーザリオ帝国がこんな謀略を仕掛けてくるなんて思いもしなかったわ」

リーザリオ帝国とはシマール国の北にある国家で国土は同じくら

いだがそのほとんどが山脈のため痩せているのだがその分民は遅しく、兵も精強である。

飢えや逆境を経験している兵を侮ってはならない。彼らは引くことを知らない死兵へと容易になり易い。

「フォルター兄様が唆されたのよ。私を謀殺してその罪をカザクラ男爵に被せろつて。間一髪エルファが気付いたおかげで何とか生き延びることが出来たわ」

つまりこの国を狙っていたリーザリオ帝国が謀略を仕掛け、あわや殺されそうになったので俺の所へ逃げのびてきたと。

話としては筋が通っている。

最近リーザリオ帝国が軍事演習で活発になってきたという報告が届いていたから真実味はあるだろう。

しかし。

「お前がリーザリオ帝国の間者という線も否定できないな」

すでに王女は死んだことになっており、目の前にいるのはただ頭のおかしい少女だからそんなぞんざいな口調で構わないだろう。

「あらあら、性格悪いわねえ」

お前には言われたくない。と、心の中でそう叫ぶ。

「けど、こればかりは信じてもらうしかないわ。今の私に証明でき

るものは何も無い」

まあ、そうだろう。

2人は相当慌てていたらしく、最低限の持ち物で逃避行を続けていたのか衣服の所々が薄汚れていた。

「イズルガルド」

俺には手が余るとし、確かな審議眼を持つ者の名前を呼んだ。

『何用かな、ユウキよ』

「少し困ったことになった、至急来てほしい」

『わかった』

短い言葉だがすぐに来るだろう、この時間帯はまだイズルガルドの活動範囲内だ。

「ねえ、いったいユウキは何をぶつぶつ言っているの？　もしかして頭がおかしくなった？」

……エルファがいなければ俺はこいつを百回殺していた自信がある。

隅の方でもベアトリクスを射殺そうとするアイラを必死に抑えるオーラの姿が確認できた。

俺達はイズルガルドが滞在できる中庭へと移動し、イズルガルドにベアトリクスを見てくれと頼みこむ。

「うーん、なんか嫌な感じね。心の奥底まで見透かされているようだわ」

ベアトリクスの感想は概ね合っている。テレパシーが使えるイズルガルドの前にはどんな嘘もつくことはできない。

『……ふむ、おそらくこの娘は嘘についておらん』

「ほら、私の言ったとおりでしょ」

視線を外したイズルガルドはそう評するが、「ただ……」と続けた言葉が不吉だった。

『一個の人間がここまでの悪意と狂気を身に宿せるものだろうか。その闇は深く、ワシでさえ全てを見通せん。使い方次第ではユウキに大きな栄光を齎すであろうがもし誤れば大いなる厄災が降り懸るであろう』

「劇薬か……」

俺はベアトリクスをそう評する。

「ありがとう、イズルガルド。助かった、このお礼はいずれする」

『ワシの酔狂だから礼などいらん。それではユウキ、もう用はないようじゃからこれで失礼するぞ』

イズルガルドはそう述べると翼を広げて飛び立ち、元の場所へ帰って行った。

「イズルガルドがそう評するのなら問題はないだろう。ベアトリクス、お前を参謀に命ずる。だからしっかりと働きなさい」

「ご拝命承りました我が君。必ずやご期待に添えて見せましょう……アハハハハハハハ！」

ベアトリクスは恭しい態度で頭を下げたと思いきや次の瞬間には大声で笑い始めた。

「……よくこれで権謀術数渦巻く王宮内で生き残れたな」

怒りを通り越して呆れてしまう俺がそこにいる。

するとエルファこうフォローした。

「ベアトリクス様は普段は淑女然ですが、気に入った相手だけこのような態度を取ります」

それを聞いた俺は喜んで良いのか悲しんで良いのか分からなくなってしまう。

「ああ、そうそう」

何を思い立ったのかベアトリクスがポンと手を打つ。

「ちょうどいい機会だわ。この際王国の設立を宣言しちゃいましょう」

そのあまりの言葉に全員が呆気に取られるが、構わずベアトリクスは話し始める。

「今のままでは私達は反乱軍だわ。しかし、それだと風評に悪いから何とかしましょう」

「あのなあ、それならお前が生きていたことを公表し、あちらの非を弾劾すればいいだけだろう」

俺は正論を言ったつもりなのだが、ベアトリクスは馬鹿にしたような笑みを浮かべる。

「何言っているの、あちらは絶対に私の生存を認めないでしょうね。まあ、それでも良いけどこの場合だと王国の設立を宣言した方が民衆受けにいいわ」

どういうことかと、俺はエルファに聞いてみる。

「今の王国に民衆は失望し、大地は荒れ果てています。王族はすでに尊敬の対象でなくなり、逆に国を乱す憎悪の的となっているのが現状です」

エルファの答えに我が意を得たとばかりにベアトリクスが。

「そういうこと。ここは私の生存よりも我が君が新しく作った方が得なのよ」

「ふざけるな」

さすがに無理があると考えて反論し、そこで終わったのだが。

なぜか後日になると俺が立国宣言するという話題で都市中が持ちきりだった。

「へえ、それは良いじゃない」

意外にもキツカがその意見に賛同する。

「ユウキ様が王となられることに私は反対することなどありません」

アイラまでそんなことを言う。

「……王様、すごい」

「まさかそんな日が来るなんてね」

ユキもクロスも乗り気だ。

「ああ、ボクがそんな遠いところまでいったか。お姉さん悲しいわ」

「師匠、私は何があっても師匠の弟子です」

「王様ですか。その時は貧困者を生み出さないでくださいね」

ティータさんやサラ、ヒュエテルさんも乗り気だ。

「いいんじゃない？ 私は相応しいと思うわよ」

「そこに関しては姉さんと同意見です」

こんな時に限って姉妹が意見をそろえる。

「まあ、キツカお姉さまが認めたのなら」

「アイラと共に御身を守ります」

「ボクに反対する理由はないな」

「王の誕生か、いいものだ」

ククルス、オーラ、ミアーそしてレオナは口々に推薦する。

八方塞になった俺は薫をも継る思いでエルファを見やるが。

「諦めてください、主」

案の定、薫がブツツリと切れた。

「どうしてこんなことに……俺は元々浮浪児だったのだぞ」

気が付けばいつの間にか俺は王様。

サルと呼ばれたどこの百姓もビツクリの出世だ。

「やればいいんだろっ、やれば」

俺は観念してそう呟いた。

「本当にあなたは優柔不断ねえ……アハハアハハハ！」

この噂を広めた元凶の高笑いがいやに耳についた。

翌日 場所は役所前広場

ジグサールの中心場所だから大きくしないと駄目だろうということでは結構な工事を行い、ジグサール内で最大の規模を誇っている広場だ。

その広場の前には多くの民衆が押し寄せている。

その目が不安げに揺れているのは、つい先ほど俺が第一王女を暗殺したとして反逆罪に問われている事実が広まったからだ。

だから昨日民衆に集まるよう表明したばかりなのに、今日の昼にはこの広場が満杯になり、近くの道まで溢れ返っている状況だ。

さて、やるか。一世一代の大芝居を。

俺は覚悟を決め、清水寺から飛び降りる覚悟でイズルガルドの背に乗った。

『鎮まれ、皆よ』

突然皆の頭にそんな声が響き渡り、大きな体躯を持つ竜が辺りを

旋回した。

「皆の者、私が王女殺害の反逆罪に問われたユウキ嬢グサリアス
嬢カザクラだ！」

水を打ったかのような沈黙の中、俺の声が響き渡る。

「今、ここにいる者は不安なのだろう。本当に私が王女を殺したの
か知りたいのだろう」

と、ここで俺は一区切りする。

さあ、もう後には引けないぞ。

「それは無実だ！ ベアトリクス王女はここにいる！」

俺の後ろから現れたのは嫺やかな雰囲気を持つ銀色の髪が印象的
な少女。

そう、あのベアトリクス嬢シマール嬢インフィニティだった。

「皆もこれで分かっただろう！ いかにも王宮の発表が欺瞞に満ちて
いるのかを！」

ベアトリクスが姿を現したことで群衆に安堵が広がる。しかし、
ここで安堵しては困るのだ。

「王女は生きている！ しかし、王宮はそれを偽物だという！ そ
れは何故か？」

群衆が俺の問いについて周り相話し始めたのでざわざわと騒ぎ出した。

「それは自分達が妬ましいからだ！ 自分達が素晴らしい生活を送っているから！ それを壊したいのだ！」

何て酷い王宮だ。と、あちこちから咳きが漏れ始める。

「諸君！ 今、この国はどうなっていると思う！ 田畑は荒れ果て、貴族の専横が横行し、国は荒廃した。ゆえに、王女はその責を負うとして退官し、代わりに私が王になれと進言した！」

王という言葉に群衆がざわめき始める。それはそうだろう。

王というのは天上の存在だ。普通に暮らしている分だと絶対にお目にかかれないのだから。

「私は迷った！ この私に王など務まるのかと！ しかし！ 私は思い当たった！ 今、我々は豊かな生活をしているが、他の地方はどのような暮らしを送っているのか！ どのような苦汁を味わっているのか！」

この言葉には最近流れてきた難民が反応する。

彼らは相次ぐ重税で身動きが取れなくなり、断腸の思いで故郷を捨てた者なのだ。

「そのような中、国はいつたい何をしていたのか！ 我々の苦しみを知っているのか！」

俺はイズルガルドの背に乗って広場や近くの道を何度も巡回していた。

「いや、知りはない！ 奴らは我々の涙を啜っているのだ！。血を啜っているのだ！ そんなことが許されると思っているのか！」

そつだ！ 絶対に許せない！ とあちこちから上がり始める。

それはアイラが仕込んだサクラからだったのが、今回はそれが良い働きをしてくれる。群衆はすでに興奮状態に陥り、俺の言うことに疑いを抱いていなかった。

さあ、総仕上げだ。

「だからこそ私は王を名乗る！ 腐りきったこの国を滅ぼし！ 新たな国を作ることにする！」

俺はここで大きく息を吸い込み、一息に吐き出した。

「その国の名はジグサリアス王国！ 諸悪の根源であるシマール国を打ち倒し、我々が笑顔で暮らせる国を作ることをここに誓おう！」

爆発したような歓声の中、俺はさらに言葉を重ねる。

「ゆえに、私の手足となって動いてくれる者達を紹介しよう！」

風林火山の将帥よ！ 呼ばれた者は前へ！

キツカ！ エメラルドグリーン！ カザクラ侯爵

疾きこと風の如く　竜騎士団『風』を率いる者とし、その補佐としてククルスⅡトパーズイエローⅡフォンテジー伯爵を任命する。
疾風迅雷を体现する軍として敵に痛撃を与えよ！

アイラⅡサファイアブルーⅡカザクラ侯爵

徐かなること林の如く　隠密集団『林』の総責任者とし、補佐としてオーラⅡアメジストパープルⅡユクエリス伯爵をつける。

無から来る恐怖を存分に敵に味わせることを期待する！

ユキⅡルビーレッドⅡカザクラ侯爵

侵掠すること火の如く　魔導騎士団『火』の団長となれ、補佐としてミアⅡガーネットオレンジⅡヴァルレンシア伯爵を命ずる。

その圧倒的火力によって敵を殲滅せよ！

クロスⅡダイヤモンドホワイトⅡカザクラ侯爵

動かざること山の如く　ジグサール騎士団『山』の將軍に命じ、補佐としてレオナⅡジルコンクリアⅡカリスリン伯爵を任せる。

その不動の姿から敵を跳ね返せ！

そして、それらを統括する参謀にベアトリクスⅡアレキサンドラ
イトブラックⅡインフィニティを命ずる。

風林火山を自在に動かし、我々に勝利を齎せ！」

彼らが呼ばれ、群衆に向かって礼をする度に広場から歓声が迸る。

俺は次に声を出すタイミングを見計らい、今だと思った瞬間に最後の宣言をした。

「私は誓おう！ 必ずや民衆を圧政から解放すると！」

ジグサリアス！ ジグサリアス！ ジグサリアス！ ジグサリアス！
ス！ ジグサリアス！

ジグサリアス王国の建設を賛同する声音がいつまでも広場に響いていた。

立国宣言（後書き）

次は対王国騎士団です。

2011年12月2日 ジグサリアス王国の設立の話を追加しました。

対貴族連合

俺は至急主要なメンバーを集めて会議を開き、その席でベアトリクスを参謀につけると発表すると、当然のごとく反対者が現れた。

反対しているのはキツカ、アイラ、ユキ、クロスやヒュエテルさん、ティータさんやサラ、ククルス、オーラなど市民出身の者で、賛成者は王宮に身を置いていたエルファ、フィーナ、レア、ミア、レオナなどだった。

「絶対に認められないわ！ そんなこと」

キツカがそう言って断固反対の態度を取り、周りもそれに同調する。

キツカ達からすればジグサールの危機を齎し、さらに不快な言動をするにも関わらず自分達の上につくということが我慢ならぬだろう。

「いいえ、あなた達はベアトリクス様の力量を知らないからそんなことを言えるのです」

するとエルファが反論する。

エルファ達は王宮に身を置いていたのでキツカ達よりベアトリクスと長く接していた経験がある。僅か16歳の少女が老獪な国の重鎮を手玉に取っていた様子を知っていることから、絶対に敵に回したくないのだろう。

「あらあら、大変ねえ」

自分の処遇からここまでの大騒ぎになっているにも拘らず、どこ吹く風とばかりに自分の銀色の髪をくるくる巻いて遊んでいるベアトリクスは本当に大した奴だと思う。

「お前のせいでこうなっているんだぞ、少しは収束させようと思わないのか」

そのあまりに呑気な様子のベアトリクスにそう毒づいたのは仕方ないだろう。

「うーん、そうねえ。会議を長引かせて相手に時間を与えるのは馬鹿らしいからそろそろ終わりにしましょうか」

ベアトリクスは挙手をして注目を集め、これまでとは違った凛とした口調で話し始めた。

「つまりあなた達は私の実力が信じられないから私が上につくことを是としないのね」

「当たり前でしょ！ 王女か何だか知らないけど勝手に現れたあなたに誰が従うものですか！」

キツカが立ち上がって激昂する。

「あらら、結構嫌われているわね。まあ、私は新参者だから仕方ないわ。しかし、私は老竜イズルガルドに認められ、我が君が参謀に命じたのよ。つまりキツカ隊長は我が君に逆らうとでも？」

「そ、それは……」

「ユウキ様を諫めるのが私達の役目なのよ、今はどう考えてもユウキ様は間違った決断を下そうとしているのだから逆らっていないわ」

言葉に詰まったキツカの代わりに副隊長のククルスがそう弁護した。

「へえ、そう来るのね」

ベアトリクスは何が面白いのかヒュウっと感嘆の声を上げる。

「まあ、そんな建前なんてどうでもいいわね。私は参謀なのだから私が提示した策で判断して頂戴」

そろそろ潮時だなと判断した俺は口を開き、現在の状況についてアイラに報告させる。

「……現在私達は王女殺害の大悪人とされ、王国騎士団がこちらへの進撃準備を進めています。そして、それに並行して各貴族が私兵を徴兵しました。その数はおよそ5万。その数がこちらへ向かっていますのでおそらく貴族の私兵の方が先に戦闘が始まるかと思われます」

アイラは多少不満げな様子だったがそんなことなど微塵も見せずスラスラと文章を読み上げる。

「で、ベアトリクス。こちらは3万しかいないように見せかけているが、実は10万の戦力を持っている。だから彼らを殲滅できるが、それをするとリーザリア国が侵略してきた際に非常に困ることにな

る。こちら相手も被害を最小限に抑えるにはどうすればいい？」

おそらく向こうは俺が3万しか持っていないと踏んだのだろう。

しかし、輪番制によって全兵のうち3分の2を単なる労働者として計上していたので実質上の戦力はその3倍にあたる10万だ。

さて、この圧倒的優位の中でどんな采配を振るのか振るとベアトリクスは唇に手を当てて少し考え込んだ後に口を開く。

「そうね、彼らは数が多いけど所詮は寄せ集めの烏合の衆だわ。だからそこをつけば良いのよ」

「つまり頭さえ潰せば簡単だと？」

俺がそう聞くとベアトリクスは大声で笑い始める。

「アツハツハ、それは無意味よ。むしろ下策ね。彼らは指揮系統ができていない代わりに個別に動くことができるから頭を潰しても素直に降伏勧告には従わない。そりゃあ相手を徹底的に痛めつけるならそれでいいけど、今回はそれを是としないんでしょ？」

ベアトリクスの言うとおり相手の頭を潰して降伏を促すのが基本だが、彼らは寄せ集めであり各軍隊が別個の指揮系統を持っている。各個撃破するのならこれ以上の条件はないが、今の状態ではお勧めできない。

「それに貴族の中でも優秀な者は何人かいるのよ。もし乱戦の最中に彼らを殺してしまうのは非常に惜しいわ」

腐敗が進んでいる貴族だが、やはりその中でもまともな貴族はいるものだ。この後を考えると彼らは生きていてほしい。

「で？ どうする？」

「そうね。無能な貴族は粛清し、有能な貴族だけ生かす方針でいきましようかしら」

「そんなことはできるのか？」

俺がそう尋ねるとベアトリクスは当然とばかりに。

「できるわ。3回の敗北とお金があればね」

女神のような美しい美貌を醜悪に歪ませてそんなことを吐いた。

「……まあ、今はそれを信じるか」

キツカはそれに異を唱えるが俺は応じない。

今はベアトリクスの立ち位置よりもこの事態を打破することが重要と考えたからだ。

「この戦が私の最期なのかも……」

私 エレナ「グランシリア」イーブルブル子爵は今回のユウキ
「ジグサリアス」カザクラ男爵の討伐に疑問符を抱いている。

彼は第一王女であるベアトリクス＝シマール＝インフィニティを殺害し、自らを王と称してジグサリアス王国の建国を宣言したとして反逆罪の疑いがかけられていた。

一山幾らの浮浪児が市民となり、はては貴族として幅を利かせているのは生粋の貴族である私から見ても面白くないものだが、それでも荒廃した領地を僅か2年で国を代表する都市へと発展させ、多数の兵と魔導騎士団、そして竜騎兵軍団を持つまでに至らしめた彼の手腕は決して侮れないものだと考えている。

まともにもやりあえばこちらが大怪我をするので戦いたくないのだが、侯爵クラスの貴族に奨励をかけられては子爵である私は従うしかない。

どうすれば良いのか散々悩んだ末に私は信頼できる兵を選抜してこの貴族連合に加わった。

一応弁護のために言っておくが、少数の兵しか連れてこなかったのは私だけでない。他の何人かも私と同じ様な不安に駆られて兵をわざと少なめに持っていった。

で、その所業が多数の兵を持ち込んだ伯爵や侯爵クラスの貴族達の不評を買ったのだらう。私を含めた少数の兵しか連れてこなかった貴族は初戦の前線を任された。

「今夜は無礼講だ！ 何をしても許す！」

そう言って祝宴を催し、最後の晚餐とばかりに大騒ぎした翌日。

私はここで果ててしまおうとまで考え、意気込んだ戦いだっただが、以外にもジグサール反乱軍は大して戦いもせず、早々に軍を引き上げていった。

私はこの機を逃さず追撃しようとしたのだが、後に残された糧食や軍資金を見て取り止めざるを得なかった。自分の領地の1年は無税でもいけるだけの量が残されていたので、隊長達がここで止めることを進言したからだ。

最初の取り決めにより、戦いによって得た戦果は各々が自由にしようと決まっていたので、これらは自分たちと同じ様に前線を任された者だけで分かち合った。

「これだけあればしばらく民を飢えさせずに済むな」

「ああ、俺の領地も子供を売る親が減る」

その成果に後方で控えていた貴族達は齒軋りしていただろうが、これくらいは許されるだろうと。前線に出ていた私達は笑いあった。

で、次の戦いも私達が先鋒になった。

あれはたまたまの偶然。次からはジグサール反乱軍が本腰を入れてくるという意見が満場一致だったからだ。

そして2回目の戦闘。

これも1回目の戦闘の繰り返しでジグサール反乱軍は早々に撤退していった。

違っていたことといえば残されていた糧食と軍資金の量ぐらいか。

前回は1年分だったが、今回は2年分あった。

私達が大した戦闘もせず、うまうまと成果を得たことが悔しかったのだろう。

今度は彼らが前線に出た。

3回目に何か起こると踏んでいたのだが、何事も起らずに戦闘は終了。彼らは3年分の糧食と軍資金を得た。

そして、次に誰を先鋒に据えるかは大揉めに揉めた。

この3回の戦闘で連勝し、旨味を知った私達が「自分が自分」と自己主張したからだ。

ジグサール反乱軍など恐れるに足らず、所詮は成り上がりの者だ。

と、というのがすっかり私達の常識になっている。

が、私はそれを冷めた目で見ていた。

産業都市ジグサールが生み出す利益は私が持つ領地からの収入など比べ物にならない。そして、もしジグサールが10年分でもポンと出せるぐらいの財力があるのなら、私達はすっかり相手の策略に嵌っているといえる。

すでにこの連合の統制などあらず、各々がいかにして相手を出し抜こうかに注意を張り巡らし、ジグサール軍のことなどもはや考え

ていない。

しかし、彼らは知っているのだろうか。

ジグザール反乱軍はまだ竜騎兵軍団と魔導騎士団を出撃させていないことに……

そんな懸念を抱いた私は後方支援に回ることにした。

そして、それは私だけでない。

初戦と次戦で共に出た者の多くも私と同じ危機感を抱いて裏方を選んだ。

「……カザクラ男爵は恐ろしい方ですね」

そんなことを呟くのは私の部下であるキリング＝トリアエルだ。

彼女は頭が私より切れるので私の右腕として軍政に活躍してもらっている。

「どづいづこと？」

聞き逃せない言葉を呟いたキリングを私は問い詰めると、彼女は前線の方に目を向けながら。

「おそらくカザクラ男爵はすでに戦の後を視野に入れていきます」

見て下さい、とばかりにキリングは両手を広げて。

「今、この連合は欲に負けた者と欲を制御できた者の2つに分かれています、前線には前者が集まり後方には後者が集合しています」

その言葉の従い私は周りを見渡す。

前線にいる貴族は民からの評判が悪く治安も低い。そして後方にいる貴族はその逆で名君とはいかないまでも優れた統治を敷いている者ばかりだ。

「そうです。玉石混合の貴族連合をカザクラ男爵は2つに分けました、私ならここで仕掛けま

「ま、魔導騎士団だ！」

キリングの言葉と同時に前線から絶望の悲鳴が上がり、幾つもの火柱が出現する。

魔導騎士団 魔法によって広範囲殲滅を主とする軍団であり、彼らを擁するのは一部の実力者にしか許されない。

打たれ弱い、その攻撃力は比類なき力を持つ彼らが最も力を発揮できる瞬間は今回のように相手が密集している時だ。

事実、彼らが放つ魔法は大きく地面をえぐり、次々とこちらの味方を絶命させていく。

「な、何をしている！？ こちらも魔導騎士団で対抗すればいいだろっ」

魔導師の攻撃を防ぐには特殊な加工を施した防壁か装備で身を固めるか同じ魔導師で対抗するしか手段はない。私は魔導師を持っていないが、侯爵や伯爵クラスの貴族なら擁しているだろう。

しかし、キリングはそれに首を振る。

「もう遅いですよ。魔導師というのは集団になると力を発揮します。最初の一撃で固まっていた魔導師を狙い撃ちにしましたから彼らに防げることはできませんし、何よりあちらは練度と装備が違います」

キリングの言葉通りだ。

彼らの魔導騎士団は宮廷魔導師など優秀な魔導師で構成されているだけでなく、あの世界最高峰の技術力を持つ産業都市ジグサールの装備だ。そこら辺の魔導師では敵うはずもない。

「しかし、このまま見捨てるわけにもいかん！ 総員！ 戦闘準備」

一刻も早く彼らを救援しなければならぬ。私はその思いに駆られて号令をかけるのだがキリングは諦めた様な声音で呟きました。

「もう遅いんですよ、すでに私達は詰まれています。ここまでの策を考えたカザクラ男爵が救援などを許すと思いますか？」

その言葉と同時に身も凍るような咆哮が辺りに響き渡り、私達の上には30体を超える竜が上空を旋回し始めた。

「私はジグサリアス王国竜騎兵軍団『風』を率いるキツカカザクラ！ 素直に降伏するのなら身の安全を保障するわ！」

「……私達の負けです、ここは潔く投降しましょう」

キリングの言葉を聞いた私は地面に膝をついて慟哭するしかなかった。

ヘアトリクスの智謀（前書き）

前置きが長くなりましたのでここからで一旦区切ります。
申し訳ありません。

ベアトリクスの智謀

ジグサリアス王国謁見室。

最も奥にある王座に俺は腰掛け、右にキツカ達武官を左にベアトリクス達文官を並べている。

今行われているのは先の戦いで殺さずに捕えた貴族の処遇を本人の前で伝えることだった。

「エレナ嬢グランシリア嬢ブルブル子爵だな」

俺が静かにそう問うと彼女は頭を下げ、片膝をついたままゆっくりと頷く。

エレナ子爵は無骨というか、一本気が通っている。180cmを超える身長にポリウムのある赤毛。すっきりと通った目鼻とそして燃えるような瞳が印象的だった。

やはり何もできずに負けた悔しさなのかその態度が少しばかり固いし、全身から並々ならぬ殺気を放っている。

「……エレナ様、もう少し柔らかくなってください。ここで相手の不興を買ってもこちらが苦しくなるだけです」

隣のキリンググがそう諭すとエレナ子爵は完全にはないにしろ幾分か殺気が和らぐ。

エレナ子爵を諫めたのは片眼鏡をかけている女性で、ちょっと仕

草から知性が見え隠れしていた。そして、特徴的なのが黒光りする美しい髪である。

「何も申し開きはない、反逆者　ユウキィジグサリアスィカザク
ラ男爵。私は貴殿を反逆罪として捕えに参った、それだけだ」

「エレナ様！」

その強気な口調に隣のキリングが血相を変える。

そしてキリングは何とか誤解を解こうと口上を述べ始めたが、俺はそれを制した。

「噂に違わない御仁だな。まあ、その発言は許さう。さて、本日ここに呼んだのは何でもない。私はエレナ子爵にこれまでの働きを奨励して領地を送ろうと考えているのだ」

「え？」

俺の言葉がよほど意外だったのか顔を上げて呆然とするエレナ子爵だが、構わず先に進める。

「体面もあるので名目上は直轄地となるがな。エレナ子爵が持つていた所領の特性上暖かい所は苦手だろう。エレナ子爵の隣り合わせであるヴァルザック公爵とベナンス侯爵を合わせた領地はどうかかな？」

「あ、あの……」

「まあ、エレナ子爵は必然的に元シマール国の3分の1の領土を統

治することになるわけだ。しかし、領地に移住する時期についてだが今は少し荒れていてな、こちらの準備が終わるまで我慢してほしい」

「ま、待って下さい」

「ん？ 何か問題でも？」

「大あります。そもそも私はあなたを討伐しようとして兵を挙げた者です。罰を与えるこそすれ何故褒美を与えようとするのですか？」

エレナ子爵は何故自分が領地を与えられるのか分かっていないようだ。

やれやれ、有能な人間と言うのは得てして己の行いがどう映っているのか客観的に見ようとしななんだなあ。

エレナ子爵が統治していた領地に住む者は、生活こそ貧しいが皆が笑顔だ。

それにエレナ子爵自身も質素儉約を行って余計な散財をせず、飢饉などの際には民に手を差し伸べるなど善政を行っているんだよな。

「エレナ子爵はよほど謙虚な人物と見受けられる。そして、だからこそ私はお前にもっと多くの領地を統治し、民を守ってほしいのだ」

「し、しかし。私には分不相応です、謹んでおこと」

エレナ子爵は断ろうとしたが、隣のキリングが黙っているとはかりに彼女の脇腹を突いたので彼女は疼くまざるを得なくなる。

「申し訳ありません。エレナ様は突然の事態に混乱していますので代わりに私がお伺いします」

ツラツラと立石に水のように饒舌に話すのだが、どこか知性の感じさせる雰囲気があるキリングが口を開いた。

「カザクラ男爵　いえ、王がエレナ様を殺さなかったのは善政を敷いているが故ですか？」

「その通りだ。少なくともエレナ子爵の領地から民の怨嗟の声は聞かない」

「次にお聞きしますが、エレナ様に領地を奉じるのは欲をかかなかつたからですか？」

「そうだな、私が仕掛けた人の欲を刺激する罫を見事に見破った。これだけでもエレナ子爵は己を律することが出来る貴族だと判断した」

「最後にお聞きします。エレナ様に最大の領土を与えるのは何故ですか？」

「それはお前を始めとした有能な家臣を多く召抱えているからだ。人は万能でない、間違っこともある。だが、重要なことは間違っこととでなく、間違いを認めて正すことだ。そして、その間違いを諫める家臣が多いエレナ子爵に最大の領土を与えるわけだ」

俺は前もって用意してあった内容を述べるだけだったのだが、目の前にいる2人には効果が抜群だったようだ。あの切れ者そうなき

リングさえ眼鏡がずれかかっている。

「……申し訳ありません、もう一つ質問をお伺いしてもよろしいでしょうか」

「構わない、述べてみよ」

「それで……そこまでする見返りは何でございましょうか。あなたのために兵や軍事物資を支援することでありましょうか」

そんなことを大真面目に述べたので俺は高笑いをしてしまった。

2人が身構えたので俺は手を振って侮辱したわけでないとおアピールする。

「済まない。決してお前達を侮辱したわけでないのだ。ただ、おかしくてな」

と、そこまで言っただけ俺はコホンと一つ咳払い。

「それに対する答えだが、エレナ子爵からは何も支援してもらおう必要はない。しかし、誤解するな。それは役立たずと言っているわけではなく、エレナ子爵が私に味方して私が敗北した場合、王国はお前という貴重な人材を失ってしまうからだ」

実際は負ける要素など微塵にもないけどな。と、心の中で付け足す。

「エレナ子爵の働きは誰よりも私が見ている。そして、お前が己の領地で奮闘している様子からエレナ子爵こそがジグサリアス王国最

大の領土を持つに相応しい」

「……」

そこまで言い切ると2人は押し黙って沈黙してしまった。

いくら経っても何も言いださなかったので俺から口を開く。

「さて、エレナ子爵は王国から疑われない内に領地へ戻ってほしい。そして、できるなら臣を纏めてすぐに移動できるような環境を整えてくれると嬉しい」

俺は2人に退出を命じる。

「どうした？ もう終わりだぞ」

と、俺がそこまで言った途端片膝をついていたエレナ子爵が両膝をつき、そしてついには額を床に擦り付けた。

「エレナ様！？」

キリングは突然の事態に驚く。

2、3秒ぐらいそうしていたエレナ子爵がパツと顔をあげる。その顔は感謝と尊敬の意があることをありありと伝えていた。

「王よ、これまでの無礼をお許し下さい。王がそこまで私に期待しているのならこのエレナ＝グランシリア＝イーブルブルは己の身命をとして忠誠を誓います」

ハッキリと、迷いなくエレナ子爵はそう言い切った。

「これで良かったのか？」

エレナ子爵が退室した後、俺は隣のベアトリクスに聞く。

「良いのよ。彼女は指揮官としても領主としても優秀だけどその子孫までが優秀とは限らない。だからエレナ子爵は派遣貴族として北を統治してもらっわ。それに、これからあそこは荒れるだろうから彼女の力が必要だろうしね」

「何か騙した様で気が引けるな」

北方に位置するリーザリオ国は近い将来に侵略してくるのは火を見るより明らか。

そしてその際に戦場となるのはヴァルザック公爵とベナンス侯爵の領地になると俺達は踏んでいた。

だからその2つの領土に住む民を移住させている途中であり、さらにアイラ直属の部隊にある仕掛けを行わせている。

「……何とかお前はもう悪魔だな」

そのあまりに凄惨な仕掛けの内容に俺はそう零したのを覚えていた。

「結局、捕えた貴族20人が全員俺に忠誠を誓ったな」

謁見も終わり、一息をついた俺はそんなことを呟く。

「領地を与えるといつてもそれは直轄地だから一代限りであり、領地を国に返さなければならぬと明言しても彼らは洗面すら浮かべなかつたな」

贅沢かもしれないが、もう少し国のために死を選ぶ者が多いと考えていた俺である。

「アハハハハハハハ、何を言っているの？ 紐付きでも領地を与えられるわけなので、逆らうより従ったほうが得よ。そして何より有能な者がこんな国と殉じるわけないじゃない」

こんな国の元王女だったベアトリクスがそう俺を馬鹿にする。

「中にはいるだろう、容易く主君を変えられない不器用な貴族とか」

「そんな貴族は無能以下、ただの部品よ。まあ、その人が騎士だったら有能と言えるけど、少なくとも貴族においてそんな不器用だったらあつという間に食われるわ」

どうやら複雑怪奇な政治を領分とする貴族においては応用が利かない人間だと駄目らしい。

「しかし、何度も言うが本当に俺が王を名乗って良かったのか？
これが謀略ならお前が王女と宣言すれば良いと思うが」

信じられないかもしれないが今の俺は王と名乗っている。

掲げた標榜は『貧困に喘ぐ民を救うべく私が王となり、新しい国を建設する』というもの。

それに関してベアトリクスは。

「ジグサリアス王国の戦力を確認したけどこれなら大義名分など必要ないわ。むしろこれだけ差があるのなら全てを破壊して一から作り上げた方が後々効率が良いのよ」

とのこと。

しかも不可解なことに自分や近隣の民からの反発もなく、むしろ好意的に受け止められている。

「良くやってくれた」とか「最後までついていきます」との評判から如何にこの国の民が愛想を尽かしているのかよくわかる。

ところ変わって会議室。

議題の内容は次に来るであろうシマール国最強と呼び声が高い王国騎士団3万についての対策だ。

「さて、ベアトリクス。何か策はあるか？」

俺がそう振っても他の者は不満げな様子を見せない。

やはり先日の貴族連合による大勝が皆の心境を変化させていた。

と、言ってもそれは表面上だけで中身は全然納得していないのが見て取れるのだが。

まあ、必要とはいえ3回も負けさせられたらそう思っても仕方ないよな。

「そうねえ……」

ベアトリクスはまたも己の銀髪を弄りながら考え込んでいる。

周りはベアトリクスがどんな意見を出すのか注視していたが、俺はクロスの様子が変だということに気付く。

提案があるが、それを出していいのか。

そんな葛藤と戦っているのが目に見える。

「クロス、何か意見はあるのか？」

だから俺はクロスにそう聞いてみるとクロスは一瞬ハツとなり、そして表情を引き締める。

「はい、自分はこの王国騎士団と正面決戦を望みます」

その言葉を受けた者の反応は2つに分かれた。

武官組を中心に「それは面白い」と頷き、逆に文官組は「それは非常識だ」と渋面顔。

クロスは続ける。

「我々の強さは控えめに見ましても王国騎士団より上回っています。ならば彼らと同じ3万で正面決戦を行って勝利し、『山』の強さを国の内外に知らしめては如何でしょうか」

「論外ね」

クロスの提案にベアトリクスが一言で切って捨てる。

「よく考えなさい。今、この国は隣国リーザリオ帝国が虎視眈々と狙っているのに、何故精鋭ともいえる王国騎士団と正面から戦うの？ 相手が喜ぶだけだわ」

「あなたはクロスの苦悩を知らないからそんなことが言えるのよ！」

当然、キツカが反論する。

「確かに先の戦では勝利を得たわ！ しかし、その代償としてクロスは軟弱な指揮官として周りから蔑まれている！ あんたに分かる？ 格下の相手に馬鹿にされる辛さが！」

クロス率いる騎士団は自分たちのことを王国最強と自負し、それは下にも共通していたからこそ不満なのだろう。事実、最近兵が不祥事を起こすことが増えている。

他を武官の様子を見ても程度の高低はあろうともキツカと同じ感情を抱いているようだ。いや、唯一レオナだけが何とも言えない表情をしているな。

「ふむ……」

飯に3万を失ってしまったといってもまだ7万の兵を持つ。それだけあれば再戦も可能だし、何より今後のためにここでキツカ達のガス抜きを行ってもいいかなと思う。

「まあ、良いだろう」

「ほんとっ!？」

その決定にキツカが目を輝かせ、他の武官も似たり寄ったりの表情を作る。

「ベアトリクスもその方向で進めることにする、だから納得しろ」

「我が君が仰るのならその通りに」

俺は反対すると思っていたのだが、意外にもベアトリクスはアッサリと従った。

「意外だな」

会議も終わり、キツカ達は勇んで軍の準備のために足早へと退出し、文官も己の業務を果たすとしてこの場にはいない。つまりこの場には俺とベアトリクスの2人だけだ。

「よく俺の意見に賛成したな。お前のことだからもう少し粘ると考

えていたのだが」

「アハハ、あの時はそうした方が良かったのよ。ここら辺で我が君の株を上げておくべきだと考えてね」

「なるほどね」

俺は得心する。

ベアトリクスがあの場合で引き下がってくれたからこそ、その後の会議は刺々しい雰囲気もなくなって議題を進めることができた。

「しかし、正面決戦でよかったのか？ 勝てるには勝てるが。彼らの力量は侮れないし、何よりリーザリア国との戦いを考えれば降伏を促した方がいいんじゃないかなかったのか」

「あああら、ただの騎士ならともかくエリートである王国騎士相手にそれは無理よ。彼らは貴族と違って全員石頭だわ、多分ほとんどの者が従わないから、それなら殲滅させて内外部に対する宣伝と自軍の士気向上のために利用した方が得よ」

あの後に決まったことは『山』の強さを見せつけるために『風』や『火』は別命あるまで待機。あくまで騎士団のみでの決戦に決まった。

こちらは騎士団しかないのに向こうが竜騎兵軍団や魔導騎士団を持ち出してきたらどうするのか懸念したのだが、ベアトリクスがそれを否定する。

「『先の戦の評価はジグサール騎士団は弱い、竜騎兵軍団と魔導

ヘアトリクスの智謀（後書き）

2011/12/8 改訂しました。

対王国騎士団 前編（前書き）

長くなりましたのでここで一旦区切ります。

対王国騎士団 前編

「サラ、いるか？」

クロス率いるジグサール騎士団が出発する前夜。

俺はサラの住んでいる屋敷を訪れていた。

サラは技術関連において無くてはならない存在なので常に警備兵が常駐している。

「あ？ 師匠！ どうしたのですか？」

サラは俺の呼び出しから1分も経たずに現れた。

おそらく暇をしていたらしい。

「明日のことについては知っているな」

「はい、クロスさん率いる騎士団が王国最強の騎士団と戦うのでしよう？ もう私も興奮していますよ」

その言葉の通りサラは元気一杯で、今にでも飛び跳ねそうな雰囲気だった。

「なら、サラ。明日の戦場は俺と一緒に行くか？」

俺はサラを戦場に誘うことにする。

「え？ どうしたのですか？」

サラが疑問符を浮かべるがそれは仕方のないことだろう。

サラの様な技術者が戦場に出ることなどありはしないから。

「まあ、特例だ。俺はサラが開発し、制作した武器防具がどのように使われているのかを知ってほしいんだ」

サラは知らなければならぬ。

無邪気に作っている武器がどのような結果を生んでいるのかを知るのに今回は絶好の機会だと俺は考えている。

納得するならよし。

納得しないのであれば……

俺の内心の葛藤も知らず、サラは元気に「喜んで」と返事した。

明朝

俺はイズルガルドに乗り、そしてサラとベアトリクスも共に乗せていた。

「参謀たる者、戦況の把握はしておかないとね」

とか言っつて無理矢理俺の前に座ったのは記憶に新しい。

ちなみにサラは俺の後である。

「イズルガルド、悪いな」

突然増えたので俺は謝るのだがイズルガルドからは『気にするな』と返ってきた。

そして戦場へ。

この場所はイラキア平原と呼ばれ、周り一面の草原で遮るものは何もない平地だった。

守るのはともかく軍を展開するのにここ以上の適した場所が無いというのが俺達の見解である。

「さて、ベアトリクス。この状況をどう見る？ こっちは3万と聞いているが実際は倍の6万はいるぞ」

あの軍の展開量と陣の厚さから俺はそう評する。どうやらキルマール騎士団長は予備兵力も投入してきたらしい。それに数体の竜騎兵と魔導騎士団も見えることからどうやらそれらも投入することは明白だ。

「……迂闊だったわね、私を追い落とした黒幕の存在を忘れていたわ」

どうやらベアトリクスは思い通りいかないと爪を噛む癖があるら

しい。

悔しそうな顔で親指を噛んでいる。

「本当の敵は北のリーザリア帝国、そこまで考えなかった私のミスだわ。我が君、ここは一度撤退しましょう。さすがのジグサール騎士団でも倍の数である王国騎士団に加え、竜騎兵や魔導騎士団を相手にするのはむ」

「必要ない」

ベアトリクスは撤退を進言しそうだったが俺はそれを途中で遮る。

「予定通り、このまま進軍させる」

「え？ え？ 我が君、どういつつもり？ まさかクロスを見殺しにするつもりではないでしょうね？」

始めて見せたベアトリクスの狼狽具合に俺はほくそ笑みながら「それもない」と答える。

「はい、ユウキ」

「どうやらキツカが近くに寄って来ていたらしい、俺にそう手を振ってあいさつをする。」

「見る限り竜騎兵や魔導騎士団を相手は投入しているようね。どうする？ 命令さえあれば私達も戦場に出るけど」

「いや、別に要らないだろう。おそらくジグサール騎士団だけで十

分だと思つが、クロスが必要だと要請したら戦列に加わってくれ」

そう言つとキツカは苦笑して。

「さつきほとんど同じことをクロスに言われたわ。ユウキが必要だと言つのなら加わってくれって」

「そうか、それなら必要ないな」

「ええ、その通りね」

俺の頷きにキツカが反応する。

そんなツーカーな返事に唯一ベアトリクスが反論した。

「さつきから聞いていたけど、あなた達はクロスを買いかぶり過ぎよ。さすがのジグサル騎士団でも竜騎兵や魔導騎士団相手を含め、さらに倍いる相手に正面からぶつかるなんて酔狂以外の何物でもないわ」

「へえ、あなたでも驚くことつてあるのね。少し気分がスツとしたわ」

「何を呑気な事を!？」

ベアトリクスの慌てふためき具合に対してキツカはマイペースに返す。

そして続けて。

「出会った時はいけ好かない奴だと思っていたけど、あなたもそんな人間らしい一面があるのね。見直したわ。私はキツカ〓カザクラ、これからよろしくね」

どうやらキツカは取り乱すベアトリクスに親近感が湧いたらしい。会議で見せる険悪感など遠くの隅へ追いやり、逆に笑顔を見せて手を差し出す。

ベアトリクスはどう反応すればいいのか迷っているのだろう。表情を目まぐるしく変化させながらキツカの手を凝視していた。

「もう良いだろう、あまりベアトリクスを苛めるな」

これ以上続けるとベアトリクスが崩壊しそうな気がしたので俺は止める。

「あら、残念」

結果的にキツカは握手を出来なかったのだが、全然堪えた様子もなくテヘっ舌を出す。

「それじゃあ私はもう行くわ。後はよろしく」

キツカはそう言い残して竜を旋回させてこの場を去っていった。

「……ありがとう」

「ん？ 何か言ったか？」

後ろから何か聞こえたのだが小さくて聞き取れない。

「何でもないわよ!」

するとベアトリクスは怒った調子で言い返してきた。

「……まあ良いか」

理不尽な気持ちに駆られるも、追及すれば悲惨な目に会いそうだったのでここで止める。

「そういえばサラはどうした?」

この間中ずっとサラが黙っていたので俺は多少不安になったが。

「眠っているんじゃないの?」

ベアトリクスの指摘通り、後ろから微かな寝息が聞こえる。

確かサラは昨日興奮して眠れなかったらしい。

だから竜の背中に乗って揺られている内に眠ってしまったのだろ
う。

「サラ、そろそろ起きろ。戦闘が始まるぞ」

気持ち良さそうに寝ているのならばそのまま寝かせてあげたいが、
ここは心を鬼にしてサラを起こした。

「緊張しているのか、クロス将軍？」

「軍を展開し終えた僕は本陣の前で瞑想していると気遣う様な声が聞こえた。」

「教か いやレオナか。いや、武者震いだよ」

だから僕は笑いながら大丈夫だと答える。

本当は全然大丈夫じゃなかったけど、ここはレオナ教官以外もいるため不安な様子を見せられない。

「その心がけは立派だ。何せ大将の信念が軍全体の行方を左右してしまうのだからな。空元気で良いから取り繕わなくてはならない」
「厳しいが優しく教えるレオナ教官は変わらないなあと思う。」

「将軍！ 報告します。魔導騎士団団長のユキカザクラがお見えになっていますがどうしましょうか」

すると連絡将校の1人が陣幕に入り込んでそう報告した。

「本当にクロスは愛されているな」

僕にしか聞こえない声でしみじみと呟くレオナ教官。

そういえばさつきもキツカが激励しに来ていたよね。

来るよう許可を出すと、すぐにユキが入ってくる。

小柄な体なのは相変わらずだけど、その内側には大陸屈指の魔力を秘めているんだね、これが。

「……大丈夫？」

開口一番そう言うユキ。

「……相手は魔道騎士団を出しているから、せめてそれだけでもこちらで引き受けようか？」

抑揚のない声で簡潔に述べるのだが、その瞳には心配の色がありありと浮かんでいる。

それを見て僕は苦笑しながら。

「大丈夫だよ、それはこの状況は意外だったけどまだ想定内。僕の率いるジグサール騎士団だけで十分だよ」

しつかりと一音一音発音してそう言い含めるとユキは少しだけ目を伏せて「……分かった」とだけ呟いた。

そして踵を返したユキは最後にこう言い残して去って行く。

「……アイラから伝言『敵の数を見誤りました、申し訳ありません』だって」

アイラが気にする必要はないのに。

この状況は誰も想定できなかったのだから仕方ないよ。

アイラの昔から変わらない変な律儀さに僕は苦笑をますます深めた。

さて、戦いの前の前哨戦を始めるか。

僕は立ち上がり、そして愛用の剣を探す。

「……これを」

レオナ教官は前もって準備していたらしい、僕の前に跪いて『獅子の剣』を差し出す。

そして僕はその剣を携え、刀身を一気に引き抜く。

すると体の奥底から燃え上がる様な高揚感と破壊衝動が湧き上がってきた。

いつもながら慣れないと思う。

ユウキが贈ったブラッディXの副作用によって僕は力を得る代わりに別の人格が芽生えてしまった。

それはとてもつもない戦好きで僕とは正反対の性格なんだけど、戦いにおいてはこれほど適した性格はないというのが僕の考えだっ

た。

昔はともかく、今はコントロールが出来るから全然問題はないけどね。

そんなことを考えている内に、湧き上がる衝動が僕の全てを塗り潰していった。

「……レオナ、行ってくる」

そう言い残した俺は振り返らず、憎きキルマークとの舌戦に向かった。

「大罪人！ ユウキ〓ジグサリアス〓カザクラ率いる逆賊どもよ！ 貴様らに救いなどない！ 命が惜しくばすぐに去れ！」

短く髪を切り、大柄でがっしりとした体躯の男が剣をこちらに突き付けながらそんなことをぬかす。

やれやれ、もう少し気の利いた言葉を言えねえのかと呆れてしまっうな。

「何を笑っている！ 何度も言うが我が王国騎士団の前には貴様らなど塵芥に等しい！ 思いあがった貴様らに正義の鉄槌を加えてやる！」

「どうやら俺は笑っていたらしい。いやあ、あまりにお粗末だから
ついついな。」

しかし、このまま一方的なのは全軍の士気に関わるから頂けねえ。
ここらで反論させてもらうか。

「正義だと！ それは笑止千万！ 貴様らは我々に何をした！ 無
数の同胞を餓え悲しませた貴様らこそ悪！ そして、天誅を下す我
々こそ正義だ！」

「何を寝言を！ 貴様らの主は私の妹を謀殺した！ その嘆き！
悲しみが貴様に理解できるか！」

妹を殺したのはお前らだろう。よくもまあいけしゃあしゃあとそ
んなことを言えるものかと感心したぜ。

「ならば我々も同じだ！ 貴様らの悪逆非道な行いでどれだけの同
胞が絶望の淵で亡くなって行ったと思う！ その何十万の悲しみこ
そ理解できるのか！」

「貴様ら下賤な者と私の妹が釣り合うと思っっているのか！」

「釣り合わん！ あんな下賤な奴一匹じゃ我が崇高な同胞の鎮魂に
なりはしない！」

「そうか！ そこまで侮辱するならその罪！ 身を持って味わうが
良い！」

「我が同胞の弔いのため！ 貴様の血も添えさせてもらうぞ！」

そうして舌戦は終わった。

まあ、正直な感想としては引き分けだな。

やはり言葉は苦手だ。

「お疲れ様だ、クロス」

陣幕に戻るとレオナが手拭いを用意していたので俺はそれを手に取りつつ汗をぬぐう。

「レオナ。お前、本気で戦えるか？」

相手はレオナの古巣である王国騎士団だ。

情に負けるようだと言っているからあえて聞いてみる。

するとレオナは一瞬悲しそうな表情を作ったがすぐに引き締めて。

「今の私はジグサール騎士団副將軍レオナ＝カリスリンだ」

「……そうか」

その迷いなき信念を聞いて俺は安心すした。

そして手拭いを近くの世話係に投げ捨てて俺は立ち上がって宣言する。

「始めるぞ！ 俺達の恐ろしさを奴らに見せてやれ！」

おおおおおおおおおおお！

俺の掛け声に全将兵が咆哮したな。

戦いの皮切りというのはまず魔導騎士団による魔法の打ち合いから幕を開ける。

ゆえに、戦いの序盤は如何にして魔導騎士団を守れるかによって決まると言えるだろう、が。

「ほら、やはりこちらは魔道騎士団を有していない分一方的に撃たれているわ」

ベアトリクスと言う通りクロス率いるジグサール騎士団には魔道騎士団がないので遠距離攻撃が出来ず、結果的にこちらから攻め入るしかなくなる。

「そんなに気にする必要はないだろう。ほら、魔法による攻撃は魔防効果のあるミスリルの楯で防いでいる」

向こうから魔法が飛んで来るものの、こちらの被害はほとんどない。

それは彼らに持たせているミスリルの楯が大きな効果を發揮して

いるからだった。

「あれはサラが作った楯を量産した物だ。ミスリルが最も効果を発揮できるようミスリルの量や熱具合を計算されて作られたあの楯はこれぐらいじゃビクともしないだろうな」

「凄いです！ 魔導騎士団の攻撃が全然効いていません」

サラは自分の作った防具が役に立って嬉しいようだ。

クロスは敵に接近するよりもまず魔導騎士団を何とかする必要があると考えたらしく、その場から動かずに弓矢部隊を前線に出す。

彼らの持っている弓矢は通常のと違い、少ない力で遠くまで飛ばせるよう設計された代物だった。

向こうは飛んでくるはずがないとたかを括っていたがそれが仇となり、守られていなかった魔導騎士団が次々と矢の餌食になってしまい、慌てて魔導騎士団を下げさせたのだが、すでにその数は半分以下にまで減っていた。

「とりあえず魔導騎士団は無力化させたな」

あれだけやられれば組織的な魔法は使えないと判断する。

「魔導騎士団は無力化させたわ。けど、それは局地的勝利にすぎない。向こうはまだあんなに厚い陣を持っているのよ」

ベアトリクスという言葉通り、向こうはこちらの倍を抱えている。

その彼らが槍を構えて突撃しようとしているのだから、参謀からすれば心もとないのだろう。

しかし、俺はそれを一笑に付する。

何故ならクロスも前線に突撃兵を送り込んで突進を開始した。

「あの槍は」

まあ、サラにとってもあの槍に見覚えがあるだろう。

何せあの槍は通常のと比べて何と約3倍の長さを誇る。

それらを一列に構えているのは壮観だった。

普通ならそんな槍など重くて持てないし、それ以前に作る前に折れてしまうのだが槍の中を空洞化させさらに金属配合を調整して強度を維持し、さらに槍を腰に装着させることによって持ち運びを可能としていた。

そのあまりのリーチの差に向こうはなす術無く打ち取られていく。

キルマーク騎士団長は不利と悟ったのだろう。

突撃兵を引つ込め、前線に大楯部隊を配置する。

「どつするの？ あれを破るのは容易じゃないわよ」

王国騎士団の陣の幅はこちらの倍はあり、特に最前列から2、3段目まで大楯を構えているので容易に打ち崩せないだろう。

しかし、俺はその懸念に首を振って。

「まあ、見ておけ。こちらの騎馬隊が出るぞ」

クロスの方から騎馬に跨った騎士が大楯部隊に守られながら王国騎士団へと接近する。

「どうしてあんなにバラバラなの？ 普通は密集させて使うものでしょっ」

ベアトリクスの指摘通り、騎馬隊の真の実力はその突破力にある。

そして、それを十分に生かすためには密集させるのが合理的なのだが、こちら側は百人単位で集合させた騎馬隊を各地に散布し、さらに彼らは方円陣を構えていた。

「さて、出来るかな」

序盤において最難関ともいえるこの局面をどう乗り切るのか俺も固唾を飲む。

騎馬隊がもう少しで敵と接する時、一際大きな銅鑼の音が鳴り、それを合図にして、100程度の騎馬隊の軍勢が動きを変える。

方円の陣形を組んだまま左周りまたは右周りまたは騎馬隊は陣形の円を回転し始めた。

それは戦場にいくつも出来た小型の台風。

こうして、高みから見下ろしている俺達は一目瞭然だが、向こうは何が起こったかが全く解らないだろう。

正面に居たはずの敵が、いつの間にか側面に居り、一瞬にして消えた様な錯覚に陥っているに違いない。

しかも、まるで途切れる事のない騎馬隊の側面攻撃を受け、兵士達は恐慌状態となっているはずだ。

「これは……」

ベアトリクスも始めて見る新戦法に目を丸くしている。

参考は戦国武将 上杉謙信が用いた車掛かりの陣。

風車の如く騎馬隊を回らせることによって敵に間断なく攻撃を仕掛けられるという利点がある。

ただ、この戦法は上杉謙信しか使えなかったという逸話の通り、習得するのに相当な技量が必要となる。

だからこそ俺はジグザールへ赴任した当初から2年間、この陣形を使える部隊を編成して、叩き込んでいた。

まあ、人間相手に使うことは予定外だったがその効果は実証された。

王国騎士団の陣列はスタスタに引き裂かれ、あちこちで逃げ惑う兵士が確認できる。

「……これは戦い方の歴史が変わるわね」

ベアトリクスは、その言葉を聞きながら俺は考える。

序盤は完勝。

魔道騎士団を無力化させ、敵の大楯部隊を打ち破って陣に食い込んだ。

「はてさて、次はどうなることやら」

戦いは中盤へと移り始めていた。

対王国騎士団 前編（後書き）

ベアトリクスはドSですから受けに回ると弱くなります。

対王国騎士団 後編

「左翼に伝えよ！ 戦線を拡大せよと！」

隣のレオナが矢継ぎ早に各部隊に指示を出している。

俺が率いるジグサール騎士団はユウキの装備と長年かけて仕込んだ奇妙な陣によってエリート王国騎士団に痛撃を与えて前線に張り付くことができたぜ。

「しかし、なんとまあ圧巻だな」

ここからは遠目にしか見えないが敵の王国騎士団の前線は混乱し、指揮系統が引き裂かれたせいかわの抵抗もなく俺達に打ち取られている。

「このまま勝負がつけば嬉しいのだがな」

レオナがそんなことを呟くが、俺はそう甘くないと見ている。

「レオナよ、希望的観測は述べるべきじゃないぜ」

兵士ならともかく、指揮官が希望にすぎるといざという時に正しい選択が取れなくなっちゃう。そうなると勝てる戦も勝てねえから甘い予測は禁物だ。

「ハハハ。冗談だ、それくらい分別がついている」

「変な冗談は止める」

俺がそう言い放つとレオナは首をすくめて。

「やれやれ、本当に今のクロスは容赦がないな。これがヘタレのクロスなら苦笑して終わりなんだが」

「今の俺はあまり冗談が好きじゃないんだぜ」

レオナはあまり堪えた様子がないのだが、これ以上話しても無駄だと悟ってそう言っただと無理矢理打ち切った。

「しかし、王が作った装備は凄まじいな」

またレオナがそんなことを呟くのだが、俺はそれに同意な何でもない。

通常、戦というのは数が最重要で次に装備、そして最後に士気がかかる。そして、誤解されやすいのだが指揮や練度というのはそれら3つを如何に効率よく運用するためにあるのであり、勝利の因として重要な要素だが、絶対でない。

極論を言つと10人の農民に槍を持たして突撃させた方が2、3人の兵士による攻撃よりも効率が良い。

つまるところ数がモノを言うのだが。

「寡兵が大軍を圧倒している景色は壮観だぜ」

向こうが6万でこちらは3万しかいないのに、状況は終始優勢だ。

まあ、さすがにこれだけの数になると全兵をぶつけるわけにもいかないから、部隊の運用が重要になってくるのだが、それを差し引いても数というのは重要だ。

しかし、現在はこちらが勝っている。

もちろん指揮や練度によるのもあるのだが、一番の要因は装備だろうな。

「見るよ、あっちの攻撃が全然通用していねえ」

視線の先には鉄仮面や鎧、鋼の脛当てで固めた重装歩兵が縦横無尽に動いている。

本来ならああいう兵種は相手の陣地を突破するための使い捨てとして突撃させるのだが、こちらはその常識を覆して軽装歩兵とはいかないまでも機敏な動きを維持していた。

しかも恐ろしいことにあれが特殊なのでなく、普通の一般装備として俺達の騎士団では標準装備だもんな。

普通あんな重装備など身に着けたらあまりの重さに動けなくなるものだが、そこはあいつの技術によって強度はそのまま、格段に軽くしたもんな。

俺が昔装備していた材料である鋼を全員に着られるよう改良し、そればかりか大量増産できるまでの設備を整えたユウキはすごいぜ。

敵ながら同情するしかないかもな。

あんな弓矢はおるか剣も槍も通せない鉄の塊に襲われ、さらにこちらの楯や鎧は容易に切断されるんだ。

俺だったら逃げる一択だな。

「……ん？」

思索から浮かび上がった俺は前線に目を向けると何か異常が起きていた。

竜騎兵が攻撃しているのは予想通りだが、それにしても混乱が大きい。

「一体何が起きている？」

レオナも同じ疑問を浮かべたのだろう、そんなことを呟く。

そうしている内に連絡将校が陣内に入ってきたな。

「報告します！ 敵は竜騎兵を投入した模様、こちらの指揮官が狙い撃ちにされています。さらに相手は風や炎など属性を操る武器を扱う一団によって指揮官不在の隊は混乱しています！」

なるほど、そういうことか。

あちらはついに奥の手である竜騎兵と属性武器を投入せざるを得なくなっただか。

数体しかいない竜騎兵はその活用によって大きな効果を上げる。

地上なら指揮官の場所にまで辿り着くまで一苦労だが、空からだと一瞬で向かうことができる。

そこから指揮官を狙われると、たとえ殺せなくとも命令を出すことが困難になり、結果として指揮官が打ち取られたと同じ状態になってしまつし、誰かを掴まれて空中に惨殺されるとこれ以上ないくらい心理的ダメージを与えられてしまふ。上空から仲間の血を浴びせられて平静でいられるのはごく僅かだしな。

また、属性武器による攻撃も厄介だな。

あれは範囲が広いとはいえ1mから2mぐらいまでなので落ちて着いて対処すれば問題ないのだが、いかんせん視覚による効果が大きい。

目の前でカマイタチや氷槍、炎を生み出されてそれが向かってくるとなれば、経験がないと足がすくみ上ってしまうだろう。

しかもそれはユウキが作っていた属性武器なのだから性能も大きいだろう。

全く、変なところで手間をかけさせてくれるな。

まあ、属性武器に関しては俺達の方が量も質も上だからすぐに鎮圧できるが、問題は竜騎兵。

あれは早急に対処しないとこちらの被害が大きくなる。

「俺が行くか。レオナ、切り札である重装騎兵を準備させておいてくれ。これが終わったら敵が浮き立つだろうからそこで勝負を決め

る」

本来なら別の手練れを向かわせるのが常であり、俺のような大将が戦うどころか武器を手にとること自体おかしいのだが、そこはまあ性だ。

どちらかというとなんは前線で戦いたい性質なのだ。

「……止めても無駄なのだろうな」

レオナが呆れ顔で呟く。

さすがだな、俺の性格をよく分かっている。

「当たり前なことを言うなよ」

「危ないと思ったらすぐに退いてくれ。私はお前に死んでほしくないからな」

うーん。その言葉は嬉しいが副官としては頂けねえな。副官というのは大将の補佐だが、それ以外にも大将に万が一があった場合、代わりとして振る舞う役目もある。

レオナのことだから取り乱すことはないに決まっているが、そんなことを言われると不安になっちまう。

今のレオナは戦時における厳しい顔だが、よく観察してみると瞳の奥が僅かに揺らいでいるな。

まあ、いいだろう。

レオナは俺の恋人でもあるのだからな。

不安を取り除くのも俺の役目だ。

そう判断した俺はレオナの肩に手を置き、驚いて顔を上げた瞬間に口付けた。

それは1秒にも満たない短い時だったが、俺の意図は十分に伝わっただろう。

「行って来る」

俺のその言葉にレオナはただコクリと頷くだけに終わってくれた。

余談だが俺とレオナの仲は幹部全員が知っている。

「俺がジグサール騎士団將軍　クロスⅡカザクラだ！　誰か俺の首を狙う猛者はいないのか！」

戦場の中陣で俺はそう吠えて己の存在をアピールする。

俺が立っている場所は前線から離れているので地上の敵に狙われる心配はなく、上空の敵だけに限ることができた。

「しかし、まあ。この恰好は良いな」

剣を握らない俺は嫌がっているが、今の俺は何故嫌うのかがわか

らない。

見よ、この全身を紅蓮に染めた甲冑に真紅のマント。

他の兵の鎧は灰色だが、俺はさらに背丈が2 mもあるので目立つことこの上ないだろう。

その証拠に中央の敵兵が俺を討ち取ろうと慌ただしく動き始めてきたな。

そんなことを考えていると俺の上空に5体の竜騎兵が集まる。

ふむ、どうやら一発逆転を狙って全ての竜騎兵を向かわせたらしいな。

肩慣らしにはちょうどいいな。

俺は一つ頷き、急降下をしてきた竜騎兵を手に持った獅子の剣で竜ごと真つ二つに叩き切った。

絶命する瞬間の兵がありえないとばかりに驚愕に染まっていたが、それは仕方ないだろうな。

けどな、残念ながら俺はキツカとよく戯れているんだよ。

あのギールとかいう野生の竜と比べれば飼いならされた竜の鱗など紙のようなものだから簡単に切断できる。

2体目の竜騎兵が俺の射程範囲外でのみ攻撃しようとしているが無駄なことだ。

この獅子の剣は炎と光を付与させているんだなこれが。

俺が獅子の剣を一振りすると金色の炎が出現して襲いかかり、竜騎兵を跡形もなく燃やし尽くす。

「さてと、次は」

こうなれば玉碎覚悟と心に決めたのだろう。3体が集まってこちらに突進してくる。

「まあ、意味ないがな」

俺はその重装備をもともせず軽快に立ち回り、数秒後には竜騎兵全員が全滅していた。

よし、これで俺の仕事はあと一つだ。

俺は血に塗れた剣を掲げる。

「強敵！ 竜騎兵は始末した！ 後は怨敵を討つだけだ！ 最後の勝負だ！ 士気を奮い立たせよ！」

味方の士歓声が湧き上がると同時に重騎馬隊が俺の後ろへ整列する。

さあ、後は詰みだけだ。

「どつだ、サラ？」

ベアトリクスが「竜騎兵を殺さなくていいじゃない、あれは貴重なのよ」とぶつぶつ呟いているのを放っておき俺はサラに向き直る。

趨勢はほぼ決定し、後はキルマークを討つだけになっている。

中盤も圧勝の一言だった。

向こうがいくら攻撃を仕掛けようとこちらは傷一つつかず、逆にこちらの攻撃は相手を面白いように葬る。

こちらは何もしなくとも勝手に自滅していつてくれる。

そして、その状況を作り出したのは間違いなくサラが絡んでいる。

サラの生み出した武器や防具が敵とはいえ命を刈り取っている事実をどう考えているのか。

「もし耐えられないのであればジグサールを去ってもいい。俺はお前を引き留めないし、これまでの謝礼も払おう。おそらく一生遊んで暮らせる額だから生活に困ることはないだろう」

正直に言えばサラは残ってほしい。

ジグサールの工業力はすでに最高水準とはいえまだまだ満足していないから、さらにはもう少し協力してほしいのだが、サラの親父さんと約束がある。

サラの親父さんはサラの幸福を願って俺に送り出してくれたのだ

から、それに応える義務がある。

だからサラがここを去る言うならば俺はそれに従うのだが、もしサラがこの景色を見て興奮しているようならば、俺は……

「……父が残した手紙に書いてありました」

ポツリと語りだすサラ。

「自分達は不幸を生み出す職業でもある。いつの日か己の所業を振り返り、後悔する日が来るだろう。しかし、どれだけ悔いても人も魔物も戻ってこず、失われた命は還らない」

それは概ね合っている。

鍛冶といえは聞こえはいいが、詰まる所生き物を殺すための武器を作り出している。

いわば死の商人。

言い訳などできない。

「そして！ だからこそ逃げるなど！」

瞳に涙を浮かべながらサラは叫ぶ。

「泣いてもいい！ 怒ってもいい！ 悲しんでもいい！ けど、鍛冶を止めるなど！」

大声で、あらん限りの力を振り絞って声を出す。

「葬った命に悔いがないためにも！ 最後まで続ける！ ……と、書いてありました」

「……」

サラの父親がそんなことを書いていたとは。

意外だったが、そう考えると色々納得いくところがある。

同じ鍛冶仲間からどれだけ弾圧を受けようともびくともしなかったのは、そういったことをずっと心に刻んでいたからなのか。

死を覚悟した人間は強いというか、確かにそんな信念があればそんな中傷なんてものともしないよな。

「……サラ、一つだけ訂正しておく。サラに罪はない。もしあるとすればお前に鍛冶を教え込んだ俺だ。何も知らないサラに武器や防具を作らせた俺こそが無間地獄へ堕ちるべきなんだ」

俺はサラの頭を撫でながら優しく囁く。

「だからここで辞めたとしても誰も責めない。もし何か弾劾されようともそれは俺の責任だ……しかし」

「ここから先は私の責任になるんですよね」

サラは俺の言葉を引き取る。

眼元こそ濡れているが、無理に笑おうとしていた。

「師匠、私は逃げません。父の言葉通りに私は見届けようと思いません。これから先、私の武器がどこに行くのか、何の命を葬るのか」

サラの言葉は決意に溢れている。

「今までありがとうございました。私、サラキュリアスは今まで師匠に甘えていました。しかし、これからは違います。これからは私自身が自ら立ち、選び、傍に参ります。王　ユウキジグサリアスカザクラ様。王のために私の持てる限りの技能を尽くしましよう」

そしてサラは俺の右手を取って額に当て、臣下の礼を取った。

「感動的な場面で悪いのだけど」

ベアトリクスがじと目でこちらを睨んできたので俺は慌てて前へ向き直る。サラも先ほどまでの気恥ずかしさから顔を真っ赤にしているようなのが横目で確認できた。

「あのままだとクロスは死ぬわよ」

ベアトリクスの指している方向には重騎兵隊を率いていたクロスが単身敵の総大将であるキルマークがいる陣へ強襲を仕掛けるところだった。

ベアトリクスは続ける。

「この謀略がリーザリオ帝国によるものだとするれば敗北したキルマーク兄様を生かしておく理由はないわね。もし私ならあそこへ突っ込んだクロス諸共伏せておいた魔導師で殺すわよ」

確かにすでに勝敗は決定しており、どう転んでも王国騎士団に勝ち目はない。しかし、何を血迷ったのかジグサル騎士団を率いるクロスは本陣へと突っ込んでいる。これならいっそ巻き添えにさせた方が後々有利に働くだろう、が。

「クロスなら死なないだろ」

俺はそんな呑気な感想を漏らす。

「は？ どういうこと？」

やはりベアトリクスは信じられないようだ。目を見開いて俺を見つめる。

だから俺は肩をすくめて。

「まあ、見ていればわかる」

そう諭した数秒後にキルマークがいるであろう本陣に火の手が上がる。

その炎は普通でなく、黒いことから魔法によって生み出されたものであることは容易に理解できた。

「火と闇を融合させた黒炎ね。あれは水じゃ消せず、燃え尽きるか光属性をぶつけるかそれとも術者の魔力が尽きるかしかないわ」

炎はどんどん勢いを増し、ついには本陣全てが黒い炎に包まれた。突然の出来事に味方はおろか敵さえも見入っていた。

そして、燃え尽きるものがなくなったらしく、黒炎の気配が弱まる。

「な、言ったとおりだろ」

そして、奥からのそりとしながらも真紅の甲冑に身を包んだ者が現れた。

「クロスの鎧は特別製だ。あれはどんな魔法も効かない」

神話に登場するオーディーンの名を冠したあの甲冑には一般の魔導師による攻撃など効きはしない。

あれにダメージを与えようと思ったら俺達が擁する魔法騎士団の団員全ての全魔力を結集した魔法をぶつけないと駄目だな。

そんな伝説クラスの甲冑を身に纏うクロスは手に持った獅子の剣を掲げながらこう叫ぶ。

「王国騎士団団長キルマーク!! シマール!! インフィニティ!! ジグ
サール騎士団騎士団長　クロス!! カザクラがこの手で討ち取った
!」

ここからはよく見えないが左手に何かスイカのようなものを抱えているからあれがそうなのだろう。

するとあちこちで絶望やら歓喜の声音が上がり、そして「ジグザリアス！」と連呼が始まる。

俺はその様子を睥睨しながらベアトリクスに声をかける。

「お前の兄は討ち取ったぞ。何か思うところはないか」

裏切られたとはいえ血縁の繋がった者である。

ベアトリクスから何かしら感傷のセリフをでも言うのかと思っ
ていたが。

「……素晴らしいわ」

「は？」

ベアトリクスは震える声音でそう呟き、俺へと向き直る。

その表情は興奮と歓喜　間違っても悲哀の色は見えない。

「本当に素晴らしいわ！　あの王国騎士団が相手にもならない！
それどころか魔道騎士団さえも無力！　何これ？　どうしてこんな
に強いのに！　これならリーザリア帝国から守るどころか三国を狙え
るわ！」

アハハハハハハ！

とベアトリクスは狂ったように笑う。

笑え、嗤い、晒う。

どうやら兄であるキルマークのことなどどうでも良いようだ。

「我が君！」

そして哄笑がピタリと納めて、改めて真剣な表情で向き直る。

「今までの非礼、申し訳ありません。このベアトリクス＝シマール
＝インフィニティは我が君に栄光を捧げることを誓います」

そう言った後、また笑い始めるベアトリクス。

何故だろうか？

サラの時と違って安堵よりも不安の方が勝っているのはどうして
なのだろう。

理由についてはおおよそ見当がついているが、それはあまり考え
たくなかった俺がいた。

「緊急連絡！ 緊急連絡！」

サラの要望によりイズルガルドの背に乗って戦場周辺を滑空して
いると緊急用の赤旗を掲げた2体の竜騎兵がこちらに接近し、用紙
を渡してきた。

「……やはりか」

その用紙に書かれた内容が予想通りだったため俺は渋面を作る。

「うふふ、楽しくなってきた」

ベアトリクスは楽しそうだ。

「あの？ どうしましたか？」

この中で唯一用紙に目を通していないサラが聞いてくる。

「簡単よ、サラ。ついに来たのよ」

俺の代わりにベアトリクスがそう答えるのだが、それだけでは何も分からないだろうと思ったので俺は補足する。

「北のリーザリオ帝国が軍隊を動かした。その数20万」

「えっ！？ つまり……」

サラもここまで言うと言ったの理解したのだろう。

しかし、それだけでない。

「さらにバルティア王国も国境線に軍隊を集めている」

二か国同時進行、その予想が現実のものとなりつつある。

「し、師匠！ どうします？ このままではいいように蹂躪されま
すよ」

サラはそう慌てるのだが、残念ながら俺はそんなに脅威とは考えていない。むしろこのタイミングで良かったとさえ安堵している。

「ベアトリクス、アイラ率いる『林』と共にリーザリオ帝国を撃退しろ」

「承知しました我が君」

続いて1体の伝令兵に目を向けて。

「『火』のユキと『風』のキツカに連絡。早急にバルティア帝国の首都を攻めろと」

「はっ！」

「『山』のクロスはそのままカリギュラスへ侵攻。シマール国の息の根を止める」

「分かりました！」

そう言い終えた俺は一息つき、そして最後にこう宣言する。

「これよりシマール国、リーザリオ帝国そしてバルティア帝国の三か国を同時に征服する」

魔物大侵攻まで後4か月。

木枯らしの風が嫌に体に染みだした。

対王国騎士団 後編（後書き）

ようやく終わりました。
はあ……長かった。

戦準備（前書き）

キリが良いのでここで区切ります。

戦準備

私 エレナ「グランシリア」「イーブルブルは憤慨していた。

先日私が王と仰ぐお方 ユウキ「ジグサリアス」「カザクラからの要請によってこのリーザリオ帝国と国境を接する砦を守衛しに来たのはいいのだが、先に到着していた輩の存在が気に入らない。

そいつは王の命令によって参謀として来たらしいのだが、その態度や行動が最悪だった。

先ほども挨拶の際に。

「こんにちは、私が美少女仮面 オマエ「バカダローよ。よろしくね、アハハハハハ」

と、クルクル回って踊りだしたのは百歩譲って認めるにしても、そのふざけた名前は何事か！

だから私はそいつを有無も言わず放り出そうとしたのだが、それは側近であるキリングに固く諫められる。

「エレナ様、お止め下さい。このお方は王の使者です。それを無下に返されましたら不興を買うのは必死です」

ふむ、それは確かに困るな。

私の才を認めてくださったあのお方を怒らせたくはない。

「そして、最も大事なことですが、このお方はベア」

「はい、ストロップよキリングちゃん」

キリングが何かを言おうとしたのだが、その直前にあの仮面少女によって口を塞がれる。

「今の私は美少女仮面　オマエはバカダローよ。わかっているわね？」

仮面を被っている上からでも分かる。

今、こいつは笑っているだろう。

私がどんな反応をするのか楽しみで仕方ないような表情を浮かべている。

しかし、私はそれ以上に。

「この下郎！　キリングに馴れ馴れしく触れるとは何事か！？」

「ふーん、あなたはこういう態度を取られるのが嫌なのね」

すると私が激昂するに比例してオマエと名乗る者はどんどん冷めていく。

「まあ、単なる私の見込み違いということでは構わないわ……先程の無礼をお許し下さいエレナ子爵、私の本当の名は」

「　いせ」

急に畏まった態度を取り始めた彼女に私は脊髓反射の如く否定する。

どうしたのかと首を傾げるオマエに私は頭をかきながら。

「……そのままでもいい。すまないな、私も気が立っていた」

どうして私が謝らなくてはならないのかわからなかったが、ここでオマエに畏まられると後々大変なことになると私の勘が告げていた。

するとオマエはクルクルと回転を始め。

「そうよ、それこそエレナ子爵よ。良かったわね、もう少し遅れていれば面白いことになっていたわよ。アハハハハハハハ」

オマエは何が嬉しいのか前よりも一段階高い音程で哄笑を挙げた。

「……命拾いしました」

隣のキリングが心底安堵した様子でそう呟いたのが印象的だった。

「で、オマエ殿。我々はここで敵を食い止めればよろしいのですか？」

このワイマール砦には北方警備隊と私の部下を合わせて10000人が集結している。

もつと数を揃えればいいのだが、生憎と今は亡きキルマーク騎士団長がここに最低限の兵だけ残して先の内戦に連れて行ってしまった。

まあ、地形的にも両脇は崖のようになっているので脇から突かれることもなく、守る側としては正面だけ相手にすればいいだけだから楽といえば楽なのだがこの数では……

「敵国の中に魔導騎士団や10体もの竜騎兵が確認できたという。もし彼らに連携されれば私達では荷が重いのだが」

しかもここには魔導騎士団と竜騎兵を常備していたのだがそれも徴収されてしまい、現在残っているのは歩兵だけだ。

本当にキルマーク騎士団長はなぜこのような暴挙を敢行したのか。

この国を滅ぼしたかったのかと疑ってしまう。

そんなことを考えているとオマエ殿は鼻をフンと鳴らして。

「あなた馬鹿？ 誰が私達だけで相手をするというの？ ちゃんとこちらも『火』と『風』を用意するわよ」

……ここで怒っては駄目だ、オマエ殿はこのように人を不快にさせることが大好きなんだから。

「勘違いしているようだけど、私達の任務は水際で相手の侵攻を止めることじゃない、住民が避難するまでの時間を稼ぐことよ」

オマエ殿は続けて。

「本来の予想ならもっと侵略が遅れると考えていたのだけど、我が君率いる騎士団『山』が圧勝し、大して損耗しなかつたから向こうが慌てて進軍を始めたのよ。だから残された住民の移動が終わるまでここで敵を足止めね」

「何故籠城を選ばないのですか？」

リーザリオ帝国の兵は強い代わりに兵站に不安がある。だからこゝは兵法の道理に従って籠城し、持久戦を行うべきでは。

昔からシマール国はリーザリオ帝国からの侵攻の度にそうして跳ね返してきたのにどうしてそれを踏襲しないのか気になった。

するとオマエ殿は肩をすくめて。

「まあ、私もそれが一番だと思っただけだね。けど、事情が変わった。リーザリオ帝国はシマール国の反対側にあるバルディア皇国内通しているのよ。もし、リーザリオ帝国と持久戦を行っている際に南から攻め込まれるとどうなると思う？」

確かに。

暴政と内戦によって疲弊しているこの国に同時に二方から攻め込まれて撃退できる力は残っていない。もしリーザリオ帝国と持久戦によって疲れ果てた時に南のバルディア皇国から攻め込まれては本当にこの国は終わるだろう。

「なるほど、それは持久戦などできませんな」

敵はリーザリア帝国だけでない。

弱みを見せてしまった国はすぐさま他の国から侵略を受ける道理を忘れていた。

「しかし、よく気づきましたな。さすがは我々を生かした王」

ここは素直に称賛するしかない。

如何に己の視野が狭いのかを自覚させられる。

「そうね、本当に我が君は素晴らしいわ。策略や智謀においては誰にも負けない自信があるけれど、視点の高さにおいては我が君に勝てる気がしないわね」

オマエ殿もそこは素直に同意する。

「私は本当に良い君主を見つけれられたものだ……」

しみじみと私は呟くのであった。

「それで、我々は何日ほどここを守る計算で」

王の慧眼の深さにしばし感動した後、私はオマエ殿にそう聞く。

「おおよそ2日というところね、それだけ持たせれば私達は撤退よ」

「承知した」

10000という数は心許ないが2日なら先鋒の2、3万を相手にする程度だから大丈夫だろう、その期間だけならこの私でも十分に対応できる。

「ああ、そうそう」

オマエ殿は何かを思いついたようにポンと手を打った。

「最初の策と撤退の際における置き土産についての策を献上しても良いかしら」

それは嬉しい。

恥ずかしながら私は普通の考え方しか出来ぬのであつと驚くような策を思い付くことが出来ない。

少しでもこの状況が有利になるのであれば良いに越したことはなかった。

「……ウフフフ。私を嵌めた報いを十分に受けてもらおうかしら」

オマエ殿が何かをブツブツ呟いていたが、声が小さかったので私の耳にまで届かなかったことを追記しておこう。

焦土作戦（前書き）

グロ注意

焦土作戦

「で？ まんまとやられたと？」

先遣隊の隊長である男に詰め寄ると、男は恐縮しながらも頷き、言い訳を始めた。

男からの報告はこうだ。

一昨日 男はワイマール砦に辿り着いたのだが、その砦は門が開け放されていた。

不安に感じたので先鋒隊2万のうち半数を連れて門へと接近し、そしてあと50歩のところまで到達すると、門の内側から魔物の咆哮が鳴り響き、次の瞬間には興奮したケルベロスやビッグガゼルなどが大挙してこちらに襲いかかり、混乱の極みに陥ったとおろで向こうが騎馬隊を出撃させたのでこちらの兵は魔法騎士団を含む7000の死傷者が出たと。

「何よそれ！？ そんなの典型的な空城の計じゃない！ 何で見破れなかったの、あんたは何を学んでいた！」

私はそう詰め寄るのだが向こうは謝るばかり。

私はそれに辟易して溜息を吐いた。

私 リーザリオ帝国第3皇女のヴィヴィアン＝リーザリア＝ト

ルツエンは非常に不機嫌だった。

私の仕掛けた謀略によってシマー国は弱体し、内戦にまで持ち込んだところまでは全て思い通りに進んだものの、あの邪魔な第1王女のベアトリクス殺害の疑いをカザクラ男爵に被せてからおかしくなった。

ジグサリアス王国の設立を宣言したのは良い。

しかし、その後の貴族連合において有能な者だけを残し、シマー国最強の王国騎士団との戦いでほぼ無傷だった。

時間を置いてしまうと向こうがどんどん有利になると判断した私は予定より早く軍事行動を起こさなければならなくなったおかげで糧食が十分に確保できず、こうして見切り発車をする羽目になってしまった。

もし、こちらの糧食が尽きてからバルディア皇国が行動を起こしてしまうとこちらは良いように利用されるだけで終わってしまうだろう。

バルディア皇国だけが利するわけにはいけないので当初はワイマール砦の前で持久戦を行うつもりだったのだが、その予定は大幅に狂ってこうして侵略行動を起こさなければならなくなった。

「全く、本当に予定通りにいかないわね」

もし普段の私を知っている者が今の私を見たら腰を抜かすだろう。それぐらい今の私の顔は憤怒で彩られているわ。

6歳から現在までの11年間手入れを繰り返したこの髪は黄金のように美しく、美貌においても入念に手を加え、いつも柔らかな微笑みを浮かべるよう訓練し、このスタイルを維持するために毎日運動を繰り返した結果、リーザリオ帝国においては私より美しい者はいないとの評判だ。

そして、智謀においても指揮においても私に敵う者はいない。私の戦略の前にはリーザリオ帝国お抱えの参謀でさえも舌を巻くほどだ。

そんな私に唯一足りないもの それは立場。

私の上には3人の兄と2人の姉がおり、私は末っ子なのでどんなに頑張ってもどこかの国に嫁がされてしまう運命だ。

私より無能な人間が私の上に立つなんて許せない。

なら、どうするか。

簡単だ、実力を示せば良い。

私こそが国を総べるものだと周りに認めさせれば良い。

だからこそ仇敵であるシマール国を乗っ取るうとしたのだけど、結果はご覧の様。

正直今の状況は芳しくない。

軍を引くことも視野に入れるべきだ。

しかし、軍を引いてしまうと私の今までの努力が水泡と歸し、2度と挽回のチャンスはないだろう。

だから私は無茶を承知で軍を進めたのだけだ。

「……まだ進まないの」

私の視線の先にはワイマール砦の外壁に梯子をかけて登っている兵士と門を防いでいる土砂を崩し、ここからは見えない位置にある堀を埋めている作業が映っていた。

「大丈夫です。これなら明日にでも通れるようになります」

副官がそんなことを言うてくるけど、その1日がどれだけ貴重なのか分かっているのか。その間に向こうはまんまと撤退し、こちらの迎撃の準備を整えているだろう。

「どうしようかしら」

道は2つある。

1つは早さを尊び少数の兵で進軍させる方法ともう1つは移動速度は犠牲にしながらこのまま大軍で進ませる方法よ。

少数の兵で先行させる方法は兵糧の関係から望ましいけど、こんな敵地で寡兵を進ませることがどれだけ危険か。

そうなると必然的に大軍になるけれど、そうなると問題になるの

は兵糧。

兵糧は国から送られてくるので距離が空けば空くほど移動距離が長くなる。そうになると危険なのが竜騎兵軍団ね。

リザーリア国は10体だけど、向こうはその3倍の30体を保持している。

彼らから糧食を守るために普段の倍以上の護衛兵を付けないとまずいわね。

「……やはり現地徴収しかないか」

どう考えても寡兵では無理なのだから大軍で行くしかないわ。

そうになると大量の食糧が必要となるからそれは送られてくる食料のほかに現地で賄うしかない。

幸いにも今は秋の終わりなのだから民家に備蓄はあるだろう。

「全軍に伝えなさい。食糧は現地で徴収するように」

2日間でどれだけ逃げれるか分からないけど、突然の事態に半数以上はまだ残されているだろう。その彼らから食糧を奪えば何とかなるわね。

私はそう自分に言い聞かせるように頷いたわ。

「……焦土作戦」

私は手のひらに爪が食い込むほど固く握りしめながらそう呟いたわ。

斥候からの情報によると辺りには人どころか民家もない。田畑も全て焼き払われ、井戸には毒を流し込む徹底ぶりらしい。

さらに嫌な報告は続く。

時折どこからか水稻と槓を括り付けた羊や牛が小隊の前に現れるのだが、それを食べた小隊の兵士は久しぶりの食事のため気が緩み、次の日には行方不明になっているそうね。

行方不明となった兵士はともかく、今の状況はまずいわね。

夜中になると竜騎兵が現れて鐘の音を鳴り響かし、私達を安眠させないのよ。

おかげでこの数日は私も寝不足だわ。

私達の兵がいくら飢えと逆境に強いとしても、常に腹をすかせ、夜中は安眠できずさらに時々仲間が行方不明になるという状況は彼らの士気を著しく下げているのよ。

「……このままだと戦わずに負けてしまうわ」

領内に入ってから一戦も戦っていないのに自軍はすでに敗北の空気が漂い始めているわ。

これでもう一つ何かがあれば彼らは完全に心を折られる。

「早いところここを抜けないとね」

この領地さえ抜ければ産業都市ジグサルまで目と鼻の先だ。あそここの周辺は有名な穀倉地帯なので自軍の士気も回復するだろう。

私は何も無い荒涼とした野原に目をやりながらそんなことを考えたわ。

私は完全にカザクラ男爵を見誤っていた。

彼も人間なのだからそこまで残酷なこととはできないとたかを括っていたのが仇となった。

よく考えれば彼は浮浪者から王へと成り上がった者。

清濁併せ呑める強さを持っていることを失念していたわ。

「ザール！ ケイン！」

兵士の誰かが旧友の名を呼んだのだろう。

しかし、それは珍しいことじゃなく、軍のあちこちで起こっていた。

今、私達の軍は目の前の光景によって完全に息の根を止められたわ。

そこは大きな街道に沿って無数の十字架が立てかけられている場所よ。

それだけだったら別に構わない。

けど、その十字架に張り付けられているのが行方不明になっていた兵士だとすれば、その衝撃は計り知れないわね。

死体には蠅と蛆が湧き、酷い悪臭が漂うこの光景にはさすがの私ですえも食べたものを戻したわ。

これが地獄なのかしら。

歩いていた兵士が突然止まり、反転して逃げ出す。

一人がそうなる後も続き、いくら隊長が押し留めようとしても無駄だった。

「……………負けたわね」

敵であろう一騎の竜騎兵がこちらに向かってくるのだけど、誰も迎撃しようとしなない。

そんな光景を眺めながら私はポツリと呟いたわ。

焦土作戦（後書き）

悪魔 ベアトリクス復活！

参考元はヴラド・ツェペシュです。

三國統一

「リーザリア帝国第3王女　　ヴィヴィアン＝リーザリア＝トルツ
エンで間違いないか？」

場所はジグサリアス王国の首都ジグサール。

ジグサールの中央役所の一室にある簡素な部屋にいるのは俺とベアトリクスと仮面を被ったメイド、そして縄で縛られさらに猿轡を噛まされている者だけだった。

「……」

身を整えれば女神と称えられそうなほど美しい容姿にも拘らず、今は敗北による憤怒と嘆きと疲労で見る影もない。

これでもまだ見れる方になっただけらしい。

舌を噛み切ろうとする彼女を無理矢理風呂に入れてさらに化粧を施してようやく今の状態なのだから、如何に彼女がこの現実に屈辱を感じているかがわかる。

「彼女は殺しておいた方が良いわよ。後々面倒なことになってしま
うわ」

ベアトリクスの言葉通りに一般の慣習に従うのならそうなる。

ジグサリアス王国を窮地に追いやった張本人なのだからそうなくても仕方がないと言えるのだが、俺としてはもう終わったことなの

でその責を負うのでなく、むしろこちらの幕下に入ってほしいと考
えている。

もし俺がいなければヴィヴィアンは冗談抜きでシマール国を滅ぼ
していたことは1人を除き、全員が納得する事実だ。

「失礼するわ、私がいるのに滅ぼせるわけがないじゃない」

とは謀殺されかけた某王女の弁。

「ヴィヴィアン、一つ聞くがお前は私の幕下に入る気はないか？」

考えていても仕方ないのでまずは言葉にして聞くのだが、ヴィヴ
イアンは俺を馬鹿にしたように笑う。

目が言っている　ありえないと。

「ほら、やはりここは殺した方が良いわよ」

ベアトリクスが横で囁いてくるが俺は無視する。

「ほう、つまり下でなければいいのだな」

「……？」

ここでヴィヴィアンが首を傾げたので俺はクックと笑い。

「なに、私はヴィヴィアン＝リーザリア＝トルツエンを妃に迎えよ
うと考えている。さて、その返事は如何に？」

この言葉はさすがに予定外だったのだろう。ヴィヴィアンは顔を驚愕に染めて硬直していた。

俺はさらに続ける。

「お前は誰かの下につくことが嫌だと言ったな。なら、俺の隣につけばいい。そうすれば問題はないだろう」

ヴィヴィアンの様子から自殺する気配は消えたと判断して俺は彼女の前に膝をついて自ら猿轡と縄を解く。

これで俺とヴィヴィアンとの距離は20？もなくなった。

「アハハ……面白い冗談ね。そんなに私をからかいたいの？ 嘲りたいの？ そんなことをしても私はともかくあなたにメリットがないじゃない。もし私と契りを交わせばジグザリアスは崩れるわよ」

ほう、混乱した状態でもそこまで頭が回るのか。これはベアトリクスとは違った意味で賢いな。

「そうだな、確かに今のお前ではデメリットの方が大きい」

そこは認めよう。

いくら国民からの求心力が高くても侵略してきた者と結ばれれば一気に離れてしまう。

しかし。

「国民に納得させる方法がある、それはお前がリーザリア帝国を滅

ぼすことだ」

納得させるには手土産が必要だ。

後ろ指を指されないほど見事な成果を持ってこれば国民も納得するに違いない。

「お前をリーザリア帝国討伐軍の総大将を命ずる。そしてもしリーザリア帝国を滅ぼすことが出来たのなら国民はお前を妃として認め、迎えられる」

ヴィヴィアンは瞳をせわしなく動かしながら。

「う……あ……。もし、私が裏切ったらどうするの？ 私に部隊を任せるということはその部隊の兵士の生殺与奪を握っていることになるのよ」

そんなことを口走る時点ですでに裏切るつもりはないことを伝えているのだが、ヴィヴィアンはそれに気付かないほど狼狽していた。

もう一押しだ

あと少しで落ちると俺は踏み、さらに驚愕の事実を伝える。

「シクラリス、仮面を取れ」

俺は傍に控えていた仮面を着けていたメイドにそう告げると、彼女は面を外して素顔を見せた。

「あ……あなたは……」

予想通り、ヴィヴィアンの混乱は極致に達して唇をわなわなと震わせながらそのメイドに指をさす。

するとそのメイドは少し頭を下げた後、涼やかな声音で言葉を紡いだ。

「はい、私はバルティア王国第2皇女　シクラリス」バルティア
「ライソラインです」

プラチナ色の髪と病的なほど白い肌を持ち、物憂げな表情を常に浮かべてさらに深窓の令嬢という言葉が似合いそうなほど何気ない動作の一つ一つが気品に満ちていた。

「ど、どうしてあなたが侍女をやっているの？　一国の皇女のあなたにそんな真似をする」

聡いヴィヴィアンはどうしてバルティア王国の第2皇女が俺のメイドの真似事をしているのか理解したようだ。

だから俺はその理解を裏付けるかのような用紙をヴィヴィアンに見せた。

「つ、つまり」

その先を俺が引き取って。

「そう、バルティア王国はジグサリアス王国に降伏した」

その驚愕の事実を述べた。

バルティア皇国がリーザリオ帝国と共謀している事実を掴んでいた俺は、あの決戦後、そのままバルティア皇国へ攻め入っていた。

始めにキツカ率いる竜騎兵軍団とユキ率いる魔道騎士団を先行させる相手はまだ準備の最中だったので、痛烈なダメージを与えることが出来たらしい。

そしてそこに騎馬隊のみで編成させたジグサール騎士団を投入するとその日の内に決着がついたという。

その動きは疾風迅雷。

またの名を電撃作戦。

そのためバルティア皇国から聞こえる声というのは「何が何だか分からない内に始まり、そして終わった」というのが大部分である。

「お前にはバルティア皇国の兵士と今回の戦で連れてきたリーザリア帝国の兵士を任せる」

ひどくゆっくりと、ヴィヴィアンの心に染み付かせるように囁く。

それは言外に「裏切られても怖くない。もしそんなことをすればどうなるのか分かっているのか？」との意味もある。

そして最後に。

「選ばせてやるう。俺に反旗を翻して死ぬか、それとも俺の横に立って生きるか」

ヴィヴィアンが素直にコクリと頷いた様子から俺は完全に決まったとほくそ笑んだ。

「……疲れた」

ヴィヴィアンを連行した後なので今、この部屋には俺とベアトリクス、そしてメイド服を着たシクラリスがいた。

「お茶です」

俺の咳きを耳にしたシクラリスが如才なくお茶を差し出したので俺は苦笑して。

「あゝ、シクラリス？ もう演技はいいぞ。メイドとして振る舞わなくていいから」

「いえいえ、ご主人様に尽くすのが私の役目です」

が、シクラリスは首を振ってそう答えたので。

「……どこかのメイドに聞かせたいセリフだな」

俺はしばし遠い目をしてしまった。

このシクラリス。

将来はどこかの国の嫁になるとして幼い頃からそうした術を叩き込まれた結果、誰かを尽くすことが全てであり、主となる人物が喜ぶことが生きがいになるとい性格になってしまった。

ベアトリクスが「こんな性格になるくらいなら死んだ方がましね」と吐き捨てていたのが酷く印象的である。

誰かに尽くすというのは王女の教育として間違っているのではないのかと思ったのだが、そう言っているとシクラリスに「そうなのですか？」と首を傾げられてしまう。

「男尊女卑のバルティア皇国皇女の教育方針はこうなのよ」

ベアトリクスのその言葉で俺はこれ以上聞くのを止めた。

うん、女性を差別してはいけないな。

もしジグサリアス王国で女性を怒らせると国が崩壊してしまうからな。

と、女性が軍政両方において中枢機能のほぼ全てを担っている国の王の意見だ。

十数日後

ジグサールはこれまでにない異様な活気を見せていた。

それもそのはず、何故ならまもなくリーザリア帝国を討伐しに向かった軍が戻ってくるのだから。

「予想より早かったな」

ジグサール全体を見渡せる場所で俺はそう呟く。

借り物の兵に加え、自分の思い通りに動かせる兵士も自国を攻めるんだ。

士気は全然上がらないに決まっているので失敗も視野に入れているのだが、見事にヴィヴァンは勤めを果たしてくれた。

「当り前よ。ヴィヴァンは頭だけでなく度胸もあるわ。言うなれば霸王としての資質を兼ね備えているのよ」

すると隣のベアトリクスがそんな感想を漏らしてさらに。

「我が君は本当にヴィヴァンを嫁に迎えるのかしら。言うておくけど辞めておいた方が良いわ。彼女は虎よ、間違っても飼いは慣らせない」

シクラリスも続いて。

「いつか彼女はご主人様の首を噛み切るかと思えます」

どうやら2人の王女の意見によるとヴィヴァンを嫁に加えるのは大変危険だと言うことらしい。

しかし、俺は苦笑して。

「蛇よりはましだろう」

「失礼ね、誰が蛇よ」

ベアトリクスがプクツと頬を膨らませる。

相手の弱みを徹底的に突き、周りから恐れられるお前が何故蛇じゃないのか逆に聞きたい。

「確かに、その通りかもしれない」

「あなたも!？」

シクラリスの呟きにベアトリクスは目を剥く。

そんなことを考えている内に歓声が一際大きくなった。

どうやら無事に帰還したらしい。

ヴィヴィアンを先頭にした軍隊はゆっくりとした歩きで俺の前の広場に向かい、そしてそこに辿り着くとヴィヴィアンが一步先へ進み出て胸を張ってこう宣言した。

「ユウキ!!ジグサリアス!!カザクラ王の妃! ヴィヴィアン!!リーザリア!!カザクラは! リーザリア帝国を打ち倒した!」

その途端広場が爆発したような印象を受けた。

国民が全員歓喜の涙と歓声を上げて誰か憚りなく抱き合っている

の見える。

それを俺は睥睨しながら。

「嬉しいのは分かるが少しはしゃぎすぎだろつ。そんなに凄いことなのか？」

俺はそう言っつて首を傾げると。

「「そんなに!?!」」

2人の王女が突っ込まれた。

「我が君は分かっつていないようね! 如何に私達が歴史的瞬間に立ち会っつているか!」

「そうですよ! ご主人様は歴代三国の王が夢見ていたことを成し遂げたんですよ!」

「わ、分かっつた……」

ベアトリクスもシクラリスも普段の調子とは打っつて変わっつて興奮した様子で詰め寄っつてくるので俺は熱意に押されて頷くしかなかつた。

「しかし、どうしまししょうシクラリス。ジグサリアス王国はユーカリア大陸において最大の国になつたわ」

「ええ、他の国々は必ずジグサリアス包囲網を敷くでしょうからその対策を練らないと」

「このまま世界を統一しちゃおうかしら」

「行く行くはそうかもしれないませんが、今は国の安定が先なのは」

そして2人はそのままこれから先について話し出す。

元凶である俺が言うのもなんだが、お前らは亡国の王女だろう。少しは亡き国について感傷してもいいのでは。

眼前の国民の内誰かが「ジグサリアス！」と声高に唱えるとすぐに周りが後に続き、あっという間に大合唱へと繋がる。

ジグサリアス！ ジグサリアス！ ジグサリアス！ ジグサリアス！
ス！

横を見ればベアトリクスもシクラリスも「ジグサリアス！」と讃頌していた。

その光景を見ながら俺は考える。

魔物大進行まで後3カ月。

三国を統一したことで守るべき領土が増えたものの、元リーザリア帝国の兵とヴィヴィアンがいれば広範囲な場所をカバーできるだろう。

本当はバルティア王国を攻めるつもりなどなかったが、もし魔物大進行まで後1か月以内の時期に攻められたら不味かったので、ちよつと良いからこちらから攻めた。

シクラリスを得たのはついだったのだが、彼女はベアトリクスと相性がいいのかよく話し込んでいたのでこれは思わぬ収穫だった。

「まあ、予定は大幅に狂ったが許容範囲まで修正できてよかった」

始めはジグサール一地方だけの予定だったのが今では三国を守らなければならぬ。

当初の予定と比べると想像を絶するだろうが、3カ月もあるのなら対策は打てる。

「だから今はこの瞬間を喜んでおこうか」

そう考えた俺は手を突き上げるとさらに歓声が一段階大きくなった。

三国統一（後書き）

魔物大進行の期限があまりにきつかったので後3カ月に変更しました。

これで第4章は終わりです、ありがとうございました。

ユウキ争奪戦開幕（前書き）

ついカッとなってやった

後悔はしていない。

この章はかなりの確率でキャラ崩壊しますのでご注意ください。
キャラの性格が変わっていても突っ込まないでほしいです。
一種のお祭りと思って下さい。

ユウキ争奪戦開幕

今、俺の立場はこのユーカリア大陸において最も力のある立場である。

どの国も俺と敵対したくないばかりに贈り物が多いのだが、その中で最も多いものが。

「主、サイザール国から側室にして姫が贈られてきました。どうしましょうか?」

「どうもこうもせんわ! 送り返せ!」

あまりの女の多さに俺はついに切れてしまった。

「あの……そんな真似をなされますと主の評価が低下するかと」

人形の様な美しさを持ったエルファは表情を変えずあくまで冷静にそう返してくる。

俺は頭をバリバリとかきながら苦悶する。

「ああ、俺は何もしていないのに、どうして女性がこんなに集まるんだよ」

言うておくが俺はまだ一人も手を出していないし、そんな噂をたてられるような真似すらしていないのにどうしてこんなことになるのか分らない。

「はあ……主。本気で気付いていなかったようですね」

珍しくエルファがため息を吐き、そして朗々と語り出す。

「良いですか、この大陸では現在ジグサリアス王国が最も強いことはご存知ですよね」

その通りなので俺は頷く。

「ですから他の国々は何とかご主人様に気に入られようという贈り物を贈ろうとする。ここまでは良いですか」

「ああ」

「そして、この国において女性の立場はどうなっていますか？」

「どうなって……まあ、結構高い方だな」

実際この国を動かしている者の大半は女性だからな。

するとエルファは早口に捲し立て始めた。

「いいえ、結構どころではありません。異常なほど高いです。一体どこの国に軍政全般において男女比率1対9がありますか。断言できません、それはここ以外あり得ません」

「いや、だってたまたま女性の方が優秀だから」

俺は能力で選んでいるから女性優遇など鼻屑はしていない。

偶然そうなったただけだ。

「しかし、世間はそう見てくれませんよ。『ジグサリアス王は女性
が大好きで糸目を付けない』というのが各諸国の見方です」

「何だそれは!!」

そんな不名誉な評価を受けていたのか。

とても不本意だ。

「ですから他の国々はご主人様に女性を贈るのです」

「そんなことになっているのなら何故教えてくれなかつたんだ。王
である俺がそんな評価を受けているとジグサリアス王国の威信が低
下してしまう」

俺がそう文句を垂れるとエルファは複雑そうな顔をして。

「古参のフィーナ様やレア様の意見によるとその方が良いそうです」

「何故？」

「彼女達によるとご主人様は女性を積極的に採用していると広める
ことによって埋もれていた有能な女性がこの地に集まり、さらに彼
女達が活躍するとその知名度が上がって遠くから有能な女性がここ
に来る。その繰り返しによって産業都市ジグサールはあそこまで発
展したそうです」

「そうだったのか……」

ジグサールの発展の陰にはそんな裏事情があったことを初めて知る。

「けど、主には悪いですが、ここは女性にとって天国ですよ。女性の力が強いから理不尽な差別や暴力を受けませんし、何より私達が必要だと思える施政を最優先で実行してくれますから」

その分男性にしわ寄せがいつていると思うが。と、心の中で付け足しておく。

「そういえば主は女性経験ってありましたか？」

「いや、ないよ？」

「……」

あまりにスツと返したのでエルファはしばし目が点になった。

そしてそのまま数秒経過した後、ようやく動き出す。

「……あの、主？ こう言うては何ですがそろそろ経験しておいた方がよろしいですよ？」

「は？ 何故だ？ 好きでもないのになぜ経験する必要がある？」

「いえ、国のためですから。色によって主が惑わされたらどうするんですか」

「それは不味い」

「その通りです。ですから一度経験しておくことをお勧めしますよ。何なら市井の人でも良い。現在この国は見目麗しい女性が多く集まっていますから彼女達にお願いしてもよろしいのでは」

「ハハハ。冗談にしては面白いな、市井の人がそう簡単にOKをするはずがないだろうが」

「いいえ、そうとは限りませんよ。むしろこの大陸最高の実力者である主に抱かれることをお望みになっている方は多数います」

ここで顔をにやけさせてしまった俺を責められる者は誰もいないだろう。

ヤバイ……これ以上続けると変な気分になりそうだ。

「ああ、そうか。そういう話はまだあとで検討しよう。所で今日の夕飯についてだな」

俺はエルファとの会話をここで変更しようとしたのだが。

「欲情が湧き上がりそうでしたから止めましたね？」

鋭い……

「とにかく、主は早急に免疫を付けるべきです。何なら私でも」

「あー！ あー！ 聞こえない！」

これ以上聞くと引き返せなくなる様な予感がしたので俺は形振り

構わず両耳を塞いで大声を上げながらその場を後にした。

「……………そうですか。それなら実力行使です」

エルファのそんな呟きが聞こえた様な気がした。

ユウキ争奪戦開幕（後書き）

一度でいいからこういつのを書きたかったんだ。

三つ巴(前書き)

第1弾完成！

この調子でどんどんいきますよー

三つ巴

軽業師の靴という装備がある。

これを履くと体が軽くなり、空中一回転も可能となる代物なのだが。

「どうして俺についてこれるんだ!？」

俺は息を切らして全力で走っているはずなのに後ろから追ってくるエルファは顔色一つ変えず追ってくる。

階段を4段飛ばしで駆け上がり、吹き抜けから飛び降りたりなど特殊な装備が無い限り絶対に追跡できないはずなのに次の瞬間には俺と全く同じルートを通っている。

「これぐらいなら今の私でも十分です」

と、言うのはフレアスカートを指で摘みあげながら走っているエルファの弁。

「くそっ!」

このままでは不味い、そろそろ俺の方が限界だ。

自分が苦しい時は相手も苦しいというのは一体誰の言葉か。

エルファは汗どころか息一つ乱していないじゃないか!

「このままでは埒が明きませんね」

後ろからそんな呟きが聞こえた気がしたが、今の俺に確認する余裕はない。

「仕方ありません……主、もう鬼ごっこは終わりですよ」

「んなあ!？」

エルファが懐からナイフを取り出してそれを俺に投げつけてくる。

あまりの突然だった出来事に反応できなかった俺は被弾覚悟だったのだが、何とエルファは俺の動作を予測していたのか投げたナイフはすべて俺の衣服に当たり、俺は木で出来た壁に縫い止められる結果となった。

「本当に、どうしてそんなに嫌がるのですか」

エルファは僅かながら呆れの様子を見せる。

「人類どころか生命体である限り脈々と行われてきた行為です。大っぴらに公言するべきではないことは確かですが、嫌悪もするべきではありません」

そう諭しながら俺の衣服に刺さったナイフを回収しているのだが、俺が逃げ出さないよう押さえるべきところは押さえているのが憎らしい。

さすがエルファはそつがないな。

「この場所であれば私の部屋が近いですからそこで済ませましょう。何、心配は要りません。主は寝ていれば後は私が気持ちよくして差し上げますから」

そんなことを無表情に言われても俺は全然嬉しくない。

何か作業をするかのような気分が陥ってくる。

俺は放せとばかりに抵抗するのだが、全体的に細いエルファのどこにそんな力があるのか、全然ビクともしない。

「ああ、もし後日にしたくなりましたらいつでも私が相手をしてあげますよ」

「っ!」

その台詞に反応してしまった俺はやはり男だからなのだろう。

そんなことを考えながら連行されていき、エルファの部屋にたどり着いた時、エルファの視線が鋭くなる。

「って、うわあ!」

そして次の瞬間に俺は横に押されて尻餅をついてしまった。

「痛た……いきなり押すとか酷くな」

「何をしてらっしゃるのですか?」

俺が抗議の声を上げようとした瞬間、絶対零度の声音が響く。

「アイラ……」

視線の先には氷のような眼をしたアイラがボウガンを構えて立っている。

アイラは浮浪児の4人の中で最も体が成長した存在と言っても過言でなく、豊かな胸と魅惑の唇はたとえ隠されていても存分に色気を放ち、事実アイラを見ていると何とも言えない衝動が湧き上がってきていた。

「主に色というものを教えようとしてまして」

ふとエルファの方を見ると手には何本かの矢が挟まっている。

状況から見るにアイラがエルファに打ち込んだらしい。

「ユウキ様を押し出すことはなかったのではないのですか？」

アイラの問いに。

「万が一のことを考えてです」

簡潔に答えるエルファ。

無表情VS絶対零度というのは見ていて寒気がしてくる。

「やれやれ、やっと追いついたよ」

その空気をひび割れさせたのは後から追いついてきたオーラだ。

彼女はブラッディ Xの副作用によって少女となってしまうたが、その身にある技能は大人顔負けという。

「エルファさん。先約があるのに横取りとは感心しないね」

オーラは口元に笑みを浮かべながらそう聞いてきたので、エルファは「先約とは」との問いにアイラが答えた。

「ユウキ様の初めては私達が貰うという約束です」

何だそれは？ 初めて聞いたぞ。

「ユウキ様には伝えていないからね。これは私とアイラで決めたことだから」

首を傾げる俺にオーラがそう囁いて補充する……と、いうかそれは約束と言えるのか？

「あなた方がユウキ様の相手をする？」

「その通り。初めてはアイラに譲るけど2回目は私が貰おうかな、なんて」

ニコツと笑いながらそう述べるオーラ。

そこはかとなくオーラの笑みに猛獣のそれが思い浮かんでしまうのはなぜだろう。

そんなことを考えていた俺を余所にエルファはアイラとオーラを

見比べて。

「失礼ですがあなた方に経験はおありですか？」

「……」

「まだないかな」

それがアイラとオーラの返事。

それを聞いたエルファは多少勝ち誇るような気配を滲ませる。

「そうならば辞めておいた方が無難でしょう」

「なぜですか？」

「簡単ですよ。初めてと初めてでは確実に失敗するからです。初と
いうのは一度だけですから、それを失敗という形で終わらせたくは
ないでしょう」

アイラの問いに滔々と語るエルファ。

思い当たる節があるのか2人ともそれに満足な回答ができない。

「さあ、参りましょう主」

そしてエルファは俺の腕を掴んでドアノブに手を掛けようとした
のだが。

「だからと言ってエルファ様に任せるわけにはいきませぬ」

アイラがまたも矢を放ってドアノブから手を離させた。

「そうだよ、例え失敗してもいいから初めては欲しいな」

オーラも完全に調子を取り戻したようだ。

「エルファ様、ユウキ様をお放し下さい。さもなくば……」

アイラがスリープボウに矢を補充しながら言い放つと。

「また返り討ちにあいたいのですか？」

エルファの気がさらに鋭くなり、まるで針を全身に刺されているような錯覚に陥ってしまう。

「今回は負けないよ。何せこれだけは譲れないからね」

オーラも懐から獲物を取り出すのだが、それを見た俺は血相を変える。

「待て待てオーラ！ さすがにデモンズダガーは不味い！ 取り返しつかない事態になるぞ！」

どんな頑強な敵であろうとも5%の確率で即死させる効果のあるデモンズダガーをこの場で使っては駄目だろう。

「構いませんよ主。当たらなければどうということはありませんか」

そう言い切るのには勝手だが、あのオーラから一発も貰わないという芸当をできるのか？ オーラは体は子供だから小さくて身が軽いので回避はおろか防御すら困難というのが俺の見立てだ。

ふと気づけば3人がすでに戦闘モードへ突入して激闘を繰り広げ、俺の意見など通りそうにない。

俺は周りを見渡すと5歩先に外へ通じる窓があるのを確認できた。

(イズルガルド、すぐに来てくれ)

そう心の中で呼びかけたのであと少しで来るだろう。

そして、竜の羽ばたき音が聞こえた瞬間俺は窓に突撃して外に出る。

『何用だユウキよ』

「野暮用だよ。しばらく上空を旋回していてくれ」

イズルガルドの問いにそう答えた俺は、先ほどまで俺がいた場所を見る。

そこには俺のことなどすっかり忘れて戦闘に熱中していた3人が確認できた。

3P（前書き）

かなり際どい表現が多数出てきます。
しかし、後悔はしていない。

『お主も災難じゃな』

テレパシーが使えるイズルガルドの前にはどんなおためごかしも無意味だ。

案の定、イズルガルドはすぐに俺の置かれた状況を悟る。

「なあ、年長者の知恵として何か良い方法はないか？」

ここは人生の先輩である老竜　イズルガルドの意見を聞くことにする。

するとイズルガルドは重々しい様子で意志を伝えてきた。

『諦めよ』

「おい!？」

真面目な様子だったので耳を済ませていれば出てきたのがそんな一言。

俺がそう突っ込んででも仕方ないだろう。

イズルガルドは遠い目を浮かべながら。

『わしはなあ、これでも昔はもっていたんじゃ』

とか唐突に昔の思い出を語り始める。

『わしはあの里で最も強く、賢く、美しく、正しかった存在なのじや』

相当美化されているような気がしなくてもないが突っ込んでも仕方ないので続きを促す。

『そんなわしは最もモテ、里中の雌竜がわしに夢中じゃった』

自慢話を始めるイズルガルド。

年寄りというのはどの種族でも共通なのか折に触れてはそのような話をしてくるのだ。しかも性質が悪いことにテレパシーで伝えてくるから聞き流すことができない。

『聞いておるのか？』

「はい、聞いています」

うつつ……本当に辛い。

『で、のう。わしはそんなことに興味など無かったものじゃから全く相手にせんでおくと、ついに雌竜達が切れてのお』

その話をオチが分かるような気がする。

『あれは地獄じゃった。全員が協力してわしから精を絞り上げ、雄竜も血走っている雌竜が怖いから見て見ぬふり。あの時は冗談抜きで死ぬかと思っただのお』

「大変だったんだな」

その状況と凄まじく似てるがゆえにそんな感想を漏らしてしまう俺。

『だからのお、ユウキ。意中の相手、または気になる者があるのなら早い所結んだ方がええ。でないとミイラになるぞ』

あまりに生々しい表現から俺はギクリとしてしまう。

腕を組み、顎に手を当てて考える。

気になる相手が。

そんなこと考えたこともなかった。

この世界に来てからずっと走り続け、色恋沙汰すら眼中になかったのを覚えている。

「うーん。意中の相手が俺は」

「もちろん私よね？」

「なあっ!？」

隣にキツカがいたので俺は驚く。

「き、キツカ!？ どうしてここに？」

「空は私の領域よ、だから驚かなくていいじゃない」

そう言いながらにこやかに笑うが、俺はそれに同調することができない。

「キツカ？ 聞き間違いでなければ俺を意中の相手とか言ったよな」
そう聞くと。

「ええ、その通りよ」

と、答えたので俺は頭を抱える。

「あんな、キツカもあれか？ 俺を狙っているのか」

「もちろんよ、当たり前じゃない」

いや、当たり前じゃないだろう。

「誤解を解いておくけど、ユウキを求めるのは単に色恋だけじゃないわよ。この竜騎士軍団を維持するには私の血を受け継ぐ者が必要だから、その義務も含んでいるわ」

確かにイズルガルドから竜を貸し与えられる際そんな約束をした覚えがある。

「だったら身近な相手の方がいいじゃない？ そして、ちょうど良い機会だからここで既成事実でも作っておきましょうよ」

そんなに笑顔で語りかけられても反応に困る。

キツカは真つ赤な髪と凛々しいその立ち姿から戦女神とも呼ばれて男性はおるか女性にも人気があるのでその申し出は嬉しく思うのだが、突然の出来事ゆえに俺はどう反応していいのかわからない。

「一緒にククルスも呼んでおいたわ。だから3人で愉しみましょう？」

横を見ると小動物の印象を与えるククルスが顔を真つ赤にしながらコクリと頷く。クセつ毛のある栗色の髪の毛をフルフルと揺れている様子から嗜虐心がむくむくと湧いてくる、が。

「ちょっと待て、やるってここでやるのか？」

「もちろんよ、当たり前じゃない？」

何を当然なことを聞いているんだとばかりの態度に俺は目をむく。

「安心して、ここで一回やれば他の場所じゃ物足りなく感じちゃうほど刺激的よ」

確かにこの一歩間違えれば落下という状況は命の危険を感じるほど刺激的だろうな。

「ユウキ様、最初の一回は私も恐怖を感じましたが、それ以降は結構楽しいですよ」

ククルスよ、さり気なくカミングアウトするな。

誰もお前とキツカがそういう関係なんて知りたくない。

まずい。

逃げようにしてもキツカとククルスの2人が挟み撃ちにのよう
立っているためどこにも行けない。

「そつだ！ ギール、お前はいいのか？ 誇り高き竜の背中で情交
に励むのは間違っているだろう」

キツカのパートナーであるギールに叛意を促す。

キツカがいくら乗り気でもさすがに竜が反対すれば無理だろうと
予想したのだが。

『知ってるか？ キツカとククルスの嬌声で飯は3杯いけるぞ』

このエロ竜が！

何で下等種族と呼んでいる人間の営みに興奮するんだよ！

『ギールよ、そなたも男になったなあ』

何かイズルガルドが感動しているし！

おかしいだろう、色々と！

そんなことを考えている間にじりじりと2人が迫ってくる。

「安心して、気持ち良くさせるから」

万事休す。

ここで終わりなのか。

と、考えた瞬間下から竜巻が出現し、イズルガルドごと俺を飲み込む。

「あ……」

とつさの出来事で反応できなかった俺はすっかり手綱を放してしまい、落下する。

見る見るうちに地上が近づき、空中に浮いているような錯覚に囚われる。

ああ、ここで終わりなのか。

これまでの走馬灯が蘇ってきた。

「さよなら、皆。こんな死に方は末代までの恥になるから俺の名は残さないでくれ」

「……何を言っているの？」

地面まであと数メートルという地点になると急激に落下速度が弱まったので俺は怪我することもなく地面に足を着くことができた。

「た、助かった……」

安堵のあまり腰を抜かして膝をつく俺。

2、3回深呼吸を繰り返していると俺に影がかかったので顔を上げると、そこにいたのは。

「ユキ……そしてミア」

魔導騎士団『火』のナンバー1とナンバー2がそこに立っていた。

「驚いたよ、何せ突然ユキが竜巻を起こすからね。どうしてそんなことをしたのか聞こうとしたらユウキ様が落ちてきたんだ」

ミアが苦笑しながらこれまでの経緯を話してくれる。

ミアはその社交的でボーイッシュな様子から男女問わず人気があり、特に女子から人気がある。しかし、キツカが「お姉さま」ならミアは「王子様」と評されるように微妙にターゲットがずれている。

「ああ、そうだったのか。少々やり方が強引だったが、窮地を救ってくれたんだ。お礼を　　ってユキ？　俺をどこに連れて行く気だ？」

ユキが俺の袖を引っ張って強引に王宮の中へ入れようとする。その理由を聞いても一言「……行く」だけなのでいまいち容量を得ない。

ユキは今回と同じように万事において口数が少なく、必要なことでさえ言おうとしない。

かなり失礼なのだがそれでも仕方ないと苦笑できるのはやはりユキが持つ個性ゆえだろう。

天然無口系であるユキは背が低く、17歳とは思えないほど幼い容姿であることも相まって小さな子を見る保護者の様な気分陥ってくる。

そういえばキツカとミアがずいぶんユキのことを気にかけていたのは2人は精神年齢が高いから母性愛が働いたのだろうと推測する。

「あー、ユキ？ 理由を説明した方がよいよ」

そのミアの言葉でようやくユキは立ち止まって俺の方を向く。

「……セクロス」

「つぶ!?!」

突然の言葉で吹き出しても仕方ないだろうな。

そしてユキはもう伝えたとはかりに再度俺の袖を引っ張り始めた。

「いやあ、本当にユキは正直だね」

「何を笑っているミア!? というか止める! そのための副官だろっが!」

苦笑しているミアを俺は必死で呼び止めるのだが、ミアは止めようつとする素振りすら見せない。

それどころから俺の反対側の腕を取る。

「な、何の真似だ？」

ミアにそう聞くと。

「何ってお手伝い。一応ボクも女の子だからさ、そういうのに興味があるんだよね」

紳士然とした対応をしながらもその瞳の奥に欲情の光が見えるのは気のせいだろうか。

「色々可笑しいだろう！ 大切な瞬間を誰かに見られるというのは恥ずかしくないのか？」

「……別に構わない」

「恥かしいけど、ユキの瞬間も見られるのだったら文句はないね」

「駄目だ！ こいつら！」

頭を抱えたいが両腕をがちりと押さえられているため身動きすら取れない。

「王宮のこの場所だったらボクの部屋が近いからそこに行こう。ユキ、頑張ってね」

「……ミアも一緒」

「うん、もちろん」

ミアとユキによって連行されていた俺だが、何度目かの曲がり角

を曲がると、2つの集団が道をふさいでいた。

よく見るとその集団は魔導騎士団の面々。

2つに分かれているのは男性と女性に分かれているからだ。

「ユキ団長！ 俺達は大馬鹿者です！」

男性の集団がそう叫ぶ。

「そうです！ 私達はミア王子の幸せを素直に願えない愚か者よ！」

続いて女性の集団が後に続く。

「……どういふこと？」

ユキが首を傾げるのも納得だろう、俺もよくわからない。

「あー……つまりボクとユキがユウキ様と結ばれることが納得いかないと？」

この中で理解力が高いミアが唯一彼らが何を伝えたいのか分かったようだ。

魔導騎士団の面々はミアの言葉に頷きながら。

「そう、ユキ団長には永遠に純潔を貫いてほしいのです！」

「ミア王子は誰の者でもないのよ！」

涙ながらに訴えてくる魔導騎士団。

おい、お前らは冗談抜きで大陸トップレベルの魔導騎士団『火』のメンバーだぞ。たった一人で1000もの人間を薙ぎ払うことができるお前らがこんな低レベルな争いをしていて良いのか？

余所の国の者なら笑えるかもしれないが、残念ながら責任者である俺にとっては笑いよりも頭痛の方が大きい。

「……邪魔するの？」

「っー！」

そんなバカなことを考えていると隣のユキの魔力が膨れ上がり、凍て付く空気があたりに充満する。ユキの強さは尋常でなく、あまりの強さからユキ一人で1000人の軍隊を凍り付けさせることができるというのが専らの評判だった。

「やれやれ、ここは一つお灸を据えないとね」

ミアも好戦的な笑顔を丸出しにして威嚇する。普段は団長を務めるユキの代わりとして魔導騎士団を統率し、さらにユキが強すぎるので目立っていないが、ミアも一騎当千な魔導師で小さな村一つ程度ならすべて焼き尽くせるだけの魔力と技量を持っている。

「ひ、怯むな同志よ！」

2人の臨戦態勢によって彼らは委縮するもすぐに持ち直す。

「そうよ、私達の結束力を見せるのよ」

魔導師というのは集団でこそ威力を発揮するので、個々の力量よりも団結することの方が重要である。

たった一人で軍隊や村を殲滅できる2人が異常なのだ。

ユキもミアも戦闘状態に入ってしまった、すでに俺のことなど眼中にない。

いい機会だ。

逃げさせてもらおうか。

抜き足差し足忍び足で移動する俺。

駆け出して行った後、後方から爆音が響いてきたのでおそらく戦闘に突入したのだろう。

「修理費は魔導騎士団の予算から引いておくか」

物が壊れる音をBGMにしながら俺はそんなことを考えた。

3P (後書き)

ミマって実はかなりヒロヒロでした。

修羅場（前書き）

どんどん過激になっていくな……

修羅場

「……疲れた」

王宮の廊下を一人トボトボと歩きながらそんなことを呟く。

「もしかしてこれが暴発か？」

イズルガルドが言っていたことを思い出す。

雌竜に対してあまりにつれない態度を取りすぎたがゆえに雌竜が目を血走らせて襲いかかってきたと。

「ああ……なんか人生最大のピンチを迎えている気がするな」

少なくともこんな腹を空かせた獣を相手にするような恐怖感は何もなかったことがない。

そんなことを考えていたせいか、俺は曲がり角からやってくる人影に気付かなかった。

「おわっ！」

「え？」

まるで壁にぶつかったような感触が俺の全身に広がり、痛さで悶絶する。

「ユウキか、ごめんね」

痛む鼻を押さえながらぶつかってきた人影を見ると、そこには人一倍体がでかいクロスがそこにいた。

「ふむ、ユウキ様よ。少し前方不注意ではないのか？」

クロスだけでない、レオナの声も聞こえたことからクロスの陰になつて見えない場所にいるのだろう。

だから俺は「まあ、その通りだな」と答えておく。

「しかし、今日はいつになく女性陣が餓えているね」

クロスはすでにこの騒動を知っているのかそんな感想を漏らす。が、俺はクロスの言葉の中に聞き逃せないワードがあったのでそこを聞いてみる。

「いつになく？」

俺が首を傾げていたのを見たクロスは呆れ気味に「気づいていなかったんだね」と呟いた。

「気づいていないとか何の話だ？」

「いや、だから女性達の好意の話」

「そんなのがあったのか？」

少なくとも昨日までは普通に過ごしていたはずだ。出会ったら声をかけて、時間が空いているなら共に食事をしたり世間話に花を咲

かせたりと親睦を深める普通な対応しかしていないはずなのに。

「うーん……何て言えばいいのかな」

クロスは何かを俺に伝えたいようだが上手い言葉が出ず、四苦八苦しているように思える。

「そこから先は私が伝えた方が良さそうだな」

クロスが詰まったので代わりにレオナが前に出る。

レオナはクロスの元教官で現在は恋人同士。常に軍服に身を包み、凛とした態度を取るので評価が高い。ストリートな金髪を腰まで伸ばし、右眼に眼帯をつけている他には眼福といえるほど豊かな体が特徴的だ。特に胸は軍服の上からでも大きく主張し、それに吸い寄せられる人間が後を絶たない。

「ユウキ様よ、あなたは御自身の魅力にお気づきでない」

「俺に魅力？ そんなものあるわけがないだろう。もし俺にあとすれば運だな、それが多大にあったから俺はお前らに出会えた」

今はジグサリアス王国の王の位置に立っているが、それにはキツ力達を始めとした仲間に出会えたからであって、その内の一人でも欠けていれば今の俺はなかったといえる。

が、レオナは俺の答えに満足しなかったらしい。首を振ったのち熱く語り始める。

「いや！ ユウキ様は気付いていない！ 一介の浮浪児から王にま

で上り詰め、あまつさえ三国を統一したユウキ様に惚れない女がどこにいる？ 生ける伝説を作り上げたユウキ様に我々女性は憧れを抱き、想像を膨らませるのだ」

「膨らませるのは勝手だが俺はそこまで凄くないぞ、却って幻滅するのがオチ」

「いや！ それは違う！」

ついにレオナは拳を振り上げて独裁者顔負けの演説を始める。

「出会って分かるのだ！ ユウキ様は想像以上だと！ 何をされても許す限りなき慈愛の深さと時折見せる残酷ともいえる厳しさ！ そのギャップに私はもう……」

「ちょっと待てレオナ、少し抑えてくれ。キツ力達に気付かれたらまずい」

俺は制止を求めるのだがレオナは全然聞いてくれない。むしろさらにヒートアップして己の豊満な体を抱き締める。

「クロス！ レオナはお前の恋人だろう！？ 恋人なら相方の暴走を止めてくれ！」

俺は必死になって訴とようやくクロスが動いてくれた。

「レオナ、そろそろ冗談は止めようよ。ユウキが困っているよ」

「む、そうか。すまん」

するとレオナは先ほどのヒートアップぶりが嘘のように冷静さを取り戻す。

「冗談だったのか今のは!？」

「「うん」「」

俺の叫びに対して見事にハモる2人。

その阿吽の呼吸に俺は脱力してがっくりと膝をつく。

「頼むからこういう時の冗談は止めてくれ」

「ハハハ、それはすまん」

俺のボヤキに対してレオナは全く反省せず、笑い飛ばした。

「おお、そうだ。面白いことを思いついたぞ」

レオナはそう言って手をポンと打ち、素敵な笑顔を浮かべながら自分の腰に差してあった剣をクロスに持たせる。

「ちよ、おい」

俺が血相を変えるのは、クロスは剣を抜くと凶暴になって手が付けなくなるからだ。性質が悪いことにこれが戦場なら冷徹とも取れる思考ができるのだが、今回の様な日常だと単なる暴れん坊になってしまうことである。

「そして！ 時折私は想像してしまうのだ。もしクロスと出会う前

ならどうなっていたかと！ いや、間違いなくユウキ様を選んで
ただろう！ 何故なら」

「ストーリーップ！！」

クロスに剣を持たせた状態だと冗談が通じない。

だからこの類でも真に受けられるとてつもなく悪い状況になっ
てしまうのだ。

恐る恐るクロスの方向を見ると表向きは変わっていない。

「いや、クロス？ これは戯言だからな？ あまり気にす」

「分かっているよユウキ」

何故だろう。ニコニコとクロスは笑っているのだがその表情が何
よりも怖く感じてしまう。

まずい、これは本気で怒っている。

「いやあ、前々から警戒していたけどついにこの日が来たか。この
無自覚天然たらし屋は人の恋人まで奪っちゃうんだね」

「いや、待てクロス。これは誤解だ冤罪だ。俺は断じてそんなつも
りでは」

俺は両手を突き出して身の潔白を訴えるのだが、クロスはその笑
顔を一向に止めようとしない。そして俺の肩に手を置いて。

「ねえユウキ、ちょっと向こうで訓練しようか？ ユウキって普段鍛えていないから良い機会でしょ」

「痛たたたた！ クロス！ 落ち着け！ 今のお前とすれば俺は絶対死ぬ！」

相当力を込めて握っているので俺は絶叫する。

「むしろ死んだ方が良いんじゃない？ 恋人がいたとしてもユウキに夢中になる女性官吏が多いから、失恋した男性官吏が後を絶たないんだよね、これが」

「それこそ俺は知らん！ とぼっちりだ！」

俺は渾身の力を込めてクロスの手を振り払い、じりじりと後ろへと下がる。

不味い。

本能が訴えている。

今のクロスに近づかない方が良くと。

と、ここでレオナが最悪の爆弾を投下した。

「そうだ。今度私とクロスとユウキ様で3Pでもしないか？ 私は大歓迎だぞ」

「貴様は人の女に手を出しやがって！」

「出していない！ 濡れ衣だ！」

剣を抜いて凶暴化したクロスから逃げるために俺は全速力で逃げた。

「あーっはっはっはっはっはっは！ 逃げる逃げるー！」

レオナの囃子声が後ろから追いかけてきていた。

「待ちやがれこのたらし野郎が！！！」

凶暴化したクロスは冗談というものが全く通用しないらしい。

あんな鎧を着ているにも拘らず俺と同じどころか僅かに速い速度で追跡してくる。

「ぐっ、このままでは」

遠からず俺は追いつかれてしまう。

そして、追いつかれれば待っているのは……

「死んでたまるか！！！」

限界を突破し、さらに走ったおかげで少しだけクロスとの距離が開く。

このまま振り切れれば問題はないのだがその前に俺の体力が尽き

てしまうだろう。

何とか身を隠せる場所はないのか。

「師匠、こちらです！」

その時天の助けとばかりに近くの扉が開いて俺を招き入れるサラ。

俺は助かったとばかりにその部屋へ飛び込み、すぐに扉を閉めた。

「あの野郎！ どこへ行きやがった！」

凶暴化したクロスの叫びが小さくなり、ついに足音さえ聞こえなくなつたところでようやく一息つく。

「た……助かった」

まさか冗談抜きで命を狙われるなんて思いもしなかった。

今更ながら体に震えが走り出す。

「師匠、ここに水があります。これを飲んで少し心を落ち着けてください」

俺を救ってくれたサラは置いてある水差しから水を汲みとり、近くのテーブルへと置く。

サラは昔ショートカットだったが、今はセミロングにまで伸びている。そして健康的に肢体が発達したのか、全体的に若々しい印象を与えるのだが、その瞳だけは昔と変わらず無邪気な光を湛えてい

た。

「ああ、すまないな」

冷静であれば、どうしてサラは水を汲んだのに俺に取りに行かせようとするのか疑問を持つはずなのだが、今の俺はクロスに襲われた後なのでそこまで考えを持たず、ただ言われるままに部屋の奥へと進んでしまった。

ガチャリ。

と、扉を閉める音が響いたので俺は血相を変えて振り返るとそこには笑顔を浮かべたヒュエテルさんが立っていた。

ヒュエテルさんはすでに30代に差し掛かった妙齡の女性で、包み込むような包容力を持っている。ウエーブ状の髪や柔和な笑みを浮かべているのが相まり、接していると優しい気持ちになれるというのが俺の評価だった。

「ヒュエテルさん？ いったい何の真似かな？」

これまで一連の出来事から大よその予想はついていたが、それでも一縷の望みをかけて聞く。

「決まっていますでしょう。サラちゃんのお手伝いですよ」

が、その希望は淡くも崩れ去った。

ヒュエテルさんはさらに続けて。

「鍛冶にしか興味を持たないサラちゃんが色恋沙汰に関心を示して相談してきたのです。ここは大人として応援をするべきでしょう」

「いや！ その理屈はおかしい！」

「いったいどこの世界に20に満たない娘にそんな手助けをする大人在るのか。」

「ヒュエテルさん、よく考えてみよう。多くの浮浪児を救ったヒュエテルさんが」

「師匠！」

「おわあっ！」

サラの不意打ちタックルを受けた俺はなんにも反応できず、サラと共に近くへあったベッドに倒れこむ。

「ど、どうしてここにベッドが。いや、計算したな！ ヒュエテルさん！」

断言できる。

これは絶対にヒュエテルさんが仕込んだものだ。

おそらくサラが俺に飛び込んだ位置にベッドがあるよう扉の鍵を閉めるタイミングを計っていたのだろう。

「サラ！ 離せ！ この関係は間違っている！ 俺とお前は師弟であり、こんな関係じゃないだろう！」

俺は何とか上に乗っているサラを引き離そうとするのだが、サラは万力で固定したかのようにビクともしない。

「師匠！ 私は師匠のことが好きです！」

顔を上げてそう告白するサラに俺は。

「ああ、俺も好きだ。お前は本当によく出来た弟子だ！ だから離すんだ！」

「嫌です師匠！ 絶対に離したくありません！ 私は好きなんです！ 師弟の関係じゃなく、男と女の関係として大好きです！」

サラは俺の胸で嫌々というようにぶんぶんと頭を振る。その度にサラの香りが鼻をかすめるので俺は劣情を抑えるのに必死となる。

「サラちゃん、もっと心に余裕を持った方が良いわよ」

と、そこでヒュエテルさんが優しくサラと俺を引き離す。

もちろん俺を逃さないことを忘れない。

「くそっ！ いったいヒュエテルさんのどこにこんな力が？」

手足をバタバタと動かすのだが、全然意味をなしていない現実がそこにあつた。

そうこうしているうちにヒュエテルさんは俺の後ろに回って羽交い絞めにする。

「サラちゃん、まずはユウキ様の下を脱がしてちょうだい」

「ちょっと待てええええ！」

突然の言葉に俺は脊髓反射で突っ込む。

「ヒュエテルさん！いきなり何を言っているの？ どうしてそこから始めるのか！」

俺は渾身の力でそう叫ぶのだがヒュエテルさんは全然聞いていない。

「はい、わかりました」

ヒュエテルさんの言葉に唯々諾々と従うサラ。

「サラ！止める！お前はこんなことをする人間ではなかったはずだ！」

サラは鍛冶のみを追い求め、純粹な光を瞳に浮かべるのが本来の姿だ。

しかし、今のサラはこれから行うことに興奮し、無邪気の代わりに妖しい色を瞳に浮かべている。

俺は必死で抵抗するのだが、サラは自分の両足で俺の脚を押さえってしまったため、完全に身動きが取れなくなる。

「大丈夫です。失敗はしません」

「失敗とか成功とかそういう問題ではない！」

俺はそう訴えるのだがサラは興奮しているのか耳に入っていないようだ。

「サラちゃん、教えられたとおりにしっかりとやるのですよ」

「はい、ちゃんとヒュエテルさんから教わった通りにすれば師匠は気持ち良くなるんですね、師匠？」

「上目づかいで尋ねるな！ 変な気分になってしまっ！」

ヒュエテルさんとサラの驚くべきやり取りに俺はサラの言葉にすっかり本心で答えてしまっ。

「アハ、師匠もちゃんと私のことを意識してくれましたね」

するとサラは新しい武器を製造した時と同じような至福の笑みを浮かべる。

「……」

いつもは純粋な子供みたいに無邪気な様子のサラが色欲に冒されている表情を見て興奮した俺はもう駄目かもしれない。

サラの両手が下にかかり、もう駄目かと思った瞬間に扉がすごい勢いで吹き飛んだ。

「あの野郎はここか！！」

扉の前には凶暴化したクロスが仁王立ちになって立っている。

「な、なんですかクロス!？」

この突然の事態にヒュエテルさんも驚いたようだ。

そして、ヒュエテルさんの力が緩んだので俺は拘束を解き、窓際へと向かう。

「死ねええええええ!」

雄叫びを上げながら突っ込んでくるクロスから逃れるため俺は窓から外へ脱出した。

ここは3階だが、幸いにも軽業師の靴を装備しているので大怪我はしないだろう。

事実、着地しても少々足がしびれた程度で終わった。

俺は逃げながら飛び降りた窓の方を確認するとヒュエテルさんやサラ、そしてクロスが様々な感情を表情に浮かべていた。

悪いな、俺はこんなことで終わるわけにはいかないんだよ。

俺は手をひらひらと振りながらその場を後にした。

満身創痍

「……はあ」

王宮の庭をトボトボと歩きながら俺はため息を吐く。

軽業師の靴を装備しているから体は軽いのだが、心労によって足取りが重い。

「もう今日は寝よう」

こんな状態では仕事などできやしない。少なくとも今日一日はベツドに入って横になりたい。

「ここを曲がれば俺の部屋だな」

最後の廊下を渡る際にそう呟く俺。

いかな。

疲れてしまって独り言が止まらない。

そう思いながら俺はその廊下を渡り切ると。

「あら、ボクじゃない？」

「ひっ！」

何故か計ったようにティータさんと鉢合わせしてしまった。

ティータさんは栗色の髪の毛をポニーテルにしており、いつも気さくな笑みを浮かべている。昔は薬屋さんの店主だったが、俺の要請によってフィーナの補佐役を頼んでいた。

「ちょうど良かったわ、ボクの判断を仰がなければならぬ案件があつてね。尋ねようとしていたところなのよ」

ティータさんはそう言いながら俺に歩み寄ってくるが、今までの経験から俺は拒否反応を示し、体が後ろへと下がってしまう。

「ボク？ 何で逃げるの？」

「よ、寄らないでくれ」

ティータさんが近づく度に俺は逃げるので、その様子を燻しかんだティータさんが片眉を上げる。

「何があつたか知らないけど、私の要件は至極真面目よ。だから

」

「俺に近づくなー！」

俺は背を向けて脱兎のごとく逃げだす。

後ろから「ちょ、ちょっとボク!?」とティータさんの戸惑い声が聞こえた気もするが、今の俺には判断できる能力がなかった。

「……やってしまった」

しばらく逃げた後、俺は自分の行いに猛烈な自今嫌悪に陥る。

見る限りティータさんはまともで俺が勝手に疑心暗鬼を膨らませて逃げてしまった。

「後でティータさんに謝っておかないと」

疲れて判断力が鈍っていたとはいえ失礼なことを働いたのは事実。

後に謝罪する必要があるだろう。

「ユウキ王ですか？」

涼やかな声をかけられたので俺は視線を横に向けるとそこには深い青色をした腰まで長い髪と深い色の瞳を持ち、全体的にスリムな体の持ち主である双子の片割れのレアがそこに立っていた。ちなみにまったく同じ容姿をしている姉のフィーナもいるのだが、彼女はレアと違って活発的である。

「ああ、そうだが。どうした？ レア」

一瞬逃げようかと思っただが、先ほどの失態もあるためすぐに動くことができなかった。

逃げるかどうかはもう少し判断材料が必要だと考える。

「ええ、少しユウキ王に相談したい事柄がありまして」

ふむ、ティータさんと同じ類のものか。

それなら応じる必要があるな。

「分かった。いったい何の案件が聞かせてもらっても良いかな？」

「はい、伝えますのでもう少し近くに寄ってください」

ん？ 何かおかしいな。

心なしかレアの雰囲気がおかしい気がするのだが、ああ言った手前、対応しないとまずいだろう。

だから俺はレアの言葉に従って足を進める。

「で、どういった内容だ？」

「はい、それはですね」

俺はレアの前に立って続きを促すとレアはまるで獲物を罠にかけたような笑みを浮かべる。

「双子井ってどう思いますか？」

「っ！！」

気付いた時にはもう遅い。

俺は身を翻して逃げようとしたのだがいつの間にかレアと全く同じ顔をした姉のフィーナが反対方向に立ち塞がっていた。

「俺が一体何をしたー！」

あまりの状況に俺は力の限り叫ぶ。

「何もしていないから問題なのよ」

するとフィーナが呆れ調子で答える。

「そうです、その通りです」

レアもそれに便乗した。

「どづいつことだ？」

「ユウキ王、私達は自分達の容姿に自信を持っています」

「そうね、昔はよく告白されたものだわ」

まあ、双生美姫と呼ばれていたから貴族達からの人気も相当あったのだろう。

事実、エルファが手を回してくれたとはいえこの双子を引き取るのにけっこう金がかかったし。

「ユウキ王に引き取られた際、私達は覚悟をしていました」

「エルファ様はああ言ったけど、やはりある時期になると求められるのかなって思っていたわ」

と、ここで2人は息を吸って同時に。

「「なのに！　いつまで経っても手を出さないとどういふこと！
？」」

「どうもどうもせんわ！」

一卵性双生児のためか声の調子も全く同じなのでステレオで聞か
されている気分になる。

「むしろ喜ぶべきだろう！　強制しないのだから！」

俺は両腕を広げてそう力説する。

本来なら彼女は奴隷として貶められるはずなのに、それを救
った俺に対してどうしてそんなに怒るのか理解できない。

「そうだとっても限度があります！」

「私達は女を否定されているように感じられるのよ」

「否定していない！　むしろ魅力的だ！」

仕事がなければとうの昔に抱いていた自信がある。

「それなら今すぐ抱いて下さい！」

「その証拠を見せてよ！」

「だから何でそんな結論に達する！？」

「私達はこの2年間戦々恐々でした！」

「いつ求められるのかと毎日ビクビクしていたわ！」

「そんなの知らん！ 俺は始めから手を出さと言ってあつたはずだ！」

確かに初対面の頃、緊張に固まる2人を前に俺が示した仕事をやってくれるのであれば俺はお前達を拘束しないとして首輪を外させた覚えがある。

「そんな口約束なんて意味はないです！」

「性欲の前には理性も約束も紙切れ同然よ！」

「お前らは俺をどんな風に見てたんだ！？」

本能のままに生きる獣と同列視されてショックを受ける俺。

「とにかく！ 私達を安心させて下さい！」

「私達は焦らされて喜ぶ性癖を持ち合わせていないのよ！」

「俺もそんなことなどしたくはないわ！」

そう叫んだ俺はまたも窓から外へ飛び出す。

ここは最上階付近なので落下するには危険だが、幸いにもこの下にはバルコニーがある。

案の定俺はそこへ無事に着地することが出来た。

「ユウキ王！ また逃げるのですか！？」

「今！ お前らに捕まれば全てを絞り尽されそうだからだ！」

双子の悲鳴に俺はそう返して部屋に入った。

「おお、王でございますか」

部屋に入るとエレナ子爵が俺の出現に驚いたようだ。

目を白黒させている。

エレナ子爵は女性でありながらクロスに次ぐ長身の持ち主で、その真っ赤でボリュームのある髪や豊かに突き出た胸、そして堀の深い顔立ちから激しい気性を感じさせる雰囲気がある。しかし、中身は潔白で、常に清貧を貫いている。常時は優しく非常時は勇敢として巷では貴族の鏡と呼ばれている。

「どうして外から参ったのですか？」

側近のキリングがそう聞いてきたので俺は顔を引き攣らせながら「聞かないでくれ」と答えておいた。

キリングはエレナの足りない部分を全て補っていると言っても過言ではない。ボブカットの亜麻色の髪や片眼鏡、そしてローブを羽

織り、口調も丁寧で礼儀を備えていることから知性を感じさせるので。副官というより教授と呼んだ方がしっくりくるだろう。

「あー、喉が乾いた」

先ほどツバイク姉妹と口論したせいかわが喉がヒリヒリする。

思えばあれだけ大声を出したのは久しぶりなのかもしれないな。

「喉が渴きましたか。少々お待ち下さい、水を用意させましょう」

エレナ子爵に命令されて水を持ってきたキリングが笑みを浮かべていたので訝しんだが、俺はそこまで注意を払わず「変だな」と思う程度に留めて杯を呷る。

冷たい感触が喉を通る　そこまでは良かったのだが、続く粉上の苦い感触に俺は咄嗟に水を吐き出した。

「ゲホッ、ゲホ……おい!?　これはまさか?」

俺の頭の中に警鐘が鳴り響き、すぐにこの場から逃げると命令するのだが体は徐々に言うことを聞かなくなってくる。

「エレナ子爵!　お前もか!？」

体が力が抜け、床に崩れ落ちる直前に某皇帝のセリフを叫ぶのだが。

「お、王よ。一体どうなされましたか?　いや、キリング!　これは何の真似だ!」

エレナ子爵も想定外だったらしい、血相を変えてキリングに詰め寄る。

するとキリングはクツクツと笑いながら。

「エレナ様の恋心を叶えてあげようと思ひまして」

と、言った。

「んなあ!？」

その台詞に形勢逆転され、エレナ子爵の顔が赤くなる。

「前々からエレナ様の様子を傍で拝見していましたが、王と出会ってからエレナ様は変わりましたよ。王のことを話す時はまるで夢見る乙女のように顔を上気させて」

「言つな言つな言つなー!」

エレナ子爵は顔をブンブンと振って否定することからおそらく凶星なのだろう。

「もし機会があれば王にこの痺れ薬を飲ませてエレナ様の希望を叶えて差し上げましょうと思つていましたが、こんなに早く来るとは予想外でした」

満足そうにキリングが頷くが、当事者の俺にとっては笑いごとでない。

「おい、分かっているのか！ 王に対してこんな無礼を働けば大変なことになるぞ！ 今ならまだ間に合う、考え直すんだ！」

とりあえず建前を述べてみる。

キングの行いは見方を変えれば王を害する意思があつたと取られても仕方がない。

「だからエレナ子爵！ キングの言うことに耳を貸すな！ ここで全てを失いたくないだろう」

エレナ子爵に対してはこのような言葉が一番効くだろう。事実、エレナ子爵は途端に視線を宙に彷徨わせ始めた。

「……やはり止めないか？ このような形は王の望みでなさそうだし……さすがエレナ子爵。

ちゃんと現実を見ているな。

俺は何とか窮地を脱することが出来たと安堵したのだが。

「しかし、この機会を逃しますとエレナ様は二度と王と結ばれませんよ？」

「う……」

「上手くいけば王の寵愛を受けることが出来て傍にいたことが出来るかもしれませんが」

「うっ……」

「そこを迷うなエレナ子爵！ 失敗した際に失うものの方が大きいことを自覚しろ！」

俺はそうエレナ子爵を止めようと言葉を放つのだが、最後に言ったキリングの言葉が致命的だった。

「この痺れ薬もベアトリクス王女によるものです。『これなら我が君に飲ませて何をしても構わないわ』との言質も頂いていますから何の心配もありません」

「ベアトリクスー！！！」

俺は断末魔の様な悲鳴を上げてしまう。

エレナ子爵も「そ、そうか。それなら大丈夫だな」と頷いているが、俺はそれよりもキリングの方が憎い。

「キリング！ お前はわざと隠していたな！？」

ベアトリクスからのお墨付きと最初に言えばここまでの喜劇を演ずることはなかったと断言できる。

さすがあの騙されやすいエレナ子爵をサポートしてきた者。

その腹黒さは他の者と一線を画している。

ベアトリクスと良い勝負をするのではと勘繰ってしまった。

「まあ、どちらでもいいではありませんか。今はエレナ様の体を愉しんで下さい。こう見えてもエレナ様はとても良い肢体の持ち主です」

「そんなことを言う必要はないだろう！」

キリングの評価にエレナ子爵はそう叫んだ。

キリングは両手を肩の位置にまで上げて首を振りながら。

「しかし、王は反応していましたよ？」

「っ！」

俺の無意識による僅かな動きを見逃さなかったとは。

恥辱心で歯を食いしばってしまっ。

「さあさあ、エレナ様。まずは王をベッドに運びましょう。脱がせること以降は私も手伝いますから」

何かとてつもなく不吉な言葉が聞こえた様な気がする。

そしてそのままベッドに横にさせられ、これで終わりかと覚悟を決めた瞬間。

コンコン

「ねえ、エレナ子爵？ ちょっと良いかしら」

絶妙とも言えるタイミングでティータさんのノックが入った。

「な！？ どうしようキリング？ この場面を見られたら私は終わりだぞ」

案の定、エレナ子爵は激しく取り乱す。

「落ち着いて下さいエレナ様。こういう時は落ち着いて対応すればよろしいのです」

が、残念ながらキリングは瞳の揺れすら見せずに対処案を提示した。

その後、俺を手短なシートに隠して2人はティータさんを出迎えたのだが、2人はその場で済ませられる内容でなくティータさんの後についていった。

俺は痺れ薬を服用した量が僅かだったことが幸いしたのか2人が帰ってくる前に何とか体の自由を取り戻し、壁に手を付けながらその部屋を後にする。

「……しばらく誰にも会いたくない」

この2、3日は部屋に引き籠っておこう。

俺は自室へ向かいながらそんな決心をした。

満身創痍（後書き）

次が最後です。

いやあ、楽しかったな。

勝者は誰だ？（前書き）

これで終了です。

お付き合いいただきありがとうございます。

勝者は誰だ？

王宮の最上階。

もつとも豪華な私室といえはこの部屋と言えるだろう。

何せフロア全体が丸々部屋になっているのだから。

俺的にはこんな豪華な私室など要らんと思ったのだが、そこは皆の反対によって却下された。

「主が貧乏なお部屋に住まわれると私達も気を使います」

とはエルファの弁。

「とにかく、しばらくはこの部屋で過ごそう」

あまりに部屋が大きいため俺は敷居を用意し、多くのスペースを作ってそこに何かしらの物を置いていた。その中に食べ物もある。

そして、俺のベッドは20人ぐらい同時に寝れるほど広い作りとなっていた。

「さて、ただい」

「お帰りなさい、我が君」

一瞬ありえないものが見えた。

あの銀髪悪魔が待っていましたとばかりにニコニコと笑いながら待ち受けていたような気がする。

ベアトリクスは白磁の肌に透き通るような銀の髪を腰まで伸ばしている。容姿こそ可憐で儂く、浮世離れした美しさを持っているのだが性格は最悪で気に言っただ人間の困る顔が好きという非常に迷惑な趣味を持つ元シマール国第1王女。

目を擦って表示されたプレートを確認しても見間違いはない。

ここは何人たりとも人を入れたことのない俺の部屋だ。

「……疲れているのかな」

今日一日の疲労によって悪夢が見えたのだろう。

気を取り直してもう一度ドアを開ける。

「お疲れ様です、ご主人さ」

「つく！..！」

幻ではない！

ベアトリクスの横にいたのはあのお嬢様メイド。

白銀の髪に病的なほど肌が白さ。そこだけ見ればベアトリクスと似ているのだが、瞳に確かな意志を感じさせることからまだ区別が付く。王女なのに何故メイド服を身に着けているかというところ、他人のために働くことに生きがいを感じるらしいから、動きやすいこの

格好が好きだと言っている元バルティア王国第2王女。

これは現実だ！

この場所に俺の安息の場は無い。

だから俺は脇目も振らずに逃走しようとしたのだが。

「どこへ行くこうとするのかな夫よ」

ガシッ！ とばかりに首を掴まれる。

俺はギギギと音が鳴りそうなほどぎこちなく首を回した先には見事な金髪が目に入った。

光り輝く髪に黄金比で調整された顔立ちから女神が降臨したかのように思わせる容姿を持つのはリーザリア帝国第3王女ヴィヴィアンであり、現在は俺の妃の地位にいる。相当な努力家であるがゆえに努力しない者は認めず、そんな人物が己の上に立つことを最も嫌うという困った性格をしている。

「なに、ちょっとテイータさんに用があつてな。緊急の用事だから離してくれるとありがたい」

俺はそう言ってヴィヴィアンの腕を払いのけて進もうとしたのだが、今度は別方向から誰かの手が伸びてくる。

「おい！ シクラリス！ 放せ！」

その白い腕の持ち主はシクラリスだった。

「ご主人様、こちらの方がもつと大事です」

例え女性だと言っても2対1では分が悪い。俺は徐々にだが部屋の方へと引きずられていってしまふ。

「あらあら、この時はこうするのよ」

「なっ!?!」

ベアトリクスの声が聞こえたと思った瞬間俺の脚は払われ、うつ伏せに倒れてしまふ。

「さあ、運びましょう」

ベアトリクスの合図によって俺はさしたる抵抗も出来ず、部屋の中へと吸い込まれてしまった。

「放してくれ〜!!!」

俺の悲痛な叫びにも拘らず、ドアは無情にも閉じられてしまった。

こういうのを何と言っのだろう。

正座している俺を中心とし、元王女3人がカゴメカゴメの要領で回り続けるというのは不気味以外の何物でもない。

「さて、我が君。私達はあなたに言いたいことがたくさんあるわ」

ベアトリクスが謡うようにそう言い聞かせる。

「まずはヴィヴィアンね、お願い」

その言葉を合図として3人は回り続けることを止め、そして俺の前にはヴィヴィアンが立ち塞がった。

「夫よ、そなたは妻である私に対して何か忘れていないか？」

心当たりがないので俺は首を振る。

結婚指輪は渡し、拳式も上げた。

他に何が必要なんだと考えているのか。

「なるほど、やはり知らなかったか。教えてやろう！ それは初夜だよ初夜！ 夫婦で行われなければならない初夜を私達はまだしていないではないか！」

「いや、だって俺達は政略結婚であって純粋な愛ゆえではないのは広く知られていることだろう。それならしない方がましではないか？」

単に体だけの関係というのは俺の中の倫理が邪魔して実行することが出来ないんだよ。

「夫よ、それはちがう！ した方がましなのだ！」

ビシリと人差し指を突きつけてそう宣言するヴィヴィアンはさら

に続けて。

「私が夫と情交をしていないことを国民に知られたらどうなる！
私は夫に心はおるか体すら興味を持たせられない最悪の伴侶として
認識されるのだぞ！ そんな屈辱を受けると言うのか！」

「そんな大げさな」

俺は笑い飛ばそうとしたのだが、ヴィヴィアンの本気の間を見て
止める。

「国民はまだ良い！ どうせ有象無象だ。しかし！ 他の国から来
た側室に憐みなんて持たれてみる？ 私は憤死する自信があるぞ！」

相当切羽詰まった様子で言い放つ様子からヴィヴィアンは本気な
のだろう。

本気で馬鹿にされるのが慣れていないみたいだ。

「形だけでも私達は夫婦だ！ それならやっておくのが筋というも
のだろう！」

「いや、だからお前の気持ちはどうなんだ？ 名誉のために純潔を
失っていいのか？ それは大切な人のために取っておくべきものだ
ろう」

「構わん！ いつ現れるか分からない人のためよりも確実に来る嘲
笑から避けるほうが遥かに大事だ！」

心なしかヴィヴィアンがやせ我慢をしているような気がするが、

そこを突っ込むのは野暮だろう。

言いたいことを言いつくしたのかヴィヴィアンは俺の背の方へ回った。

「さて、次は私ですね」

そう言っつて次はシクラリスが現れた。

「ご主人様、私はすでに身も体もご主人様に差し上げていることはご存知ですよね」

その問いに俺は頷く。

バルティア皇国を降伏させた際、貢物として贈られたのがシクラリスであり、その時に彼女は俺に永遠の忠誠を誓っている。

「私はあの日からどんなことをされるのかと身を悶えさせました。何せご主人様は浮浪児から成りあがった者、そんな異常な方が普通のプレイじゃ満足できないと考えたからです」

「……おい、さりげなく俺を馬鹿にしたな？」

俺は片眉を上げるのだが、生憎とシクラリスは抗議を無視して先に進める。

「蠟燭、拘束、木馬、吊り下げ、鞭打ち、浣腸、二本差し、便器、ピアス、公開、輪姦等色々想像していましたが、ご主人様は何故どれもしないのです!？」

「やるやらない以前に想像すらせんかったわ！」

というかよくそこまでスラスラと頼すら染めずに言えたな。

俺はそこにびっくりだよ。

「嘘です！ 男は全員そんな行為に興味を持つはずです！」

「勝手に決め付けるな！ 少なくとも俺は絶対に興味など持たん！」

お前はどれだけ男に対して偏見を持っているんだ？

「だってお父様もお兄様も妻や奴隷に対してよくそいった行為を

「

「ストローップ……！」

これ以上続けさせると俺の中でバルティア皇国の評価がガタ落ちしてしまうので強制終了させる。

バルティア皇国はついでという形で滅ぼしたのだが、今となつてはその判断が正しかったと考えてしまう。

現に俺はすでにバルティア皇国を滅ぼした罪悪感など綺麗さっぱり消えてしまったし。

「とにかく、私はそのような行為を受け入れることが出来ますから。もし興味があれば私に言って下さい」

うん、よく分かった。

お前には最高の教師をつけてやるから如何に男女が平等なのかを
知れ。

シクラリスが横へと消えていくのを眺めながら俺はそう固く決心
した。

そして最後はベアトリクス。

「アハハハハ。こんにちは、我が君」

こいつは人を馬鹿にするときは笑いながら踊るといふ癖を持っている。今、結構テンションが高い様子からベアトリクスも絶好調なのだろう。

「ねえ、我が君。今回の騒動はどうだった？」

「どうもこうもしない、本当に災難だった」

傍目から見ると喜劇かもしれないが、実際に巻き込まれると悲劇
だぞ。

俺の答えを聞いたベアトリクスは何がおかしいのかさらに声の調
子を1オクターブあげる。

「如何だったかしら？ 私の考えた遊びは？」

「は？」

今、こいつはとんでもないこと言ったぞ。

「名付けてユウキ争奪戦。参加したプレイヤーはどんな手を使っても良いから我が君の童貞を奪えば勝ち。そして勝てば向こう1か月我が君と共にいる権利を勝ち取れるわ」

「ちょっと待て、ベアトリクス。もしかしてお前が仕込んだと？」

「ええ、その通りよ。最近娯楽がなかったからいい暇つぶしだと思っ
つてね」

なるほど、薄々感づいていたがやはりベアトリクスが一枚噛んでいたか。

道理で今日に限って女性陣が問答無用で求めてきたものだよ。

「誤解しないでほしいのは、仕掛け人は私だけど元々の原因は我が君よ。我が君が私達が日頃から発する好意に気付いていればこんなお祭りなどなかったと言えるわね」

「は？ 俺のせい？」

突然出てきた俺の名に呆けるのだが、憎たらしいことに3人全員がウンウンと頷く。

「私が馬の骨を夫にするはずがないだろう」

「ご主人様として不適合ならとつくに舌を噛み切っています」

ヴィヴィアン、シクラリスがそう答え。

「私も馬鹿を我が君なんて絶対に呼ばないわね」

ベアトリクスもそれに同調した。

「あー……それは悪かったな」

ここは謝っておくべきだろう、俺は素直に頭を下げる。

「分かれば良いのよ」

・ ・ 何故だろう 何故か殺意が わいてくる

ベアトリクスの尊大な態度に俺はそんな一句が浮かんだ。

「さて、これでゲームは終了ね。勝者は私達3人。これから1か月ゆっくりと愉しみましょう」

「「「ウフフウフフフ」」」

と、3人の笑いが八モったので俺は恐怖にビクリと震える。

そしてヴィヴィアンが俺を立たせ、シクラリスが先導した先にベアトリクスが待ち構えている。

「憎しみ合っていた三国の王女3人との乱交。これって一つの奇跡よね」

そんなことをベアトリクスが言う。

このままなら俺の争奪戦ゲームは王女3人の勝ちで収まっていた

だろう。

が、事態はそう易々と進まない。

俺がベッドに腰掛けた瞬間扉が勢いよく開き、多くの女性がなだれ込んできた。

「げ……」

俺がそうつめき声を上げたのも無理ないだろう。

何故なら彼女達は今日、俺を追いかけまわしていた面々だからだ。

「予想通り主はここにいました」

「ユウキ様、申し訳ありません」

「また負けちゃったわ」

「……エルファ、アイラ、そしてオーラ」

先程まで戦闘していたのだろう。しかし、本当にエルファには攻撃一つ当たらなかつたのかエルファが無傷の代わりにその分アイラとオーラがボロボロだった。

「イズルガルドの勘はもの凄いわ」

「お姉様が危惧した事態までまだなっていないようです」

「キツカにククルスも」

あの竜巻の余波なのか2人と衣服の所々がほつれ、髪には木の葉が付いていた。

「……間に合った」

「ぎりぎりセーフというところかな」

「ユキとミア、よく無事だったな」

あの魔道騎士団と2人で相手にしていたはずなのに疲れの素振りすら見せないのはもはや化け物だ。

「あ！ 師匠！ ここにいた！」

「あらあらサラちゃん、慌てなくてもユウキ様は逃げませんよ」

「サラ、ヒュエテルさん。よくここが分かったな」

俺を見つけて喜色満面のサラにそれを暖かく見守るヒュエテルさん。

「やっぱりここだったのね」

「ごとういう時の姉さんは役に立ちます」

「その瓜二つの顔はフィーナとレアか」

急いで来たのだろう、2人は息を切らしていた。

「ちょ、ちょっとキリング。急ぎ過ぎではないのか？」

「何を言っているのですか、私達が最後ですよ」

「エレナ子爵もキリングも来たのか」

最後に現れた2人を見て俺はそう呟く。

「これは予想外だな」

「うつつ、後一步だったのに」

「さすがのヴィヴィアンやシクラリスもこの事態には戸惑うか」

2人とも先程までの勝ち誇った顔が消えている。

「うーん、どうでしょうか。この状態から逆転できる手は……」

が、唯一ベアトリクスは諦めていないようで銀髪を弄くりながら策を考える。

そして出た答えが。

「決めた、やはり早い者勝ちよ」

そう言うが早い俺を押し倒すベアトリクス。

ベアトリクスの行動を見た残りの15人が一斉に動き出す。

そして次の瞬間には天国と地獄が出現した。

次の日

「こんにちは、ティータさん」

昼、俺はおそらく今日動けるであろうティータさんの様子を見に行った。

「ああ、ボク。おはよう」

ティータさんはいつも通りの笑みを返してくれる。

「それにしても今日は人が少ないわね。おかげで仕事が捗らないわ」
ティータさんがそうぼやくのも無理はないだろう。

何せジグサリアス王国の首脳部の大部分が欠席しているからな。

「クロスとレオナはどうした？ 確かあの2人は出勤していると思うが」

俺がそう聞くとティータさんは僅かに呆れのため息を吐きながら。
「昨日やり過ぎたからって両方とも腰を痛めて今日休むと連絡来たし……若いつて良いわね」

どうやらあの凶暴化したクロスが際限なき欲望をレオナにぶつけた結果、自身すら痛めてしまったらしい。

まあ、あの2人から結構痛い目にあつたので同情心など湧かないが。

「と、ここでティータさんが年のことで黄昏ていたので俺はフォローする。」

「いやいや、ティータさんも十分若いですよ」

「そう、ありがとう」

20の前半ってまだまだ若いだろう。

「それで、他の皆はどうしたの？」

ティータさんがその2人以外のことを尋ねてきたので俺は肩を竦めて簡潔に述べる。

「全員俺のベッドで寝ている。何でも腰を痛めたらしく、今日は満足に動けないらしい」

特にベアトリクスはお仕置きの意味も兼ねて入念に相手をしてやったから2、3日は動けまい。

最後はもう泣いていたのか悦んでいたのか分からなかったからな。

「はあ？ 何それ？」

ティータさんがそう聞いてきたので俺は曖昧にぼかすことにする。

「ところでティータさん。遅漏って何分ぐらいからだと思っ？」

女性にする会話ではないのだが、ティータさんはこの類の話に免疫があるので安心してできる。

「うーん、そうねえ……」

「卑猥な雑誌を見ながら30分以上擦ってようやく出るってどう思っ？」

「ちょ！ それは遅漏とかそんなレベルじゃないわ！ もはや伝説の域よ」

ティータさんが血相を変えて捲し立てるので茶化してはいないだろう。

「ああ、そうか。ありがとう。ところでもう今日は仕事にならないから終わって良いよ」

「え、でも……」

「仕事をすることも大事だが、今回は誰も動いていないから仕事が回ってこない。だから今日は休んで精神を回復させてくれ」

「あら、そう。じゃあお言葉に甘えて」

ティータさんは少々驚きながらも今日を臨時休業にすることを了承する。

「さて……何をしようか」

そして一人になった俺はウーンと背伸びをしてこれから午後の時間をどうしようか考えた。

余談だがあの大乱交以降、女性陣は今後俺を相手にする時は2人以上で行うことというのが固く決められた。彼女達曰く「1人だったら確実に壊されるから」というものらしい。

「16人もの女性を相手にしなければならぬ……やれやれ、王様は大変だねえ」

俺はそんなことを呟いた。

勝者は誰だ？（後書き）

次は間章です。

この章と違ってシリアス多めにいきます。

リーザリオ帝国討伐（前書き）

ヴィヴィアンが主役です。

リーザリオ帝国討伐

「お初にお目にかかります。私の名はオーラ・アメジスト・パープル
ユクエリス、諜報部隊『林』の副主任です。これから先ヴィヴィ
アン様のお目付け役としてご同行させて頂きます」

丁寧な口調で淀みなくそう述べるのは私率いるリーザリオ帝国の
軍を戦いもせずに敗北させたあの焦土作戦の実行役の副リーダーだ
った。

しかし、よくもまあその1ケタの女兒にしか見えない容姿を維持
できるものだわ。何か秘術でも使ったのかしら。

私 ヴィヴィアン・リーザリオ・カザクラはユウキ王の国を攻
めて敗北し、彼の妃へなる代わりに母国を滅ぼすという契約を結ん
でいる。

そのための兵として同時期に滅ぼしたバルティア皇国の兵士と敗
残兵、そして『林』の部隊を借りているのだが。

「そうそう。最初に言い含めておくけど、私達はヴィヴィアン様の
命令に従う必要はないから」

このオーラの言うとおり『林』は実質別部隊で、私を監視するた
めにあるものだ。

ただ、私はこの措置をやりすぎだと考えている。

なぜなら。

「そんなに心配しなくていいわよ。今更反旗を翻したところで将来負けるのは確定なのだから」

ジグサリアス王国は仇敵だったシマール国を滅ぼし、バルティア皇国を降伏させた実力を持っている。

それにシマール国が誇る王国騎士団に圧勝した事例も鑑みると、裏切っても近いうちに攻め滅ぼされることは明白。それなら妃として収まった方がまだ未来があるのよ。

そう答えるとオーラは得心したのか一つ頷き「そう」と返した。

「さて、ここからリーザリオ帝国までのルートを確認するわね」

こちらの兵力は30万で、向こうは40万。

数も向こうが勝っているし、こちらの兵の半分は借り物の兵のため、窮地に踏ん張ることができないので旗色が悪くなればすぐに逃げ出すので、質も劣る。

「本当に、よくこんな状態で攻め滅ぼせなんて命令を出したわね」

「これぐらいしなければ国民は納得しないのよ」

私の漏れてきた愚痴にオーラはそう返す。

「ここからリーザリオ帝国の帝都まで進もうと思えば最低でも城2

つを通らなければならぬわね」

一番近いのは三方が山に囲まれたベートリア城で壁が相当高く作られている。

このベートリア城はシマール国から侵略を防ぐための城だから防衛力もリーザリオ帝国随一ね。

「さて、どうする？」

オーラの問いかけに私は少々考え、そして一つの案を出した。

「そうね、『林』は相手の陣地にまで手が伸びている？」

「詳しくはお答えできませんが、中級指揮官までに伝わる指示ならある程度こちらに入ってくるわね」

ジグサリアス王国の諜報部隊の優秀さに舌を巻くんだけど、それは表に出さない。

……全く、本当に恐ろしいわね。

「それなら彼らにこう噂を流して頂戴。『リーザリオ帝国のヴィヴィアンはジグサリアス王国から逃れてきた』と」

「ふうん、それで？」

「私は信頼できる手練れに酒と食糧を持たせて中に入るわ。そしてそれを飲み食いし、全員が油断したところで頃合いを見て火をつけ、城門を開くからその時に全軍を突撃させて」

「なるほどね、その手でいきますか」

オーラは納得するかのように顎に手を添えて内容を吟味する。

おそらく向こうは私が本当に寝返ったと信じていないから私が帰還したとして快く門を開くだろう。そして、私が持ち込んだ酒と食糧で宴会を開くだろう。

ベートリア城の兵士には悪いけどここで死んでもらうわ。

何を言っても言い訳にしかないけど、私が妃になった暁には必ずリーザリオ帝国の民を救ってあげるから。

私は小さく黙祷した後、オーラに至急上記の伝言をベートリア城の陣中に広めるよう命令したわ。

作戦は終始上手くいったわ。

私が精鋭を連れてベートリア城の前に立ったところ、すぐに門を開いて私を迎え入れてくれた。

そして、その城の指揮官に持ち込んだ酒と食糧で慰労を行うよう頼んだ。

城門の向こうにまだ兵がいたので指揮官は難色を示したけど、そこは私が押し切った。

私はまだ王女の身分だったから向こうは逆らえないからね。

そして皆が酒を飲んで油断している時に、私の手練れが城門を開いて外の軍を中へ招き入れたわ。

その途中、事態を知った指揮官に殺されそうになったけど、『林』の主任であるアイラが表れて私を守ってくれたことを追記しておくわ。

「お見事です、ヴィヴィアン様」

隣のオーラが私を称賛するけど、自国の兵士を殺したという事実はやはり晴れないわね。

一応今は敵になっているのだけど、1か月前までは味方だったのだからそれも当たり前か。

私は勝利に沸き返る軍をしり目に息も絶え絶えになっているベートルリア城の守兵の手を取る。

「最後に何か言いたいことはあるかしら」

するとその守兵は瞳に憎しみをみなぎらせ「……裏切り者」と残して逝ったわ。

「……次はアシアン城ね」

悲しんでいる暇はない。

泣いている暇があるのなら私は少しでも先に進み、この不毛な戦

いに終止符を打たなければならぬのよ。

アシアン城は平原にある城であり城自体の防御力はないが、代わりとして詰めてある人数が最も多い。

まあ、そこは帝都に次ぐ規模の都市にある城だからそうなくても仕方のないだけのぞ。

「どうしますかヴィヴィアン様。おそらく向こうは野戦を仕掛けてくるかと思われませんが」

オーラの言うとおり、数も質も向こうが勝っているのだから、障害のない野戦を行ったほうが効率がいい。

「そうね、食糧と金はどれくらい使ってもいいのかしら」

「ふむ、相当な猶予はありますがどうなされるおつもりで」

「簡単よ。向こうは数が多いといってもそれは食い詰めた連中が大半で、愛国心なんて高尚なものは持ち合わせていないわ。食べさせてくれるのだったら彼らは喜んでこちらにつくわよ」

悲しい事実なのだけど、リーザリオ帝国において忠義の心を持っている兵士はごく僅かしかいないわ。兵士のほとんどが農民の次男坊三男坊で、食い詰めたから仕方なく兵士になった者が多いのよ。

「できるだけ一般兵士も気付くぐらいに派手に送って頂戴」

「わかりました。しかし、この策を確実なものにするために少々仕込みを行います」

「どのような内容？」

「『ジグサリアス王国へつけばもう飢えなくて済む』や『上官が送られてきた食糧を独り占めにしている』という情報を流すことです」

「それはそれは……」

私が言うのもなんだけど結構あくどいわね、それは。

もし上手くいけば向こうは戦うどころか組織を維持することすら困難になるわね。

けど……

「もう一つ付け加えてよろしいかしら」

そこまで能力が高いのならこの策も出来るでしょうね。

「今、あの城の指揮官はルール・ウエスタン・イザラニアというリーザリオ帝国きつての猛将よ。あのやかましい將軍がいる限り兵の動揺は少ないでしょうね」

30代にも関わらず髭面で大柄な体躯の持ち主で、その野太い声で吠えるというリーザリオ帝国全土に響き渡ると噂されるほど声が大きいよ。だから彼が一喝すると大抵の兵士は大人しくなるわ。

兵からも慕われ、帝国からも信頼されている希少な人材なのだけ

どやはり彼にも弱点があるのよね。

「ここに彼の母が書いた手紙があるわ。誰かこの手紙に書いてある筆跡を真似て將軍に送り付けて頂戴。『立派になったお前の顔を見せてほしい』という内容がいいかしら」

彼は親孝行な人物なのだから母の願いには逆らえないの。

「わかりました。そして、ルール將軍の母君がいる村にアイラ主任を送り込んでおきましょう」

「アイラを送っていいの？ 彼女って確かあなたの上官でしょ？ わざわざ上が行くのかしら」

「普通ならおかしいのですが、アイラは人を扱うことが不得手であり、単独潜入においては彼女の右に出る者がいないためそうなる役回りなのです」

つまり実質的な上官はあなたというわけね、ややこしい。

まあ、確実に捕獲してくれるなら問題はないわ。

「できれば生け捕りが望ましいのだけど」

ルールは殺すのに惜しい人材だわ。できれば信頼できる人間として私のもとで働いてほしいわね。

「アイラなら造作ありません」

そう返すことからオーラはアイラに対して絶対の信頼があるので

しょうね。

私はここまで決め、大きく伸びをする。

「さあ、後は結果を待つのみよ。しばらく兵士には休んでもいいと伝えてね」

後は自滅を待つのみ。

こちらはそれまでの間、この寒い気候になれない元バルティア皇国の兵士の体調を慣らしていきましようか。

「さて、後は本丸ノースタジアね」

アシアン城も兵士達による不信によって関係が崩れ、それを抑える将軍もいなかったせいも、短期間で向こうは内部分裂を始めたわ。

兵士の損耗率が低く、多くの捕虜を捕えたので糧食に不安な面が出てきたことが懸念材料かな。

閑話休題

ルール將軍を捕えたのはいいけど、私の幕下に入る条件として將軍の力を使わずにリーザリア帝国を滅ぼすことが決まったわ。

まあ、本来なら彼の力などあてにしてなかったから別に構わないけど。

「帝都決戦といっても消化試合の側面が強いけどね」

オーラがそう呟くのも分かる。

すでに大勢は決している。

リーザリオ帝国において最大の防衛力を誇るベートリア城は陥落し、交通の要所であるアシアンも抑えた。

後は戦わずとも持久戦に持ち込めばこちらが勝つというのが大方の見方だ。

現に利に敏い商人や貴族はこちらに阿り始めているし。

けど、軍の内情はそうでもないのよね。

特に食料が予定より消費速度が多いから、実際に持久戦に持ち込まれるとこちらが負けてしまう。

「さて、早いところ帝都を落としましょうか」

私はそう檄を飛ばして軍を進めたわ。

「やはりこれを使ってきたか」

私は帝都の前で呆然とする。

本来ならここから帝都までの道のりは一本道で木一本生えていな

い荒野地帯のはずなのだけど。今、私の目の前には多数の氷の壁が帝都を遮るかのように立ち塞がっていた。

「これは見事ですな」

近くに生えてある氷の壁を叩きながらオーラは感嘆の息を漏らす。

「中に土が見えることから、一度土壁を作り上げた後に上から水かけたのでしよう。この寒いリーザリオ帝国の中でも最寒といえるノースタジア帝都周辺の気候だと一日で氷の壁が誕生するわ」

昔、シマール国からの侵略に対してこの戦法を用いた実例があった。

当時のシマール国は精強で、このノースタジアまで攻め入れられただけど、この戦法を使って撃退した史実がある。

「『火』も多少いますから魔導師によって溶かすことも可能ですが、そんなことをしていると先にこちらの糧食が尽きてしまいます」

オーラの言うとおりそんな悠長な方法など取っている暇はない。

この温度では溶かす傍から凍っていくわ。

だから私は大きな被害が出るのを覚悟して正面突破を敢行したわ。

帝都攻略からもう1週間

状況は芳しくない。

いえ、確実に進んでいるから成果は上げているのだけど死傷者が多すぎるのよ。

そして、それよりも大事な問題が食料。

もうこのペースのままだと帰りの分を計算すると後1週間で終わる計算となってしまう。

「どうも旗色が悪いようですね、撤退しますか？」

オーラがそう聞いてくるけど私は首を振ってその意見を却下する。

今ここで退けばリーザリオ帝国を落とすことが出来なかったとして妃に相応しくないと判断されてしまう可能性がある。

そうなれば後は惨めなもので私に行き場などなく、今度こそ死しか道はなくなるだろう。

しかも自国を攻め滅ぼそうとした忌むべき王女としての烙印を押しされながら。

「そんな未来はごめんだわ！」

我知らず叫んでしまう。

考えただけで震えが止まらない。

地位も名誉もなく、ただ悪人として死ぬなんて。

何とか考えないと。

このリーザリオ帝国を滅ぼし、ユウキ王の妃としての地位を確立しないと私は全てを失ってしまう。

「……仕方ないわね」

私はある決断をする。

「食糧の配分を減らしなさい」

「しかし、それをしてしまうと兵からの不満が。ただでさえ結束力が低い我が軍がそんな真似をすると」

「分かっているから早くしなさい！」

私の剣幕に押されたのかオーラはそれ以上何も言わず、ただ頭を下げたわ。

「予想通り、兵からの不満の声が上がっています」

オーラからの報告通り、突然食糧の配分を減らされたのでこちらも兵の怨嗟が聞こえてきていた。

「予定通りね」

「は？ どういうことですか？」

私の呟きにオーラは目を点にするけど、生憎とそれを気に留める時間はないのよ。

「オーラ、食糧の配分を担当する者を呼べるかしら」

「だから何が　はっ、まさか！」

オーラは途中で私の意図に気付いたようね。出会ってから始めて声を荒げたわ。

「何という非情な策だこと。これは絶対に真実を知られるわけにはいきませんね」

オーラの指摘も最もだろう。

今、私は何の罪もない者に濡れ衣を着せようとしているのだ。

本当に申し訳ないのだけど食糧の配分を担当している者を殺してその首を兵達の前に晒す。

罪状は兵士の食糧を誤魔化した罪。

そして兵の鬱憤が彼に向けられたところで食糧の配分量を増やして一気に帝都を攻め落とす。

それしか勝つ方法がない。

犠牲になる者は申し訳ないのだけど、贖罪として彼の兄弟と妻子の面倒を見てあげるから。

「もう一度言っわ食糧の配分を担当している者呼びなさい」

けど、なぜかオーラは動こうとしない。

やはり非情過ぎてこの策は使いたくないのかと一瞬考える。

「……王のご懸念通りになりましたね」

そう言ってオーラは懐から一通の手紙を取り出す。

「もし、王妃ヴィヴィアンが非情な策を取るようであればこれを渡すようにと」

そしてオーラはその手紙を私に寄越したわ。

私は恐怖によって手が震える中、中身を取り出して確認すると。

「アハハハハハハ！」

もう笑うしかない中身だったわね。

「如何なされました？」

オーラは片眉を上げて私に問いかけるけど、全然気にならなかつたわ。

その答えとしてその手紙をオーラに渡す。

「じ、これは……」

オーラも目を見張っただろう。

そこに書かれていたのは私の罷免の類ではなく、このリーザリオ帝国で育成する植物の調理方法について書かれていたからだ。

あんな横にしかならない植物が食べられるなんて考えたこともなかった。

アクが強くて渋く、食べられない類のものを中心として書かれたそれは現在の食糧状況をひっくり返す程よ。

「これで食糧の問題はなくなったわね。さあ、ノースタジアを攻略しましょうか」

どうして彼がこの北国で生息する植物の調理法を知っていたのか気になるところだけど、そこは後で問い詰めましょうか。

今は目の前の帝都を落とすほうが先決よ。

そして帝都を落とした私は意気揚々とジグサールに戻ったわ。

父様や兄様、姉様達は捕えて専用の場所で拘束してある。

自害しそうだったのをアイラが止めたらしい。

私としては情けとして殺したかったのだけど、アイラがジグサールへ連れ帰るといふのなら反対はできないわね。

そこは負けた者として仕方ないと割り切るしかないわ。

さあ、中央広場が見えてきたわ。

どうやらジグサリアス王国の国民は私を認めてくれたみたい。

ふう、これで一つ目の難関を超えたわ。

次は王妃としての地位を確立すること。

今のままだと良い側室が来れば切り捨てられる恐れがあるから気を付けないと。

さて、宣言しましょうか。

私は王妃だということを皆に知らしめるために。

私の視線の先には夫のユウキ「ジグサリアス」カザクラがいて、両隣にはシマール国の王女とバルティア皇国の皇女が控えている。

全く三国を統一するなんて本当に彼は化け物ね。

「ユウキ「ジグサリアス」カザクラ王の妃！ ヴィヴィアン「リーザリオ」カザクラは！ リーザリオ帝国を打ち倒した！」

私は大きく息を吸ってそう宣言すると広場に集まった国民は歓喜が爆発したわ。

リーザリオ帝国討伐（後書き）

気付いておられる方もいると思いますが、作中に登場した策の元ネタは三国志演義に登場する曹操を参考にしています。

バルティア帝国侵攻(前書き)

今日は更新できました。

バルティア皇国侵攻

大空を飛行し、ついに私達はバルティア皇国の国境付近まで辿り着いたわ。

「私達の役目はバルティア皇国の足を止めることよ！ 応戦せずに船を狙いなさい！」

お姉様の凜とした声音が響き渡ると私　ククルス「トパーズイエロー」フォンテジーを含めた竜騎士軍団『風』の隊員は自然と身が引き締まる。

ああ、本当にお姉さまは素敵なこと。

真っ赤に燃える髪の毛に燃えるような瞳に加え、全身からあふれ出す灼熱の雰囲気にはもう身も心も燃やされつくしたわ。

「……ククルス、後で相手をしてあげるからその締まらない顔を引き締めなさい」

あらいけない。

いつの間にかお姉様が私の前まで来てジト眼で呆れかえっていたわ。

心なしか他の隊員の目が「またかよ」って訴えているし。

コホン

私は一つ咳払いをして調子を取り戻す。

「さて、キツカ隊長の仰る通り私達の目的は敵の足止めであって数を減らすことじゃないわ。だから無駄な戦闘など行わず、粛々と任務を遂行すること」

私の最終確認に全員が頷く。

私が選んだだけあってこの『風』に属する者は胆力と判断力を高いレベルで兼ね備えているわ。

まあ、引き抜いた人間のほとんどが軍の幹部またはエースだったからジグサール首脳陣は大変だったそうだけ。

閑話休題

「作戦通り、隊を2つに分けます。一つは船を焼き払うための隊でもう一つは相手の竜騎士団を撃墜することよ。後者はキツカ隊長の元に集まり、前者は私の所へ来るように！」

あまり大声は出しくないので、ここは私が言わなければならぬから仕方ないわ。

そんなことを考えながら私は弓を番える。

私達の隊は全員火矢を準備しているのよ。

火なら簡単に燃やせるからね。

わざわざ近づいて撃退される危険性を増やしたくないし。

代わりにお姉さまの隊は弓の代わりに長い槍を持っているわ。

別段変なところはなく、槍が空を飛ぶ者の標準装備と言えるわね。

「キツカ隊長、その人数で大丈夫でしょうか」

私が不安がるのはお姉さまが最も危険な場所に加え、槍を持っている者はお姉さまを含めて5名ほどしかないからよ。

いくらお姉さまが強いからといってもバルティア皇国は10体控えてあるようだし、こちらは20体もいるのだからもう5体それぞれに回してもいいのではないかと考えるわ。ちなみに残る7体はリーザリオ帝国の援護に向かっているわね。

もしお姉さまに万が一があると私はどうすれば……

「心配しないでククルス、私は死なないし負けない。それは決定しているのよ」

お姉さまは相変わらず根拠のない自信を示すけども、何故かお姉さまの言葉にはそうだと信じさせてしまっ何かがあるわ。

『安心しろ小娘、我がついているのだ。養殖で育った同族などに後れは取らぬ』

お姉さまの相棒である竜のギールもそう励ましてくる。

確かに私達の竜は育てたのと違ってスピードもプレスも段違いだけど、その中でもギールは別格ね。

『風』の中の模擬戦でお姉さまとギールのペアに勝とうと思えば少なくとも3人は向かわせないと食い止められなかったわ。

そんなことを考えているうちに停船場が見えてきたわ。

「総員！ 火矢を準備！ 狙いは船！ 放て！」

私の掛け声を合図にして20体の竜騎兵から一斉に射撃が行われたわ。

向こうも必死に消火活動しようとしているけど、空から射ている私達の攻撃の前に無力。

向こうの努力も空しくあの停船場にあった船は軍事物資もろとも灰へと成り果てた。

「進行方向を7時へ！ その先に停船場があるわ」

『林』の部隊からの情報によって私達は何の抵抗も受けなく次々と船を燃やしていたけど、4つ目になるとようやく竜騎兵が現れたわ。

「やっと来たわね、待ちくたびれちゃった」

予想はしていたけど、始めて見る他国の竜騎兵に私を含めた全員が緊張していたけど、お姉さまのその言葉によって多少雰囲気は軽くなった。

「さて、私が突っ込むからルートとワーギは私の後に続いて。そし

て残りのアオルとシャラは討ち洩らしを防いでね」

そうテキパキと指示を出したお姉さまは敵の中へと突っ込んでいく。

その様に私達は一瞬呆けたものの、指名されたルートとワーギは慌ててお姉さまの後を追ったわ。

そこから先はなんと形容すればよろしいのかしら。

4世代前と次世代との戦いといったほうがしっくりくるわね。

たまにユウキ王が練習中に現れて幾つかの技を提示したのだけど、それが実戦で使用するとここまで華麗かつ圧倒的だとは思わなかったわ。

確かユウキ王が言っていた技名　ロールやループ、旋回はまだ私達も使えるにしろ、その先のインメルマンターン、スプリットSやスライスターン、バレルロールを実戦で使用できるのはキツカお姉様しかない。

それら華麗な技を自在に操り、敵を撃墜する様子はまさしく戦乙女。

美しいという言葉以外見つからなかったわ。

お姉さまが選んだ4人も私達と違って一通りの技が使えるけど、実戦に使うのには心もとなく、お姉さまの領域には遠く及ばない。

お姉さまは「ギールだからここまでできるのよ」と笑っていたけ

ど、例え私達の竜がギール並みの強さを持っていても無理だというのが共通の見解よ。

あの空中演武はお姉さまだからこそできること。

「さあ、次の停船場へ行くわよ！」

撃墜数8という圧倒的な記録をたたき出したお姉さまは凜とした声で竜骨の槍を突き上げ、そう宣言したわ。

一応ボク　ミアリガーネットオレンジヴァルレンシアは伯爵の跡取りだったんだけど、それを蹴ってユキについたことは間違っていないかったと思うね。

確かにミドルネームのキャストウィッチを失ったときは僅かな寂しさも覚えたけど、今はもう過去の話になった。

ユキは可愛く、いつまでも愛でていたくなるようだけど、それを抜きにしても本当に彼女を敵に回さなくてよかったよ。

「……この氷はあと5分持つ。だから早く」

いくら大陸は広いといってもこのバルティア皇國中を流れる川らを真っ二つに割って凍らせる芸当をできるのは多分ユキだけだろう

ね。

昔、ユキが流れる川を割って凍らせる瞬間を見たボクはおろか『火』の団員全ての目が点になり、ユウキ王でさえも「まるでモーゼだな」と苦笑していたからどれだけすごいか理解できるだろう。

今、ボク達『火』は『山』の中でも速さに特化させた軽騎兵を先導してバルティア皇国の皇都へ侵攻中だ。

ユキが川を割り、凍らせて作った道を渡ることの繰り返しで直接皇都を攻める。

この戦法にはバルティア皇国もビックリだろうな。

何せ圧倒的な障害として自分達を庇護していた川が全く役に立たないんだから。

向こうの慌てふためき様が目に浮かぶよ。

この事態を何とか打破しようとする動きもあるけれど、そのための足はキツカ率いる『風』によって潰された。

もうほとんど詰みの状態だね。

だからボクは鼻唄交じりに進んでいたけれど、やはり向こうも最後の意地だけは通したいらしい。

幾つかの川を渡り、そして皇都を目前とした川の対岸に軍を展開しているのが見受けられる。

「……ミア」

たったそれだけでユキが何をしてほしいのかが伝わってくる。

思えば学生時代からの付き合いだったからね、ユキが何を求めているのか大抵分かるんだよ。

ボクは腰に携えたあつた杖を手取る。

その先には純度の高いルビーが埋め込まれており、魔力の媒体としては十分だ。

さてと、あの兵士達には悪いけれど、これも戦場ということだ。

「サラマンダー」

ボクの呼びかけに対して杖の先から蛇の形をした炎が出現し、それが時間を経つごとに大きくなっていく。

「これぐらいで十分かな」

先日の貴族連合を燃やし尽くした炎より少し多めに調整する。

「皆！ ボクの攻撃の後に魔法を放つように！」

ボクはそう宣言した後召喚した炎を飛ばす。

一瞬の静寂、そして向こうの陣地が一気に燃え上がった。

そしてそれを合図にして『火』の団員が援護のための魔法を発射

し、取り逃した敵を殲滅する。

「魔法はこうやって使うものだよ」

何もなくなつた向こうを見やってボクはそう宣言した。

「……やりすぎ」

ユキがそんな風に叱るけど、ボクは首を竦めるだけで終わらせる。

だって炎が好きなんだもん。

あの揺らめきを見ていると心が躍るんだよね。

そして、ボク達がここまで強いのはわけがある。

もちろんユウキ王が示した矢われたはずの古代魔法や魔力伝導率の高い装備もあるけれど、何と言っても『火』の魔法訓練はユウキ王が開発した意図的に魔力が薄い部屋で行っているのが大きい。

あそこで行うと魔法が発動しにくいので苦勞する代わりにあの部屋で魔法が使えたのなら、通常時だと2、3倍の威力が発揮できるんだよね。

しかも『火』の装備一式は身に着けているだけで魔力密度が濃くなり、威力も規模も上がるんだ。

冗談抜きで『火』は大陸最強の魔導騎士団だと思うな。

そして大陸最強の魔導師はもちろんユキだね。

そう考えているうちにユキは馬に乗って出発準備を整える。

もう敵の主力は消し去ったから後は制圧するだけだね。

「さあ！ 狙うはバルティア皇国皇都 水上都市ファルケニア！

我らの強さを皇民に見せつけぞ！」

ボクがそう宣言すると同時にユキが皇都までの最後の川を割ったので、ボク達はフォルケニアへ一直線に進んだ。

バルティア帝国侵攻（後書き）

前話のルール將軍の年齢ですが50代から30代へと変更しました。

弱者

破城槌が城門を叩く音がこの玉座にまで聞こえる。

今、この場には私と側近　ワークハードの2人しかおらず、他の者は逃亡したかそれとも捕えられたかのどちらかであろう。

「フォルター宰相……」

「分かっている」

私の教育係であり今は知恵袋として私を支え続け、すでに初老の域にさしかかっているワークハードが言い難そうにしている事柄がなんなのか私にも十分理解できた。

王都カリギユラスの門は「林」と名乗る部隊によって大した抵抗もできずに開け放たれてしまった

そして必殺ともいえる街中を火の海に変え、奴らを混乱させる策を用いても奴らはしつかりと統率され、逃げ惑う住民の中に潜んだ刺客さえも冷静に対処してみせた。

城を守る近衛騎士隊もあのキルマークが率いる王国騎士団を破ったジグサール騎士団の前に手も足も出ないのは明白。

しかも聞くところによるとジグサリアス王国はシマール王国のほかにバルティア王国とリーザリオ帝国を同時に相手をしているとの報告も入ってきている。

「なあ、私はどこで間違えたのだろうか」

ワークハードに問うが何も返ってこず、重苦しい沈黙が辺りに横たわる。

「国を守るために妹を謀殺しようとし、仲間であった貴族の大半を失い、弟のキルマークを戦死させ、さらに王都を焦土に変えても撃退しようとしたにも拘らず上手くいかなかった……ハハハ、もう笑うしかないな」

これまでの行動を振り返るともはや自嘲しか出てこない。

国のためだと思ってした行動がすべて裏目に回り、今はシマール国の終焉を迎えようとしている。

「リーザリオ帝国が攻めてきた時、私は己の迂闊さを呪った。おそらくあの甘言に惑わされて妹を謀殺した罪をカザクラ男爵に被せてしまったから道を踏み外してしまったのだろうか」

あの時はああするしか手段は無かったのだ。

騎士団は貴族を嫌い、貴族も騎士団を嫌っている。

国が疲弊していつているにも拘らず、自分達は王宮で泥沼の争いを続けていた。

そんな不毛な争いを止め、国のために尽くしたいという想いは兄弟ともあるのだが、お互い彼らの後ろ盾がないとまともに発言すらできない立場。

そんな中、一人の者がある意見を出した。

それは近年急成長したカザクラ男爵に末っ子であるベアトリクスを謀殺したとすれば2人は共通の敵が出現したとして纏まるのではないかということだ。

骨肉の争いを止められるのであれば是非もない。

キルマークも賛同していたから悪いとは思いつつ妹は死んでもらうことに決まった。

妹は王宮内の誰の派閥からの後ろ盾が無いのでいなくなったところで大して影響はなく、さらにカザクラ男爵も一介の浮浪児が由緒ある者よりも力を持っていることが気に入らない貴族が多かったので、目論見は成功して私はキルマークと再び手を取り合うことが出来た。

しかし、ここで予定外のこと起きる。

謀殺するはずの妹がある『草』の手引きによって我々の手から逃れてカザクラ男爵の領地へと逃げ延びたことだった。

カザクラ男爵は国のために死んでもらう予定だったから別にどういうことはないかと踏んでいたのだが、その目論見は甘かった。

あの妹に参謀としての才能があることを見抜けず、私は味方である貴族の大部分を失う結果に終わってしまった。

そのことに激昂した貴族は王国騎士団の総力を挙げて弔い合戦を行おうと提案したのだが、キルマークが反対する。

キルマーク曰く、ジグサールの騎士団は3回も負けており、先程の敗北も貴族達の油断があったから起こってしまった悲劇だという。

ここで総力挙げてしまえばこちらは後世の世まで大人気ないと評される可能性があるので、向こうが宣伝している通り3万で迎え打てば良いと述べた。

さすが名誉を重んじる騎士団の畑から育った者の意見だと考えたのだが、それだと貴族達の気が済むわけがなく、何としてでも自分達の同胞を多く殺した力ザクラ男爵の一派を完全に粉砕したいようだった。

いつまで経っても議論に終わりがなく、辟易していた頃に妹の謀殺を甘言した者が手を挙げたのだ。

彼の発言は驚くべき内容だった。

彼はリーザリオ帝国やバルティア皇国など国境と接する兵も呼び寄せてシマール国の全兵力を叩きつけ、それによってシマール国の盤石さを国の内外に知らしめるというものだった。

そうなると他国からの侵略も懸念されていたのだが、向こうは3万しかいなく、こちらは50万以上なのであつという間に決着が付くと言う意見も出た。

血気盛んなキルマークがその意見に乗り気だったが、その50万を集めてもロクな連携が取れないので、妥協案としてすぐに連携が取れるほど練度の高い兵で構成した6万で迎撃することに決まった。

今となつてはもう遅いが、あの者はリーザリア帝国と繋がっていたのだらう。

リーザリオ帝国とバルティア皇国が侵略してきたという報と同時に彼が消えたことから、その確信はますます深まった。

しかし、私はこの事態こそ国の危機としてカザクラ男爵と休戦を模索したのだが、その構想は水泡に帰す。

何せ向こうはこの事を予期していたかのような対応を見せ、こちらの助けなどまるで必要なかった。

こうなると向こうは私達と組む利点が無い。

それならカザクラ男爵が立国時に宣言した通り、この国を滅ぼした方が良いだらう。

事実、何人かの貴族が降伏したのだが、ほとんどの者が私腹を肥やした咎を受けて処刑されている。

「……………」

知らずに涙が零れてしまう。

どうしてこんな事態になってしまったのか。

どうしてシマール国が滅びなければならないのか。

どうしてその時が私の代なのか。

どうして……

私が嗚咽を漏らしている間にワークハードは何も声をかけてこなかった。

本当によく出来た者だと思う。

振り返ればこの者だけがカザクラ男爵と敵対することを最後まで反対し、逆に手を取り合うことを進言していた。

あの時、その忠言を受け入れていればどうなっていただろう。

もしかしたら……

「……仮定の話にしても仕方ないか」

その言葉と同時に私は深くため息をつき、玉座に深く腰かけた。

「ワークハード、宰相としての命令だ。私を殺せ、そしてその首を持ってカザクラ男爵、いや、カザクラ王の元へ参るが良い」

「……」

側近であるワークハードは首を振って拒否しようとするが、私は翻さない。

何せこの者はこの腐りきったシマール国の中でもまだ良心のある殺すには惜しい優秀な人材。

向こうも潔癖で知られるワークハードなら迎え入れることが出来

るだろう。

「お前は生きる。そしてその力を新たな国に役立ててほしい」

そして私はシマール国の宝剣をワークハードに手渡し、首を切り易いように前傾の姿勢を取る。

「キルマークよ、すぐに私も逝くぞ」

乱暴者だがあれでも私の弟だ。

あやつは普段威張り散らしているが、その中身は昔と変わらず寂しがり屋なのだなこれが。

いつまでも1人にさせておくのは可哀想だろう。

「どうした？ 早く斬れ」

いつまで経っても剣が振り下ろされる感触が無いので、私は目を開けてワークハードを見ると彼は険しい目つきをしてある一点を睨んでいた。

「おい。どうし」

「そこに隠れている者は出てこい！」

私は戸惑いながらそう尋ねようとするとワークハードは壁に向かって一喝する。

するとしばらく何も異変が見えなかったが突然笑い声が響き、そ

の場所の景色がゆがんで一人の女性が姿を現した。

「よく私の擬態を見破りました、素晴らしいですね」

黒装束と頭巾に隠れているから表情は見えないが、おそらく感嘆しているのだろう。

が、私はそんな相手の些細な表情などどうでもよかった。その女性はまだで冷たい機械のようで、人間味の温かさなど微塵にも感じないことが私に一層の恐怖を湧き立たせる。

「この下郎が、貴様はこの神聖な間に土足で足を踏み入れるとは、せめて名を名乗れ！」

ワークハードがその女性に剣を向けながらそう怒鳴ると女性は腰を深く折ってお辞儀した後自己紹介を始めた。

「これは申し遅れました。私の名はアイラ＝サファイアブルー＝カザクラ。『林』の主任です。此度は重罪人フォルターを捕えに参りました」

その言葉とともにアイラと名乗る女性から何かが飛んできたがワークハードが防ぐ。

「ひっ！」

一瞬遅れて私の喉から悲鳴が上がる。

もしこれが刺さっていればどうなっていたであろう。

そんな想像が私の頭を侵食し、怯えが満ちていく。

「ふむ、これも塞がれましたか。まあ、良いでしょう。最終的な結果は変わりませんし」

「王よ！ お逃げ下さい！ この場は私が引き受けます！」

ワークハードがそう叫んで応戦するのを確認できると同時に私は憑かれたように玉座の後ろにある秘密の通路に向かう。

嫌だ、死にたくない。

先ほどまでであった胆力と誇りはアイラと名乗る女の前で消え去ってしまった。

あの凍りついた瞳を見ていると、無性に生の執着心が湧いてくる。

あれはだめだ。

あれに捕まると悲惨な未来しか待っていない。

私はおそらくこの戦争を始めた元凶として車裂きの刑を公開で行われるだろう。

いや、そうとは限らない。

ここまで国を疲弊させた咎として最も残虐な鋸挽きになる可能性もある。

そうなってしまうのなら私にも考えがある。

どうせ死ぬのなら他の皆も道連れだ。

私はその通路を進んでいくと、途中で何やら色の違うレンガが眼前に登場する。

それは城において最大の急所であり、このレンガをずらすだけで城の重心はバランス失い、崩壊する仕組みとなっていた。

私はゆっくりと手を挙げてその色の違うレンガに手を置く。

「……私が悪いんじゃない、時代だ、他人だ、カザクラだ。そう、私はたまたま運が悪かっただけなのだ」

私はそう呟くと同時にそのレンガを押して外させた。

もう近いうちにここも崩れるだろう。

急がなければ。

「私が悪いんじゃない、私は何もしていない。わたし」

私は少々掛け足になって進んでいたのだが、慣れない石畳の上だったので足を取られて滑ってしまい、頭をぶつけてしまう。

すぐに立ち上がろうとしたのだが、変なふうにぶつけたのか体の言うことが聞かない。

このままだと埋もれて死んでしまう。

だから早く動こうとするのだが、私の意志に反して体は全く動かなかった。

天井から埃が落ちてくる。

おそらく崩壊の兆候だろう。

「どうして私がこんな目に会わなくてはならないのか」

と、私が呟くと同時に天井から岩が落下し、私の視界は完全に閉ざされた。

弱者（後書き）

フォルターは悪か善かという2つでは測れない存在だと思います。

受け継いだバトン

「王都、カリギュラスを制圧しました……しかし」

「わかつているアイラ。城は崩れ、街並みの大火事によって見るも無残な姿になったと」

「はい、せめて命令を下したフォルターは捕まえたかっただのですが、ワークハードと名乗る者によって妨害されました。現在彼は拘束中です」

「火を止められなかったのか？」

「言い訳になりますがこの数日晴れが続き、乾燥している条件に加え強風が吹いていました。そのため出火場所のいくつかを取り押さえられてもどこか1か所だけでも火が付けばもう終わりでした」

「そうか、それなら仕方ないな」

どっちみちカリギュラスの滅亡は避けられなかったのだろう。そうならばアイラを責めても意味が無い。

カリギュラスの近くにある平原に降り立った俺はアイラからそんな報告を受け取る。

ここにいるのはサラと俺とアイラの3人。

ベアトリクスはイズルガルドに乗ってすでに北へと向かっていた。

本当ならもう少しここで滞在してもよかったのだが、イズルガルドがベアトリクスと少し話をさせてほしいということで彼女だけ乗せて飛び立っていった。

「あいつは泣いていたらしいな」

イズルガルド曰く、ベアトリクスは表面上は何でもない風に振舞っていたが、心の中では泣いていたらしい。

ああいうタイプは決して落ち込んでいる姿を他人には見せないの
での不自然なテンションの高さはおそらくそれを隠すための演技
だということになる。

ああいう時ならイズルガルドと話し合った方がいいと俺は思う。

何千年も生きている老竜イズルガルドは俺達人とは比べ物にならないぐらい経験が深いので、きっとベアトリクスを慰めてあげる
とが出来るだろう。

「アイラ……故郷がなくなっただな」

「今の私には関係がありません」

アイラは努めてそっけなくそう返すのだが、普段と比べて僅かに震えていた。

無理もない。

アイラを始めとした浮浪児組はあそこで生まれ、育ってきたのだ。
何かしら思うところがあるのかもしれない。

「何もかも無くなったな」

俺の眼前には血と瓦礫に埋め尽くされた都市がある。

王城が崩れ落ちる瞬間まであの都市はシマール国の兵とジグサリ
アス王国の兵、そして関係のない市民を巻き込んだ戦いが行われて
いた。

報告によるとそれは凄惨を極めたらしい。

フォルター王による勅命で都市の住民は事前に逃げ出すことすら
できず、何も知らされないまま街中に火を付けたらしい。

炎が街を覆う中、混乱の極致にあった都市での戦闘。

逃げる者、略奪を行う者、戦う者。

そんな三者三様がカリギュラス中で横行していた。

人間だけだ。人間だけがあそこにいる。カラスもネズミもゴ
キブリさえもない中、人間だけがあの灼熱地獄の中で殺し合っ
ていた。

誰の言葉だったか忘れたがそんな一句が脳裏に再生する。

5年前、俺がここに来た際の活気ある街並みはすでに見る影もな

い。

どちらかというプレイヤー時代に出てくる廃墟カリギュラスに似ている。

これで魔物も出てくれば完成だな。

魔物が跋扈し、戦死した亡霊が渦巻く都市　カリギュラス。

皮肉にもその原因を作ったのが未来を知っているこの俺というこ
とだから滑稽だ。

100万人を擁した都市は火で包まれ、生き残った民はその1割
もない。

お互いの兵を合わせて約100万人分の怨念があそこに渦巻いて
いることとなる。

「あの王城には宝が眠っているかもしれないね」

「じゃあ取りに行ってみるか？」

あの火事によって運び出せた街の財宝も少なく、王城の宝に至っ
てはほとんど手を付けられていない。運が良ければ一攫千金の宝に
出会えるかもしれない、が。

「御冗談を。あんな場所へのこのこと出向けばゾンビに食い殺され
るのがオチです」

アイラの答えの通り、あそこは殺された者の怨念が溜まっている

ので、もうしばらくすれば死体が動き始めて宝を探すどころか歩くことさえ困難になるだろう。

まあ、今から処置すればそんなことになどならないが俺はあえて放置する。

あそこは俺が知っている知識によると最難関に近い魔物の巣窟となっている。

そうなら俺は何もしない方がいいだろう。

「まあ、処置するにしてもたった4ヶ月ではあれを鎮めることなど不可能だしな」

あと4ヶ月後に魔物大侵攻が起こるので、今はそこに手を加えることはできない。

幸いにも亡霊はあの場に留まり続けるので、こちらに影響するとはないだろう。

ならばカリギュラスは冒険者のために置いておこうか。

「しかし、アイラなら大丈夫だろう」

だから俺は茶目っ気たっぷりに戻すとアイラは首をすくめて。

「人はともかく魔物はまた別の感覚を持っていますからね。それに数が多すぎます、あのゾンビによる包囲網を掻い潜れる自信がありません」

「それは残念。ならキツカはどうか？ あいつなら喜んで向かおうと思うが」

「キツカは肝試しすら全力で否定するほど怖いものが大の苦手ですから絶対行こうとしないでしょう。ユウキ様が光属性の装備を作って出向けばどうです？」

アイラがそう振ってきたので俺は手を振りながら苦笑する。

確かに光属性はゾンビに有効だが、カリギュラスのようにあそこまで死体と亡霊が溢れる場所だと光属性の効果が半減してしまう。

王城の中には目もくらむような宝が眠っているかもしれないが、そこまでたどり着くまでにどれだけの怨霊やゾンビを相手にしなければならぬのか見当もつかない。

一体一体はともかく数がな。

100万人を相手にするのはさすがに……な。

それに兵士の死体は一般人の死体と違ってまた一段と強いし。

確かに廃墟カリギュラスは上級者向けだよ。

「ねえ、お父さんとお母さんは無事かな」

サラがアイラに向かって発した言葉に俺は顔が硬直してしまう。

「あんな大火事があつて心配だから会いたいのだけど、会えるかな？」

その無邪気な問いにさすがのアイラでさえもどう答えていいのか分からないようだ。

どう伝えるべきか迷っているように見える。

「サラ様、実は」

「サラの両親は行方不明だ」

だから俺はアイラの声を遮ってそう述べる。

「『林』の部隊がサラの両親を保護しようと両親がいる店へ向かったのだが、すでに両親はいなかった」

その非情とも言える答えにサラがみるみる血の気を失っていく。

「え……つまり」

「まだ決まったわけではない。今避難させている民の中にサラの両親がいるかもしれない」

「うん、そっか。そうだよな。お父さんとお母さんが死ぬわけないもんね」

サラは自分に言い聞かせるように「大丈夫」を繰り返す。

それはまるで自分に暗示をかけているように見えてしまう。

「ユウキ様……」

アイラが何とも言えない視線を向けているにはわけがあった。

言えるわけがない。

サラの両親は俺が反逆罪を掛けられた際にはすでに捕えられていたことを。

シマール国はサラに叛意を促す内容をしきりに宣伝していたが、その情報がサラの耳に入る前に俺とアイラで全て握り潰していたのでサラは両親が捕らえられたことすらも知らなかった。

言えるわけがない。

貴族連合を撃退した際、サラの両親は見せしめとして公開処刑されていたことを。

多くの仲間を失った彼らは敗戦の鬱憤を晴らすために俺と関係のあった人を問答無用に捕えて拷問にかけた。そしてその最たる者がサラの両親として前で両親ともども車裂きの刑に処したことであった。

言えるわけがない！

2人は泣き言恨み言を漏らさず！ 最後まで俺の正義を訴えていたことを！

アイラはサラの両親を事前に救い出そうとしたが、2人から頑強

に拒まれたらしい。

曰く、「この老いぼれの2人の生などどうでもいい。それよりも私達の死に様によってユウキ殿の正しさを証明し、国の腐敗を糾弾する」と。

もちろんアイラは問答無用で2人を連れ出そうとしたが、大声をあげられてしまったのでやむなく撤退したそうだ。

「ジドさん、俺はあなたにどう報いればいい？」

思い起こすのは3年前。

ジドさんとサラについて怒鳴りあったことがまざまざと思い浮かぶ。

もっと教えてほしかった。

たった一人で家を支え、家族を守ってきたジドさんに聞きたかった。

俺は今、ジドさんと同じ国を支え、国民を守る義務がある。

規模こそ違えど、一国一城の主であったジドさんはどうしてあんなに強かったのか教えてほしかった。

「……まあ、後悔しても仕方ないよな」

俺はそう割り切った後、サラを見る。

サラはまだブツブツと自己暗示をかけているようだ。

「偽善かもしれないがお前は必ず守るから」

俺がその声をかけても返事すらない世界にサラは没頭していた。

その儂く、壊れそうな様子から俺はますますジドさんのことを思い浮かべる。

ジドさんは俺にサラを託してくれた。

なら、俺はそれに応えることがジドさんへの手向けとなるだろう。

「……アイラ、しばらく2人にしてほしい」

アイラは少し眉を上げたものの、軽くうなずいて姿を消す。

俺はサラが自己暗示から復活するまでずっと傍にいた。

受け継いだバトン（後書き）

己の文章表現のなさをここまで恨めしいと痛感したことはありませんでした。

将来の布石

私、エルファ＝ララフルは主が市民だった頃は主の身の回りの世話をしていました。最近バルティア皇国の皇女であるシクラリス様の傍にすることが多いです。

まあ、やることといっても彼女の監視の他にお茶を汲んだりスケジュールを確認する程度なので、専門教育を受けていない私でもできることです。

が、私の今の職場はおそらく体力がないとキツイでしょう。

なぜなら……

「レア！ ジグサールに移住を希望している集団の処置をお願い！」

「またですか！ ああもう、どうして次から次に！ ヒュエテルさん！ すぐに担当の者に取り次いで！」

「ちょっと待ってください！ 私を含めて官吏全員が一杯一杯なのです！ これ以上は無理です！ ティータさん！ 何とか上手いこと話して引き下がらせて頂戴！」

「はあ？ またあ！ なんで私はそういった損な役回りばかりなのよ！ この前も宥めるのに命の危険を感じたのよ！」

「大変ですね〜」

私と黒いメイド服と対照的な純白のメイド服に身を包んだシクラ

リス様がのほほんと仰る通り、このジグサールの政の中枢はご覧のとおり戦争状態です。

シマール国、リーザリオ帝国そしてバルティア皇国を併呑したジグサリアス王国は領土が以前と比べ物にならないほど拡大したため、その処置にてんてこ舞いです。

何かもうシクラリス様を除いて下級官吏を含めた全員の眼が血走っています。

あまりの仕事の多さに逃亡する官吏が後を絶たないため、『林』が官吏を監視及び逃亡した者の捕縛を行っています。

……隠密部隊である『林』の使い方を間違っていると感じているのは私だけでしょうか。

「エルファさん、お茶をありがとうございます」

私が汲んだお茶を両手で受け取って上品に飲むシクラリス様。

もちろん他の者も一緒に汲んでいます。全員飲む暇すら惜しいという状態です。お茶がすでに冷めきっています。

シクラリス様は何もしていないように見えますが、実はしっかりと仕事をしています。

彼女は何かを発信するというよりは受信する方なので、全体を俯瞰することに向いています。各部署から送られてきた書類をチェックする役目を持っています。

それに参謀のベアトリクス様と主の名代のヴィヴィアン様はよく衝突しますので、その仲介役としても一役買っています。

他人に指図されたくないベアトリクス様と主の妻であることを振りかざすヴィヴィアン様。

本来なら参謀であるベアトリクス様は主の名代であるのヴィヴィアン様の命令に逆らえないはずなのですが、ヴィヴィアン様が主の妻となった軌跡が複雑なため、素直に従いません。

私から見ればどちらも亡国の王女なのですから同じだと考えているのですが、当事人だと違うようです。

そして、その果てない争いを止めるのがシクラリス様。

あまり自分から意見を発することが少ないシクラリス様は意見しか発しない2人の間に立って諫めてくれます。

水と油の関係である2人をなだめることのできるシクラリス様は洗剤のような方だと思えます。

閑話休題。

「フィーナさん。これだとレアさんの計画に支障が出るから書き直しね」

「またあゝ!!」

提出した計画書を笑顔で突き返されて絶望の悲鳴を上げるフィーナ様。

何とというか、判断を下す際のシクラリス様は容赦がありません。

どれだけ訴えても笑顔で切り捨てるのです。

ですので官吏からはシクラリス様を陰で閻魔大王様と呼んでいる
そうです。

他の3人も心当たりがあるのか同情の視線をフィーナ様に向けて
いたのが印象的です。

「はいはい、みんな頑張つて。これはご主人様の構想の礎になるの
よ」

シクラリス様が笑顔でそう述べますが、それは嘘ではありません。

ある時、主はベアトリクス様とヴィヴィアン様を含んだ私達にあ
る計画書を見せてもらいました。

「いつかは実行に移したいな」と笑いながら渡してきた内容は驚く
べきものだったのです。

それは従来の統治法を覆す代物でした。

いくつかを思い出します。

まず一つが文官と武官の給料の待遇についてです。

両方とも基本的に担当している地域から入る租税の内から何%を
給料として配布するのですが、シグサールに勤めている官はそこか

らさらに各地から集めた税からも上乘せされます。

地方によっては3倍以上の差がつくのですが、この計画書によるとそう中央官吏の懐に入ることはありません。

何故ならば交通費や出張に伴うお金は全て自腹であり、基本接待は禁止、やむを得ず受けた場合でもいつ、どこで、誰とやったかの報告を義務付けています。

さらに中央官吏は主の方針で頻繁に地方へ査察に行かせるので、ほとんどの者が上乘せされた分を使い切ることになっています。

と、言っても専用馬車でなく共同馬車を使用したり、宿も高級なものではなく一般的な宿を利用すれば結構懐に残るのは事実ですから、要は使いようということですよ。

傍から見ると相当厳しいように見えますが、そうやって中央官吏が一般人と同じ視点に立つことによって組織の硬直や腐敗を防ぐことになるそうです。

主はよく「自分は特別だと錯覚した瞬間から墮落は始まるんだ」と仰っていました。

もしこの方法が上手くいけば官吏の腐敗は無くなると容易に想像が出来ます。

次が参勤交代

主が仰る参勤交代の意味がよくわかりませんが、領地を治める貴族の跡取りは必ずジグザールに過ごさせることを義務付け、領主は

1年ごとに領地とジグサールを往復するということです。

そうになると領主がいない際に誰が領地を守るのかと問われると、そこは中央から派遣した武官が地方の武官と連携して指揮を執り、普段の管理は中央官吏を中心に行います。

こうすることによって領主に大量のお金を消費させると同時に中央の威光を端から端まで行き渡らせることが出来るのです。

そして最後が楽市楽座。

これは大陸を幹旋している商業組合の干渉を受けないというのが目的で。彼らの独占を防ぐことにより経済を活性化させて物の流通を良くするそうです。

このご時世では、商人による組合が物流を管理していますから物の値段も私達が決められないのです。しかし、もしこの楽市楽座というものが成功すればその組合から解放されるでしょう。

他にもいくつがあったのですが、私が辛うじて理解できたのが以上の3つです。

そして、それらの構想は現在は残念ながら私達に従わない国があるので実現できません。

上に対して厳しすぎるので、優秀な人材が他国へ流れやすくなる弊害があるのです。

しかし、この大陸を全て統治下に置いた時、これらの方法が真価を發揮します。

その3つだけを実行するだけでも官吏の腐敗を防ぎ、領主から反乱の芽を削ぎ、商人から力を削ぐことができ、ますます国が精強になります。

この広大な大陸を治めるのだとすれば主が示した方法ほど有効な統治手段があるはずありません。

そして、大陸全てを統一し、主が構想している内容を全て実行できたのならそれは千年国

いえ、止めましょう。

私は一介のメイドなのです。

1000年や1000年先の未来など考える必要はないのです。

これらの計画を聞いた時、私やレア様など大多数がそっやって心を閉ざしましたが、三国の王女は想像できたようです。

ベアトリクス様は狂ったように哄笑して主に跪き、ヴィヴィアン様は「さすが私の夫だ」と感激しながら抱きついてシクラリス様はその先に想いを馳せていました。

一体主は何者なのでしょう。

誰もが夢を見る大陸統一どころか、夢を見ることすら叶わないその先について現実的に考えることが出来るのはもはや狂人の域です。

出会った頃は主に対して主らしく振舞ってもらおうと考えていま

したが、それは誤ちでした。

主は私如きの想像出来る範囲にいなかったのです。

私に理解できないものを理解できる範囲まで落とそうとしたのはなんて滑稽か。

今、振り返るとあの時の自分を殴ってやりたくありません。

周りを見渡すと、皆は怒鳴り叫びながらも決して投げ出そうとしていません。

それは主の構想を理解できないにしても、その先を見たいからなのでしょう。

「主よ、あなたは私達をどこへ連れて行くのですか？」

ふと、そんな呟きが私の口から洩れていきました。

将来の布石（後書き）

これで間章は終わりです。
ありがとうございます。

そして、内政に関するアイデアを頂いたyuma様に感謝を。

神の見えざる手（前書き）

はい、ここからが最終章です。

神の見えざる手

未来が分かっているのはどこか滑稽だ。

後数日後には魔物大侵攻が始まるというのに、俺を含めた人間と
いうのは目の先の出来事に精一杯なのだから。

少し冷静になってみれば魔物の様子がおかしいことに気づくだろ
う。

このジグサリアス王国では魔物を徹底的に刈っていたから少ない
にしろ、他国でも魔物の被害が去年と比べて激減している。

津波が来る前に潮が引くというかいう兆候にいったい何人が気づ
いているのか。

「まあ、そんなことを考えても仕方ないな」

玉座に座って眼前に重臣を揃えている俺はそう溜息を吐いた。

「我が君。余裕ですね、各国が反ジグサリアス同盟を結成したとい
うのに」

ベアトリクスが俺の溜息を見咎めて酷薄そうに言うてくる。

「いやな、人の愚かさについて少し考えていたところだ」

シマール国、リーザリオ帝国そしてバルティア皇国の三国を併呑
させたジグサリアス王国はこのユーカリア大陸で最大の国となった。

そして、浮浪児から王にまで上り詰めた俺を脅威と捉えた各国は危機感を抱き、長年憎み争っていた国々でさえも一時休戦して同盟を結んだ。

その同盟の名を反ジグサリアス同盟。

卑賤な輩の侵略から守るための同盟だというのだ。

「そこまで俺を敵視する理由はなんだろうな」

謀略によって濡れ衣を着せられたものの、俺は変なことをしていないと断言できる。政治に対してもそんなに横暴な態度を取っていないのにどうしてここまで俺を嫌うのか。

「簡単だ、夫よ。各国の王は恐れているのだ」

「何にだ？ ヴィヴィアン」

俺が振るとヴィヴィアンは唇をゆがめて。

「最底辺の者が最高にまで上り詰めたことによる自分達の常識では推し量ることの出来ない事実には恐れられているのだ。浮浪児が市民になるのはわかる、そして貴族が下剋上によって王にとって代わるのもまだ理解できる。しかし、浮浪児から王にまで上り詰めたのは夫ただ一人だ。つまり、各国の王は前人未到の域に立った夫に恐怖を持っているのだ」

「何て迷惑な」

俺は何もしていないのに、も関わらず向こうが勝手に敵視してくるのはしんどい。

「なあ、こちらから不戦の使者を送れないか？ 俺は各国を侵略する意思はないということのを伝えれば少なくともこの包囲網を緩めることができるのでは」

その提案に首を振るのはシクラリス。

「無理でしょう。各国の王はご主人様の行動ではなく、その存在を恐れているのです。あの同盟は自分達の物差しで測れないご主人様を消し去るということによって一致団結しているので、向こうが包囲網を緩める時はご主人様の身命はおろかその功績も跡形もなく消し去った後でしょうね」

どうやら俺は存在自体許されないらしい。

その事実には溜息しか出てこない。

「で、どうするの？ 我が君。このまま包囲網が完成するのを指を啜えて眺めているつもり？」

愉しそうに聞く様子からベアトリクスは先制攻撃を仕掛けたいのだろう。

が、俺はその進言に手を振って「もう少し待て」と答える。

「夫よ、相手の攻撃を待つというのは感心しないぞ」

ヴィヴィアンがそう口を尖らせるが俺は相手にしない。

「とにかく、後数日待て。そうすれば全てが分かる」

魔物大侵攻が起こると言っても誰も信じてくれないのであやふやな言葉で終わらせるのだが、意外に誰も文句を言っていなかった。

「そうですか、ご主人様がそう仰るのであれば従いましょう。凡人である私達にはご主人様の考えなど理解できるはずありませんから」

シクラリスの言葉に他の者も頷いていることからどうやら俺は神格化されていたらしい。

俺は神じゃないので否定しようとして一瞬考えたが、こちらの言うことを聞いてくれるのならそれでいいと思い直して会議は終了した。

数日後

ここまで予想通りだと恐ろしくなるな。

俺が目論んだ通りにこのユーカリア大陸全土で魔物の大侵攻が始まり、すでに幾つかの国も陥落しているという報告が入ってきた。

どうして皆々と築いてきた人の都市がここまであっさりと崩れ去るのか。

その理由は簡単で、人間よりも魔物の方が数も力量も多いからだ。

だが、そうにも拘らず人間が魔物を追いやって繁栄を築いてきたのは偏に団結し、組織立った行動を得意としていた点である。

魔物は数こそ多いもののその種類は膨大であり、それらが団結することなどありはしない。

が、もし魔物が団結したらどうなるのか。

その答えが今、現実起こっている出来事だった。

「で、シクラリス。国内の被害状況は？」

この前代未聞の事態に眼前に揃った皆は心なしか緊張しているように見える。

「はい。先日発生した魔物による侵攻の件ですが、事前に国内の魔物を重点的に殲滅していたこともあり辺境にある村のいくつかは滅ぼされたものの、都市レベルだと被害は軽微です」

「ベアトリクス、軍の損耗率は」

「『風』と『火』の損害は皆無ね。ただ、『山』はそれなりの被害を受けているけど全体には影響がないわ」

「ヴィヴィアン、各国の状況は」

「突然の出来事に同盟は崩壊。各国とも魔物の処理に奔走しているのでこちらにまで手が回らないみたい」

それらの行動を聞いて俺は一安心する。

「こういっては何だが、もし魔物大侵攻が起こらなければどうしようとかビクビクしていたのだ。」

さて、これで当面の危機は回避された。

後は勇者が魔王を倒すまで治安の維持を図ろうか。

「さて、フィーナ。キーツ王国はどうなっている？」

あそこは勇者が生まれた国。

魔物になど襲われていないだろうが一応聞いておこう。

が、フィーナの言葉は俺の予想と外れていた。

「キーツ王国は魔物によって存亡の危機よ。同盟国も手を差し出さない様子だから近いうちに滅びるんじゃないかしら」

「……は？」

俺は間抜けな声を上げてしまう。

おい、キーツ王国が滅びたら勇者はどうなるんだ。彼しか魔王を殺せないのだぞ。

「ラブレサック教国はどうなっている？」

勇者を影から支えた国で、世界宗教の宗教国家ラブレサックは何をしているのか。かの国の聖女は勇者のお供をしたのだぞ。

「あそこは聖女派と枢密派で内戦状態。各々の派閥がある国や都市に軍隊を送ろうと紛糾しているから関係ない他の国なんてどうでもいいみたい」

「いったい何をしている。」

「今はそんなことなどどうでもいいだろう。」

「他国はその2国を介入するそぶりはないのか」

「残念ながら他国に干渉できるほど余裕のある国はこのジグサリアス王国にしかないわよ」

「魔物大侵攻を起こした魔王を倒すはずの国は亡国の危機やら内乱状態に陥っている。」

「そして、それを救えるのはこのジグサリアス王国だけ。」

「この2つから推測できることは。」

「……」

「……そうか」

「そういうことか。」

「ずっと疑問に感じつつも蓋をしていたが、どうして俺がここに飛ばされたのようやく納得がいった。」

「すまない、少々席を外す。すぐに戻るから会議を続けていてくれ」

俺はそう断って一人自室へと向かい、鍵をかけた。

完全防音のこの部屋はここで大砲を鳴らしても外側では聞こえないほど完璧な作りとなっている。

そこで、俺は大きく息を吸い、怒鳴り始めた。

「神よ！ 何故あなたは俺を選んだ！」

たった一人しかないこの部屋で俺は呪詛を吐き続ける。

「俺は単なるゲーム好きの高校2年生だった！ どこにでもいる普通の人間だ！ 俺よりゲームにのめり込んでいる者はたくさんいる！ 俺より賢い人間もそうだ！ なのに！ 何故！ 俺をこの世界に飛ばした！」

力の限り叫ぶがもちろん返ってくる返事はなく、俺はただ虚空に向かって叫んでいた。

「神よ！ 俺はあなたを恨む！ 日本に帰せ！ 人生を返せ！ 時間！ 友人！ 趣味！ 両親！ 俺から奪っていったものを全てか……ごほっ!？」

これほど大声を出したからだろう俺の肺は空っぽになり、脳が酸欠状態に陥って視界が歪み、たまらず俺は両膝をつく。

「……分かっているよ」

両膝どころか両肘そして額を地面に擦り付けながら俺は呟く。

不思議なことに先ほどまで荒れ狂っていた理不尽からくる怒りの感情はどこかへと消えていた。

「俺にしかできなかったのだろう？」

俺でなければキツカ達4人を仲間に加えなかったし、冒険者ではなく、市民として根を生やすこともなかった。貴族として領地を富ませることも王として領土をここまで大きくするにはこの火桜優喜しか出来なかったのだろう。

腹立たしいがこれまでの軌跡を振り返ると、俺の目に見えない形で神が手を貸していた確信がますます深まる。

姿も影も、匂いすら感じられないが神は実在するという説を信じてしまう俺がここにいる。

「……分かったよ」

神の思い通りに動くのは癪に障るが、かといって俺についてきた皆 キツカやアイラ、ユキ、クロス、ティータさん、ヒュエテルさん、サラ、エルファ、レア、フィーナ、ククルス、オーラ、ミア、レオナ、エレナ子爵、キリング、ベアトリクス、ヴィヴィアン、シクラリスを見捨てるわけにはいかない。

彼女達のことを想うと神に対する反逆の意志など消えてしまう。

「まあ、いいか」

このままだとこの大陸は魔物に侵略されて終わる。

それを防ぐために神は俺をこの世界に呼び寄せたのだろう。

勇者が魔王を倒すための環境を整えさせたいのだろう。

「やってやるか」

俺は立ち上がり、頭を振って思考を切り替えてこれからやることについて計画を立てる。

少なくともキーツ王国に救援を送るのは必須。

ラブレサック教国も聖女派に味方しなければならない。

そして、現在から魔王が殺される8年後まで、これ以上の侵略を防ぐために大同盟の結成もしよう。

「ジグサリアス王国が盟主だと各国が躊躇するかもしれないから、ラブレサック教国を表に立てるか」

他にも勇者の仲間となった人物を確保し、成長させる手順を整える。

このままだと人間の歴史は終わる。

それを避け、これから先も人間の歴史を続けさせるために俺は歴史の欠片となるんじゃないか。

俺は上を向き、そう誓った。

神の見えざる手（後書き）

ようやく神を登場させることができました。

このような類の神もいかなと思っています。

番外編 余計な奇跡（前書き）

とりあえず思いついたから書きました。

番外編 余計な奇跡

神様とやらは奇跡を起こす存在だが時には要らん奇跡も起こしてくる。

俺が総勢18人と女性の関係を持っている。

それゆえに出来てしまう可能性があるのだが、ここで神は本当に余計なことをしてくれた。

そりゃあ俺だって子供を欲しいと考えたことはあるよ。

俺は王という立場だからその意味も含めてそういう前提で行ったこともある。

けどな、神様よ。

何で18人全員を同時期に懐妊させるんだよ。

しかも全員女の子というオマケ付き。

そしていつの間にかティータさんもレオナもその中に入っていたし、レアとフィーナは双子だったし。

おかげジグサリアス王国の中枢部が全員産休を取ってしまい、えらいことになってしまった。

いやあ、あの危機をどうやって乗り越えんたんだろ。

全く覚えていないや。

閑話休題

とにかく、俺は一気に20児のパパという「どこのビッグダディ？」と問いかけたくなるような立場になってしまったわけだ。

俺は神にこう言いたい。

頼むから変なことだけはしないでくれ。

俺は何の気なしに自室で政務に勤しんでいると扉が開き、2歳ぐらいの銀色の髪の毛をした幼女が危なっかしいトテトテとこちらに向かってきた。

「危ないな」

俺はその幼女に心当たりがあったので筆を止めて幼女の元へ向かい、そして抱き上げる。

キヤツキヤと綺麗な笑顔で笑うのが印象的である。

「……カトリーナの母親もこれくらい純粹であればなあ」

この銀髪の幼女はベアトリクスの子である。

あの悪魔が産んだ子にしてはどうも純粹すぎるので他の者は「他の子と取り換えたのではないか」と疑っているらしい。

「夫よ、何をしている？」

カトリーナを高い高いしてしばらく遊んでいるとそう険のある声
音でそう呼ばれたのでそちらを向くと俺の妻であるヴィヴィアンが
ピアノを抱いて部屋へと入ってきていた。

「いや、カトリーナが勝手に部屋へと入ってきてな。構ってほしそ
うだったから遊んでいた所だ」

隠しても仕方ないので正直に話すと、ヴィヴィアンは不満そうに
口を尖らせて。

「その暇があるのなら私の子と遊んでやってほしい。ピアノは昨
夜父に会いたいと泣いていたんだぞ」

そう言っでずいとピアノを俺に差し出してくるヴィヴィアン。

そのやきもち焼きな様子に俺は苦笑してカトリーナを降ろそうと
したが、その気配を察知したカトリーナは俺の両手を精一杯掴む。

「やっ」

その可愛らしい否定にクラツときた俺を責められる者は誰もいな
いだろう。

しかし、俺は心を鬼にして。

「ごめんなカトリーナ、次はピアノの番なんだよ」

そう優しく説き伏せるのだがカトリーナは2歳ゆえなのか一向に放そうとしない。

「やっ、ヴィヴィアンおばさん、いや」

「おば……」

カトリーナの口から出た言葉に表情を硬直させるヴィヴィアン。

「おいおいカトリーナ、ヴィヴィアンはお姉さんだろ」

まだ正気に戻らないヴィヴィアンの代わりに苦笑しながらそう述べる俺。

が、カトリーナは俺の言っている意味が分からないらしく、可愛く首を傾げた。

「えーと、だからね。ヴィヴィアンは」

「おばさんであっているわよカトリーナ」

ここでまた俺の部屋に乱入者登場。

その姿は儚く、消えてしまいそうな脆さを持っているがその中身は邪悪そのものだ。

「べ〜ア〜ト〜リ〜ク〜ス〜!!」

地獄の底から響いてくるような音を発するのはヴィヴィアン。

まるで般若の如き表情をしている。

「あんた子供に何てことを教えているのよ!!」

ヴィヴィアンは烈火の如く怒るのだがベアトリクスは涼しい顔で。

「あら、それならBBAの方が良かったかしら?」

何てことをたまうのでますますヴィヴィアンの怒りに油を注いだ。

おい、そろそろやめておけ。

カトリーナもビアンカも2人を怖がって俺の後ろに隠れているぞ。

「あらあら、大変ですね」

この事態をどうやって納めようかと悩んでいると今度はシクラリスが部屋へと入ってきた。

「ああ、ちょうど良かった。あの2人を止めてくれ」

俺がこれまでの経緯を説明するとシクラリスは分かりましたとばかりに頷く。

「ではご主人様。私はベアトリクスとヴィヴィアンを宥めますので、その間はこのシャルロットの面倒を見て下さい」

……はい?

俺が聞き返すより先にシクラリスは俺にシャルロットを渡し、自分分はさっさと2人の間に入っていった。

そして後に残るのは俺とシャルロットとカトリーナとビアンカ。

「……はあ、仕方ないか」

ビアンカとカトリーナが「ズルイズルイ」と言いながら俺の周りを回っているのを横目に俺はシャルロットを肩車した。

番外編 余計な奇跡（後書き）

本当なら他にも登場させたかったのですが、ネタが思い浮かびませんでした。

その器、まだ未熟なり

あれから3年の月日が過ぎた。

俺が下したあの決断が正しかったのかどうか分からないが、少なくとも世界の延命は図ることが出来た。

魔物大侵攻によって大陸人口の半分は削られてしまったが、それで済めることができたのは誇るべき点だろう。

と、言ってもユーカリア大陸の西側諸国はすでに壊滅的であり、魔物の領域はじわじわと東へと侵食していつてるのだから安心するにはまだ早いかな。

表向きはラブレサク教国がトップなのだが、それを信じている者は余程傾倒した信者しかいなく、奴隷や浮浪者であつてもこの大同盟の実質的トップというのが知れ渡つていた。

まあ、浮浪児だった俺がそんな立場にいることを快く思わない王もいるにはいるのだが、それを表だつて言うことが出来ないのだが現状だ。

何故なら、ジグサリアス王国が同盟に動いたからこそここまでの被害で抑えられることができたのは周知の事実なのだから。

そして俺は今、ジグサールで何をしていたかというと。

「おお、勇者よ。死んでしまつとは情けない」

「勝手に殺すな！　そして俺はまだ負けてねえ！」

魔王を打ち倒すはずの勇者　カルベルト「キーツ」ダルムンクがクロスにボコボコにされたので、その屍に向かってそう言い放っていた。

15歳の少年らしい体つきで、筋肉はそれほど無いのだから負けて当たり前だが、それでもそのことを言い訳にしない。

金色の髪と碧眼であり、全体的に整った顔つきからクールな容貌を見せるが、その中身は熱く、負けず嫌いな性格をしている。

カルベルトはミドルネームに王国名が入っている通り、キーツ王国の王族である。

キーツ王国は森林が豊かな国で、年間多くの観光客が訪れる国だった。

そして、永世中立を誓っているので反ジグサリアス同盟に参加しなかった数少ない国でもある。

どの同盟に組みせず、ずっと中立を保ち続けることが出来るのは、偏にキーツ王国の王族のみが持つ力ゆえである。

これは不可思議な力で、火や風など7大属性のどれにも属さない属性を操ることが出来る代物だ。

その属性をあえて呼ぶなら『天』だろう。

その力は絶大で、昔侵略してきたある国の軍をたった一人で壊滅

させた事例もある。

『天』を現代風に表すと核兵器だな。

その威力の前には万物が塵芥となり、大地を砕き、海を割り、そして天空さえもその形を変えろという。

その圧倒的な力を持つがゆえにキーツ王国には厳しい戒律があり、さらにどの国からの侵略も侵攻もすることがなかった。

まあ、それでも負ける時は負けるんだがな。

今回の魔物大侵攻によってカルベルト以外の王族は助けられなかったのだから。

本当に組織だった行動というのは恐ろしいと感じる。

「くそつ、もう一回だ。俺はまだ負けていない！」

すでに体中痣だらけな上に肩で息している様子から、もう限界近いことは分かるのだがそれでもクロスと手合わせを願う。

「ええと、どうするユウキ？」

クロスもこれ以上相手にしても時間と労力の無駄だと分かっているのだが、この闘志溢れるカルベルトを前にすると中止と言えないようだ。

だから俺はため息をつきながらカルベルトの肩に手を置いて。

「今日は終わりだ。次の訓練はまた明日にしてくれ」

そう簡潔に述べる。

無論カルベルトは反対するが、俺が少しカルベルトの肩を強く握ると彼は顔を歪めて剣を取り落とした。

「ほら、もう体も無理だって悲鳴を上げているだろ。体を壊さない内にもう休め」

が、カルベルトは首を振って「まだやれる」と繰り返す。

どうしてここまで執着するのかというと、それは両親の復讐からきている。

魔物は『天』の恐ろしさを知っていたのか分からないが、魔物大侵攻の際においてキーツ王国は重点的に攻められていた。

救援に赴く際、これまでの戦いにおいて無傷であった『風』や『火』からも死傷者が出たことから、如何にキーツ王国の救援が苛烈な戦いだっただのか分かるだろう。

ここから先はキツカの報告だが、キーツ王国の王族は長男であるカルベルトをこちらに任し、残りの王族はキツカ達の囷として残って最後まで戦ったらしい。

カルベルトは両親と妹の肉親3人を失って孤独の身となった辛さを俺には想像できない。

だからこそカルベルトは俺やクロスの言うことなど耳を貸そうと

しないのだろう。

仕方ない。

こつという時は彼女に任せるか。

俺は近くにいた衛兵を呼び寄せようとしたのだが、それより先に目的の彼女がこちらへ走って向かって来ていた。

その少女は14歳なのだが、全体的にスラツと伸びており、ショートカットにした赤い髪や少し鋭い目つきから実際より年上に見える。その少女は瞳に怒りを浮かべて。

「ああ、ちょうど良かったメィア。カルベルトをと」

「何やってんのこのバカが！」

俺がその先を続ける前にその少女　メィア「ジャグリング」ア
ルガンはカルベルトにドロップキックを放った。

突然の出来事にカルベルトは受け身も取れず、もんどりうって転がる。

「あんたはまた恩人に迷惑をかけているわね！　もう少し自分の力量を鑑みなさい！　しかもそんなボロボロの状態で頑張っても他人に迷惑を掛けるだけよ！　それとも何？　俺はこんなに頑張っているんだぞっていう自己アピール？　はっ、下らない。盟主や大將軍に迷惑だからさっさと去りなさい！」

流れる様に捲し立てるのはカルベルトの幼馴染であるメィア。

「う、煩いメイア。お前に俺の気持ちが分かるも」

「分かっているわよ。私だって両親や兄を殺されたのよ。何もできない無力さなんて嫌というほど理解しているわ」

カルベルトは痛む箇所を摩りながらそう反論しようとしたが、それより先にメイアが声のトーンを落としてそう呟く。

メイアの家はキーツ王国の侯爵であり、小さい頃からカルベルトと付き合っていた間柄である。

そして、メイアの両親もカルベルトの両親と同じくキツカ達を逃すために最後まで残って闘っていた。

そしてメイアはカルベルトの前に跪き、その頬に手を当てて。

「カルベルトはキーツ王国の希望なの。死んでいった者が今のカルベルトを見たらどう思う？ そんな自分を痛めつけているのを見てもお父さんやお母さん、そして妹も悲しむわ」

俺やクロスが何を言ってもカルベルトは聞かないが、同じ経験をしたメイアの意見は聞く。

メイアの言葉によって冷静さを取り戻したカルベルトはゆっくりと立ち上がり、俺とクロスに頭を下げた後、闘技場を去って行った。

「……悪いな、メイア」

カルベルトを押し止めたメイアに俺はそう礼を述べる。

「いえ、むしろこちらが謝らなければなりません。申し訳ありません盟主様。カルベルトは3年前のあの一件によって人が変わってしまった。本当は心優しい人なんです。今はただ復讐に囚われているからあんな」

「安心しろ、分かっているから」

メイアの弁解を俺は手を振ることで終わらせる。

「12歳という多感な時期に肉親を失えば誰だってああ言う風になるだろう。まあ、3年経つても一向に収まる気配が無いのは心配だが、俺はあまり気にしていないから心配するな」

俺の言葉でメイアはホッと安心した。

このまましんみりするのもあれなので俺は話題を変える。

「そちらはどうだ？ 聞くところによるとルール將軍と打ち合っていたそうだが、その感想は？」

「まだまだですよ。まだ10本中3本しか取れません」

あっけらかんとそう答えるメイアだが、実際にやっていることは笑えない。

ルール將軍は元リーザリオ帝国の勇猛な將軍だったがゆえに、その力量も侮れない。

その実力はクロスと同程度なので、簡単に考えてもメイアはクロ

スと闘つても10本中3本は取れる計算になる。

ちなみにカルベルトはクロスから一本取るどころか利き腕でない左手一本で相手にしていることから、メイアの実力というものが分かるだろう。

まあ、メイアはカルベルトの剣として活躍していたからそれぐらいの力はあるだろうな。

「カルベルトはあんなに頑張らなくても私が守ってあげるのに」

そんなことを呟くメイアだが、俺からするとメイアが強すぎるからカルベルトはムキになるのだろう。

俺はもう慣れたから何とも思わないが、やはり年頃の少年としては女に守られるという事実が耐えられないのだな。

カルベルトの本来の役目は剣を持って戦う兵士でなく、敵の軍団を殲滅させる戦略的兵器なのだからメイアと張り合う意味はないのだけど、やはり男としてのプライドが邪魔をしている。

「それにしても、どうしてカルベルトはあんなに自分を酷使するのでしょうか」

それはメイアが強すぎてカルベルトに立つ背が無いからだよ。

とはもちろん言えなく、腕を組んで唸っているメイアを俺とクロスは何とも言えない目で見守っていた。

悲壮な決意

ラブレサック教国は名目上の盟主であるため、重要な会議はこの国で行われる。

と、言っても軍事、食糧そして人口のすべてを握っているのはジグサリアス王国だから会議というよりは俺に対するお伺いを立てる場になっていた。

そしてその会議の結果、ギルトリア共和国とダグラス商国に食料の援助と軍隊の派遣を優先的に割り振ることが決められた。

会議が終わり、今俺は聖女のみが立ち入れる間にカルベルトと2人で聖女と聖女候補を待っていた。

「あいつは苦手なんだよなあ……」

隣に座っているカルベルトがポツリと呟く。

「運命やら神様やらを唱え、挙句の果てには俺を運命の人とかほざくのと会いたくない」

「おい、万が一信者に聞かれるとお前は大変なことになるぞ」

「そうは言ってもなあ、フローラと会うのは少しな」

そう言ってカルベルトは深いため息を吐いた。

フローラというのはこれから来る聖女候補であり、過去に俺が神

殿の下働きをしていたフローラを無理矢理聖女候補へねじ込んだ覚えがある。

あまりの横暴さに残党の枢密派はもちろんのこと聖女派も反対したが、フローラの日頃の行いを見ていくうちにそういった批判は立ち消えていく。

フローラの立ち振る舞いや信者に対する接し方、教典の博識さに皆は瞠目し、今では聖女の最有力候補として名を連ねていた。

まあ、歴史を知っている俺からすればそれら一連の出来事は喜劇にしか見えなかったわけだが。

閑話休題

ガチャリとドアが開き、そこから2人の見た目麗しい女性が静々と入室してくる。

「勇者様……」

ボウツと熱に浮かされた顔でカルベルトに熱視線を送るのは話題のフローラ＝リバング＝アースニア。

背丈は一般女子と同じくらいであり、櫛の必要が無いほどストリートな金色の髪を腰まで伸ばしている。体の起伏はあまりないものの、それが下手な欲情を掻き立てられないので、それがいいかもしれない。

純朴そうな雰囲気を持ち、一目見てその愚直さを感じ取れるほどの純粹さが万人の心に何かを訴えかけ、フローラのことを記憶に刻

みつけられてしまうだろう。

それがフローラ＝リバング＝アースニア

次代の聖女の最有力候補だった。

そしてフローラとともに入ってきたのは現在の聖女。

背が高く、年季がいつているように見え、フローラまでとはいかないまでも輝くような金髪に、人形のような整った美しい顔の造形が印象的だった。

常に信者からの畏敬と崇拜を受けてきた彼女は全身から神々しさが溢れているのだが、フローラと並べると幾分が見劣りしてしまう。

おそらくこれが天然と人工の違いなのだろうと考えた。

「お待たせしたことをお許しください盟主様」

聖女はそう言って恭しく頭を下げる。

これが公式の場なら逆なのだが、実力的には俺が上になるためこ
うなる。

「いや、気にしなくて良い。それよりも早く本題に入ろう。フロ
ーラ、向こうでカルベルトの相手をしてやってくれ」

俺がそう言うと聖女の横にいたフローラは立ち上がってカルベル
トの手を取り、別室へと誘導する。

「勇者様、どうぞこちらです」

「わかっているから触れるな。場所ぐらいわかる」

聖女候補の好意を無碍にする勇者。

何も知らない者がこの光景を見ると非常識に見えるが、俺と聖女は何も言わない。

このフローラ。

純粹といふかなんというか非常に思い込みが激しい。

貴族の地位を捨てて神殿で下働きをしていたのも、そうするよう夢からお告げがあつたからと言い、俺が聖女候補へ引き上げたのも動揺もせず真顔で運命だと言う。そして拳句の果てにはまだ何の關係もないカルベルトを一方向的に盲信する始末。

正直な話、フローラを一人にさせたらどんなことをしでかすか危なっかしくて見てられない。

しかし、そのひたむきさから多数の信者の信頼を得ているのも事実なので、それを欠点と言えないのが悩みどころだ。

とにかく、嬉しそうにしているフローラが迷惑そうな顔つきのカルベルトを連れて別室へと移動するのを俺は最後まで見送っていた。

「フローラは相変わらずだな」

2人が消えてしばらくお互い沈黙していたが、俺はそう口火を切って話を始める。

「あの時から一向に変わっていない。それが吉か凶かは俺が知る由もないが」

「人間としては凶ですが教団としては吉です」

聖女の答えに俺は皮肉気に口を歪める。

確かに1人の人間としてみたらフローラは失格だが、集団のリーダーとしてみると彼女ほど有能な者はいない。

リーダーにとって必要なのは何かを信じさせてくれる力。

それを十分すぎるほど持っているフローラはまさしく理想のリーダーの一人と言えた。

そこで俺は話題を変え、先ほどの会議について話し合う。

「先ほど現在進行形で領土を削り取られている2か国に援助を決定した。だから後少しは踏ん張れるだろう」

「はい、確かに盟主の予想通りにあと一年は持つでしょう……しかし」

聖女はその先の言葉を言い難そうにしているが、俺は何を言いたいのか予想がついていた。

「このまま小手先の戦いを続けていいのか。そんな疑問を各王は溜まってきたような」

俺の言葉に聖女は頷く。

確かにこの3年間、俺が取った戦法はひたすら耐えることであり、領土を取り返すための大規模な討伐に出たことは一度もない。

「『このままではじり貧だ、この厭世気分を吹き飛ばすためこの辺りで攻勢を仕掛けてみる』という多くの意見が私の元へ寄せられています。それに対して盟主はどのようにお考えですか？」

聖女の提案に俺は腹の底で笑う。

確かに今の時期なら奪われた国の一つや二つは取り返せるだろうがそれだけだ、全てを奪い返すには不可能。

しかもその領土は魔物によって蹂躪されつくしているため俺達人間が利用できる建物など皆無であり、畑も同じなので必要なものは全て持つてこなければならぬ。

統率された魔物が輸送隊を狙って弱体化され、そして一気に叩かれればこちらは全滅するだろう。

「こちらが勝つには魔王の抹殺が絶対条件。魔王さえ倒せば魔物どもは統制を失い、こちらが容易に勝利するのだが、現在はその魔王の位置すら掴めていないんだぞ」

国の一つや二つ奪い返したところで何の意味もない。

そんな戦力の小出しをするよりか、乾坤一擲の大勝負にかけた方が良いだろう。

「とにかく、そんなことを言ってくる王は無視しろ。まだ勇者が育っていない以上戦うのは無意味だ」

俺はそう締めくくって背もたれに体を預ける。

が、聖女はまだ何かを言いたいようだ。

「なら、せめて勇者の存在を公表して下さい。キーツの王族のみが使える『天』を見せつけければ各王も納得するでしょう」

「そんなことをすればすぐにでも魔物の大群が押し寄せて来るぞ。しかもそれに勝ったとしても向こうは無限に近い物量を持っているんだ。第2陣、第3陣と続き、いつかは敗北するだろう。『天』の使い手を滅ぼした 向こうがそう錯覚しているからこそ俺達はまだ生きていることを忘れるな」

絶対的優位に立っている者の傲慢なのか、魔王はキーツ王国を滅ぼした後はじっくりと、まるでこちらをいたぶるかのように侵略してきた。

生かされているというのは癪だが今はそれに甘んじなければならぬ。

俺もこの状況に苛立ちを感じているが、だからと言って暴発すればそれこそ終わる。

ここは耐える時なのだ。

「盟主が魔王ではないかという声にはどう答えますか？」

「違うと答える。そう非難されたからと言って魔王の領土に攻め込むことはない」

「愛しい人を亡くした者に対してはどう声をかけますか？」

「話は聞こう、怒りや嘆きを俺にぶつけても構わない。しかし、俺は考えを改めようとはしない」

「例え盟主の目論見通り魔王を倒したとしても、盟主が尊重されることはなく、むしろ臆病者として記憶されますよ」

「人間の歴史が続くのならそれでいい」

全てはそこに集約されている。

そのためならば俺はどのような誹りも甘んじて受けよう。

「……そうですか」

俺の意図が伝わったのか聖女は「ふう」と息を吐く。

「そこまで決意が固いのであれば私からは何も言いません。しかし、そのために盟主はこれからも誰にも理解できない茨の道を歩み続けますがよろしいですか？」

俺は迷わず首肯する。

俺が悪人として名を刻んでも構わない。

俺を悪人として認識できる後世があるのならば俺は喜んで悪の汚名を着よう。

聖女の言葉を最後に俺も聖女も何も言っこともなく、ただ、時が過ぎるのに身を任せていた。

代償

俺は今、カルベルトとともにイズルガルドに乗って空を飛んでいる。

「おい、カルベルト。落ち着けよ」

イズルガルドに乗っている間中カルベルトはずっとそわそわしていたので俺は堪らずそう声をかけた。

「う、うるさいな。空が怖いんだよ」

カルベルトはそう言い訳するが、実際は違う。

『カルベルトよ、想い慕う娘と会うゆえに逸る気持ちはわかるが、少々落ち着くとよい。そのままでは愛想を尽かされてしまうぞ』

「何？ それはまず　　って！　俺はそんなんじゃないよ！」

一瞬イズルガルドの念に頷きそうになったカルベルトだが、すぐに思い直して慌てて否定する。

本人は必死に違うと言っているがイズルガルドの前だと嘘をつけないぞ。

それに普段の言動からお前がマジに気があるのは周知の事実だからな。

ちなみにマジの名を出すとメイアは不機嫌になり、フローラは涙ぐむ。

やれやれ、カルベルトとマージの恋路は一筋縄でいかないな。

そして俺達は都市を去り、町を抜け、村を通り越して木が生い茂っている樹海 通称『迷いの森』の中心地点に着地した。

この樹海は一般の人が足を踏み入れられる場所でなく、ここに来ようとすれば俺のように空から来るか、またはこの森を越えるかのどちらかである。

まあ、この迷いの森に足を踏み入れたら特殊な磁場と霧によって方向感覚が狂うので魔物と戦っているうちに疲れ果て、大抵は屍となってしまうが。

で、俺はこの森の主となった者を訪ねるために、唯一人工のものである一軒家のドアをノックした。

「おい、ユキ。いるか？」

俺がそう呼び鈴を鳴らしてしばらくするとガチャリと門を外す音が響き、ドアが開いた。

「こんにちは、ユウキさん。師匠はすでに起きて待っています」

彼女の名はマージ・インスペンデンス

俺が保護をし、その面倒をユキに任せた少女だった。

魔女つ娘帽子であるとながり帽子を被り、顔には大きい眼鏡をかけているのだが、サイズが合わないのか少しずれている。

栗色の髪の毛を三つ編みにし、少しのそばかすがあるのだが、それを愛嬌と思えるほど顔立ちを整っていた。

「こ、こんにちは。マージさん。今日もいいお天気ですね」

ガチガチに緊張したカルベルトがよく聞き取れないほど早口でそう捲し立てるのだが、マージは嫌な顔一つせず会釈を返した。

うん、本当によくできた娘だな。

まあ、あのユキを師事しているのだからこれくらいのコミュニケーションなど当然か。

ユキは必要なことも言わないから結構苦勞するんだよ。

「じゃあマージ。俺はユキの部屋に行くからカルベルトと時間を潰しておいてほしい」

「はい、わかりました」

「よ、よろしくお願いします」

俺はマージに言ったのに何故かカルベルトが俺に腰を曲げて礼する。

……何やってんだか。

普段のカルベルトなら絶対そんなことをしないぞ。

俺はカルベルトの豹変具合に呆れながら階段を上った。

この一軒家には3部屋あり、入ってすぐがキッチン兼リビング。そして右に行くとユキの部屋で左に行くとマージの部屋だった。

「ユキ？ 入っていいか？」

コンコンコンとドアをノックすると奥から「……どうぞ」と返事が来たので俺は開ける。

どうでも良い豆知識だがドアのノック回数は2回だとトイレ、3回だと親しい友人、そして4回が上司の部屋に入室する際の確認である。

そこは殺風景な部屋で奥には外へ繋がる扉があり、他には本棚と机やベッド　そして車椅子が置かれていた。

そしてベッドにちょこんと腰かけているのは大陸最強と謳われるユキルビレッド。カザクラだった。

「……久しぶり」

「まだ1か月も経っていないぞ」

ユキのその言葉に俺は苦笑して訂正するのだがユキは「……そう」で終わらせてしまう。

本当に変わらない。

ユキは会った時とそのままであり、まるで時間が止まっているような印象だ。

「……外に出たい」

俺はユキの要望を叶えるためにユキの首と両膝に手を入れて持ち上げ、ゆっくりと車椅子へと下ろす。

「……ありがとう」

そして車椅子を押し、外へ出るとユキはそっけなく、いつも通りに答えた。

ユキはあのキーツ王国救援の際、魔物による大けがを負って半身不随の身となった。

しかし、それでもユキは絶望することなくいつも通りに淡々と生きているので、どちらかというと俺がユキに慰められていたのを感じている。

あの時は辛かったな。

自分のせいでユキが半身不随になってしまった責に加え、そうまでして救い出したカルベルトがあんな「自分の苦しみなんでお前には分らないだろ」という態度を取る奴を俺は何度殺したく思ったか。

キツカやアイラ、そしてクロスが止めてくれなければ俺は奴をどうしていたか分からないな。

閑話休題

まあ、ユキは本当に大した人間だと思う。

あんな状態でもちゃんと子を産んだのだから。

そして、出産後のユキは魔導騎士団をミアに任し、俺が見つけた
マージの指南を引き受けて現在に至る。

「……」

お互い何も話さない。

ユキも俺も口数は多い方じゃないから当然といえば当然か。

そうしてしばらく佇んでいると隣の来客室からマージの笑い声が
響いてきた。

あの様子からまたカルベルトが何か失態をしたんだろう。

やれやれ、本当に初心な奴だな。

「……マージは天才」

俺がカルベルトに対して呆れ返っているとユキが口を開く。

「……魔法を教えてもう2年。マージは7大属性の全てをマスター
した」

まあ、そうだろうな。

何せマジの名は俺の知っている中では歴史上最大の魔導師なのだから。

「ユキもそろそろ抜かれそうか？」

俺が少し茶目っ気を込めて聞くとユキは心なしか声音を固くして。

「……まだ負けない」

と、小さく答える。

その様子に俺は、ユキは本当に変わっていないと唇に笑みを浮かべた。

そのまま時が過ぎて真上にあつた太陽が真っ赤に光る頃まで進んだとき、俺は口を開く。

「ユキ……ごめん」

出てくるのは懺悔の言葉。

「俺があんな命令をしなければお前は」

「ユウキが気にする必要はない」

普段よりハッキリとユキは否定する。

「怪我をしたのを私のミス。だからユウキが気に病まなくて良い」
視線を彼方に向けたまま、淡々とした調子でそう言うユキを見て
いると俺は自分が情けなく感じる。

罵ってほしい。

罵倒してほしい。

自分をこんな目に合わせた俺を弾劾してほしい。

が、ユキはそうしない。

それどころかキツカもアイラも、クロスでさえも俺を責めようと
はしない。

それが俺にとって最も辛い事なのだが、それがあがるがゆえに俺は
全てを敵に回そうとも歩み続けることができるのだから皮肉な事だ。

「……ユウキ。ユウキは自分の信じた道を貫いてほしい」

ユキは車椅子から俺を見上げてそう言う。

「……それが私にとって何よりの償いになる」

それは浮浪児時代に俺からパンを見ていた時と全く変わらない瞳。

本当にユキは純粹だなと思う。

あれから8年で身の回りの状況は大きく変わったにもかかわらず

ユキのそれはあの時のまま。

だから俺は真顔になってユキの瞳に焦点を合わせ。

「ああ、必ず」

しっかりとした声で俺はユキに誓った。

代償（後書き）

これで勇者の仲間が全員揃いました。

次が最後です。

納得いただけるような終わり方にしたいです。

運命（前書き）

最終話です。

ハッピーエンドとは程遠い内容ですが納得いただけると幸いです。

運命

ある日

ジグザール城内は騒然となっていた。

「やれやれ、どうしてこんなに驚くのかな」

あのベアトリクスやエルファでさえも動揺している中、俺は手に持った紙をヒラヒラさせて呟くと。

「夫よ、いくら何でも落ち着き過ぎではないのか？」

「そうですねよご主人様。あの魔王から手紙が届くなんて前代未聞ですよ」

ヴィヴィアンとシクラリスが呆れ調子で返してきた。

そう。

今、俺の手の中にある手紙が全ての元凶だった。

脈絡もなく突然魔物が現われ、迎撃に赴いたキツカにこの手紙を俺に渡すよう言伝たらしい。

その中身はこうだ。

明後日、この紙に指定された場所に最大3人まで連れて来るようにとのことだ。

「明らかにこれは罠です」

「でもレア、向こうが罠なんて仕掛ける必然性ってあるかしら？
何もしなくともこちらは負けると言っのに」

レアの言葉にフィーナが否定する。

確かにこのユーカリア大陸全体の状況は芳しくなく、じりじりと押され続けている。

その速度が常に一定なことから向こうは余裕を持って侵略していることは容易に想像できた。

「どつちみち……この提案は受けなくてはならない」

俺は玉座に体を預け、深く息を吐く。

「アイラ、そしてカルベルト。その2名は俺と共についてこい」

アイラは目を見開き、カルベルトは驚いたものの頷く。

「俺の代わりに指揮を取るのはシクラリス、お前だ。そしてベアトリクスとヴィヴィアンはその補佐を命じる」

本来なら名代は妻であるヴィヴィアンなのだが、彼女はベアトリクスと犬猿の仲なので間にシクラリスを入れる必要があった。

さすがに事態が事態なのか3名とも異は唱えず、了承した。

「そして、この封筒を置いておく。何か重大な異変を感じたら開けると良い」

さらに俺はシクラリスにある封筒を手渡す。

「悪いが俺は一人で考えたいことがある。だからしばらく一人にして欲しい」

玉座に座ったままそう命令を発すると、皆は何も言うことなく素直に従ってくれた。

全員が退出したのでこの広間には俺しかない。

そこで俺はこれまでの軌跡を思い浮かべていた。

「振り返れば一瞬だったな」

突然わけも分からなのまま少年のままこの世界に放り出され、がむしやらに動いていたらいつの間にか王となっていた。

日本にいた頃のあのうだつの上がない高校生をやっていた自分と比べると何て充実していたことか。

俺はこの世界には無い知識と技術を持っていたがゆえにここまで上り詰めた。

それはとても大きなアドバンテージだろう。

しかし、それは無償で与えられるわけではない。

得たものが大きい分、それに見合う代償を払わなくてはならない。

そして、その清算を行う時が今なのだ。

「……まあ、楽しかったから良いか」

今まで得たものを鑑みると、それぐらい安いものだなと考えた。

そこは長い間使われていなかった古城で、外装は勿論のこと内装の至るところまで朽ち果てている。

普段のカルベルトなら絶対に文句を言うのだが、さすがにこの場面でそんなことを言う胆力はないようだ。

俺は指定されていた部屋にあったテーブルに腰掛け、アイラとカルベルトは俺の後ろに控える。

「ユウキ様、必ずお守りいたします」

アイラが普段と違い、決意溢れる様子でそう語りかけてきたので俺はただ苦笑して済ませた。

……多分その約束は守れないと思うな。

そして数十分後。

背筋に怖気が入る程の悪寒と共にドアがガチャリと開いた。

そしてその者はコツコツとこちらに向かってくる。

「……1人か」

俺は入室してきた者に対してそう呟くと。

「1人で十分なのである」

と、自信満々に言い放ってきた。

「こいつが！」

「……魔王」

カルベルトとアイラがそう口々に囁く。

全身緑色の皮膚に顔を潰して固めたかのような醜悪な表情、背丈は2mもあり、幅も俺が3人でようやく囲めそうなほど大きい。

そして、そんな不快感を与える外見をしているにも拘らずあまり気にしないのは、それら嫌悪感を全て圧倒しているのが全身から発する並々ならぬ暗黒の気配だった。

「ふむ、貴様らが人間の王か。一応名乗ろう吾輩の名はジルベツサー|| シュバルツ。崇高な種族であるオークの王である」

魔王は椅子に腰かけた後、そう流暢に話し始めた。

「遙かな昔 このユーカリア大陸の支配者は人間でなく、我々オークであった。オークの王は『冥』を使え魔物を操れるにも関わら

ず、『天』を扱う人間の出現によって敗北した我々は辺境の隅へと追いやられてしまった」

ほう、それは初耳だ。

俺の知っている知識だと、オークはいるにはいるが数も知能も低いので、辺境の隅っこで細々と生息しているものなのだが、この時代だとオークは人間並みの知性を持って魔物を操れるらしい。

まあ良い。

今はそんな考察よりも目の前のジルベツサーの話だ。

「そしてそのまま時が過ぎ、力も知恵も失った我々はこの場にずっと居続けることになりかけた時、神は吾輩に力を戻して下さった。そう、古代のオークの王が使えた『冥』という最大最強の力と魔物を操る術をな」

途端に魔王の全身から黒い瘴気が溢れ出して気温を下げる。そして、その瘴気に触れた物はまるで生命を吸い取られたかのように石化し、朽ち果てていった。

「『冥』というのは命を吸い取るのか」

『闇』という属性もあるが、あれは紛い物の命を吹き込んだり幻想を見せたりとどちらかというところ『与える』種であり『奪う』こととはしない。

だから本当にあれは『闇』とは別種のものなのだろう。

「オークが如何に崇高なのかは分かったが、一応こちらも自己紹介しても良いか？」

「滅びる人間の名など覚える必要はないのである」

そのぞんざいな台詞にカルベルトがいきり立つ。

「吾輩がお前を呼んだのはただ絶望を突き付けるためである。降伏は認めない、貴様等は一匹残らず死ぬことを伝えに来たのである」

どうやら自慢話をしたいがために俺達を呼び寄せたらしい。

やれやれ、本当にジルベツサーは良い意味でも悪い意味でも王様だな。

「無傷で帰れるとお思いですか？」

これまで何も話さなかったアイラがスツとボウガンでジルベツサーに向けて。

「わざわざ相手の親玉が現れるのに、こちらが何もしないとお考えでしたか？」

「ふん、人間風情が。やってみるが良い」

その言葉と共にアイラが矢を放つ。

それは一直線にジルベツサーの額へと向かっていったが、途中から矢の腐食が始まり、ついにはただの錆へと変わり果てた。

「『冥』の絶対防御か」

「その通りなのである。一部を除いてこの防御を打ち破れるものは存在しないのである」

鼻をフンと鳴らしてそう自慢するジルベツサー。

「なるほど、だから『冥』を打ち破れる『天』の使い手のキーツ王国を滅ぼしたのだな」

「」名答である」

俺の答えに大仰に頷いてくる。

「しかし、滅ぼしたはずのキーツ王国の生き残りがいるという噂のため吾輩は大仰に力を使えず、魔物によって国を攻めるしか方法が無かったのである……が」

「生き残りは満足に『天』を扱えなかったと」

俺がそう言うと同時に耐え切れなくなったのかカルベルトが手をジルベツサーに向けるのだが、何も起こらない。目を血走らせて血管を突き出るほど力を込めても、何も起きなかった。

「ほら、やはり使えないのである」

ジルベツサーは満足そうに鼻を鳴らした。

「ふむ、お前の言いたいことはそれだけか？」

「その通りである」

「お前以外に『冥』や魔物を従えさせるオークはいないのか？」

「そうである。この崇高な力は吾輩のみが扱えるのである」

ああ、そうか。

それは良かった。

これではらく時間を稼ぐことが出来るな。

「アイラ、カルベルト。倒すべき敵の存在を刻みつけたな」

その言葉に悔しさを滲ませながらも2人は頷く。

「何を無駄なことを、魔物大侵攻の第2波によって貴様ら人間はもう終わりである」

俺の言葉を悪あがきと受け取ったのであろう。

ジルベツサーは呆れ口調で言い放つ。

やれやれ。

どうして過ぎたる力を持った者はこうして傲慢になるのか。

まあ、そのおかげでこちらに勝機が出来るのだから構わないか。

「アイラ、カルベルト。お前らはイズルガルドに乗ってここから去

れ。俺はもう少し魔王と話したいことがある」

「ですが」

「いいから言う通りにしろ」

アイラが多少戸惑ったが、俺は強く言い放つと「承知しました」と頭を下げてカルベルト共にこの場を去っていった。

「ふむ、お前1人きりだがどうするつもりであるか」

完全に俺とジルベツサーだけになった場で、ジルベツサーが口を開く。

「なあに、こちらもちよいとご高説を垂れようと思ってね」

俺はしばし目を閉じ、呼吸を整えた後話し始める。

「魔王、俺は別世界から来た人間だと言えはお前は信じるか？」

「まあ、お前は人間にしては異質であるな」

「まあ良いだろう。で、俺はゲームによってこのユーカリア大陸の未来を知っている。それはこの時代より遙か未来の話。文明レベルは現在とそう変わらないが、そこは人間がこの大陸を謳歌し、オークは辺境に住んでいた」

「胸糞の悪い未来であるな、我々オークが陰で過ごしているなど」

「確かにお前からすれば不愉快な未来だろう。しかし、それが真実

だ。俺達人間が今も未来もこの世界の支配者なのは純然たる事実だ」

「何を言っているのか。もしそれが未来なら吾輩が壊してやろう。この『冥』と魔物を操る力を以て正しい歴史へと導くのが吾輩の役目だ」

「いや、それは違う。お前は滅びるのだよ、今から3年後の未来にあのカルベルトによってお前は死ぬ」

「ハハハ、面白い冗談であるな。しかし、それは何を根拠に言っているのか。すでに人間は息も絶え絶えであり、次の大攻勢で滅びるのである。そして頼みの綱である者はまだ『天』を扱えきれていない。この状況のどこを見ればそんな未来を言えるのであろう」

「簡単だ。今、お前がここで死ねばいい。いや、そこまではいかなくともしばらく動けなければ、魔物の統制は利かなくなり、こちらは大攻勢のための魔物を滅ぼして時間を得ることが出来る」

「それこそ妄言であるな。この『冥』を打ち破れるのは『天』だけである。それ以外の攻撃は効かぬのに、どうしてそんな」

「いや、その絶対防御を破壊することが出来る」

この言葉に始めてジルベツサーが表情を崩す。

「言っただろう。『天』ならばその『冥』の防御を破れると。なら簡単だ、『天』を作れば良い」

「何を馬鹿なことを。そんな真似をできるわけがない」

「ハハハ。先程言っただろう、俺は別の世界から来た。つまり今の水準では到底作り出せない技術も俺は知っている」

俺はそう言っただけでテーブルの上にある物を置く。

それは黒く光り、周りに何とも言えぬ威圧感を放っていた。

「これを作るための必要な原石はそのままだと何も起こらないが、ある加工を施すと周りのエネルギーを限界まで吸い取り始める効果を持つ」

その名も暗黒物質　　ダークマター。

プレイヤー時代、あまりの強さによって運営側から使用禁止になってしまったものである。

ブラッディXと同様作れるはずがないと思っていたのだが、現実には作れてしまった。

なお、この技術はサラにさえ教えていない。

何せこんなものがあれば世界が2、3度滅びてしまうからな。

この代物は俺だけが知り、俺と共に滅びるのが一番良いんだ。

「そしてな、これを破壊すると今まで貯め込んだエネルギーを周りに放出するんだ。そしてその威力は『天』と同様……ここまで言えば分かるだろう？　俺がこれから何をしようとしているのか」

俺は懐から金鎚を取り出してそのダークマターの上で振り上げる。

「お、お前は死ぬ気か？ そんなことをすればお前も無事では済まないぞ」

さすがのジルベツサーも狼狽の色を浮かべる。

それを見ながら俺は笑って一言。

「人間の歴史が続くのなら俺の命ぐらい安いものだ」

そして。

俺は躊躇なく金鎚を振り下ろした。

「なあ神様よ……もし俺の願いを聞き入れてくれるのならユキの足を元通りにしてやってくれ」

辺りに閃光が満ち、指、手、腕、胴体と順番に消えていく中で俺は最後にそう願った。

運命（後書き）

次は今までに登場した人物の後日談です。
それで終わりです。

今まで本当にありがとうございました。

エピソード 箱庭の楽園（前書き）

1万字越え……さすがラストだ。
キャラが暴れまわっていたぜ。

エピローグ 箱庭の楽園

我 イズルガルドはあの魔物大侵攻において活躍した者達が後世においてどのような評価を下したのか、その事実を皆に伝えることとする。

なお、これからの名前はユウキ殿の遺言として名乗らせた名前ではなく、それ以前の名前で呼ぶこととなる。

カルベルトⅡキーツⅡダルムンク

世界を救った英雄。キーツ王族のみが使える「天」を使いこなし、魔王を打ち破った。その後、彼と彼の仲間がどこに行ったのかは不明である。

メイアⅡジャグリングⅡアルガン

英雄の守り手として活躍。その獅子奮迅の働きによって英雄を守ったのは事実であり、多くの歴史家も彼女の存在がなければ魔王のもとへ辿り着けなかっただろうと断言されている。

フローラⅡリバングⅡアースニア

聖女として勇者が魔王を打倒すまでの間、絶望に打ち負けそうになった人類を励まして奮起させた。彼女の功績は歴代聖女の中でも

比類なく、多くの人々から中興の祖として崇められている。

マージⅡインスペンデンス

英雄の剣として数多の魔物をその魔法で屠った。彼女の魔法は『天』と同等かそれ以上とされ、間違いなく歴史上最強の魔導師として記録されている。

「なあ、俺達ってそんな風に記録されているらしいぞ」

「へえ、そうなの。ところで私達はどこら辺にいるの？」

「勇者様、私達は東へ向かっていたはずですが」

「いつの間にか逆の西へ進んでいます」

「……と、とにかくまっすぐ行けばいいんだ！」

「「それはおかしいわ」「」

エレナⅡグランシリアⅡイーブルブル

ジグサリアス王国の筆頭貴族として生涯王家に忠誠を尽くし、民を守った。その生き様から貴族の鏡とされ、後世においては彼女が貴族としての手本となっている。

キリンググ＝トリアエル

エレナの補佐としてその力を存分に振るう。公と私をこれ以上ないほど厳しく分別し、理想のナンバー2としてエレナを陰から支えた。

「私はそこまで褒められるわけではないのだがな」

「エレナ様、度が過ぎる謙遜は失礼ですよ。ここは素直に受け取っておくべきです」

「そ、そういうならその名誉を受け取ろう」

「それでよろしいのです」

ヴィヴィアン＝リーザリオ＝トルツエン

ジグサリアス王国『スリークイーン』の内の一人。その溢れるカリスマからユーカリア大陸の諸国全てを引っ張っていく。名目上はジグサリアス王国の女王だが、実質初の世界皇帝として記録されている。

ベアトリクス＝シマール＝インフィニティ

ジグサリアス王国『スリークイーン』の一人。参謀として公式上の記録こそ少ないものの、ジグサリアス王国が諸国の指導的立場を得るために水面下で動いていたのは非公式や民衆の噂などにごまん

とある。公式ではないにしろ、彼女が世界を纏めた立役者なのが皆が認めている。

シクラリスⅡバルティアⅡライソライン

ジグサリアス王国『スリークイーン』の筆頭。その肩書きの割に目立った功績はないが、彼女の存在が特徴溢れるジグサリアス王国を纏めていたことは周知の事実である。宰相の他にも国家間の問題を解決する委員会の議長も務めていた。

「はっはっは！ どうだ、私の実力は」

「何寝言言ってるの？ 私のおかげじゃない」

「はいはい、仲が良いのは分かりますけど喧嘩は止めて下さい」

「誰がこいつと仲が良いですって!?!」

「アハハ、それですよ」

「……」

レアⅡレグリアスⅡツバイク

ジグサリアス王国の内政責任者として腕を振るう。『悠久のまどろみ』と名高い平穏な世紀を作り上げたのは彼女の行った統治法によるものが大きい。

フィーナ・レグリアス・ツバイク

ジグサリアス王国の筆頭外交官として各国を飛び回り、調整を果たしてきた。魔王亡き後に各国が領土侵略を行わなかったのは彼女の働きによるものである。

「発案者ではないのに私の功績になっているって……」

「気にする必要はないわよ。今は私達が間違っていなかったことを喜びましょう」

「そうね。たまには姉さんも良いこと言っじゃない」

「『たまには』って何よ！ 『たまには』って！」

サラ・キュリアス

当代一の鍛冶師としてその力を存分に振るう。彼女が生み出した新技術や作品によってユーカリア大陸の技術レベルは50年ほど早まったと言われる。そして、後年の産業国家ジグサリアスとしての下地を作った。

ヒュエテル・クーラー

魔王の侵略によって親を失った孤児の保護・教育に全力を尽くす。

その献身的な姿から後年、彼女は孤児院の象徴的な存在となった。

「うーん、私としては、私より師匠のことを褒め称えて欲しかったんだけどな」

「あらあらサラちゃん。ついに他人のことを考えられるようになったのね」

「……ヒュエテルさん。まだ私をちゃん付けなのね」

エルファ＝ララフル

ジグサリアス王国のメイド長として働いているメイドに教育を施す。ジグサリアス王国の要人が暗殺された歴史が無いのは偏に彼女の教育によるものが大きい。ゆえに各国にあるどのメイドの心得の教科書にも必ず彼女の名が記されている。

ティータ＝エルマライ

各国を飛び回るフィーナの代わりに国内で外交の総責任者として諸国に滞在している外交官の調整を行っていた。目立たない仕事だが、彼女の働きによってフィーナが存分に腕を振るうことが出来たとされている。

「私の名が残ってよろしいのでしょうか」

「ん？ 何か不都合なことでもあるの？」

「ティータにも隠していましたが、私は実は」

「暗殺者でしょ。でも、それは過去の話だから気にする必要はないわよ」

「知っていたのですか。まあ、それでも知らない風に振る舞うのはティータらしいですね」

キツカ「エメラルドグリーン」カザクラ

魔物大侵攻から魔王が打倒されるまでの間、遊撃兵として数多くの人間を窮地から救った空の英雄として呼び名が高い。彼女の舞は他の竜騎兵と一線を画し、魔物ですら見惚れるものだったという。

ククルス「トパーズイエロー」フォンテジー

用兵術に優れ、空での戦法というのを根本から覆した者として戦術の教科書には必ず名前が出る。また、全体を見渡す能力も長けており、彼女がいなければキツカの活躍は半分も無かつただらうと評されている。

ギール

キツカの愛竜。その獰猛な性格から周りの竜より恐れられていたが、それに見合うだけの力量を持ち、この竜だからこそキツカが神

技と呼ばれる動きが出来たのだと言われている。

「うーん。私ってそんなにすごいかなあ？」

「何を言ってるんですか！？ 私からすればこれでもまだ足りないくらいなんですよー！」

『その通りだ、我とキツカの評価が低すぎる』

「まあ、そこまで言うんだったらそういうことにしておきましょうか」

アイラⅡ サファイアブルーⅡ カザクラ

魔王の居場所を突き止め、例え移動しても勇者がすぐに捕捉出来たのは彼女の偵察力ゆえである。諸国の誰もが彼女を恐れ、裏ではアイラの首を取った者に多額の賞金を与えられる触れ込みが出されたらしい。

オーラⅡ アメジストパープルⅡ ユクエリス

ジグサリアス王国の立場を脅かす不穏分子の除去に全力を尽くす。ジグサリアス王国の繁栄を裏で一手に支えてきた存在とされている。

「『らしい』の推測でなく実際に行われていたのですがね」

「まあ、アイラは強すぎて恐ろしいから仕方ないのかも」

「笑うのは結構ですが結果から見るとオーラの方が恐ろしいのです
が」

「アハハ、それは光栄かも」

ユキールビーレッド「カザクラ

事故により半身不随となっていたが、ある日突然立ち上がれるようになった。弟子であるマージの陰に隠れがちだが彼女の力量も相
当なものであり、彼女の魔物撃退数は他の魔導師より2、3桁違っ
ていた。

ミア「ガーネットオレンジ「ヴァルレンシア

最強の魔導騎士団「火」を率いる者としてその名を轟かす。オー
ラが陰だとすればミアが表からジグサリアス王国に敵対する者を葬
っていた。

「……ミア、凄いね」

「ユキがボクを褒めた！？ 何か変なものでも食べたのかい？」

「……」

「冗談だよ冗談。だから怒らないでえ」

「……プイ」

クロスⅡダイヤモンドホワイトⅡカザクラ

大同盟によつて編成した軍の元帥を務め、その見事な指揮で魔王による被害を最小限に抑えることが出来たとされている。しかし、クロス以外この異種混合した軍を本当に纏め上げるのは不可能だったのか、未だに結論が出ていない。

レオナⅡジルコンクリアⅡカリスリン

クロスの副官としてルール將軍と共に軍の統率の補佐をした。魔王亡き後は正式に軍を引退し、クロスの妻として家庭内に収まったとされる。しかし、文献の記述によると時々軍の調練に顔を出していたらしい。

「『時々』じゃなくて『いつも』だけどね」

「まあ細かいことは気にするな、私がいなくなったことで軍が腑抜けになつては困るからな」

「でもレオナのおかげで『山』の練度を維持できたのは事実なんだなこれが」

「だろ？ それなら良いじゃないか」

ユウキⅡジグサリアスⅡカザクラ

全ての始まりとされ、彼がいなければ人間の歴史が終わっていただろうと推測される。が、勇者と聖女が存在を神格化する目的と、浮浪児が王にまで上り詰めるのは統治上好ましくないという2つの理由から徐々に彼の功績が削られていき、現在では『彼は本当に実在したのか』と、存在自体が疑われている。

「……………」

『ユウキよ、聞いておるのか』

イズルガルドの少し怒ったようなテレパシーによって玉座に頬杖をついてうたた寝をしていた俺はまどろみの状態から覚醒する。

「ああ、すまない。少し寝ていた」

俺ははにかみながらそう言うと、どこからか呆れた様なテレパシーが伝わってくる。

『ユウキよ。一体ここはどこなのだ？』

神様から提示を受け、自分がここに来るよう願ったはずなのだがイズルガルドは戸惑っているらしい。まあ、俺もそうだったし、キツカやアイラでさえも動揺していたからな。

「ここは『箱庭の楽園』。俺が立派に役目を果たしたから褒美として神が俺に贈ったユーカリア大陸に似た世界だ」

『世界……』

「まあ、世界といっても俺やキツ力達以外の住民は決まった受け答えしかせず、さらに俺達を含めた全員が不老不死だから世界の紛い物という方が正しいかな」

『ふむ、それは少々退屈だな』

「確かに昨日と同じ今日が永遠に続く世界だからその通りかもしれない。しかし、本当に嫌なら願えば良い。そうすればイズルガルドはこの世界から消え、輪廻の輪に戻るぞ」

『いつかはそうするだろうが、今のところはお主と共に過ごしたい。だからこそわしは望んでこの世界に来た』

「その言葉はここに来た全員が同じことを言うんだよな。俺からすれば誰か1人ぐらいそのまま転生すると思っていたのだが」

『お主よ、そなたはもう少し自分の存在を自覚した方が良い。お主が死んでから彼女達の嘆きが如何ほどであったか』

その言葉に俺は苦笑して。

「いや、十分すぎるほど理解したよ。何せ俺に会った瞬間皆は怒るわ泣くわ喜ばれるやらで大変だった。しかもそれが23人分なのだからそれはもう……な」

『ハハハ、女泣かせのお主にとって良い薬じゃ』

イズルガルドの笑い声が頭に響いた。

「さて、イズルガルド。ここに来たばかりで悪いのだがカルベルト達を迎えに行つてやれないか？ 多分また迷っていると思うから」

『そんなことはお安い御用じゃ』

イズルガルドは了解したらしく、テレパシーを切つてカルベルト達を迎えに行つた。

「さて、俺もそろそろ起きようかな」

俺はそう呟くと同時に玉座から立ち上がり、体の凝りを解すために伸びをした。

そしてそのまま広間から出ると、何やら憤慨した様子のアイラとオーラが見える。

「アイラとオーラか、どうした？」

「どうもこうもありません。ユウキ様があんな不当な評価を受けているのに、この憤りを抑えることが出来ますか」

「そうね、さすがにこの時ばかりはアイラと同意見だわ」

どうやら2人は俺の存在を抹消された歴史が気に食わないらしい。

俺の代わりに怒ってくれるので俺は知らずに苦笑する。

「まあ、それが後世の人間が選んだ選択なら俺は何も言わない」

「ユウキ様、それは甘すぎるのでは？」

「アイラと同感」

2人は俺の答えに呆れていたが、俺はそれ以上何も言わずに歩いていく。

「ああ、そうだ。イズルガルドが4人を連れて来たらパーティを開くから中庭で待っていてくれ」

最後に俺は振り向き、そう2人と約束をした。

バルコニーへと向かうと、そこにはキツカとククルスがギールに跨り、出発しそうな場面が待っていた。

「おい。キツカ、ククルス。イズルガルドが向かったから2人はいかなくていいぞ」

その言葉に振り向く3人。

「あら、そうなの。それなら行く必要はないわね」

キツカは軽い身のこなしでヒラリと降りる。

「うう、せっかくお姉さまの背に堂々と抱きつけるかと思ったのに」

対照的にククルスは恨み言をブツブツ言いながらゆっくりと地面に足を着けた。

「イズルガルドか……彼も来たのね」

キツカが感慨深そうにそう呟く。

『……俺はあまり会いたくないな』

ギールはイズルガルドと聞いて背中を丸めて拒否反応を示した。

「まあ、イズルガルドからすれば里を守る役目を果たさずキツカの後を追ったのは長老の立場からすると褒められないな」

「こらこらユウキ、あまりギールを苛めない。大丈夫よ、イズルガルドにはククルスが弁護するから」

「お、お姉さまの偉大さを余すことなくしっかり伝えます」

ククルスが俄然と張り切っていたので俺は「気合が入りすぎて空回りするなよ」とだけ忠告しておいた。

バルコニーから引き返し、俺は図書室に向かって歩いていく。

そのドアを開けると目論見通りお目当ての人物達がいた。

「ユキとミア。お前らは本当に仲が良いな」

そこにはいつも通りミアがユキを膝に乗せて本を読んでいた。

「……私は迷惑」

いつも通り無表情のユキだが、頬がかすかに赤いことから見られたことが恥ずかしいのだろう。

「ボクは満足」

ユキとは対称的にこの世の至福とばかりの笑顔を見せるミア。

「じゃれあうのは構わないが、そろそろ中庭に集合してくれよ」

「うん、了解。さあユキ、ボクが抱っこしてあげるよ」

「……一人で歩ける」

「いやいや。そうかもしれないけど、ボクは長い間ユキと触れ合えなかったんだ。だからそれまでの分を取り戻しておかないとね」

「……自分勝手」

ユキが必死に抵抗しているが、おそらくミアによって抱っこされて現れるだろう。ミアはああ見えて強引なところがあるし、ユキも何だかんだ言って甘えたがりだからな。

ワイワイ言い合っている2人をしり目に俺は図書室のドアを閉めた。

鍛錬場に足を向けるとそこには剣を打ち合っているクロスとレオナの姿があった。

男と女だからクロスが優勢だろうと思っていたが、意外なことに戦いは拮抗している。

「そこっ！」

レオナの鋭い一閃とともにクロスは持っていた剣を取り落してしまった。

思わずパチパチと拍手する。

「おお、ユウキ様。これは気づきませんでした」

持ってきた手拭いで汗を拭きながらそう答えるレオナ。

「ユウキか、どうしたの？」

クロスは剣の手入れをしながらそう訪ねてきたので俺は用件を簡潔に伝える。

すると2人とも頷いて了承してくれた。

「いや、すごいな。あのクロスに勝つとは」

俺は先ほどの試合について称賛すると。

「ハハハ、あれぐらいチヨロイものだ」

レオナは天狗になり。

「レオナが勝つまで勝負を続けたくせに」

クロスはじと目でレオナに釘を刺した。

「うっ……しかし、まあ良いではないか。こうして剣を打ち合えるなんて久しぶりだったんだ」

クロスに責められたレオナは多少怯んだものの、すぐに調子を取り戻してクロスの背をバンバンと叩く。

「とにかく、遅れないようにな」

2人の夫婦漫才についてそう締めくくった俺は踵を返して鍛錬所から出て行った。

「次に向かう先は遊技場。」

多分そこにはレアとフィーナが遊んでいるはずだった。

「よしっ、次は私が先行ね」

ビリヤードの台でバンキングに勝ったフィーナが嬉しそうに宣言する。

「しかし、それに勝ったからと言って勝負に勝つとは限りませんよ」

力加減を失敗して所定の位置に止められなかったレアが悔しそうに言い放った。

この2人 意外にもゲームの腕はほとんど同じで、どのようなゲームでも引き分けかそれに近い形の戦績だった。

「おい。レア、フィーナ。そろそろゲームを終わりにしてほしいのだが」

「あら、ユウキ王じゃない。ゲームの中止つてもしかしてイズルガルドが来た？」

フィーナの言葉に俺は首肯する。

「そうならばゲームをしている場合にはありませんね。すぐに向かいますよう」

レアはラッキーとばかりにキューを所定の位置へ戻した。

「しかし、イズルガルドって来るの早すぎない？ 私がここにきて余り経っていないのだけど」

そのフィーナの疑問にレアが。

「姉さん、ここは時間の流れが違うの。私より少し遅れてきた姉さんがあんなに長く生きていたなんて信じられないわ」

「あ、そうか。ごめんね」

フィーナが舌をペロリと出す様を見てレアが一言。

「まだボケ老人の時分を引きずっているのですか？」

「失礼なことを言わないの！」

レアの冗談にフィーナが爆発する様子から本当に2人は変わらな
いと感じる。

2人が喧嘩をしているのを見て苦笑した俺はその場を立ち去って
行った。

鍛冶場へと向かう途中で偶然ヒュエテルさんと出会う。

聞けば自分もサラを呼びに行くところらしい。

「多分サラちゃんは鍛冶に没頭して出てこないでしょうっから」

ヒュエテルさんの言葉に俺は苦笑する。

あの鍛冶に命を懸けているサラなら容易にありえそうだったから
だ。

「しかし、まあ。あんなに打ち込まなくてもいいだろうに」

サラはここに来て俺に一通りの感情をぶつけた後、鍛冶場へとす
っ飛んで行った。

それはもう弾丸と見間違うが如くの様子で。

「仕方ありません。サラちゃんは晩年目が不自由になり、鍛冶を出来ませんでしたから」

するとヒュエテルさんはその頃の訳を語り始めた。

「鍛冶が出来なくなったサラちゃんは本当に火が消えたようでしたよ。顔から生気が抜け、食欲もなくなつてすぐに逝ってしまいました」

ヒュエテルさんはサラの最期を看取つたのだろう。あの柔和な微笑みのヒュエテルさんが悲しそうな表情を浮かべるぐらいだから、当時は相当辛かつたのではないかと容易に想像できる。

「いや、違うのですよ。これはあくまで当時の話であつて、ここに来てからはそんなことありません」

するとヒュエテルさんは俺ががしんみりしていることに気づいたのか慌てて弁解を始めた。

俺はその様子がおかしくて思わずクスリと笑ってしまった。

そうこうしている内に俺とヒュエテルさんは鍛冶場の前へと到着する。

俺が第一声をどうしようか迷っていると、突然向こうからバタンとドアが開いて俺の顔面を直撃する。

「ついに全員が揃つたのですね！ 分かりました、すぐに片づけを

始めます！」

俺が悶絶している横でサラはあの時と変わりないきれいで純粹な笑みを浮かべてまたドアを閉めた。

「……えーと、サラちゃんに悪気はないのですよ？」

さすがのヒュエテルさんもそれぐらいにしかフォローできなかつたようだ。

サラをヒュエテルさんに任せて俺は広場に向かってっていると、先に歩いている2人が目に入る。

その真っ赤な髪と亜麻色の髪の2人は俺の記憶の中だと1つしか該当しない。

「エレナ子爵、そしてキリング。少し待ってくれ」

俺が2人を呼び止めると始めは誰だとはかりに燦しげな表情を作っていたが、俺だと分かるとすぐに改める。

「ユウキ王ですか。もしかして中庭に？」

エレナ子爵の問いに俺は頷いた。

「しかし、ユウキ王はまだエレナ様を子爵と呼ぶのですね」

「まあ、俺の中ではエレナ子爵はエレナ子爵だからな。どうもそれ

以外はしつくりこない」

「それでもエレナ様は侯爵の地位まで上り詰め、多くの貴族の指導的立場に立ったお方なのですよ」

「うん、それはイズルガルドが教えてくれたが、改めて聞くとすこいな。本当に俺の下にしていたのが不思議なくらいだ」

「ご謙遜をユウキ様。私など若輩者で、キリングがいなくなっただけならは2年で退きました」

「そこが私の不満点なんですよね。私などいなくても十分偉大な方なのに、どうして引退したのか」

「何を言っているのか、私があんな大役を務められていたのはお前がいたからこそ。影のない実体は幻のように、キリングを喪った私は私でなくなってしまったのさ」

「エレナ様……」

……何とか間に立ち入ってはいけない空気が辺りに満ちる。

だから俺は適当にお茶を濁してエレナ子爵とキリングの2人から距離を置いた。

ふと厨房を除くとそこは戦場だった。

エルファが特注の大なべを使って料理を作っていくのだが、あん

な人の子供ほどありそうなフライパンを片手で操っている様子は圧巻だ。

「はいはい。ボク、ちょっとごめんね」

ティータさんが後ろからそう声をかけた後、俺の後ろを通過して厨房へと入っていく。

どうやらエルファが料理、ティータさんが運ぶ役割らしい。

「主ですか？」

包丁で食材を斬りながらエルファは背を向けたまま俺に問う。

「もう少しで料理ができます」

「ああ、見れば分かる」

食材を斬り終えたエルファは流れる手つきで次の作業へと移った。

「あれ以来、私は料理を腕をあげました」

「へえ、そうなのか。それは楽しみだ」

と、ここでエルファは作業を止めて俺の方を見る。

「これから毎日作って差し上げますよ」

その人形の様な整った顔に魅惑の笑みを浮かべてそう囁いた。

「そういえばティータさんは料理を作れないのか」

ちょうどタイミング良くティータさんが入ってきたので俺がそう聞く。

「何言っているの？ エルフアに料理を教えたのは私よ。まだまだエルフアには負けないうて」

笑顔でそう返してくる。

そしてそれに反応したのがエルフア。

「ティータの知っている私はそうでしたが、ティータが逝って以来の私はあの時と比べ物にならないくらい料理の腕を上げましたよ」

「へえ、それは楽しみね。じゃあ今度勝負しましょうか」

「良いですよ。味の審査は全員でもらいましょう」

それつきり2人の会話は終わり、エルフアもティータさんも作業を再開させる。

「少し楽しみだな」

広場に向かう途中、俺はエルフアとティータさんの料理を想像して知らず涎を垂らした。

「お前らはもう先に来ていたのか」

視線の先にはベアトリクス、シクラリスそしてヴィヴィアンの3人が先に待っていた。

ちなみにベアトリクスは淡青のドレスを、シクラリスは純白のメイド服をそしてヴィヴィアンは派手な真っ赤なドレスを着ている。

「フッフ、私の成果を皆に伝える時が来た」

「また妄言を、ヴィヴィアン一人なら単なる道化よ」

「ベアトリクスの様な腹黒よりましだろう」

「むっ、言う様になったわね」

「まあな、これでも私はお前より長く生きていたんだ。これぐらいの余裕はある」

「けど、その奇抜なセンスは変わらないわね」

「どこが奇抜だ！」

そう言って2人は口喧嘩を始める。

本当に2人は変わらないなあと呆れていると隣にスススとシクラリスが寄ってきて弁明を始めた。

「ああ見えてベアトリクス様が亡くなった際に一番悲しんでいたのはヴィヴィアン様ですよ。カトリーナ様を見るたびに遠い目をし、そして亡くなる間際もベアトリクス様の名を呼んでいましたから」

「……そうか」

シクラリスの話を聞いて俺は何も言えなくなってしまつて。

そして俺はシクラリスに目を向けて。

「お前が最後だったらしいな。旧知である仲間が先に逝くのを見てお前はどう思った？」

俺のその問いにシクラリスは様々な感情を瞳に浮かべ、そして沈黙の果てに出た言葉が。

「……とても辛かったです」

言葉静かにそう絞り出した。

「でも、今は違いますよ。こうして皆と会えて私は本当に幸せです」

その屈託のない笑顔から嘘偽りなどでなく、本心からそう言っているのであらう。

それを見た俺は幾分か心が軽くなる。

「おーい！」

城内にいた全員が中庭に揃い、後は4人の帰りを待つだけになると、上から威勢の良い掛け声が聞こえたので俺は顔を上げると、そ

ここにはイズルガルドとその背に乗っている4人の姿が見えた。

「ちゃんと魔王を打倒したぞ！」

「王の仇を取りました！」

「勇者様の跡継ぎについては心配いりません」

「ユウキさん、師匠はお元気ですか？」

口々に己の為したことを繰り返す4人。

全く、それはお前らがここに来た時から皆に話しているだろう。

どれだけ自慢したいんだか。

そしてイズルガルドが中庭に降り立つ。

キツカやアイラ、ユキ、クロス、ティータさん、ヒュエテルさん、サラ、エルファ、レア、フィーナ、ククルス、オーラ、ミア、レオナ、エレナ子爵、キリング、ベアトリクス、ヴィヴィアン、シクラリス、カルベルト、メイア、フローラ、マージ、ギールそしてイズルガルドと俺が関わった全員がこの中庭に集まった。

やはり乾杯の音頭は俺が取るべきだという意見が出たので俺は盃を掲げる。ちなみにギールとイズルガルドは手を器用に使って樽を持ち上げていた。

さて、これが締めという言葉だ。

俺はコホンと一つ咳払する。

「数多の英雄達よ。労苦を分かち合った仲間と共に今は存分に楽しんでくれ……乾杯！」

「」「」「乾杯！」」「」

全員による唱和がこの中庭に響き渡った。

エピローグ 箱庭の楽園（後書き）

これで終わりです。

本当にありがとうございました。

なお、次回作の予定ですが。

先日に関連していた「ruck - 9999」を大幅に改稿します。
具体的にはキャラ名など「ゲームの世界で第二の人生!？」を払拭
した内容へと改稿します。

ただ、卒業研究のためすぐに執筆へ取り掛かれませんが、不定期
更新になることをご了承ください。

番外編 5人でのクリスマス（前書き）

緊急クリスマス企画！

……だったはずなのですが、途中からシリアスになってしまいました。
た。

おかしい、最初はこんな予定で無かったはずなのに。

番外編 5人でのクリスマス

コンコン

俺は迷いの森にある家へのドアを叩く。

「はい、いらっしやいませ」

そして数秒の内にドアが開かれて中からマージが開けてくれた。

「ユウキさんとカルベルトさん。そしてキツカさん、アイラさんにクロスさんですか……凄いですね」

マージは俺とカルベルトの他に3人が訪れたのを見て驚いているようだ。

それはそうだろう。

何せキツカ達はこのユーカリア大陸を代表する軍のトップという
錚々たる陳列だったからだ。

「さて、マージ。今日はユキの世話をしなくても良い。だからカル
ベルトと共にジグサールに向かってほしい」

おそらくメイアやフローラもすでに揃っているだろう。

ジグサリアス王国の要人のみが出席するパーティは明日だから早
めに行っておくにこしたことはない。

ちなみに各国の王を招いてでのパーティは明後日である。

今日は5人で集まって行こうささやかな集まりだった。

「しかし、師匠を置いていくわけには」

マージはユキと離れることに不安を覚えているらしい。

瞳が少し揺れている。

「……行くと良い」

俺は何か言おうとする前にユキの部屋からそんな声が漏れる。

「……これも訓練。仲間との交流を深めておくべき」

「分かりました、師匠」

俺からするとユキは何を伝えたいのかイマイチ分からなかったが、マージからするとそれで十分だったのだろう。瞳の不安は消えて元の明るい表情を取り戻す。

「ではイズルガルド。2人を頼む」

カルベルトとマージを乗せたイズルガルドは一つ頷き、翼を広げて大空へ飛び立っていった。

「ほら、ギール。あなたも行きなさい」

キツカに急かされてギールもイズルガルドの後を追った。

これは気のせいかもしれないが、最近ギールはキツカとよくいることが多くなっている。

竜と仲が良いのは好ましいことなのかもしれないが、少しいきすぎだと感じるのは何故だろう。

俺は横に立っているキツカの姿を見ながら思いを馳せる。

この世界の人間は普通40代、どれだけ生きても60が限界だ。

何千年も生きる竜からすると俺達の命など朝露にすぎない。

……もしキツカがいなくなればギールはどうするのだろうか。

「まあ、考えても仕方ないか」

それは当事者であるキツカとギール。そして長老のイズルガルドが決めれば良い。

俺が口に挟む必要はないだろうな。

そこまで考えた俺はその思考を打ち切った。

俺がキツカと共に中へ入ると、すでにユキは車椅子に乗ってアイラと談笑をしていた。

「本当に護衛達の体たらくは困ったものです。何度侵入を許せば気

が済むのですか」

「……アイラ、あまり苛めちゃ駄目」

「私は苛めているつもりでは」

「結果的にそうになっているんだよ。ね、ユキ」

クロスの合いの手にユキはコクリと頷いた。

「私はそんなつもりでは」

ブックサと文句を垂れて顔を膨らませているアイラがそこにいた。

感情が薄くなったとはいえ、3人と触れ合っていると昔のアイラが戻ってくるんだな。

俺はそんなことを考えながら厨房へと入る。

残念ながらこの中で料理が出来るのは俺一人なので、そうになってしまう。

アイラが手伝うと言ってくれたのだが、俺は丁重に断った。

この時ぐらい4人で水入らずの時間を楽しんでほしいからな。

「ねえユキ。今度一緒にギールに乗って散歩をしましょうよ」

「止めておいた方が良くよキツカ。ユキは下半身が麻痺しているんだからすぐに落っこちてしまうよ」

「それなら私と体を縛り付けておけば大丈夫ね」

「……それは恥ずかしい」

4人が会話に花を咲かしているのを確認しながら俺は持っててきた材料を前に腕まくりをした。

「うーん、これは美味しいわねえ」

クリスマスに相応しい料理　七面鳥の足にポテト、スモークサーモンのシーザーサラダにシャンパンといった料理にキツカは舌鼓を打っている。

「おいおいキツカ、お世辞は良いぞ。宮廷付きの料理人の方が美味しいだろう」

俺は苦笑してそう窘めると。

「いえいえ、ユウキ様ご自身が作った料理だからこそ美味しいのですよ」

「大陸最強の王が作った料理って世界一豪華だよね」

「……その通り」

アイラ、クロスそしてユキの言葉に俺は何も言えなくなってしまったのは言うまでも無い。

「それにしても、こうしてユウキの作った料理を食べていると昔を思い出すわあ」

キツカがポテトを撮みながら感慨深げに零す。

「ええ、思えばあの頃からずいぶん遠くへときましたね」

アイラがシャンパンを口に含む。

「まさかここまでいくことは誰も予想していなかったんじゃないかな」

クロスがチキンをユキに分け与えながらそう漏らすと。

「……私は薄々勘付いていた」

「「「「え？」「「「「」

ユキの言葉に全員が凝視した。

「……ごめんなさい、嘘」

さすがのユキもバツが悪くなり、縮こまりながら謝罪を口にした。

宴もお開きとなり、俺達はユキの寝室に毛布を敷く。

床で寝るのは俺とクロスで、キツカとアイラはユキのベッドに眠

ることとなった。

俺が床に寝ることに皆は渋面を示していたが俺は無理矢理納得させる。

「じついつ時ぐらい王として見ないでくれ」

今の俺は王ではなく、お前達の仲間の1人としていたかった。

「……キツカ、アイラ、ユキそしてクロス」

ランタンの灯りを消してしばらく経った頃、俺は皆に話しかける。

「お前らは俺を信じてくれるか」

俺は右手を持ち上げて空にかざす。

月明かりに映し出されるそれは浮浪児だった頃と違い、幾分かごつくになっている。

この手が掴む未来　それは人間の歴史。

それを叶えるために俺はどんな犠牲も厭わないと考えている。

「俺は一体何をしようとしているのか……それを最後まで見届けられるか？」

俺がそう聞くと、クロスから意外な答えが返ってくる。

「……僕達はユウキが何を考え、何を見ているのか分からないけど、

それでも僕達はユウキの傍で守る。ユウキの夢見る未来を掴むための木材　それが僕達の役割だと思っただ」

「木材って……俺はそんなに命を捧げるほどの人間じゃないぞ」

「何を言っているのよ」

俺の答えに今度はキツカが呆れた声を出す。

「魔物大侵攻の際もユウキが事前にジグサリアス王国内の魔物を殲滅していなければ冗談でなく本気で私達は終わっていたわよ。そしてそれ以上に重要なことはユウキが私達をここまで引っ張り上げてくれたこと。もしユウキと出会わなければ私達はあのスラム街で何もできずに滅びを待っていたわね」

感謝している　キツカは呟く。

「今、手にある物は全てユウキのおかげ。だからその恩を返すためなら私達はどんなことでもするわ」

「……俺が死ぬと言えばお前らは死ぬのか？」

「当たり前です」

つい出てしまった軽口にアイラが大真面目に返す。

「私達の他にもユウキ様を支えられる人間がいますし、子も残すことが出来ました。私達の願いは叶えられたも同然ですのでこの命、もう惜しくはありません」

そして最も大事なことは アイラが力を込めて。

「例え私達に死を命じてもユウキ様は絶対に死を無駄にしません。どうしようもないから、それ以外に方法がないからその手段を取るのであり、さらにその先に輝かしい未来が待っているのであれば私達は喜んでこの命を捧げましょう」

「……」

「……ユウキ、ユウキは己の信じた道を貫いてほしい」

ユキは同じ言葉を繰り返す。

「……私達が最も不安に感じていることは私達によってユウキが迷い、苦しむこと。多分私達はユウキを惑わせる存在を排除するため生まれ、ユウキと出会えたのだと思う。だからもしユウキが私達の存在が重荷になるようなら遠慮なく切ってほしい。例えそうなたとしても私達はユウキを恨むことはない」

ユキの言葉の重さに俺は沈黙してしまう。

普段笑いながら接しているキツカ達の裏にそんな壮絶な決意があったことを始めて知る。

「……ありがとう」

不意に景色がぼやけてきたので俺は右手を顔面に乗せ、顔を隠した。

番外編 5人でのクリスマス（後書き）

正月の1月1日にもう一つ番外編を掲載する予定です。

そして、少しお願いがあるのですが、12月28日までに感想を書いて頂ける方は1つでも良いので20人の子供達の名前候補を挙げて欲しいです。

何せ作者のキャラでは20人も名前を考えるのは力不足ですので、本当に申し訳ありませんが、名前を挙げて頂いても必ず採用する保証はありませんので、その時はお気を悪くしないようお願いいたします。

追加 一応今のところ子供は全員女の子で、王女組は名前が決まっているのですが、面白ければ男の子も増やしたり名前の変更も行います。

「変更しすぎ」と怒るかもしれませんが、そこは私の作風として納得して下さい。

私の中の優先順位は

? 完結

? 話の流れを壊さない

? 面白い

これらが守られるのであれば設定変更もバンバン行います。

番外編 英雄の復活（前書き）

えーと……hiroさんから頂いたアイデアが面白かったため、
堪え切れずに話にしました。

すいません。正月にあげる話は全然進んでおりませんが、
もしかしたら間に合わないかもしれませんが、お許しください。

番外編 英雄の復活

「ツアスターよ、そなたにだけは言っておきたいことがある」

寝台に横たわった俺の祖父はそう口火を切る。

祖父 アルトリウスⅡ シャンクフルーツはジグサリアス、ノースタジアアそしてフォルケニアの3大都市を結ぶ大鉄道の計画を立案・施行した者として大陸中から喝采を浴びていた。

そして大鉄道の完成が現実味を増してくるにつれ祖父の名声は高まる一方だったのだが、それに比例するかの様に祖父は苦悩が深まっ
つていき、ついには倒れてしまった。

医者はずくに治りますよと仰っていたが、それが優しい嘘なのは明らか。すでに祖父はお粥すら体が受け付けず、砂糖の入った重湯を飲んで生き永らえていた。

「わしは……とんでもない大罪人じゃ。地獄に何度落ちても購い切れない罪を犯した」

いつも柔らかな笑顔を浮かべているけど、時折見せる鋭く厳しい雰
囲気を発散させて周りから畏怖される祖父。

幼い頃に両親を亡くした俺を育ててくれ、今までの20年間変わ
らず俺の憧れだった祖父は見る影もなく、もうそこら辺にいる臨終
間近の老人と同じだった。

「何言っただよ、じいちゃんが重罪人なら他の皆はどうなるんだ

よ。じいちゃんが30年という長い時間をかけて作った鉄道は歴史に残る程偉大なものだ」

だからこそ俺は明るく振る舞って笑い飛ばす。こんな弱気な祖父など見たくもないし、聞きたくも無かったからだ。

が、祖父は俺の言葉に首を振る。

「それなのじゃよ。あの鉄道こそがわしが地獄に堕ちるべき因なのじゃ」

「は？ どういうことだ？」

その言葉に祖父は息を吸い、ゆっくりと噛み締める様に話し始めた。

「あの大鉄道はな、わしが考えたものではない。遥かな昔　そう、500年前からあったものなのじゃ」

「え？」

祖父の言葉に俺は何も言えなくなる。

500年前と言えばあの魔物大侵攻が起こった頃であり、ラブレサク教の全信徒が3日3晩祈った結果、神が勇者を遣わし、数多の英雄と共に魔王率いる魔物を撃退したとして語り継がれている時代だ。

勇者カルベルト、剣聖メリア、聖女フローラや大魔導師マージを筆頭に、数え上げればきりが無い。歴史の中でもあれほど民衆から

の人気のあり、学者が最も歴史的価値のあると断定する時代というのが周知の事実だった。

「わしらの祖先はな、レアⅡレグリアスⅡツバイク様なのじゃ」

「レア？」

俺が首を傾げると祖父は愉快そうに笑って。

「ハツハツハ、ツアスターの反応も分からんでもない。わしも父から聞かされた時は同じような動作をしたものじゃ。レアはキアの旧名じゃ。昔、ある者によって名前を変えさせられたゆえにな」

「どうしてそんなことを」

「それは過去のことじゃから。現在のわし達には想像することしかできません。そしてな、大鉄道の計画の草案を考えたのはその者なのじゃ」

「え！？ それはまさか」

俺が驚いたのは最近巷で民衆の口に乗っている存在が出てきたからだ。

ルール將軍やワークハード文官を加えた総勢25人の英雄がいたというのが常識だが、現在ラブレサク教の支配が弱まってきた影響があるのか、実は26人目の英雄が存在しているというのが噂になっている。

祖父は得心したように頷き。

「そう、それはユウキ・ジグサリアス・カザクラ。英雄を生んだ英雄、人類の歴史を存続させた最大の功労者。彼がいなければ今のわし達はいなかったにも拘らず歴史上から抹殺された悲劇の人物じゃ」

「……下らない」

あまりの事実に俺はそう毒を吐く。

「じいちゃんまであの狂人に誑かされたか」

「頼むからわしの親友であるジエイムズを悪く言わないでくれ」

あの祖父がそう懇願するが、俺は素直に賛同できない。

ジエイムズ・アルバート。尊敬できる祖父だが、たった一点許容しがたいのが祖父が親友と呼ぶジエイムズが存在だ。

あいつはずっとユウキとかいう存在が実在していたと声高に宣伝していたため、教会から目を付けられて様々な迫害に会っていたが、それでも自説を曲げなかった。

「そして有罪判決を受けたあいつは精神が触れているとされて隔離され、そこで無意味に死んだでしょうもない奴だ」

信念を貫き通すの立派だが、もう少し周りの人の迷惑を考えて欲しい。

あいつが学校時代に祖父と親友だったというだけで祖父もあらぬ嫌疑をかけられ、役人の花形である財務関係から今の鉄道関係に左

遷されてしまった。

あいつを殺したいほど憎しみを抱いても仕方ないはずなのだが、祖父は怒りの欠片すら浮かべずに淡々と左遷を受け入れたと祖父の同僚から聞いている。

まあ、祖父が鉄道関係の役場に回されたおかげで今の功績があるのだから何とも言えないな。

祖父の懺悔は続く。

「わしは……間違っていた。あの時ジェイムズの差し出す手を取っていれば、裁判の際に親友を擁護すれば。しかし、わしは臆病風に吹かれて何もせんかった。ジェイムズが有罪判決を受けた瞬間の表情は今でも鮮明に覚えている。そして、それが今でもわしを苦しめる」

祖父はここで一息吐き、部屋のクローゼットの裏側にある隠された小箱を持つてくるよう頼む。

そして祖父の言葉通り裏に隠し扉があり、中から古びた小箱が出てきた。

「開けて中にある羊皮紙を読んでみるが良い」

祖父の言葉に従ってそれを開ける。

相当年月が経っているのだろう、中から黄色く変色した羊皮紙の束が現れた。

「これは」

その中身に書かれたいた内容は祖父が計画した草案と酷似していた。

さすがに500年前とは地形も技術も違うので細かな箇所は違っているが、根本となる骨子は同じ。

「こんなものが5世紀も前に……」

500年前と言えば技術が全然発達しておらず、部品一つ作るにも形や重さがバラバラという時代だった。

しかし、これは全く同じ形状をした部品の製造が当たり前という前提で書かれている。

これを書いた者は今の時代を見通していたというのか。

俺は震える手でこれを書いたものの名を確かめると、記されていた名前に俺は羊皮紙を取り落としてしまった。

「……ユウキニジグサリアスニカザクラ」

あの架空とされた存在の名が筆記者として最後のページに書かれていた。

「そう、これはご先祖様が技術が一定の水準に達したらこの計画を施行するよう遺してくださったのじゃ」

祖父の重々しい言葉に俺はただ呆然とする。

そして、俺は次の瞬間に気付く。この羊皮紙の存在が抹消されていたユウキの存在を復活させる大きな手掛かりになるのではないか。

しかし……

「こんなものを発表したら俺は勿論のこと友人やシエラにまで迷惑がかかる」

教会の支配力は衰えたと言ってもまだまだ個人をもみ消せるだけの力を保っている。下手すれば俺はあのジェイムズと同じ運命を辿る可能性だってあるのだ。

そんな俺の苦悩を察したのか祖父はやせ細る体に鞭を売って起き上がり、俺の両手を取った。

「無茶なことを言っておるのは重々承知しておる。たった一人の肉親であるお前の幸せを考えるのならこんなものなど発表せん方がええ。しかし、それでもこの事実を公表せんかったらわしは死に切れんじや。今のままじゃとあの世で待っているジェイムズに会わず顔が無い。頼む、老いぼれの最後の頼みと思うてわしの願いを聞き入れてくれ」

祖父が苦悩と悔恨に表情を歪ませながら涙目でそう語る様子を見ると俺は何も言えず、ただ黙って頷くことしか出来なかった。

そして、祖父は大鉄道の完成を待たずに逝った。

祖父の葬式は国を挙げて行われ、多くの人が涙を流し、数々の著名人が葬儀に参列するほど大きなものだった。

こんなにもたくさんの人々から死を惜しまれるのは幸せなことだと神官がご高説を垂れるが俺は知っている。

祖父の死に顔は決して安らかなものではなく、むしろ生きて来たことを後悔しているような苦渋に満ちた表情だった。

「じいちゃん、分かったよ」

俺は死化粧を施された祖父の亡骸の前で一通りの弔文読み上げの後、静かにそう決意した。

そして大鉄道開通の日。

残されるのはテープカットだけとなり、そして俺はその前に祖父の肉親として集まった群衆にスピーチを行うことになっていた。

俺の前に教会から派遣された神官が話している。

「ゆえに、この発展は神が思召したものであり、故アルトリウスは必ずや天国で幸せに暮らしているでしょう。思えば神はあの魔物大侵攻の際に人類が危機に瀕した時、敬虔な信者の祈りによって」

そこから先はいかに教会が素晴らしい存在なのかをアピールする場へと変わる。

最近教会は影響力の低下に危機感を募らせているのか、あらゆる行事に出没してこのようなスピーチを行っている。

何も知らない者はともかく、祖父から全てを聞いた俺にとっては滑稽以外の何物でもなかった。

俺の番が回ってくる。

小箱を抱えて壇上に立った俺に何千という視線が集まってくるのを感じて少し押されてしまう。

俺は最初、台本通りの当たり障りのない言葉をつづる。

そして、次に祖父の功績を述べる段に至った時、俺は友人や恋人の名を思い浮かべた。

クラミツ、シエルクーフ、ロン、 balan、そしてシエラ、ごめんな。

俺のせいで迷惑をかけるかもしれないけど、それでも祖父の遺言と死に顔を見ると声を上げずにはいられないんだよ。

「さて！ 祖父の功績についてだが、重大な見落としがある！ それはこの大鉄道計画が祖父の考えたものではないからだ！」

突然俺の調子が変わったことに皆がポカンとする。

「この計画は約500年前にはすでに創案されていた！ 祖父はそれに則って施行したにすぎない！」

「お、おい！ あいつを止めさせる」

正気に返った神官が泡を食って俺を指差す。

が、俺は止まらない。さらに声の調子を上げて。

「祖父は苦しんでいた！ 親友であるジェイムズを裏切り、他人の名声を掻っ攫っていることにずっと苦悩を続けていた！」

群衆がザワザワと蠢き始める。

戸惑っている者が大半だが、中にはその通りだと頷いている者もいた。

「そして！ これが証拠だ！」

俺は小箱に入っていた羊皮紙の束を群衆に向かってぶちまける。

黄色く変色した羊皮紙が乱れ飛び、広範囲にわたって広がった。

と、ここで到着した警備兵によって俺は抑えつけられる。

そして、口を塞がれる最後の瞬間にこう言い放った。

「その計画書に記された名はユウキィジグサリアスィカザクラ！ 教会の陰謀によって消された最初にして最大の英雄だ！」

警備兵に拘束され、猿轡を噛まされたが今の俺に全く後悔はなかった。

神官が「それは悪書だ！ 絶対に読むな！」と声高に触れまわっていたが、おそらく群衆は言うことなど聞かないだろう。

祖父の時代ならともかく、今の時代に民衆の言動を完全に支配する力などもう教会には残っていないのだから。

「はてさて、どうなることやら」

おそらくこの出来事を皮切りとして一気にユウキの名前が浮上するだろう。

祖父からの話によると、現在各国で行われている政策の大半はユウキの草案が元になったものらしいから、第二、第三の俺が現れるかもしれない。

もしかすると俺は1人の英雄を復活させたかもしれない。

そして、そこから今認知されている歴史が大幅に変わる可能性もある。

この後ユーカリア大陸全土に吹き荒れるであろう大嵐を想像した俺は何となく震えた。

番外編 英雄の復活（後書き）

すでにお気づきかもしれませんが、皆様から頂いた名前をいくつか拝借しました。

番外編 正月特別企画前編（前書き）

正月用の特別編です。

前半部分が出来たので挙げます。

後半も出来次第挙げますので期待しないで待っていて下さい。

番外編 正月特別企画前編

俺は王である。

しかも隣国の動向を伺わなければならないような小国の王でなく、大陸の情勢を一変できるほど力のある大国の王である。

そう、俺は偉いのだ。

だから

「おとーさん、もっともつと」

「あー、つぎはぼくー」

「おとーさん、もうつかれたのー？」

「ぐおおおお……」

ヴィヴィアンの息子　ジグヴィス、ベアトリクスの子
マールスとしてシクラリスの子　ヴァイスの3人に押しつぶされる
のは間違っている。

「主、一体何をしていますか？」

顔を上げるとエルファが若干呆れを含んだ眼で見下ろしていたので俺は口を開いて3人の声真似をする。

『夫よ、今日はビアンカと外遊してくるからジグヴィスを頼むぞ』

「なるほど、だから今朝からヴィヴィアン様のお姿が見えなかったのですか」

何でも次世代を担う者として市井の見聞を広めるのが目的らしい。

ヴィヴィアンは本当に生まれつきの王だな。

自分は勿論のこと、その子供にまで上に立つ者として相應しい言動を取るよう幼い頃から手解きを行っている。

なのでピアンカはまだ5歳にも関わらず、普通に大人と会話を交わすことが可能だった。

続いてベアトリクスからの言葉。

『我が君、少しカトリーナに教育を施すのでマルスの面倒をよろしくね』

「ベアトリクス様のお部屋から、何やらよからぬ単語が漏れてきます。私が言うのもなんですが、子供にはまだ早過ぎるか」と

ベアトリクスは5歳にもなっていない子供に秘伝の人の心を手玉に取る方法をカトリーナに教授していた。

すでにカトリーナは同年代の子供からベアトリクス秘伝の技術によって骨抜きにしている様子からカトリーナの将来が未恐ろしく感じるが多々あった。

そして最後にシクラリス。

『シャルロットは昨夜から急に熱が出ましたので、今日は付きつきりで見病します。ですのでヴァイスをよろしくお願いします』

「ふむ……至って普通の理由ですが、前の2人の理由が理由なのでとても崇高だと思われませう」

「そうだろそうだろ？ 一体どこの世界に女王としての心構えや悪女の手解きを行う親がいるんだ？ シクラリスの方がよっぽど親らしい！」

最初に理由を聞いた俺は涙が出そうになったよ。これこそ理想の親、そんな変な知識など付けず、シクラリスの様に振る舞うのが正しいんだ。

「と、まあこういう理由で俺は3人の息子を相手にしなければならなくなっただんだ」

「何やら嫌な予感がしたので参りましたが、予想通りでしたね」

エルファがそう評する。

「主が嫌でなければ私が3人の面倒を見ましようか？」

「え？ 良いのか？ お前もレイファがいるのだろう」

澄ました顔をしているがエルファも1児の母である。

なので俺はエルファの負担を慮ったのだが。

「レイファももう4歳です。そろそろ私が近くにいなくても良い年頃なので心配要りません」

そっけなくそう返された。

レイファは子供の中でも一番大人びており、最も手がかからなかった子供だ。だからこそエルファも他の人の元へよくヘルプに向かっていたのを覚えている。

「そうか、それなら3人をお願いして良いかな。俺は少し皆の様子を見て来る」

3人を引き剥がしなら俺はエルファに言うと、エルファは畏まりましたとばかりに頭を下げた。

「あら、ユウキじゃない。どうしたの？」

俺はキッチカの部屋を開けると、暖炉の前に佇むキッチカの姿がそこに会った。

「お姉様に何か用でもあるのですか」

ここからは陰になって見えなかったが、ククルスもいたらしい。

暖炉前にある安楽椅子を回転させてこちらを向く。

「何、ちょっとお前たちの顔を見たくくなってな」

「あらあら、いきなりどうしたの」

「さあ、俺にも良く分からん」

キツカがクスクスと笑ったので俺は肩を竦めてそう答えた。

「ところでユウカとスウはどうした？」

キツカの娘であるユウカとククルスの娘のスウは部屋の中にはいない。

「ユウカとスウは幼竜が育つ施設で遊んでいます」

するとククルスが俺の疑問に答えてくれた。

「おいおい大丈夫か？　いくら幼竜といえども体長は大人のそれと同じぐらいだぞ」

竜の卵は人の顔ぐらいの大きさがあり、そして生後1ヶ月で大人の体重を越える。なので幼竜がじゃれ合ったつもりでもこちらからすると命の危険を感じることがあるので、それを心配したのだが。

「大丈夫よ、ギールが付いているし」

どうやら保護者役としてギールがユウカとスウを看ているらしい。

「まあ、それなら大丈夫か……しかし、やはり2人とも将来は竜騎兵になりそうか」

俺の眩きにキツカが頷いて。

「そうね。ユウカはすでにパートナーを見つけたし、スウも気になる幼竜がいるみたい」

「幼竜が飛べるようになったら、私達がコーチをしようかと考えています」

「キツカとククルスが指導するのか、それは豪華だな」

最強の竜騎兵とされているキツカと最高の教官と評されるククルスの2人が教えるのであれば、さぞかし相当な乗り手になるだろう。

「ええ、今から心躍るわよ」

キツカが楽しみで仕方ないという風にニッコリと笑ったのが印象的だった。

「えーと……」

廊下を歩いていた俺は前方に進んでいる不可解な光景にどう反応しているのか分からず立ち尽くしていた。

大道芸の玉乗りをしていると言った方が正しいだろう。

直径1mの大玉の上に乗って進んでいるのはオーラの娘 アンナフィリア。その超人的なバランス感覚で危うげ無く、それどころか楽しそうに笑みを浮かべながら大玉を転がしていた。

「どうしましたか？」

「うおう！？」

突然後方から声をかけられて飛びあがる俺。

心臓をバクバク言わせながら振り向くとそこには影が立っていた。

真黒な黒装束と口を覆う頭巾。性別さえ不明な様相にも拘らず溢れ出てくる色気を出しているのは俺の知る限り1人しかない。

「アイラか、あまり驚かせるなよ」

「申し訳ございません、以後気を付けます」

アイラはそう謝罪した後、腰まで折る丁寧な礼をした。

「ところであれは何だと思っ？」

俺は玉乗りをしているオーラの娘を指差すと。

「アンナフィリアはサーカスに興味があるようですので、オーラが教えた一部です」

つまりあれ以外の技も出来るらしい。

オーラもそうだが、アンナフィリアも負けず劣らず器用な娘だと納得した一幕である。

「私の娘　レイアも何かに興味を持つてくれると嬉しいのですが」
アンナフィリアが角を曲がって見えなくなると、アイラがそう零す。

「ん？　レイアに何か悩みでもあるのか？」

俺の質問にアイラは。

「はい。レイアは大人しく良い子なのですが、いかんせん影が薄すぎるのです。前もいつの間にかいなくなり、そしてまたオーラによって連れ戻されるまで私を含めて誰も発見できませんでした」

「おい、それはさすがに冗談だろう」

一体どこの世界にオーラしか見つけれない子供がいるのか。

しかも別に訓練を受けたわけではなく、ただの子供が、である。

「これは本当ですよ。子煩悩になります。誰にも気に止められず、どこにでも侵入できるレイアは天性の暗殺者でしょう。もしレイアを敵に回せばユウキ様をお守りできる保証がありません」

普段は辛口しか評しないアイラがそこまで言うのは親ゆえかそれとも真実ゆえか俺には分からなかった。

「あら、ユウキ様じゃない」

そんなことを考えている下方からそんな声がかけられる。

見た目9歳、実年齢その倍以上というアンバランスな容姿をした人物はオーラしかいなかった。

「ああ、オーラか。いや、何でもない。オーラこそどうした？」

俺はオーラにそう返すと。

「またレイアが抜け出したので追っていたのよ。で、ようやく見つけたわけ」

「ほう、それはどこに？」

俺が尋ねるとオーラは少々呆れながら。

「ユウキ様もアイラも気付いていなかったのね。ほう、そこよ、アイラの右隣に何かいるでしょう」

言われてから気付いた。

アイラの右足をよく見ると、小さな子どもがトテトテと歩いているのが確認できる。

「……いつの間」

さすがのアイラも絶句していた。

そして俺達の様子を確認したオーラは溜息を吐きながら。

「私が言うのもなんだけど、どうして赤の他人であるレイアを私しか発見できないの？　ここは親のアイラが見つけるべきでしょう」

この時ばかりはオーラに分があったので、アイラは何も言えずに
しよげ返っていた。

「……まあ、頑張れ」

アイラに説教しているオーラを尻目に俺はこの場を立ち去って行
った。

「ミア、いるか？」

ドアをノックをすると中から返事が返ってきたので俺はドアを開
ける。

「ユウキ様か、どうしたの？」

ミアはいつもと変わらずボーイッシュな笑顔を浮かべてそう聞い
てきたので。

「いや、なに。コユキとミュウの様子を見たくてな」

「ああ、2人ならそこにいるよ」

ミアが顎でしゃくした先にはコユキとミュウが2人仲良くベッド
で眠っている光景が目に入った。

「お昼寝か」

俺はそれを微笑ましい様子で見つめる。

「うん、本当に可愛いよ」

ミアも普段とは違う温かい眼差しを向けていた。

「しかし、ユキの娘をコユキと名づけるのは安易すぎないか？」

「アハハ。ユキらしいじゃないか」

ミアはそうカラカラと笑うが、俺はそう笑えない。

皆が必死に子供の名前を考え、中にはそれだけのためにかつての祖国から名前を募集した猛者もいた中で、唯一ユキだけはその場で考えましたと言わんばかりにコユキと名付けた。

「『……この子は小さいユキ。だからコユキ』と淡々と言ったユキは俺達を戦慄させたな」

当時の状況を思い返してそう呟く俺。

「けど、ボクからすればユキらしいと思うよ」

ミアは一瞬後大爆笑し、そしてユキが嫌がるにもかかわらず頬をすりすりさせていたな。

「それじゃあ、俺はもう行くぞ」

「うん、それじゃあまた」

ミアの返事にそう答えた俺は手を振りながら踵を返した。

「……気が滅入るよなあ」

前からレオナ、そしてクロスがこちらに向かってくるのを見ると俺の心が一気に重くなる。

「同意の上だったとはいえ、本命より先に子供が出来るのは褒められないよな」

クロスとレオナの3人で酒を飲んでいた俺達は何を血迷ったのかそのまま行為に及んでしまった。

あれは失敗した、今でも反省している。

クロスは笑って許してくれたがあれは形だけだ。

しばらく俺と口を聞いてくれなかったのを覚えている。

まあ、ここでは語り尽せないほど愛憎渦巻く劇を繰り広げた後、ようやく和解にまで漕ぎ着けることが出来たから良しとしよう。

最終的に神に全てを押し付けることで納得させた。

全員が妊娠した奇跡に加え、クロスとレオナの子が出来たことがあって何とか収まってくれた。

いやあ、不幸中の幸いとはこのことだな。

あやうく『山』が男女のもつれで崩壊という最悪の事態は避ける
ことが出来たよ。

そして今では前と変わりなく接してくれる、良かった良かった……
が。

「おお、ユウキ殿ではないか」

「本当だ、ユウキだ」

レオナとクロスが俺に気付いて手を挙げる。

「こんにちは、それより2人でどうした？」

なので俺も手を挙げて答えると。

「なに、少しユウナと遊んでやろうと思ってな」

レオナが俺との間にできた子供の名を挙げた。

「唯一の女の子だからね、他の子とは別に接してあげたいんだ」

2人がそう答えたので俺はため息を吐きながら。

「ところでお前らは何人子供がいたっけ？」

その質問にレオナは笑いながら。

「ハハハ、ユウナを含めて5人だぞ」

「名前はリオラート、ラルゴ、シーザー、そしてローランだね」

……愛し過ぎだろう。

この4年間で子供5人だなんてどれだけだよ。

しかも恐ろしいことに短期間の間にそれだけの子を産んだレオナは体型が全く崩れていない。

これも元が軍人だったから筋肉があったのかなあとそこはかとなく考えた。

「まあ、俺は全員を平等に愛してくれるのなら何も言わないがな
俺がそう言つと。」

「ハハハ、何を当たり前なことを」

「全員僕達の子だよ。除け者は絶対作らないから安心してほしい」
2人から間髪なしにそう返ってきたので俺は嬉しくなった。

「そうか、それを聞いて良かった。じゃあ俺は用があるからこれで
俺はそう言い残して歩を進め、その場を後にした。」

番外編 正月特別企画前編（後書き）

魔王との邂逅を4年後でなく5年後に変更しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4709w/>

ゲームの世界で第二の人生！？

2012年1月1日01時12分発行